

恩 納 村

く ら は かい づか
久 良 波 貝 塚

— 導水管理設工事に係る緊急発掘調査報告書 —

1992年3月

沖縄県教育委員会

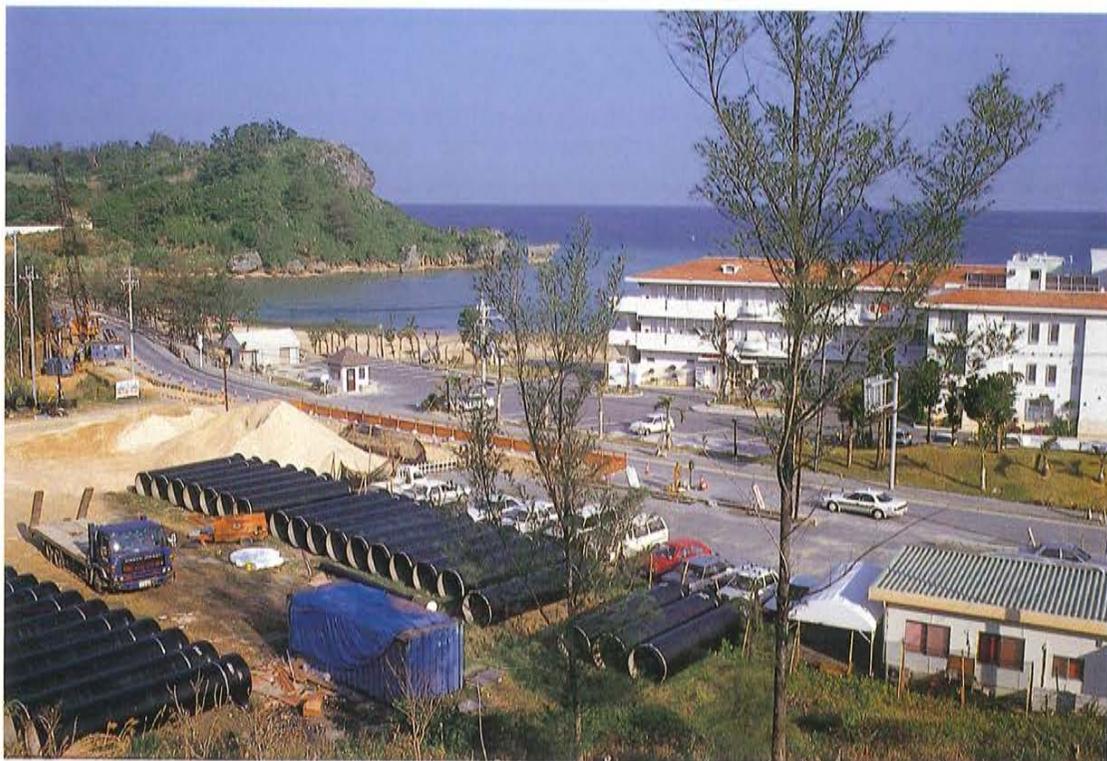
表紙題字
大城聖月氏の揮毫

恩納村

—導水管理設工事に係る緊急発掘調査報告書—

1992年3月

沖縄県教育委員会



久良波貝塚近景



久良波貝塚出土の固形樹脂

序

この報告書は、伊波～嘉手納導水管付設工事に際し、県企業局と協議の結果、久良波貝塚の記録保存を目的として、平成2年度に発掘調査した記録であります。

発掘調査の結果、現在の県道6号線の南側車線下から、まず戦前の旧道や近世に相当する陶磁器類が検出され、さらにその下から、沖縄貝塚時代後期に所属する甕形、鉢形、壺形の土器類、加工具としての石器類、生産道具や装身具になった貝製品、家畜とみられる犬の骨、当時の人々が食した貝殻や獣骨類など概ね、二つの時代の研究に資する遺物が多数出土しました。

これら多くの資料類を平成3年度に整理し、今回まとめることができました。本報告書を通して埋蔵文化財に対して、一層のご理解とご協力をいただければ幸いです。なお、遺跡の保存と調査に対してご協力をいただいた恩納村教育委員会、山田区公民館、仲泊区公民館、地元の方々をはじめ、固形樹脂の理化学的分析をしていただきました森巖先生、獣骨の同定をしていただきました金子浩昌先生等の関係各位の御援助と御配慮により、本書を発刊することができましたことを心から感謝申し上げます。

1992年3月

沖縄県教育委員会

教育長 津 留 健 二

例 言

本報告は、平成2年度（1990年度）に沖縄県教育庁文化課が沖縄県企業局からの委託業務として、伊波～嘉手納導水管付設工事にかかる恩納村所在の久良波貝塚の緊急調査をまとめたものである。

本書に掲載した（1/2500、1/25000）の地形図は、国土地理院発行の成果を複製したものである。

遺物の実測図は、その規模や種類によって整理縮小し、各図版にスケールを付した。なお遺物の図版については不定縮尺になっている。

石器の石質は、沖縄県教育センターの大城逸郎氏に同定依頼し、その成果を収録した。

固形樹脂は、琉球大学教授、森巖氏に理化学的分析依頼し、玉稿をたまわったものである。

獣魚骨の同定は早稲田大学講師、金子浩昌氏のご指導により整理分類した。また、その成果に基づき執筆依頼をし、玉稿をたまわった。

調査報告書掲載の遺物の写真は、矢沢秀雄氏の撮影によるものである。

本書の編集は上原 静が当たった。

出土した資料および実測図などの記録類は、全て沖縄県教育委員会文化課で保管している。

目 次

序		
例 言		
第 I 章	調査に至る経緯	1
	第 1 節 調査に至る経緯	1
	第 2 節 調査の体制	1
第 II 章	遺跡の環境と現況	3
第 III 章	調査の経過	7
第 IV 章	調査の内容	8
	第 1 節 層序	8
	第 2 節 遺構	9
	第 3 節 遺物	11
	陶磁器類	12
	青磁 染付 唐津焼	
	施釉陶器 無釉陶器 煙管	
	貝製品	33
	有孔二枚貝製品 タカラ貝製品	
	貝匙 ホラガイ製品 貝輪	
	石器	46
	叩き石 砥石 凹石	
	石錘 磨り石	
	土器	66
	甕形土器 鉢形土器 皿形土器	
	有段口縁 山形口縁 有文土器	
	外耳土器 壺形土器 底部	
	自然遺物	103
	貝殻	103
	動物遺体	110
	R o s i n	117
第 V 章	おわりに	123

挿図目次

第1図	恩納村、久良波貝塚位置図	
第2図	久良波貝塚調査トレンチ位置図	2
第3図	久良波貝塚調査トレンチ配置図と壁面図	6
第4図	旧道の路肩縁石	10
第5図	青磁1 染付2～8	16
第6図	施釉陶器 a類9～14 b類15～21	17
第7図	施釉陶器 c類22～28	19
第8図	施釉陶器 c類29、31～39 唐津焼30	22
第9図	施釉陶器 c類40～47 黒褐釉陶器48	24
第10図	無釉陶器	26
第11図	無釉陶器 61～65 煙管66、67	29
第12図	無釉陶器 68、69、71、72 施釉陶器70	30
第13図	無釉陶器	31
第14図	有孔二枚貝製品 ザルガイ1～9 リュウキュウザルボウ10～18	34
第15図	有孔二枚貝製品 リュウキュウザルボウ19～31	35
第16図	有孔二枚貝製品 メンガイ32～46	36
第17図	有孔二枚貝製品 メンガイ47～52 シャコガイ53～56	37
第18図	有孔二枚貝製品 シャコガイ57～61	38
第19図	ヤコウガイ製品62 タカラガイ製品63～73 貝匙74	41
第20図	貝匙(メンガイ)	42
第21図	ホラガイ系有孔品	44
第22図	貝輪 ゴホウラ製品86 オオベッコウガサガイ製品87	45
第23図	叩き石1、3 砥石2 凹石a類4、5	48
第24図	凹石 a類7、9 b類6、8、10、11、12	49
第25図	凹石 c類13～19	50
第26図	凹石 d類20～23	52
第27図	凹石 d類24～28	53
第28図	凹石 d類29～34	54
第29図	凹石 e類35～40	56
第30図	凹石 f類41～43	57
第31図	凹石 f類44～45 石鍾46	59
第32図	磨り石 47、48	61

第33図	磨り石 49 石鍾 50、51	62
第34図	甕形土器 a類 1～3 b類 4	69
第35図	甕形土器 b類 5～7 c類 8、9	71
第36図	甕形土器 a類 10～20 b類 15～18 c類 13、14、19、20 鉢形土器 21	72
第37図	鉢形土器 a類 22～24、26～28 b類 29、30 皿形土器 25	73
第38図	有段口縁部 31～37、40 山形口縁部 38、39、41～46	78
第39図	有文土器 口縁部 47～50、58、59 胴部 51～57、60～63	79
第40図	外耳土器	83
第41図	壺形土器	83
第42図	底部分類概念図	86
第43図	底部	87
第44図	底部	90
第45図	底部	93
第46図	底部	97

写真図版

図版 1	久良波貝塚遠景 上：久良波の海岸 下：左側は国道・右側が県道	128
図版 2	久良波貝塚近景 上：県道6号線と海岸のレストラン等 下：県道沿の調査トレンチ	129
図版 3	久良波貝塚、上：国道（左）と県道（右） 下：調査地区	130
図版 4	調査トレンチ状況	131
図版 5	調査トレンチ 上：壁面状況 下：旧道縁石状況	132
図版 6	調査トレンチ 上：道路側壁面 下：旧道縁石	133
図版 7	調査トレンチ状況 上：旧道縁石の状況 下：道路側壁面	134
図版 8	旧道縁石	135
図版 9	青磁 1 染付 2～8	136
図版 10	施釉陶器 a類 9～14 b類 15～21	137
図版 11	施釉陶器 c類 22～28	138
図版 12	施釉陶器 c類 29、31～39 唐津焼 30	139
図版 13	施釉陶器 c類 40～47 黒褐釉陶器 48	140
図版 14	無釉陶器	141
図版 15	無釉陶器 61～65、69、68 施釉陶器 70 煙管 66、67	142

図版16	無釉陶器	143
図版17	有孔二枚貝製品	ガイ 1～9 リュウキュウザルボウ 10～18 144
図版18	有孔二枚貝製品	リュウキュウザルボウ 19～31 145
図版19	有孔二枚貝製品	メンガイ 32～46 146
図版20	有孔二枚貝製品	メンガイ 47～52 シャコガイ 53～56 147
図版21	有孔二枚貝製品	シャコガイ 57～61 148
図版22	ヤコウガイ製品 62	タカラガイ製品 63～73 貝匙 74 149
図版23	貝匙 (メンガイ)	150
図版24	ホラガイ系有孔品	151
図版25	上：貝輪 ゴホウラ製品 86 オオベッコウガサガイ製品 87	下：Rosin (固形樹脂) 88 152
図版26	叩き石 1、3 砥石 2 凹石 a類 4、5	153
図版27	凹石 a類 7、9 b類 6、8、10、11、12	154
図版28	凹石 c類 13～19	155
図版29	凹石 d類 20～23	156
図版30	凹石 d類 24～28	157
図版31	凹石 d類 29～34	158
図版32	凹石 e類 35～40	159
図版33	凹石 f類 41～43	160
図版34	凹石 f類 44、45 石錘 46	161
図版35	磨り石 47、48	162
図版36	磨り石 49 石錘 50、51	163
図版37	甕形土器 a類 1～4 b類 5～7 c類 8、9	164
図版38	甕形土器 10～20 鉢形土器 21	165
図版39	鉢形土器 22～24、26～30 皿形土器 25	166
図版40	有段口縁部 31～33、34～37、40 山形口縁部 38、39、41～46	167
図版41	有文土器 口縁部 47～50、58、59 胴部 51～57、60～63	168
図版42	壺形土器	169
図版43	底部	170
図版44	底部	171
図版45	底部	172
図版46	底部	173
図版47	巻貝	175
図版48	巻貝	177

図版49	巻貝	179
図版50	巻貝	181
図版51	二枚貝	183
図版52	二枚貝 13~33 陸産マイマイ 1~4	185
図版53	魚類	187
図版54	海ガメ類	189
図版55	犬 上：上面 中：側面 下：裏面	191
図版56	イノシシ 1~15 ジュゴン 1~5	193

表目次

第1表	出土遺物一覧表	11
第2表	近代遺物組成一覧表	12
第3表	近代遺物出土一覧表	13
第4表	器種別一覧表	14
第5表	二枚貝有孔品法量表	39
第6表	タカラガイ製品法量表	43
第7表	貝匙法量一覧表	43
第8表	石器トレンチ別出土一覧表	63
第9表	石器レベル別出土一覧表	63
第10表	石器と石質一覧表	63
第11表	石器法量表	64
第12表	土器トレンチ別出土状況	66
第13表	土器分類別一覧表	101
第14表	巻貝出土一覧表(1)	104
第15表	巻貝出土一覧表(2)	106
第16表	二枚貝出土一覧表	108

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯

調査の発端は、県企業局から久良波貝塚周辺の開発にかかる当貝塚の範囲について、文化財当局へ照会があったことに始まる。県企業局は、伊波～嘉手納導水管付設事業で、平成 2 年度に当該遺跡地域の埋設管工事の着手にあたり、その路線上の周知の久良波貝塚の関わりが注意されたためである。早速、その取扱いについて協議がなされた。久良波貝塚は、県道 6 号線をはさんで両側地域に存在しているが、工事予定の現県道下については過去の道路工事で破壊されたことも考慮されたため、それが依存しているかどうか不明であった。企業局としては県道の両側にも貝塚が分布していることから、さらに海中布設案についても、これまでの接続管との関係から設計変更が困難であるとの理由から、曖昧部分を残した当道路下の埋設が最も望ましいと判断されるにいたった。したがって、事前に試掘調査を実施することであらためて協議することになった。その結果、第 2 図に示す地区において遺物を含む貝塚層の遺存が確認され、これに基づき、記録保存を目的として、企業局と発掘調査事業の経費、期間について調整がなされ、委託事業として県文化課が緊急発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成 2 年度におこない、資料整理と発掘調査報告書の刊行業務は平成 3 年度に実施することになった。

第 2 節 調査体制

調査主体 沖縄県教育庁 文化課

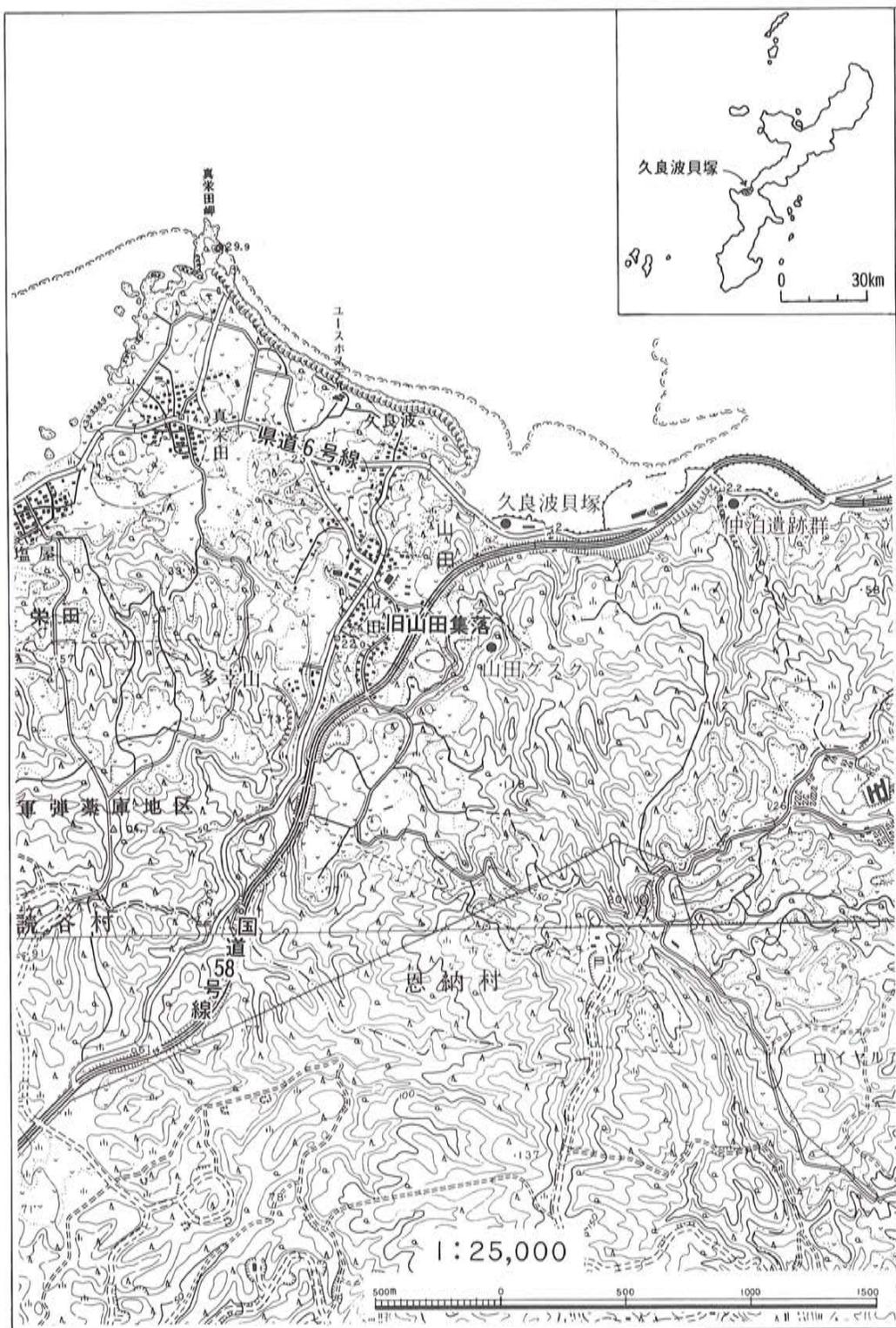
文化課 課長	宜保榮次郎	
文化振興係長	仲里哲雄	
文化振興係主査	新垣昌頼	
埋蔵文化財係長兼主幹	安里嗣淳	平成 2 年度 (発掘調査年度)
埋蔵文化財係長	大城 慧	平成 3 年度 (資料整理年度)
埋蔵文化財事務	大城秀子	
発掘調査担当 主任	上原 静	

発掘調査作業員 (山田、仲泊集落の婦人)

阿波根エイ子	島袋節子	大城カマド	池村佐代子	松田なへ
古波蔵勝代	山内うと	上原久子	宮城カメ	大城シズ

資料整理作業員

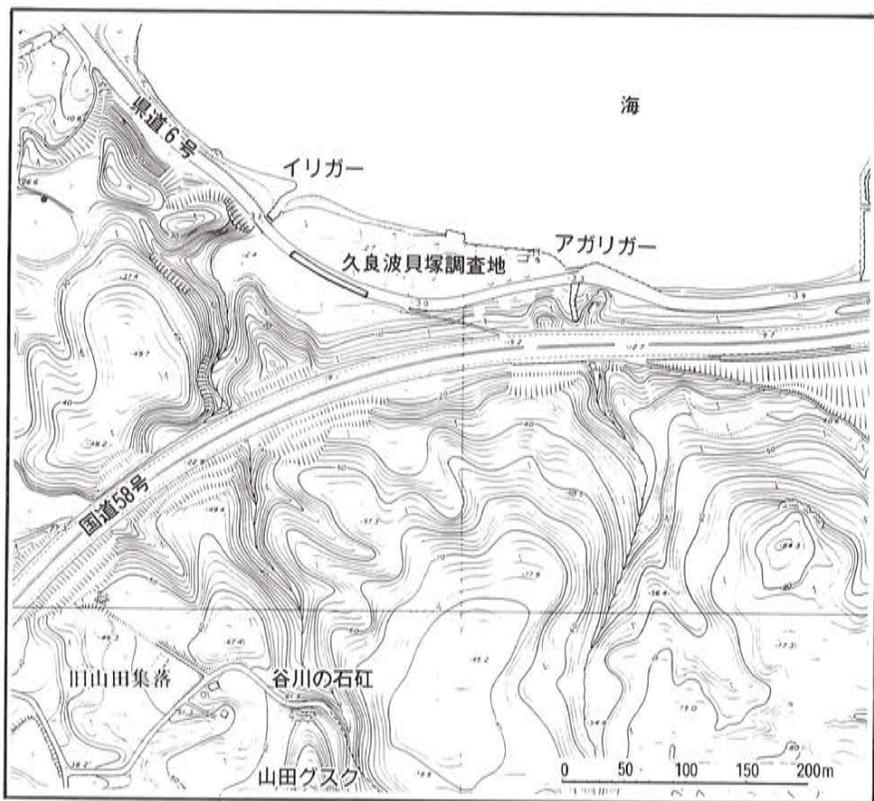
渡慶次ゆかり	石嶺真由美	西銘定子	城間悦子	高宮とり	
知念純子	岡村綾子	城間桂子	安和千代子	伊波小百合	大城勝枝
上原園子	城間千鶴子	照屋利子	我那覇悠子	当山慶子	外間 瞳
仲宗根三枝子					



第1図 恩納村、久良波貝塚位置図

第Ⅱ章 遺跡の環境と現状

久良波貝塚は、沖縄本島中部の西海岸に面する恩納村に所在する（第1図）。同村は、南北軸が約22km、東西軸が約2.0kmと細長く、その地理的位置から、都合によって時に北部圏また中部圏にとその所属が変わるほど長い自治体になっている。同村の西海岸は、海側から内陸へ直ぐに山岳になる地形環境を呈した所が多く、人間活動の場が必然的に、海岸側の入江や砂丘上を舞台に展開にしている。当貝塚のある字久良波は、行政区内では村内の南の端に位し、隣の読谷村に近い所にある。遺跡の立地は、例にもれず西海岸多く発達した入江の海拔2～3mの砂丘上にあり、戦前までは久良波集落が存在していたところである。背後の山麓までは、約100mときわめて狭い地域になり、居住空間が制限された世界になっている。当該地の水源は、小川が二か所、砂丘地を囲む両側の山縁にあり、西側をイリガー、東のそれをアガリガーと称している。当該地は現在、遺跡の上を横断するように県道6号線がはしり、その浜側には近代的なドライブインやホテルが建ちならび、旧集落の面影は全くとどめていない。



第2図 久良波貝塚調査トレンチ位置図

当遺跡は、沖縄貝塚時代後期と近世に営まれた遺跡であるが、近隣にも遺跡が多くみられる。東側の海岸沿約800mに仲泊遺跡遺跡群がある。該遺跡は複合遺跡で沖縄貝塚時代前期、中期、後期の遺跡が存在する。また当久良波貝塚の背後にあたる丘陵上には、護差丸の居城としての山田グスクが存在し、伝承によると、当久良波海岸は当時の貿易港として華やいたところだとする。文献の『おもろさうし』に登場する久良波集落は、山田グスク下に位置する山田集落の一つとして存在している。該集落には、当時の首里城から国頭へつなぐ宿道が通っていた。その宿道は山田グスク下の丘陵から尾根沿に北に進み、そして久良波の海岸へ一旦おりている。この道はさらに山手側の陸路につないで仲泊へといたっていた。

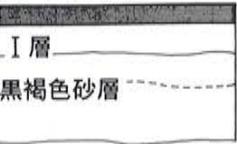
ところで戦前の久良波集落は、中南部へ向かう山道と名護国頭方面に向かう浜道の転換点となる海岸部にあったので、県道（旧）が開通する明治末期までは舟や馬による旅行運送に携わる者がいて、宿泊所もあった。つまり、久良波集落はおもに海道の休憩地的な性格をおびていたようであり、民間伝承でも宿場町としても繁栄していた様子がうかがえる。

生業は戦前、戦後を通じて農業が中心である。専業農家は7戸で、兼業農家が多く、軍作業や土建業から現金収入を得る場合が多かったという。主な農作業は甘藷であった。

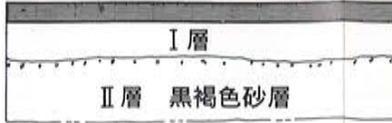
戦後は、ここ数十年前まで、本遺跡の北側海岸地に、レストラン、海水浴、温泉を日玉にしたホテル等の施設がありにぎわっていたが、しかしこれも、丘陵上に国道58号線が新たに付設されて以降、人の流れが変り北部への単なる通過点となってしばらく下火になっていた。しかし、近年、高級ドライブインや大型のホテルに立て替えられ、また周辺も植栽修景がなされ高級観光地に一新している。

なお、現在地には集落はなく、この地より、西方へ400m先にいった丘の上に現在の久良波集落が展開している。戦前までは、当貝塚地域の海岸地帯に存在していたもので、米軍の接収により現在地へ集落移動を余儀無くされた結果であった。

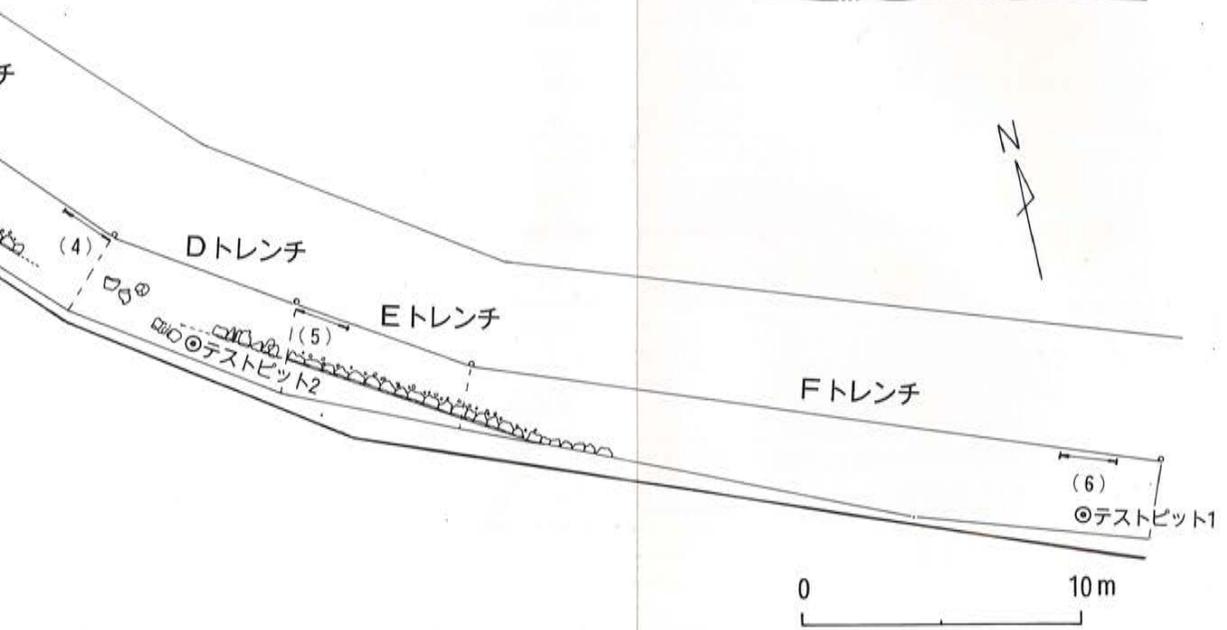
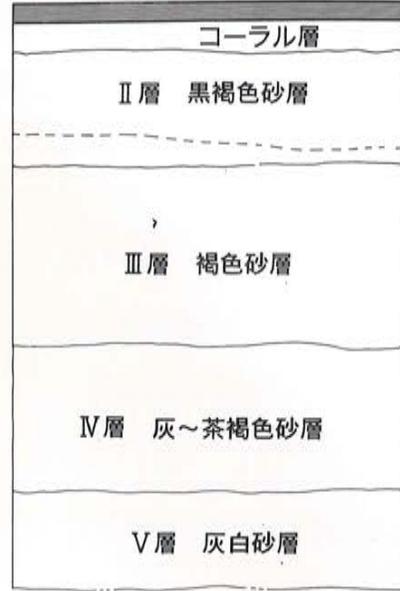
ンチ(4)壁



Eトレンチ(5)壁



Eトレンチ(6)壁



第IV章 調査の内容

第1節 層 序

本貝塚で確認された体積層は5枚であった。その内で、文化層は上位に位置する第II層の一枚だけであった。 第3図

第I層

現代の県道路敷分にあたる層である。最上部に約10cmのアスファルトが敷かれ、その下部にコーラル層の客土からなる。同層は東方のEトレンチ側で約15cmをはかるが、漸次西方へ向い深くなるように厚さが増し、Aトレンチ側で約60cmを計測する。基本的に工事によって外部からもたらされ無遺物層である。

第II層

遺物包含層であると同時に、その上部は旧道の舗装面にもなっている。直上は、コーラル敷きになり、近世の破壊もうけている。包含層は、先に述べたコーラル層と同様に、東から西へ深くなるように厚く層厚を増して、東側で最小40cm、西側で最大60cmを計る。当該層は約100mと長いトレンチ間で層の状況が異なるため、その相違部分のトレンチを基準に状況を記述する。

A、B、Cトレンチは上位の20~25cmが細かい千枚岩礫、玉ジャリ、石灰岩礫などが混入した灰色~黒味のある茶褐色を帯びた砂層で、細い土交じりでもあるため、発掘時にはつるはしを使用する程の堅さに締められていた。その層はE、Fトレンチでは破壊され明確に検出できなかった。当該層は旧県道の路面として使用されていたものとみられる。下位は暗褐色ないし赤褐色、灰褐色、茶褐色とさまざまな色調の砂がしま状にみられる。この層の上下が混在したのがE、Fトレンチである。

第III層

第II層下の堆積層である。黄色の砂層で無遺物層になる。層厚は約100cmをはかり、砂質は細く、乾燥が早くサラサラになる。当該層の上面は東から西へ傾斜している。これは西の河川に向かって地面が傾斜していたことによるものとみられる。

第IV層

同層は非文化層であるが、重量のある大形石器が出土している。出土品はいずれも第II層に属するものが、III層をつきやぶるように当該層にたったものとみられる。砂層の色調は灰~茶褐色で、枝珊瑚礫、円礫などの比較的粗い砂質になっている。層厚は約80cmをなしている。

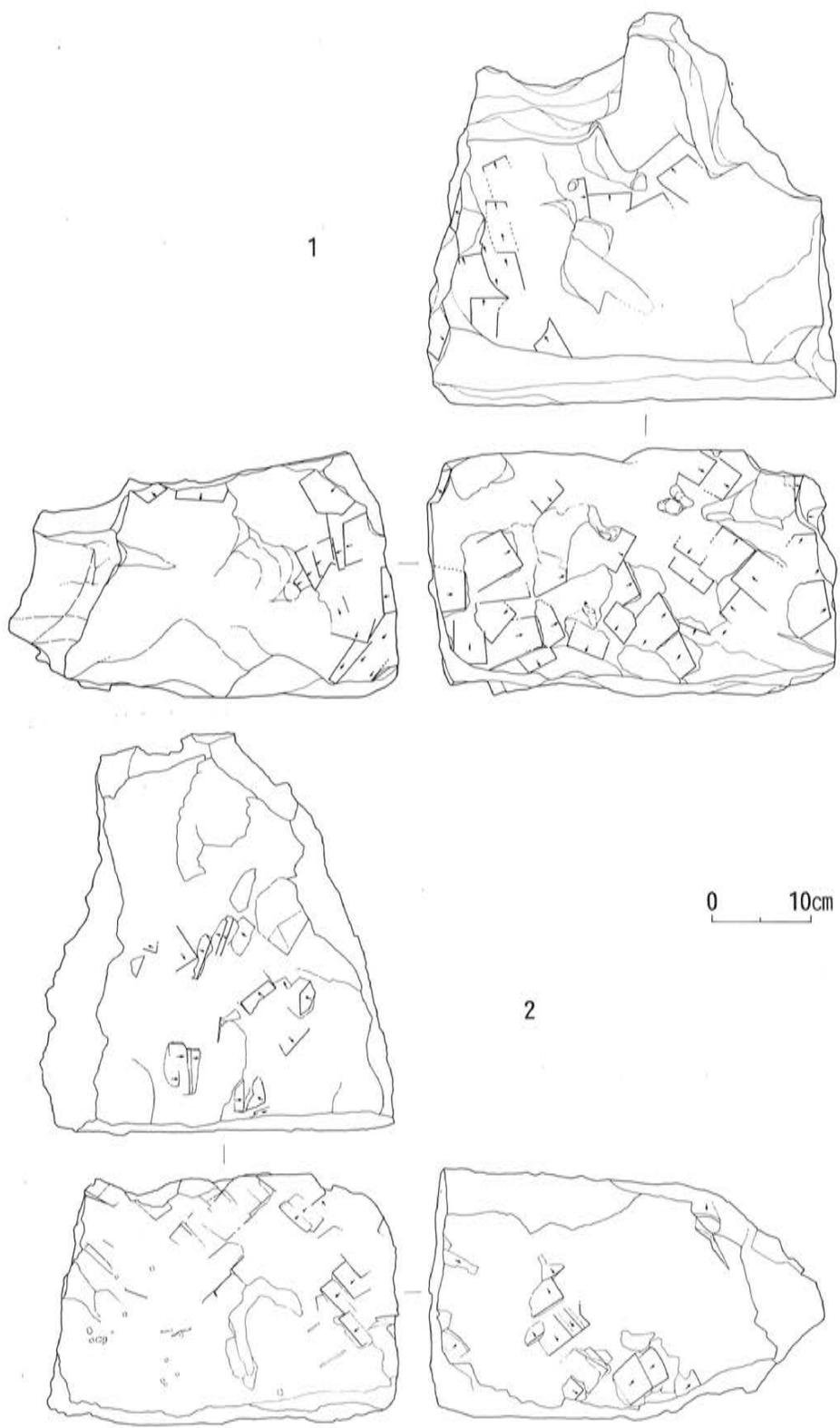
第V層

基盤層であり灰白色の砂礫層になっている。第IV層に比べると砂が細く、水分も含んでいる。

第2節 遺 構

遺構と判断できたのは、第3図の旧道のみで、先史時代に属するものの発見はなかった。旧道は、現在の県道6号線とほぼ重なるように位置している。レベル的には、現県道の基礎材にあたるコーラル土層の直下にある。形態としては、路面および路肩石積からなる。路面や路面中から大戦前の集落で使用されたとみられる近世時期の生活雑器類がえられ、特に東側トレンチ地域で多く得られた。聞き取りによると、調査地区の東側に集落が近年まで存在していたとあり、その状況と一致している。調査区は、トレンチ幅が3mと狭く制約され、一度に旧道の幅員全体を検出することは不可能であったが、調査トレンチが長く湾曲していたため幸に、道を構成する縁石をA、B両トレンチで別々に確認することができ、図面上で推定復元をすることが可能になった。それからすると、おおよそ5mの道幅をみることができる。推定線からすると、厳密には現在の県道6号線の南側車線下に位置するように走っているようである。

構造は、道の両側の路肩部分に珊瑚石灰岩を数段程積み上げ、路面部には枝珊瑚磔や千枚岩の磔を混ぜ、約20cm程に敷きつめ、その上から突き固めたものである。横断面からみると路面中央部分が高く盛り上がる形態をしている。路肩は、石積みによって縁取られ、検出された時点での石の段数は2個であった。また、その控えにあたる背面側にも珊瑚磔の栗石が入れられていた。石積みの石材は、珊瑚塊。切石の大きさは、第4図1が縦22cm、横36cm、控え36cm、重量1800g、2が縦25cm、横35cm、控え40cm、重量2300gになっている。積み石そのものには、当時の整形加工痕として、全面に幅3.5cmのノミ跡が覆う様に残されている。今回の調査で、砂丘地における道路の仕様と、その旧道の規模、構造を具体的に知る手掛かりが得られた。



第4図 旧道の路肩縁石

第3節 遺物

出土遺物は巨視的に先史時代の資料と、近世の資料からなる。前者の資料は土器、石器、貝製品などがあり、後者は青磁、染付、黒褐釉陶器、無釉陶器、近代磁器、赤瓦などからなる。また他に自然遺物の貝殻や獣魚骨類、樹脂類などが得られている。人工品の相対的出土量の比率は、先史時代の遺物の土器が70%、石器と貝製品が合わせて6%、近世資料類が残る24%と先史時代の資料が主体になっている。出土地点で出土傾向が変り、先史時代の資料が、西側のAトレンチ側に集中し、近世の資料は逆に東側に多く出土する傾向がみられた。層位的にはいずれも第II層から得られ、後世の攪乱を受けているか所が多い。出土量では第II層0～30cm

第1表 出土遺物一覧表

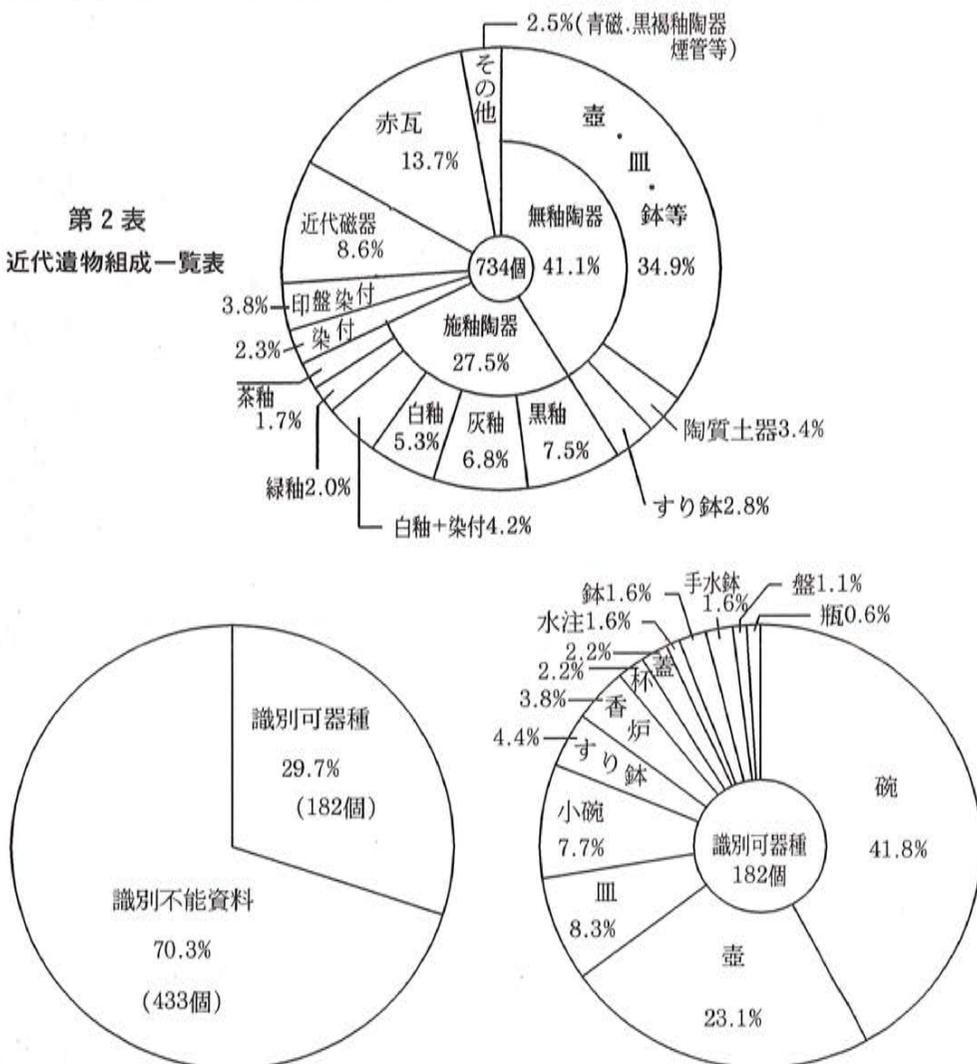
層序 (cm)	遺物	土器	石器	貝製品	青磁	染付	黒褐釉陶器	施釉陶器	そ(陶の器)他	近代磁器	キ(雁セ首)	赤瓦	自然(獣魚骨)遺物	自然(貝殻)遺物
II 層	0～10	373	22	14	1	39	1	190	1	20		43	28	279
	10～20	1107	11	26	1	16	1	146	3	23		22	37	585
	20～30	223	4	42		13		104	4	6	2	18	35	1004
	30～40	304	7	15		2		7		1		3	30	542
	40～50	135	3	8		2		4		1		2	11	479
	50～60	52		11		2		11		3				122
	60～70	4	1	10		4		5		3		5	20	586
	70～80	8		1		1		6		3		3		16
	80～90	5				1		5		3		5		12
試掘			3											
合計		2211	51	127	2	80	2	478	8	63	2	101	161	3,625

に集中して検出されている。また同層以下の無遺物層を4地点で試掘した結果、第IV層の非文化層から大形の石器の出土をみた。しかし大形の重量のある石器に限っての現象であり、その他の人工遺物は検出されていない。以下、近世に属する資料から順次記述していきたい。

陶磁器類

本類に含めた資料は総数734点になる。その種類ごとに分類すると、青磁（2点）、黒褐釉陶器（2点）、染付（80点）、近世施釉陶器（486点）、近代磁器（63点）、赤瓦（101点）などからなる。量的には、第2表に示すように、無釉陶器（荒焼含む）が41%と最も多く、続いて施釉陶器27%と全体の半分以上が陶器類で占めている。他はほぼ近い数量で、染付、印版染付、近代磁器などからなる。産地の理解できるものに、中国産の染付、日本産の伊万里焼などがわずかにみられ、大半は沖縄産である。器種としては、碗、小碗（湯のみ）、鉢、大鉢、皿、杯、瓶、手水鉢、すり鉢、急須、香炉、小壺、大壺の13器種と、他に煙管の雁首、赤瓦などからなっている。出土量は、Fトレンチ側の東方側に多く、出土レベルは第Ⅱ層0～20cmに集中する傾向がある。これは近世の集落が当該地点付近に存在していたことを反映しているものとみられる。

第2表
近代遺物組成一覧表



青磁

2点得られた。凶化したのは第5図1の大型の酒会壺の胴部破片である。他に盤の見込み部分の破片が検出されている。1の釉色は青緑色、器壁の厚さ1.3cm。いずれも水磨をうけて破損面が丸くなっている。前者はAトレンチ第Ⅱ層0～10cm。後者がFトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

黒褐釉陶器

2点得られた。第9図48の口縁部の断面が略方形に肥厚し、特徴的な形態を示す壺の口縁部破片である。劈開面は暗灰白色をおび、粒の粗い混入物がみられる。釉面には細かい貫入がある。前述の胴部破片かともみられる資料で表裏面に施釉されている。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

染付

染付は釉、素地、呉須の違いから4種類に分類した。年代の判明するものでみると、17～18世紀以降のものが主体を占めている。器形は、碗、皿、大皿、瓶、鉢などの器種がみられる。

第3表 近世遺物出土一覧表

トレンチ	Ⅱ層	Aトレンチ			ABトレンチ		Cトレンチ					Dトレンチ								Eトレンチ		Fトレンチ			合計				
		0～10	10～20	20～30	10～20	20～30	0～10	10～20	30～40	40～50	50～60	0～10	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	0～10	10～20	0～10	10～20		20～30			
青磁		1																								1		2	
染付A																											1	1	
”B														1													3	4	
”C		1	1																						5	2	5	15	
”D																									1	1	1	3	
黒褐釉陶器																										1	1	2	
白釉染付		2	4					1					1	1	2	1	1	2		1	6	2		6		1	31		
黒釉陶器		1	1			1		4					5		4						5		18	12	4		55		
灰釉陶器		1						2			1	1	2				1				4	2	6	15	15		50		
茶釉陶器											1														8	4		13	
緑釉陶器																									5	5	5	15	
白釉陶器		2			2			2					5		4		1	2	1	1	1				5	5	8	39	
その他(陶器)														1	1										1	2	3	8	
無釉陶器		2	6	1	1		1	15	1	2			11	6	3	2	1	7	3	5	3	28	1	64	45	48	256		
陶器(すり鉢)							1					1	1								3		6	7	1		21		
陶質土器							2						2	1							1	1		9	2	7	25		
印盤染付		11	2	1			1	1					3		2			1	2	1				3			28		
近代磁器		2	5	3				11					7	3	1	1	1	3	3	3	3	1			10	4	2	63	
キセル(雁首)																											2	2	
赤瓦		7											3	3	5	3	2				5	3	5	3		30	19	13	101

染付 a 類

第5図2は高台の破片である。釉は薄く、灰色釉になっている。高台脇から裏と見込み部分が無釉になっている。高台裏のトキンは残っている。素地は暗灰白色を呈する。呉須は黒褐色を帯びて、ところによっては上薬がかかってなく雑な感じをうける。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。福建・広東系の染付で18世紀以降の資料。

染付 b 類

素地がやや黄色味をおびる磁器で、器体部に丸やY字の文様が十分な空白をおいて施文された印判手の資料である。呉須は淡く、器体面には比較的大きい貫入がはしっている。見込みは破片資料からみるに無釉になる。中国産である。第5図3、4の資料で前者はY字の文様、後者は丸文様が描かれている。いずれも外返する口縁の碗資料である。図面復元をすると、3は口径推算が16cm、4が14.4cmをなしている。出土地区はいずれもFトレンチ第Ⅱ層20～30cm。17世紀後半～18世紀に相当する。

染付 c 類

淡い呉須で花文が描かれているのが特徴的で、器形に碗、鉢、大皿の破片がみられる。中国磁器である。第5図5は浅い碗の口縁破片で、口径推算約13cmをはかる。口唇が僅かに外返し、器体部に花文がえがかれている。口唇と見込み部分に圈線が配されている。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

第5図6は浅い碗の高台破片資料で、底径推算約7.2cmになる。高台は細く高く高台脇に二条の圈線が施されている。17世紀相当の資料。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

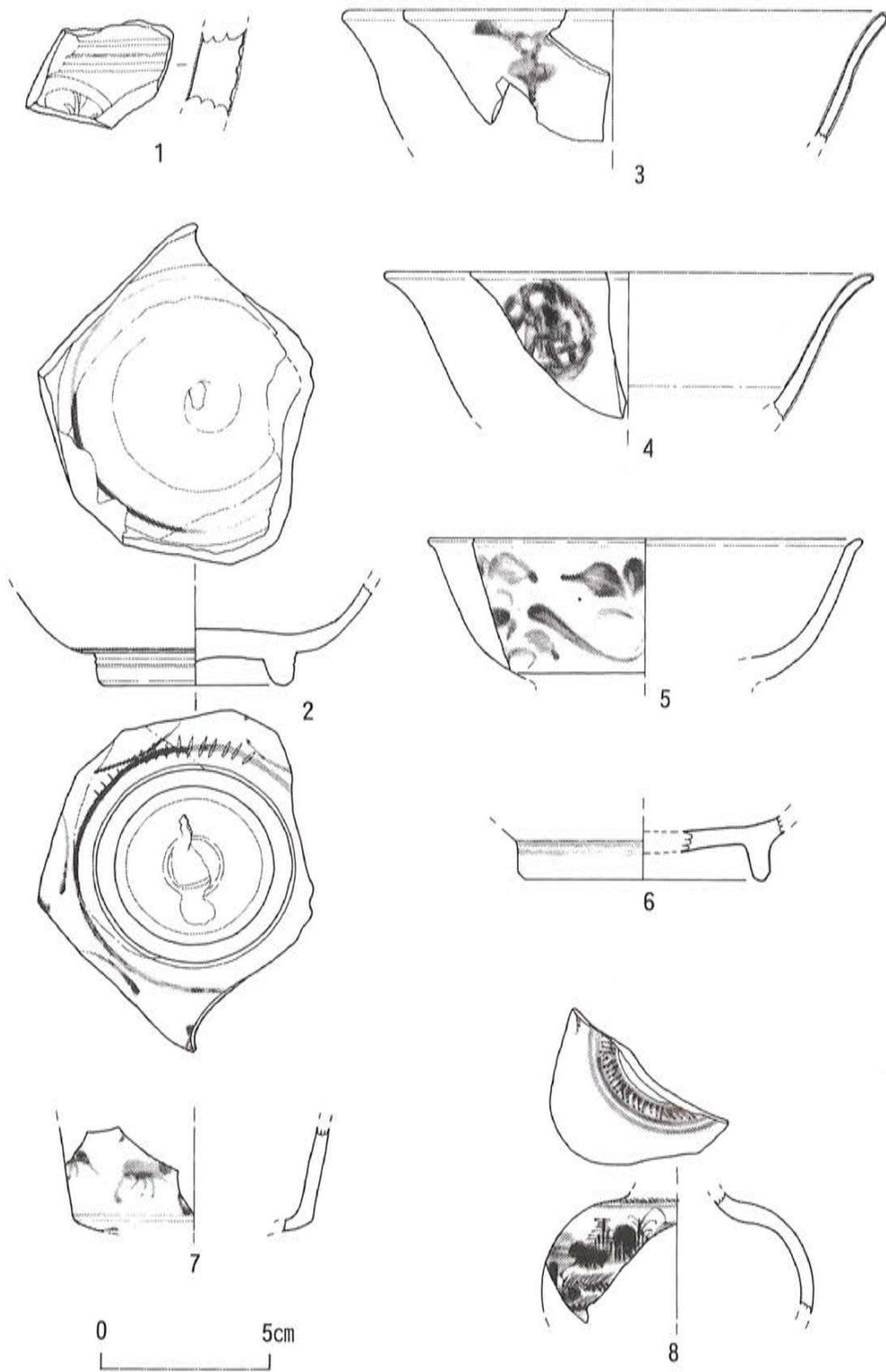
染付 d 類

3点である。香炉と瓶、皿の小さい破片からなる。図化にたえるのは、第5図7の香炉で、胴から底に移行する腰部の破片である。呉須は薄く松か花状の模様が描かれている。見込み部分には回線がみられる。素地は白色できめこまかい。17世紀以降の中国産。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

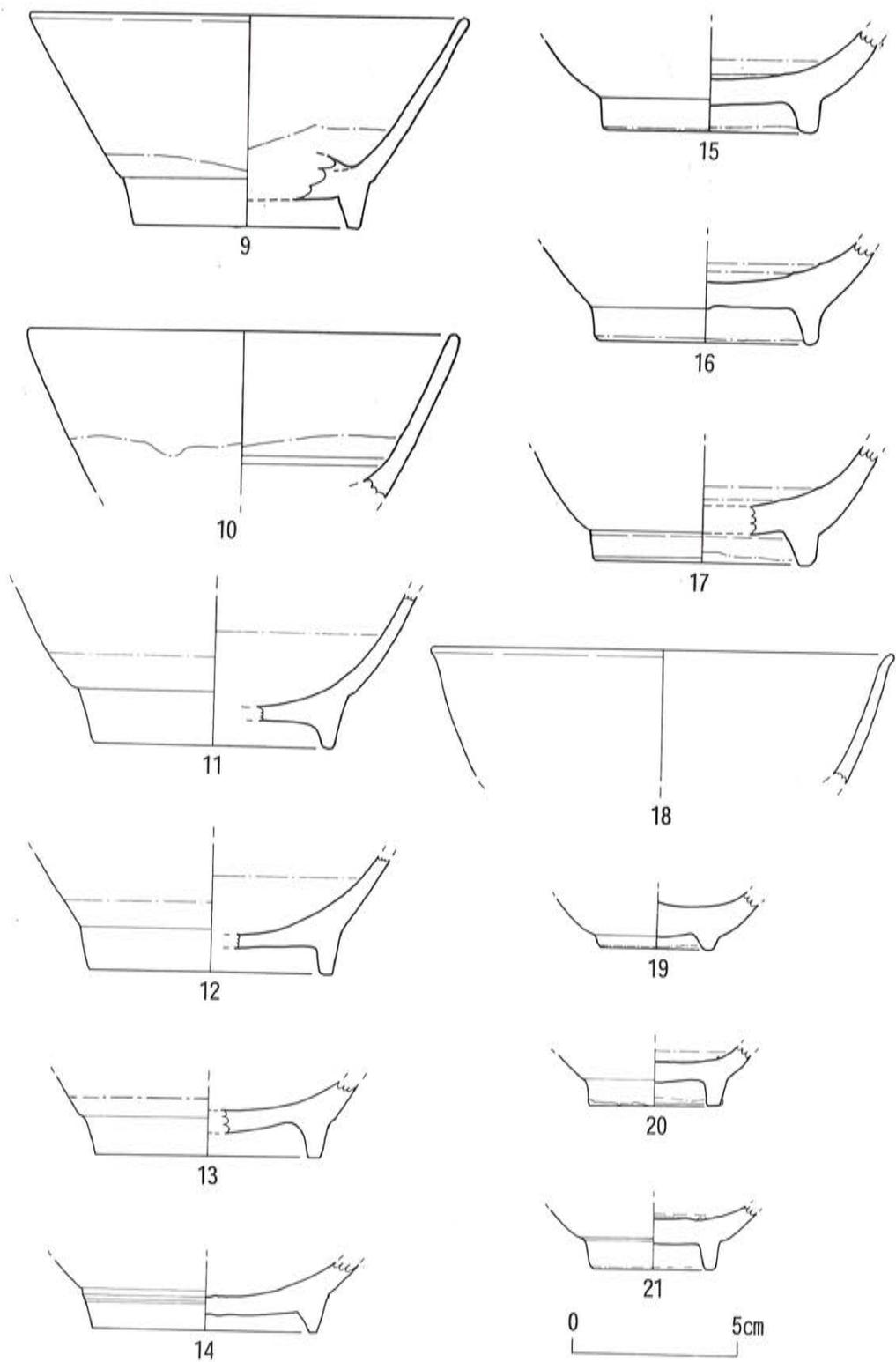
同図8は、瓶の肩部分の破片で、胴体部には景色が呉須で描かれている。内面にも光沢のある透明な釉が施釉されている。素地は細かい気泡がみられ、白色を呈している。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。中国製品。17世紀。

施釉陶器

釉色、素地、整形により3種類に分類して記述をすすめる。



第5図 青磁1 染付2~8



第6图 施釉陶器 a類9~14 b類15~21

a 類

いわゆる灰釉と称される陶器である。第6図9～14。

同図9は、口径推算13cm、底径推算6.8cmの磁器碗である。口縁部の内外壁に薄く施釉したもので、暗緑色をおび、素地は暗灰色になる。畳付部分には白色の砂粒が付着している。内底面は焼成時にできた膨れが破裂した状態になったままである。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図10は、口径推算13cmをなす口縁部破片である。本資料も高台脇以下および内底面が無釉による磁器質碗になっている。釉は透明で薄く淡青緑色を呈する。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図11は、底径推算7.3cmの底部破片である。高台脇にかかる釉は薄く淡緑色をおびる。高台中央と見込み部分にかぎり陶器質になり淡褐色になっている。Dトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図12は、素地が褐色をおびた陶器質で、また高台脇にみられる釉も生焼けをし、光沢のない白色をおびた粒子からなる。高台のつくりは上記の資料と同じく細く、内底面はボール状にまるくくぼむ。底径推算7.4cm。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図13は、灰色に焼き締められた磁器質の碗底部で、上記の底部の残存する資料と同じく内底面に重ね焼きの痕跡がみとれる。外器面の高台脇に僅かに暗緑色の釉をみることができる。底径推算6.8cmをはかる。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図14は、これまでの資料とことなり、素地が灰白色を呈した磁器質碗の底部である。残存部分は無釉で、高台が低くなる。畳付部分にわずかに砂粒の付着をみとめる。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

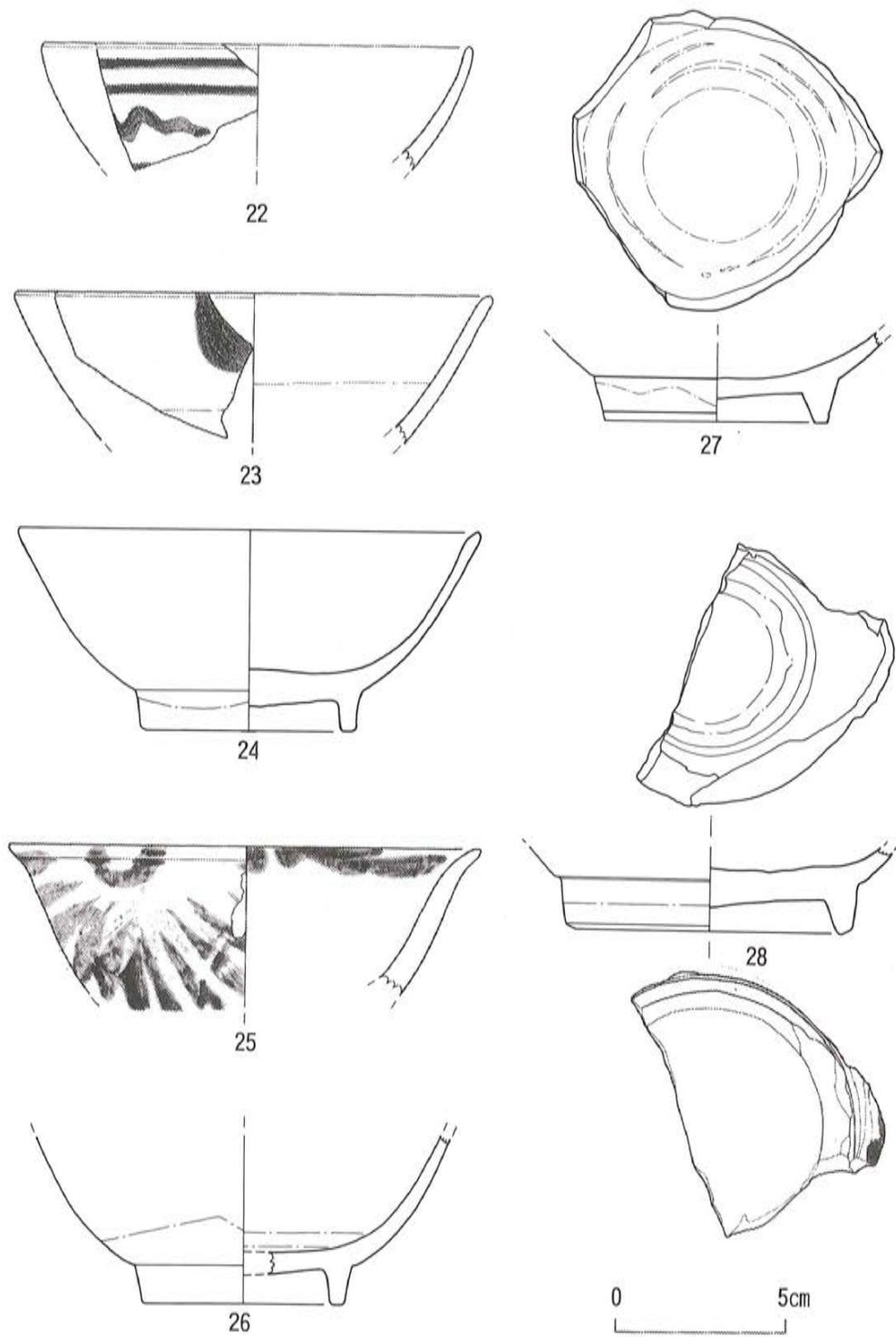
b 類

白土釉を施釉した資料の一群である。器形は碗、小碗からなる。

第6図15は、碗の高台の破片資料で、見込み部分に重ね焼きのためにかきとった無釉の圏線と畳付が無釉で、他は白化粧が施されてる。畳み付け部分は角がとれた高台になる。底径推算6.5cmをはかる。素地は淡褐色をおびている。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図16は、上述の15と同じ施釉の方法をなした底部資料である。内底面の割れ部分でみると褐色をおび他の部分では淡褐色を呈している。見込み中央には釉のひび割れや、高台裏には砂粒の付着がみとめられる。底径推算6.8cm。Dトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図17は、素地が赤みの強い褐色をおびた破片で、上述の資料と同じくほぼ全体に施釉され



第7図 施釉陶器 c類22~28

た碗である。釉は細かい貫入が入り、また高台裏から黒色の釉が全体に施釉されたところがこれまでのものと異なる。底径推算6.7cm。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図18は、白化粧釉をした碗の口縁部資料で、口径推算14cmを計測する。釉内には細かい貫入がはしっている。素地は淡褐色。口縁形は直でわずかに口唇部で外返がみられる。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図19～21は小碗になる底部資料である。19の素地は、やや磁器質のある灰白色で、現在の資料でみるかぎり、前体に施釉され僅か畳付部分が無釉になっているのみである。断面でみると内底面と高台裏が盛り上がり厚くなる。また高台自体も低くなっている。釉内には細かい茶色になった貫入がはいつている。底径は3.5cmを計測する。Dトレンチ第Ⅱ層60～70cm。

同図20、21は、全体の形状、施釉の部分は同じであるが、若干その大きさ、別色の釉を採用するところで異なる。20は、見込み部分に重ね焼きのためのかきとりの無釉部分が圏状にみられ、その部分に重ね時の付着物もみられる。素地は赤褐色で、高台裏全体に黒釉が施されている。底径推算4cm。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。 後者は施釉部分は同じであるが、ただ高台裏は器面を覆う白土釉と同じものである。底径は幾分小さくなり底径推算3.7cmをはかり、高台の高さは内底面からでは、前者が1.3cm、後者が1.6cmと高くなっている。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

c類

茶色釉、黒色釉、コバルト釉などの類である。器形は碗、小碗、鉢、急須、香炉、壺などがある。

第7図22は、内湾器形をした口縁部資料で、口径推算13.2cmを計測する。素地は淡褐色で、透明釉を施釉してある。外器面には、口縁に沿って二条の線とその下に波状の線を描いている。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図23は、直状の口縁部破片で、灰釉が口縁部のみ施釉された資料である。釉色は灰色、素地は施釉された口縁部近くは灰色をなし、その下の無釉部分は淡褐色を呈している。外器面には破損して全体形は不明であるが茶黒色の丸文が施されている。口径推算14cm。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図24は、碗形の資料である。素地は口縁部付近は灰色の磁器、高台部分は淡褐色の陶器質

になっている。釉は外器面は黒釉を高台脇までなし、内器面は口縁部、胴の中央、見込み中央に同じ釉がみられ黒味の強い釉で線引きをしている。それ以外の内器面は、暗緑釉が施釉されている。内底面は蛇の目状に削りとっている。口径推算13.6cm。底径6.2cm。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図25は、淡褐色の素地をした碗の口縁資料である。口縁部は軽い外返がある。外器面には大きな花状の文様を描き、口縁部内面には歯のような線をめぐらしている。釉は光沢があり、文様はコバルトブルーの釉で施文してある。口縁部推算14cm。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図26は、見込み部分は蛇の目になり、外器面は高台脇まで施釉されている。釉は光沢があり赤味のある茶色釉からなる。後者の第31図35と同じ釉になる。底径推算6cmをはかる。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図27は、上記の26と同じ様な施釉でなされるものである。外器面側の釉は黒釉をなし、内面側は草色釉を施釉してある。器形は、碗の高台になるものとみられ、内底面は丸く、くぼんで整形されている。高台径は6.6cmをはかる。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

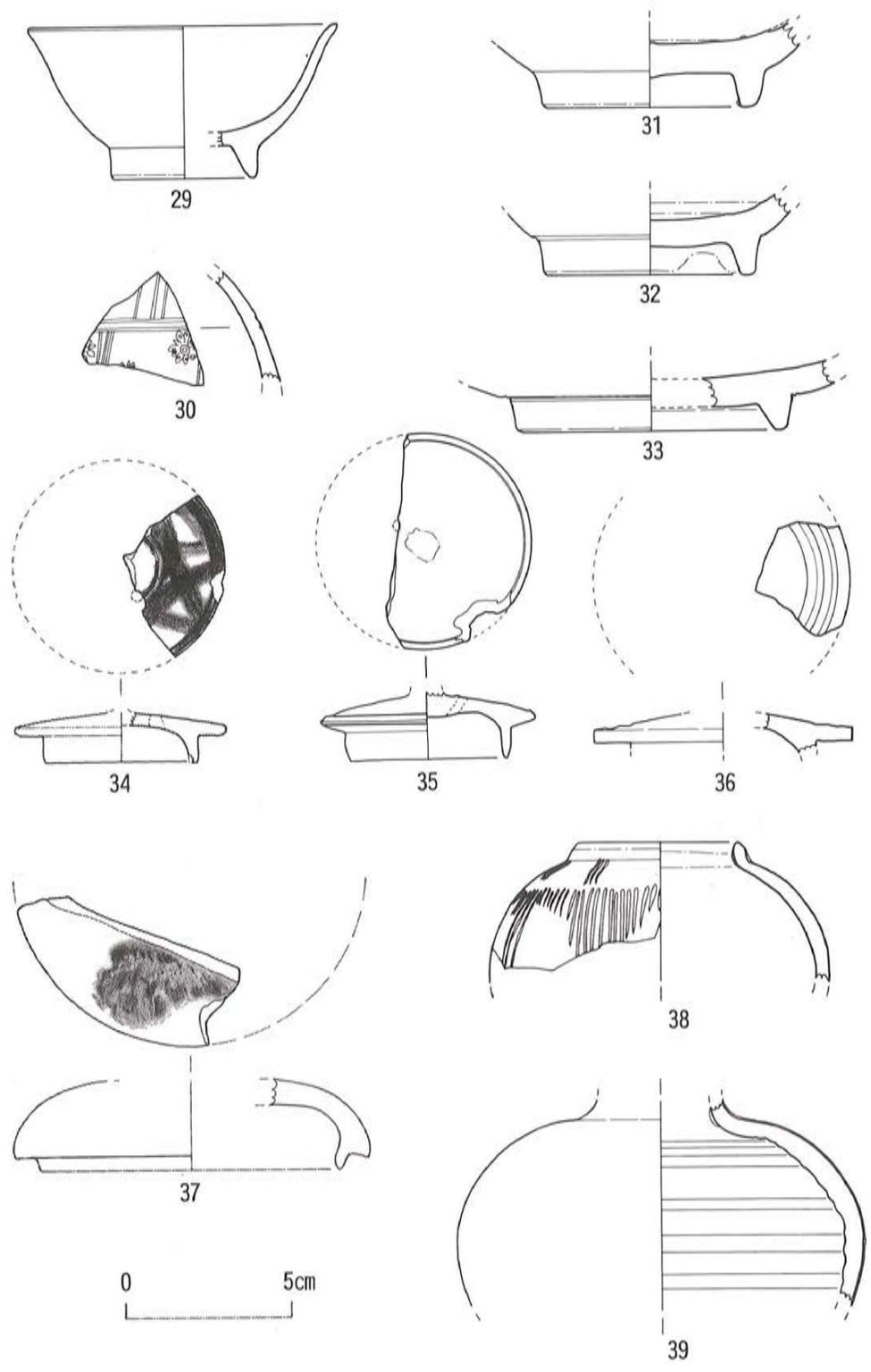
同図28も高台の破片であるが、底径は8.5cmと鉢形の資料と考えられる。施釉は見込み部分は蛇の目状に、外器面は高台脇まで、高台裏には白釉を施している。釉は薄くきめの細かい混入が大量にはいっている。また外器面には草色による文様が施文されていたようで、破片が小さいため、その文様の形状は不明である。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

第8図29は、口縁部が僅かに外返がみられる小碗の資料である。施釉は内器面は蛇の目に白釉を施し、外器面は黒釉を畳付部分まで施釉してある。高台裏も無釉になる。内器面の釉には細かい貫入がはいっている。素地は暗灰色ないし淡褐色。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図31は、畳付と見込みの蛇の目部分のみが無釉になった底径推算6.5cmの資料である。素地は磁器質になり淡灰色をおびる。白土化粧を施したもので釉は外器面のものは特に光沢がある。Dトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図32は、丁寧に高台を削り出した底部資料である。残存部分は全て無釉になる。素地は細かく精練され淡乳白色を呈する。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図33は、見込み部分が蛇の目を形成し、底部裏は畳付が無釉で、高台裏は釉を撫で付けた



第 8 図 施釉陶器 c類29、31~39 唐津焼30

ように雑に施釉された資料である。基本的に白土化粧でなされている。素地は灰白色の磁器質に焼き締められている。釉には細かい貫入が観察される。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図34～36の三点は急須の蓋にあたる資料類である。

34は、白土化粧の釉の上に、コバルトブルーの釉で車状の文様を施文した資料である。素地は乳白色をおびた陶器質である。蓋の最大径は6.3cm、身の部分の口径は4.7cmになるものとみられる。Eトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

35は、素地は灰色をなした磁器質で、その蓋上面に茶色の光沢のある釉を施釉している。蓋の最大径は6.4cm、身の部分の口径は5.0cmになるものとみられる。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

36は、赤褐色の陶器質の素地をなす資料で、蓋上には黒釉を施してある。残存部のその上には篋削りによる凹線が二条みられる。蓋裏の爪は破損しているがその身の口径は図面復元は可能である。蓋の最大径は7.7cm、身の部分の口径は5.1cmを計測する。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図37は、合子の蓋状を呈する資料で白土化粧をベースにその上に青ないし、み草色の釉を文様としてかけた製品である。素地は灰白色で岩石質になる。白釉の部分には細かい貫入が走っているのが認められる。蓋の最大径は10.6cm、身の部分の口径は9.4cmになるものと思われる。Eトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

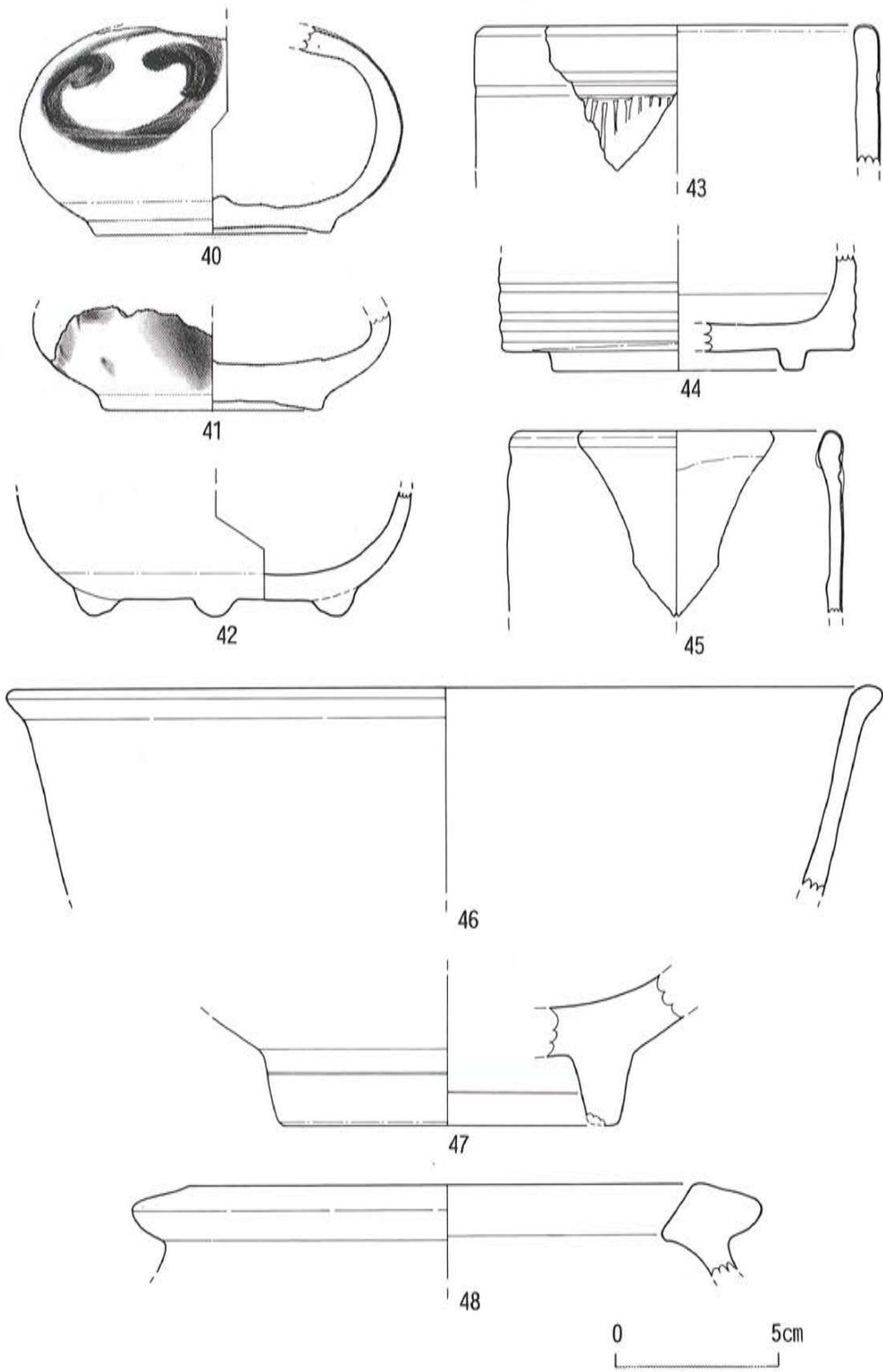
同図38は、急須の身の部分であるが、大きく胴部から底部を欠落している。口径推算4.7cmをはかる。素地は灰色で磁器質になる。外器面には白土釉を施し、図の様な線状の文様を施している。釉は薄く草色を全体におびる。また釉内には細かな貫入がはしっている。なお、内器面には茶色の釉が薄く塗布してある。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図39は、胴部が著しく張り出す壺の破片である。素地は灰白色の磁器質で、外器面に厚く草色の釉を施している。釉内の貫入は細かく、概して右から左斜め下の方向に線がはしっている。内器面には無釉で轆轤整形痕がそのまま残されている。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

第9図40～42は急須の底部資料を図化したものである。

40は、内湾ぎみの平底をなすタイプである。当初、器面全体に白土化粧がなされ上部から胴部下部近くまで透明釉がおよんでいる。素地は褐色の陶器質になる。残存する器体部には二つの頭からある巴文様が薄い青で描いてある。透明釉には細かい貫入が観察される。底径7.2cm。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

41は上記の40と同質の素地を有するもので、高台部分のつくりが若干ことなり、幅1.2cmの



第9図 施釉陶器 c類40~47 黒褐釉陶器48

低い高台が作られている。施釉は高台脇までなされ、また高台裏も施釉されている。畳付は白化粧の土塗布されているのみ。器体部には草色、青色の二色の釉による文様が施されていたものとみられる。残念なことに破損が大きいため形状については不明である。底径推算6.7cm。
Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

42も、同じく白土化粧が全体に塗布されていて、そのうえから底部脇まで白釉が施釉されたものである。したがって底部の裏は光沢のない白土化粧のみである。上記の資料類と異なる点は足が付されていることで、結局三種類の底径形態がみとめられたことになる。釉には細かい貫入が多くはいつているのがみられる。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

第9図43～45の三点が香炉である。

43は、口径推算12cmを計測する直口状の口縁部資料である。素地は橙褐色をおびる陶器で、外器面には、へら彫りの文様があり、その上から黒釉を施釉している。内器面は無釉である。
Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

44も同じく、素地が赤褐色をおびる陶器で、内器面は露体し、外器面には横位の凹線を幾条も施文したもので、その上に黒釉を施釉した製品である。なお、器面の釉は風化を受けていて、一見すると暗緑色をおびている。胴部径10.8cm。高台径7.7cmを計測する。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

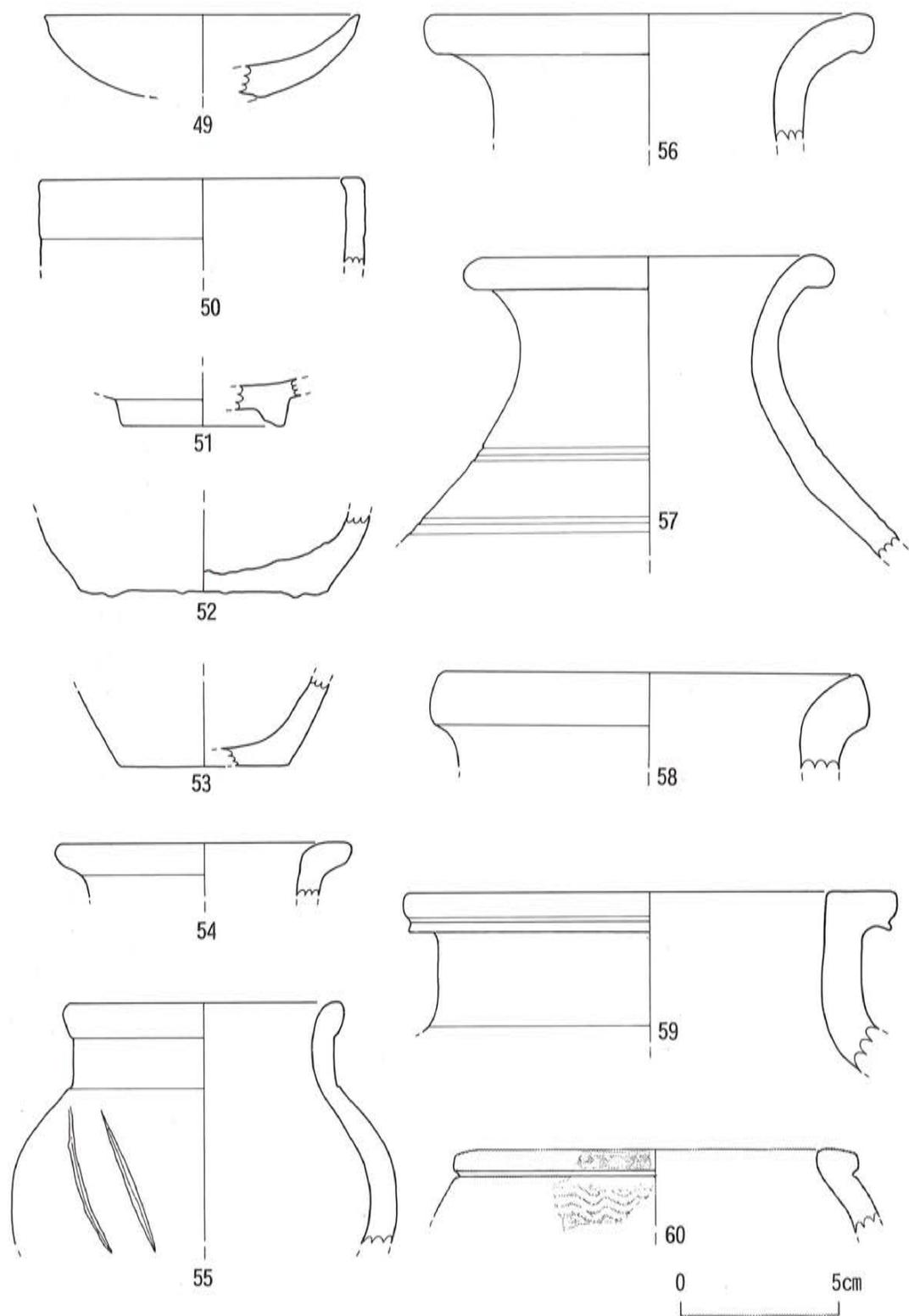
45は、暗灰色の磁器である。口唇部、そして外器面全体を施釉したもので、釉は、青緑色を呈したものである。内器面の露体部は、やや褐色をおびている。口径推算10cmをはかる。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

第9図46は、口径推算26.6cmをなす鉢の口縁部資料である。口唇部が玉縁に肥厚する資料で、ほぼ直に胴部に移行する器形である。素地は灰色の磁器である。全面に施釉がなされ、釉内には細かい貫入が無数に入っている。なお、外器面の口縁直下には自然に施釉が厚くなるためか暗緑色の線がみとめられる。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図47は、高台径推算11.2cmをはかる破片である。残存部でみるかぎり、畳付と見込み面に重ね焼きで削りとった蛇の目部分のみが無釉である。外器面は光沢のある黒釉が施釉され、内器面は白釉がほどこされている。白釉部分には細かい貫入が見られる。素地は淡褐色で岩石質になるものである。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

唐津焼

2点検出されている。図化した破片は第8図30の瓶の破片である。器面上に格子状の線と菊



第10図 無釉陶器

模様の花がほどこされている。素地は暗灰色で釉は暗緑色をおび、そのうえに白色の模様がみられる。なお白色の模様は散った状態で丁寧ではない。Dトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

無釉陶器

荒焼きとも称される群で、なかには極めて薄く鉄釉が塗布されているものもみられたが、便宜的にここに含めて紹介する。器形は皿、土鍋の蓋、香炉、壺、すり鉢、水鉢などが、えられている。

第10図49は、口径推算9.8cm計測する皿形の資料である。素地は赤褐色の粘性のある劈開面になる。口唇部の内面に煤が付着しているが、機能と関連するのかは今後の検討課題としたい。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図50は、器面全体に自然釉に近い褐色系の光沢がみられる。香炉の小破片で、口径推算10cmを計測する。口唇部は平坦になり、内器面側に飛び出したかたちをしている。素地は白色砂粒が混入した赤褐色の陶器である。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図51は、明褐色を呈した陶質土器である。いわゆる土鍋の蓋の摘み部分と考えられる資料である。説明の便宜上、図では高台のごとく図化してある。推算径が5.1cmをはかる。畳付部分には糸切痕が残っている。Dトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図52は、素地が精練された赤褐色の底部の破片である。底径は7.8cmをはかる。一部の底部の脇とその裏に、砂混じり状態で緑色釉がかかっている。内底面は自然釉の黒色の半光沢がみとめられる。また内底面の整形は丁寧ではなく轆轤引きのあとが残されている。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図53は、やや白色の微砂粒が多く混入した赤褐色の素地を有する底部破片である。底径推算5.3cmである。整形は上記の52に比較し丁寧なつくりで、立ち上がり部分と底部との境は明瞭である。破損部の胴部上辺には、薄い黒緑色の釉がかすかに見て取れる。ただしこの釉が全体になされていたかは明確ではない。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図54～60まですべて壺形の資料で、いずれも玉縁を形成する口縁部資料である。54は、玉縁状の口縁部が、外返させつつ口唇部を平坦に整形した様な資料である。素地は赤紫をおび粘性がみられる。器面は風化しているが緑がった施釉が見られる。54は口径推算9.3cm。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

55は、口縁推算8.6cmを計測する。垂直の頸部が明瞭にありそれ以下が胴部として張り出す

壺形である。残存する胴部部分には斜めに切り付けた様な沈線が二条みられる。素地は赤褐色で砂粒子や細かい気泡がみられ、やや粘性がみられない状況を呈している。外器面には薄く施釉がなされ、赤褐色の光沢が部分的に観察される。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

56は大きく外返した壺で、口径推算14cmを計測する。素地は赤褐色でおび、その劈開面は粘性をみている。口唇部は外返のため稜が明確にある。外器面は全体に風化しているため、微かに黄色みをおびた付着物が認められるが、それが汚れか、釉かどうかは明確ではない。Dトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

57は、典型的な玉縁になり、肩部には轆轤引きによる沈線文様を施文した壺である。素地は前記の58と同じである。口径推算12cmを呈する。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

58は、断面が三角状に肥厚した口縁部で、口唇部が角を有する形になるものである。口径を図上復元すると13cmになる。器面は風化がすすみ、その破損面も磨滅している。素地は、赤褐色で、器表面には、やや黒褐色をおび施釉がなされていたものとみられる。Dトレンチ第Ⅱ層0～20cm。

59は、逆L字形をした口縁部資料で、口径推算15.6cmをなす。口唇部の幅は、2.2cmを計測する。頸部は直の状況をみせる特徴がある。素地は光沢のある暗赤褐色で中心部はサンドイッチ状に黒味が強くなっている。内器面が赤褐色、外器面がザラついた暗赤褐色を呈している。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

60は、頸のない壺で、口縁部の外側に波状の沈線文様を数条配した資料である。素地は赤褐色で口縁部から外器面は、光沢はないが黒味がかぶった様にある。口径推算12.8cmをはかる。Dトレンチ第Ⅱ層80～90cm。

第11図61は、植木鉢の口縁の様に断面が方形に肥厚した鉢形の口縁部である。口径は推算すると34.8cmになる。肥厚した口唇部は幅が2.7cmを計測する。素地は赤褐色で口唇部から内器面側の表皮が黒くなっている。Eトレンチ第Ⅱ層0～20cm。

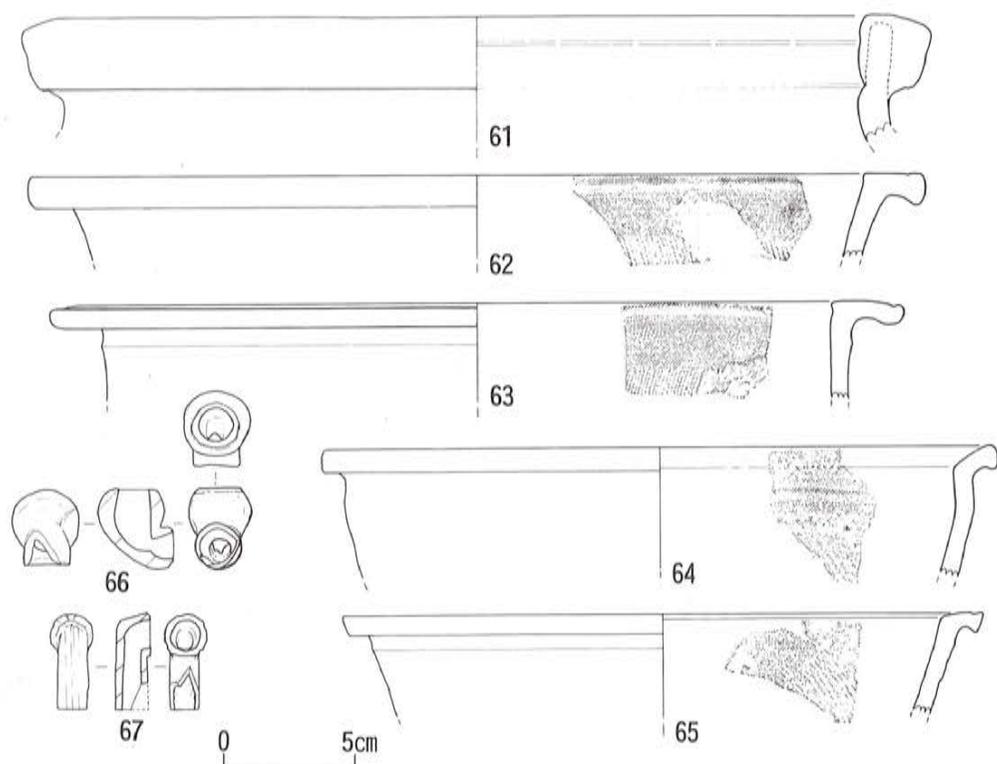
同図62～65、第13図73は、すり鉢の資料である。

62、63の資料は口唇が大きくつくられたもので、口唇部の外周側にいずれも一条沈線がめぐっている。前者の素地は赤褐色で、劈開面が粘性をみせる。櫛かきがされた内面の色調は褐色で口唇から外器面側は自然釉の焦茶色の光沢釉がみられる。口径は最も大きく34cmをはかる。Fトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

後者も素地は同質で、器面の色調が口唇から内器面は褐色で、外器面は暗褐色を呈する。楕目は細かく、楕目の間隔は1.5mmになっている。口径推算32.7cm。Dトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図64は、口唇の顎がやや斜めに立ち上がる破片で、口径推算25.5cmと小形になる。楕目の間隔はやや広くなり2.5mmになる。素地はやや紫味をおびた赤褐色で岩石質になっている。外器面は風化と、焼成時の器面仕上げの悪さからか、細かい気泡とうすいピンク状の釉が剝離して粗面になる。Eトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図65も口径推算が24.5cmと小型になる資料である。口唇部の幅は1.6cmとなり外周側に一条沈線が施されている。また楕目は粗く2mmをはかる。また口縁部近くの楕目をかき上げたのちの横ナデによる揃え調整が徹底していない。器面は、橙褐色をおびるが、素地は中央が赤褐色、それを両側から挟む様に黒くなっている。劈開面は、粘性がみられる。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

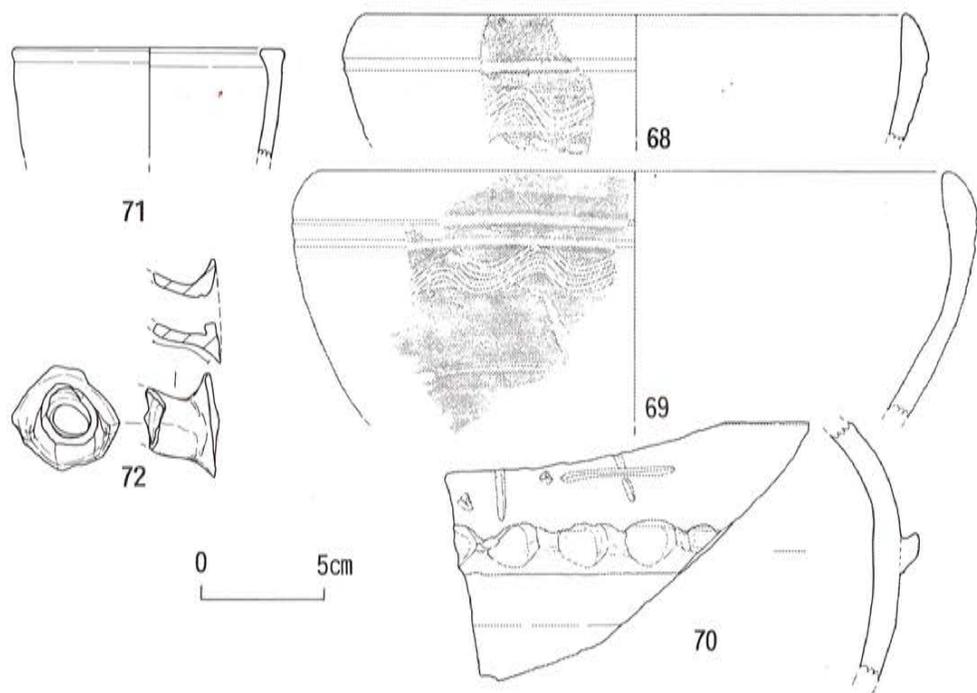


第11図 無釉陶器61～65 煙管66、67

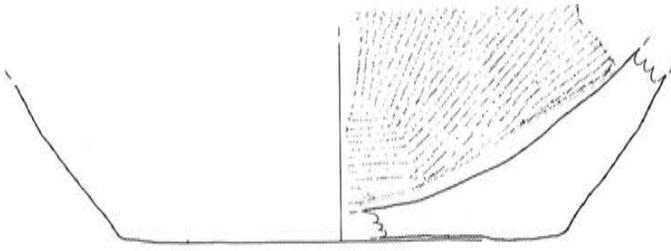
第13図73は、底径推算12cmの底部破片である。櫛目は太く、その数も約11本を一つの単位としたものとみられる。幅は2.1cm前後をはかる。内器面の色調は赤褐色、素地は暗灰色、外器面はやや光沢のある焦げ茶色をおびる。Eトレンチ第Ⅱ層0～20cm。

第12図68、69で、いずれも口縁部が若干肥厚して内湾する鉢形である。前者は口径推算25.5cmを計測し、色調が明るい褐色を呈する。後者は22cmをはかる。色調が外器面は茶褐色で、内器面が明褐色をおびる。外器面の文様は、前者が口縁部下に二条の凹線とその下に5本の櫛目による波状の沈線を配している。後者も同様になされてるが、口縁部下の凹線が一条になっているだけである。俗称ミジクブサーと、いわれるものである。いずれもCトレンチ第Ⅱ層0～20cm。

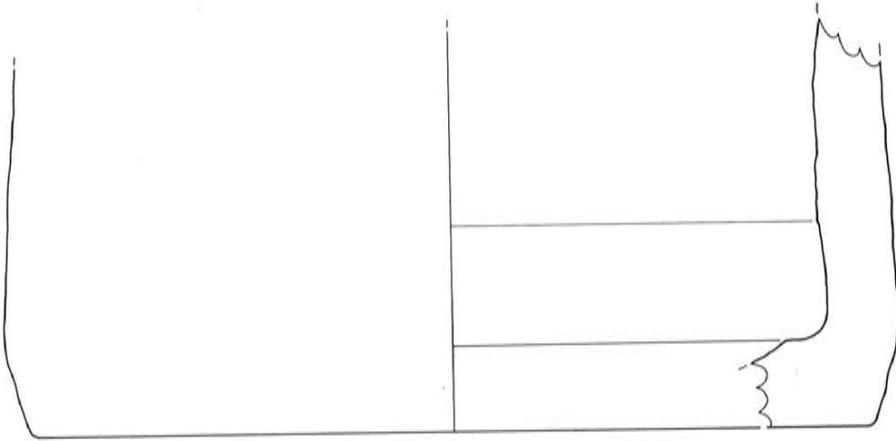
第12図71は、香炉の口縁部資料で口径推算11cmになる。器面には轆轤整形時の横位の擦痕がみられ、全体に明褐色をおびる。器壁の厚さ0.5cm。同図72も同質の胎土、色調、焼成をした薬罐のそそぎ口部分の資料である。そそぎ口の下部に黒い煤が付着している。そそぎ口の整形の手順が当該資料から理解される。つまり完成した胴体にそそぎ口が付けられ、その後に胴体内部からそそぎ口部分に貫通する孔が穿たれている。ただその孔の方向にずれが生じ真ん中には位置していない。両資料ともFトレンチ第Ⅱ層0～10cm出土。



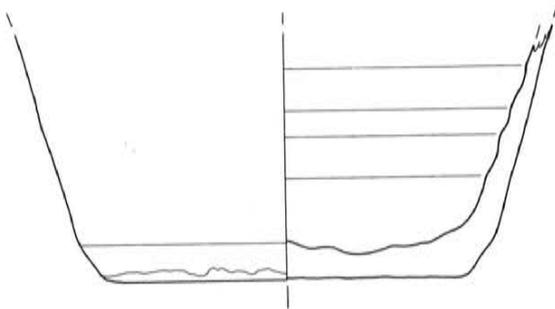
第12図 無釉陶器68、69、71、72 施釉陶器70



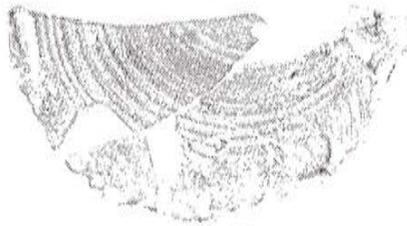
73



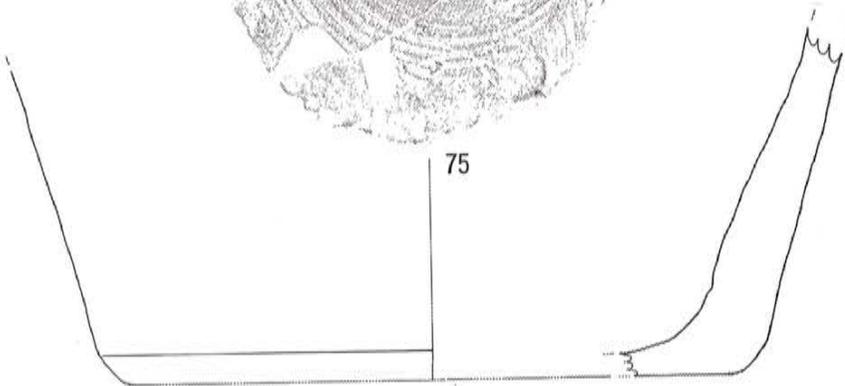
74



0 5cm



75



76

第13図 無釉陶器

第12図70は、外器面に横位の凸文様とその上に窠書きの刻みがある胴部資料である。凸文様は幅が1.5cmのもので、約3cm間隔で押し潰して文様に仕上げたものである。外器面は光沢のある茶色の薄い釉がみられる。内面は赤褐色で露体している。素地は赤褐色で粘性があり、細かい気泡がみられる。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

底部

第13図74は、素地が瓦質の陶器で明褐色をおびる。内器面には轆轤痕がおびのようにみられ、外器面は赤褐色になり器面の仕上げも丁寧に調整されている。器壁の厚さはほぼ一定して2.1cmになる。底部裏は平坦になり、糸きり跡の様な数条の擦痕が同心円状にみられた。この面の色調は灰白色になっている。Eトレンチ第Ⅱ層0～20cm。当該資料と同一固体の破片とみられ底部の小破片が、Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図75は、口縁部を欠落した陶質土器の資料である。無釉で、風化しているためか、手触りで器面の粉末が付く。内器面には轆轤整形痕が明瞭にのこり、また底部裏は糸切り跡がくつきとみられる。底径推算9.5cmを計測する。Fトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図76は、底径推算21cm。素地は赤褐色をおびて、劈開面は粘性があり、細かい白色の砂粒や気泡が観察される。底部の裏は、平滑になり、窠などの調整とみられる細かい条痕が微かにのこっている。残存部については無釉になっている。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

煙管

2点出土をみている。いずれもタバコを受ける部分であるが、器形、施釉が特徴的な資料である。第11図66は全体に白釉が薄くかかるもので、火受け部分が球状に大きくなり、吸い口側の部分は短いつつを作っている。同図67は無釉焼きしめで、器面には窠整形によるものとみられる細かい面が無数にみられる。色調は暗赤褐色をおびている。器形的には火受け部分の首や大きさが小さく、吸い口側の筒は長く作られている。両資料ともFトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

赤瓦

101点の破片が検出された。いずれも小破片であるが、器形の判断できる資料からすると軒平瓦からなり、漆喰の付着した破片もみられた。いずれも裏面に布目圧痕がある、いわゆる明式瓦である。殆どのものが、胎土中に赤色の粘土物質が混入していて、厚さは約1.4cmをはかり、

明褐色から赤褐色をおびている。また、わずかながら胎土中央が暗灰色の焼き締った瓦資料も含まれている。

貝製品

貝製品は総数127点検出された。層位的には第Ⅱ層0～30cmに集中する傾向がある。製品別にみると、実用品としての有孔二枚貝製品、タカラガイ製品、ヤコウガイ製品、貝匙、ホラガイ有孔品の5種、そして装身具の貝輪の計6種類になっている。量的には、有孔二枚貝製品、タカラガイ製品が全体の57%と実用品が主体をなしている。

有孔二枚貝製品 第14～18図

二枚貝の殻頂部に粗孔を穿った製品類で、総計61点になる。貝殻別にみると4種類の貝殻が使用され、その内訳は、ザルガイ(9点)、リュウキュウザルボウ(22点)、メンガイ(21点)、シャコガイ(9点)となっている。貝種別に出土量をみると、リュウキュウザルボウ、メンガイを中心とする構成であった。

貝種別に重量をみるザルガイは、3.3～4.3gのものがあり、その中で多く得られたのは約3.2gである。リュウキュウザルボウは、6.1～24.4gで量的に9.0gに集中している。メンガイは、1.5～8.0gがあり、12gに偏って得られている。シャコガイは、量的に少なく12～87gと重量に幅があってその偏りはみられない。

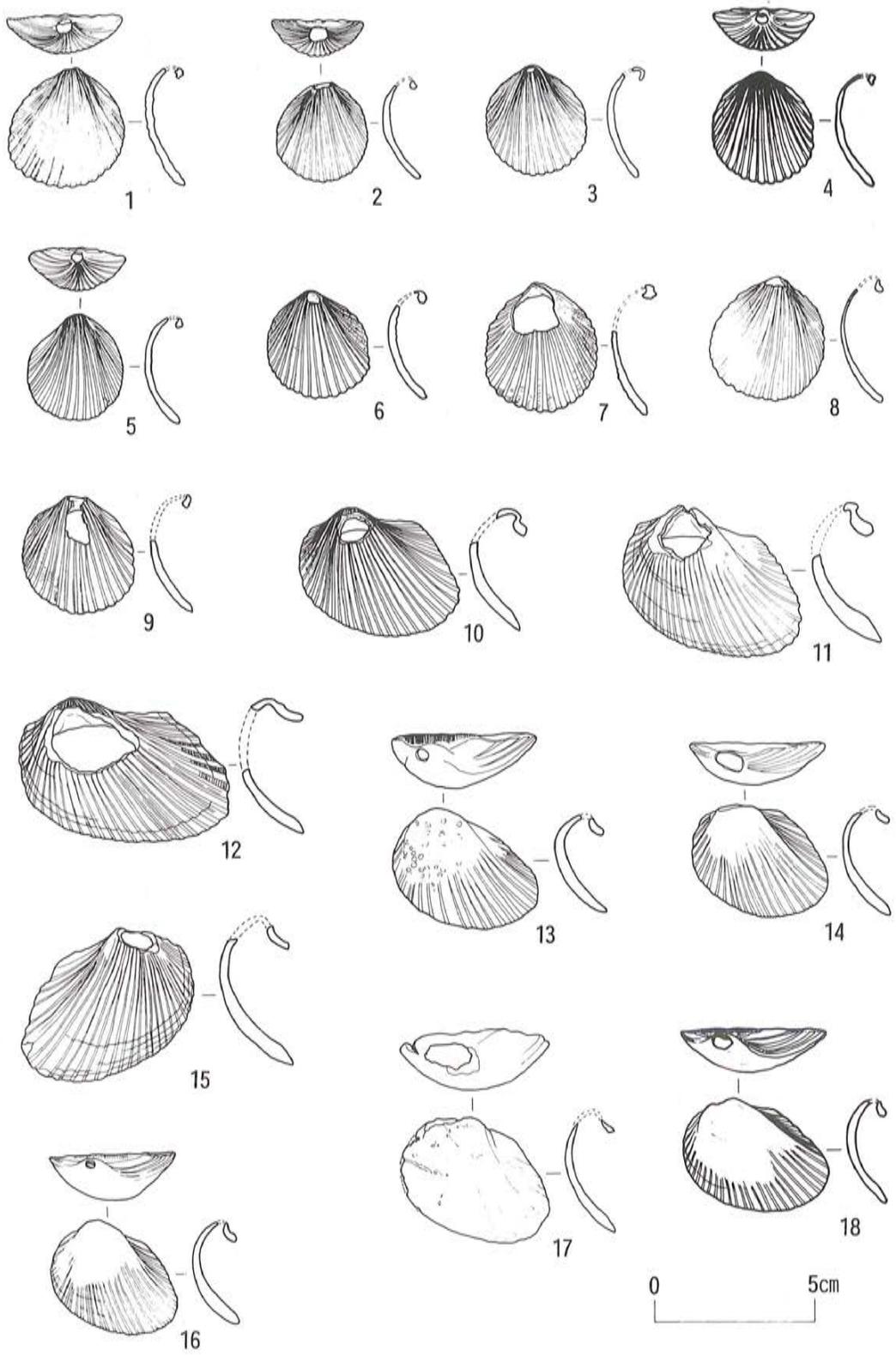
製作上では、ザルガイの孔は殻頂部に穿たれ、大きさ約0.4cm台の小さいものが多い。リュウキュウザルボウも殻頂部に穿たれるものが圧倒的に多く、背面部にあるものは3点である。メンガイは孔のある部分は共通しているが、最も大きいものが1.8cm、最も小さいものが0.6cmと幅がみられる。この点はシャコガイも同様で、最大2.4cm台と最小0.6cmと幅がみられる。代表的なものを第14～18図に掲載した。

タカラガイ製品 第19図

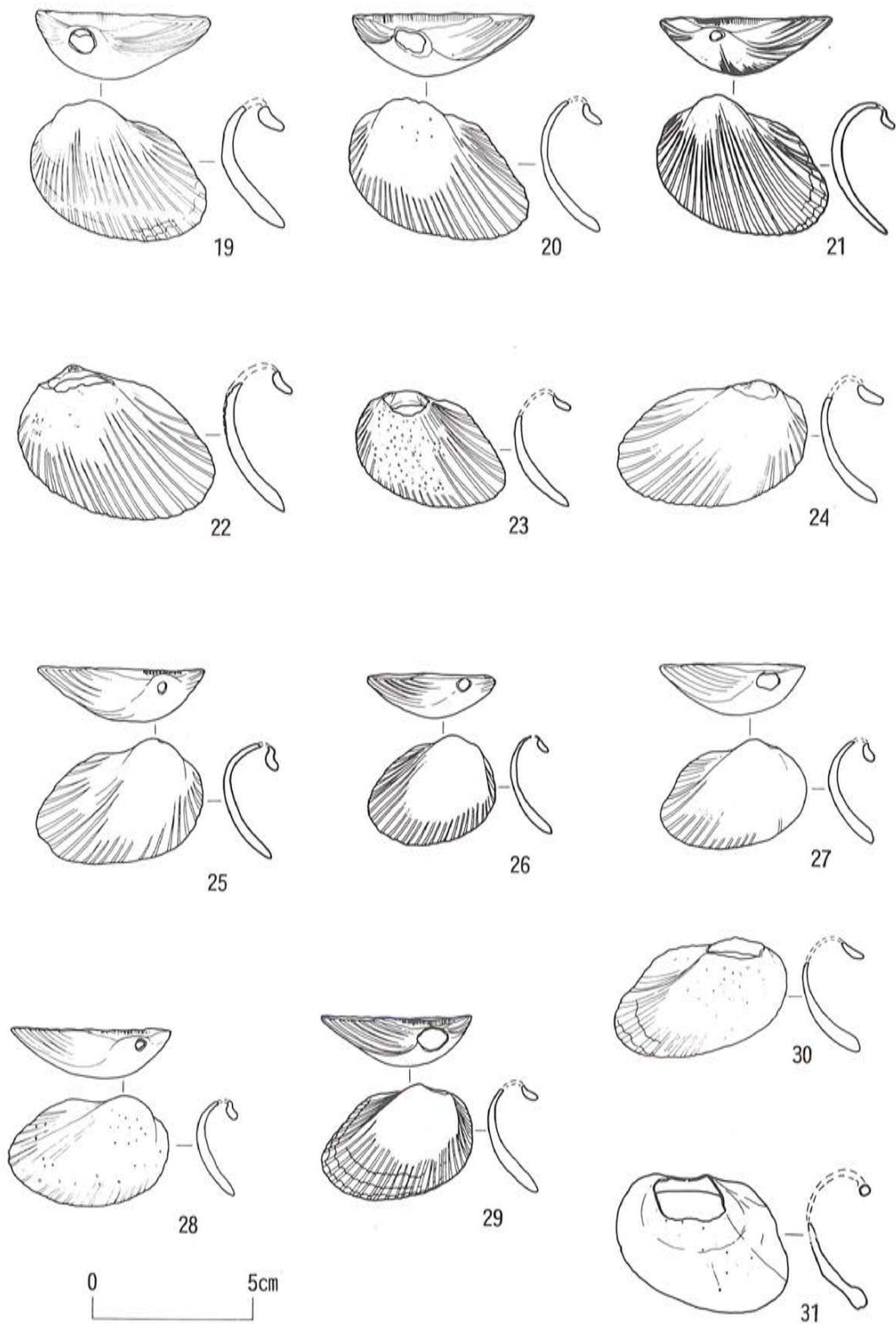
タカラガイの丸くなった背面側を、割りとった資料群で総数11点出土した。器面は磨滅がみられその使用が認められる。長軸の最小21.5cm、重さ3.4gから、最大5.0cm、重さ18.3gのものが得られた。重量の集中するものは、重量が5.5～7.5gであった。

ヤコウガイ製品 第19図62

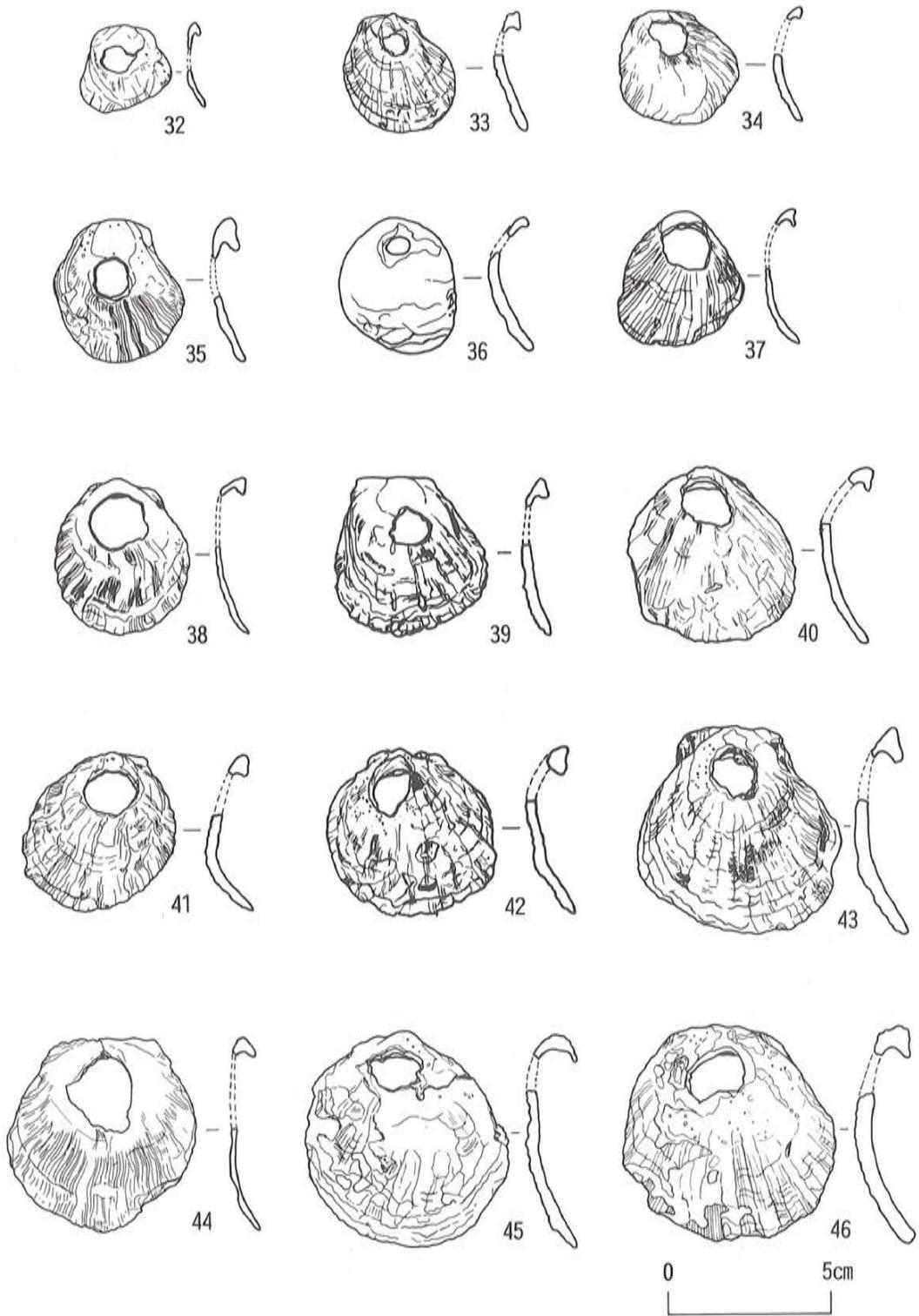
第19図62の製品で、夜光貝の体層部を札状にし、その中央に粗孔のみを穿った資料である。外周はこれといった丁寧な研磨加工はみられず風化している。長軸と短軸の一方にいずれも折り施されている。錘の一つと思われる。大きさは、長軸7.1cm、短軸5.5cm。厚さは0.3～0.8cm、重量35g、孔部分は口径が縦2.4cm、横1.4cm。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。



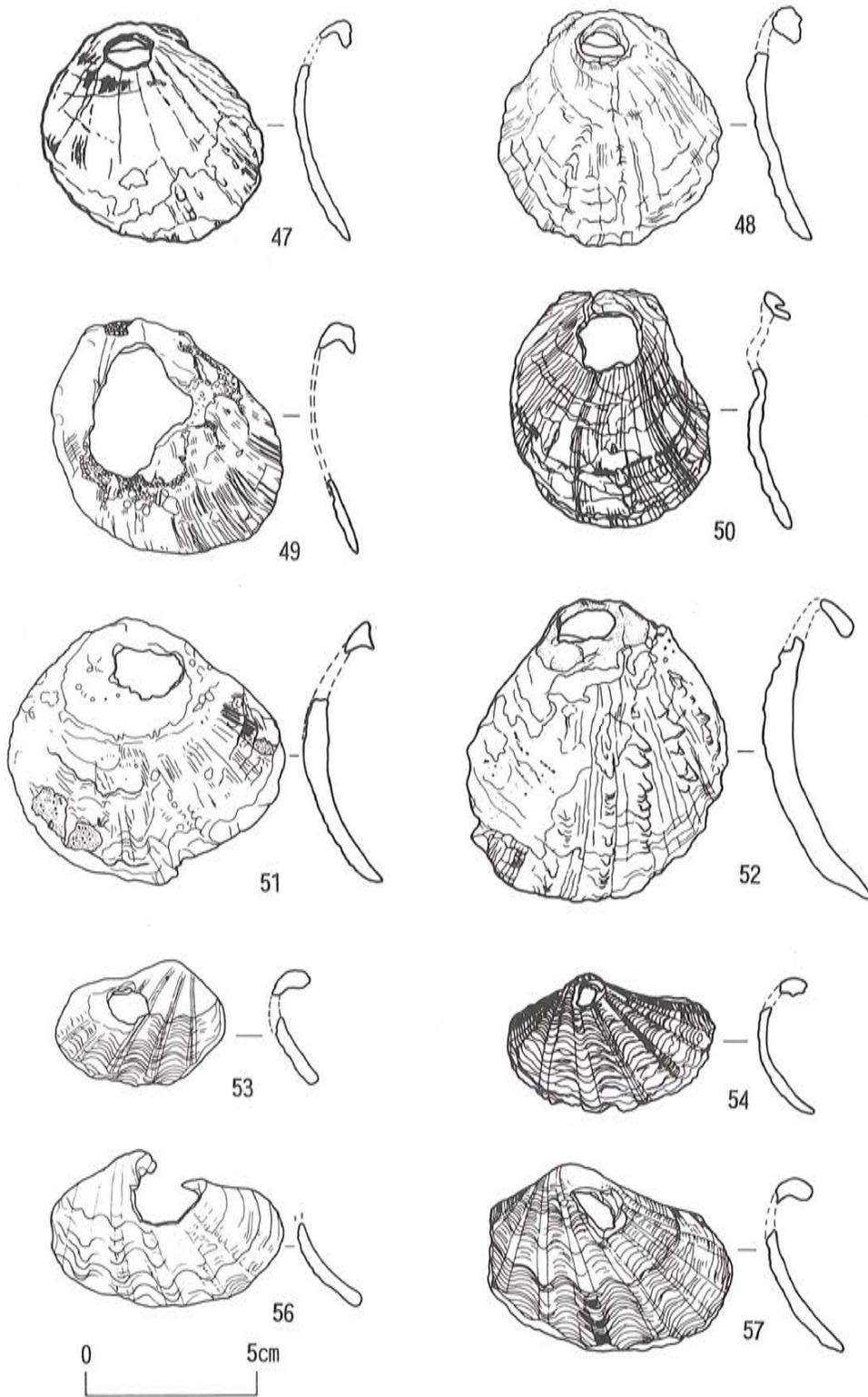
第14図 有孔二枚貝製品 ザルガイ1~9 リュウキュウザルボウ10~18



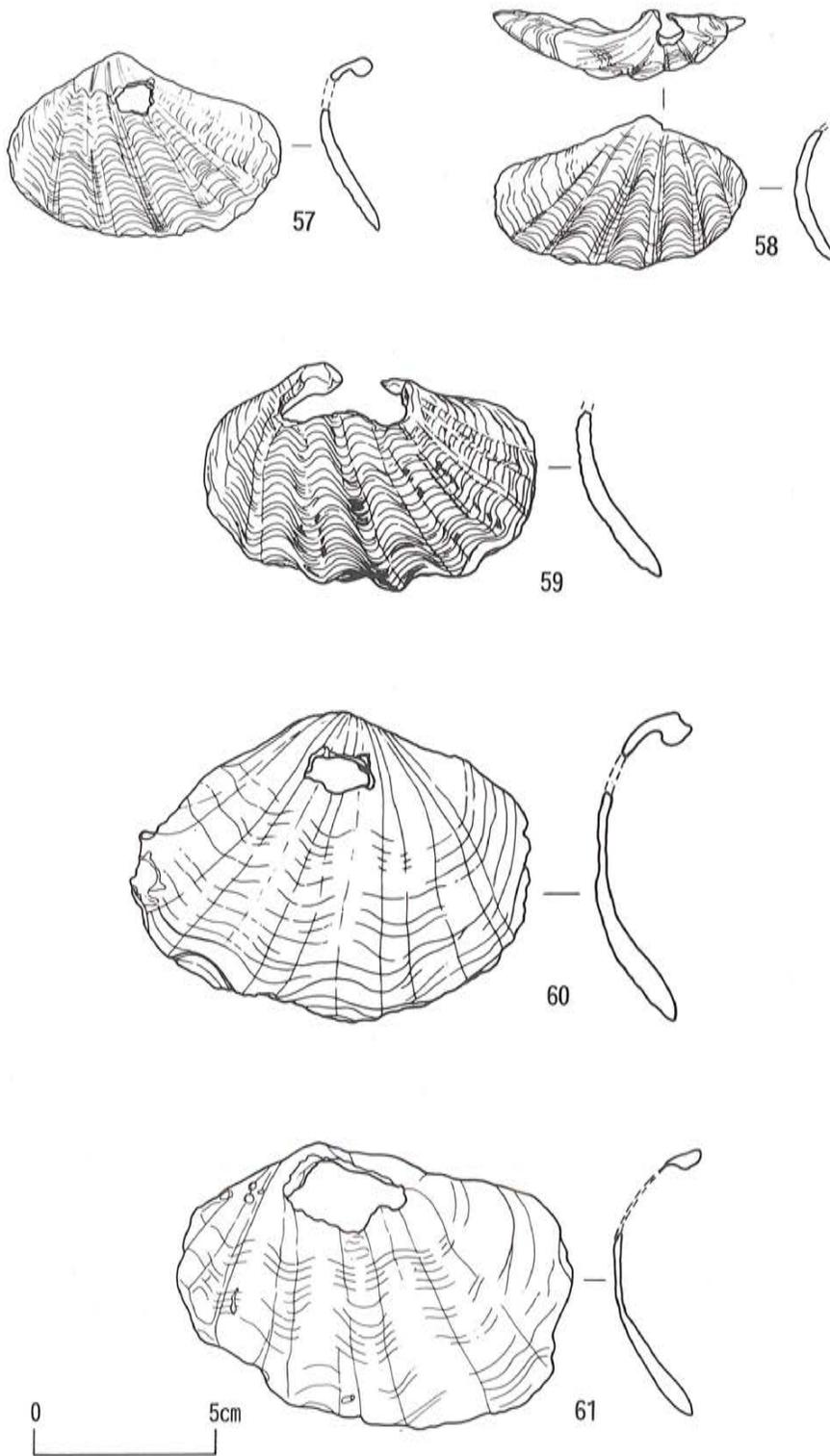
第15図 有孔二枚貝製品 リュウキュウザルボウ19~31



第16図 有孔二枚貝製品 メンガイ32~46



第17図 有孔二枚貝製品 メンガイ47~52 シャコガイ53~56

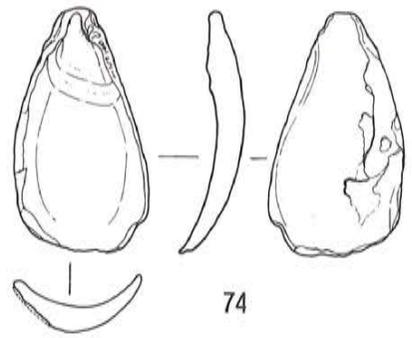
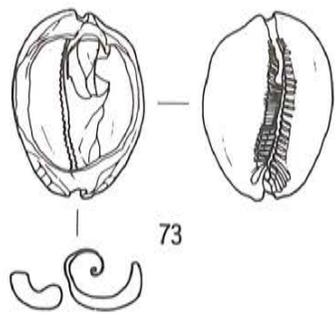
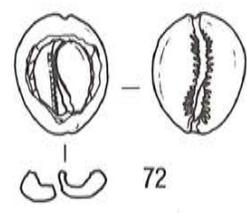
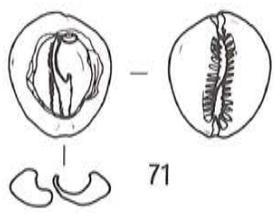
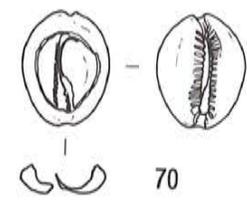
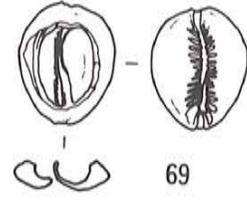
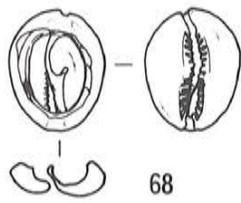
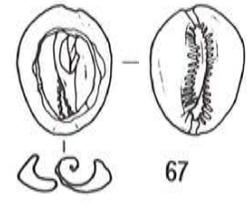
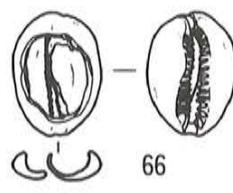
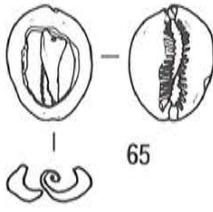
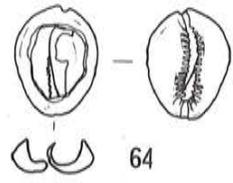
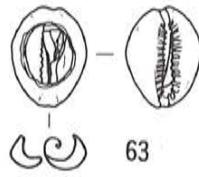
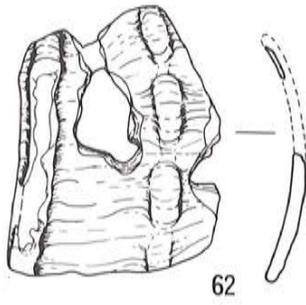


第18図 二枚有孔二枚貝製品 シャコガイ57~61

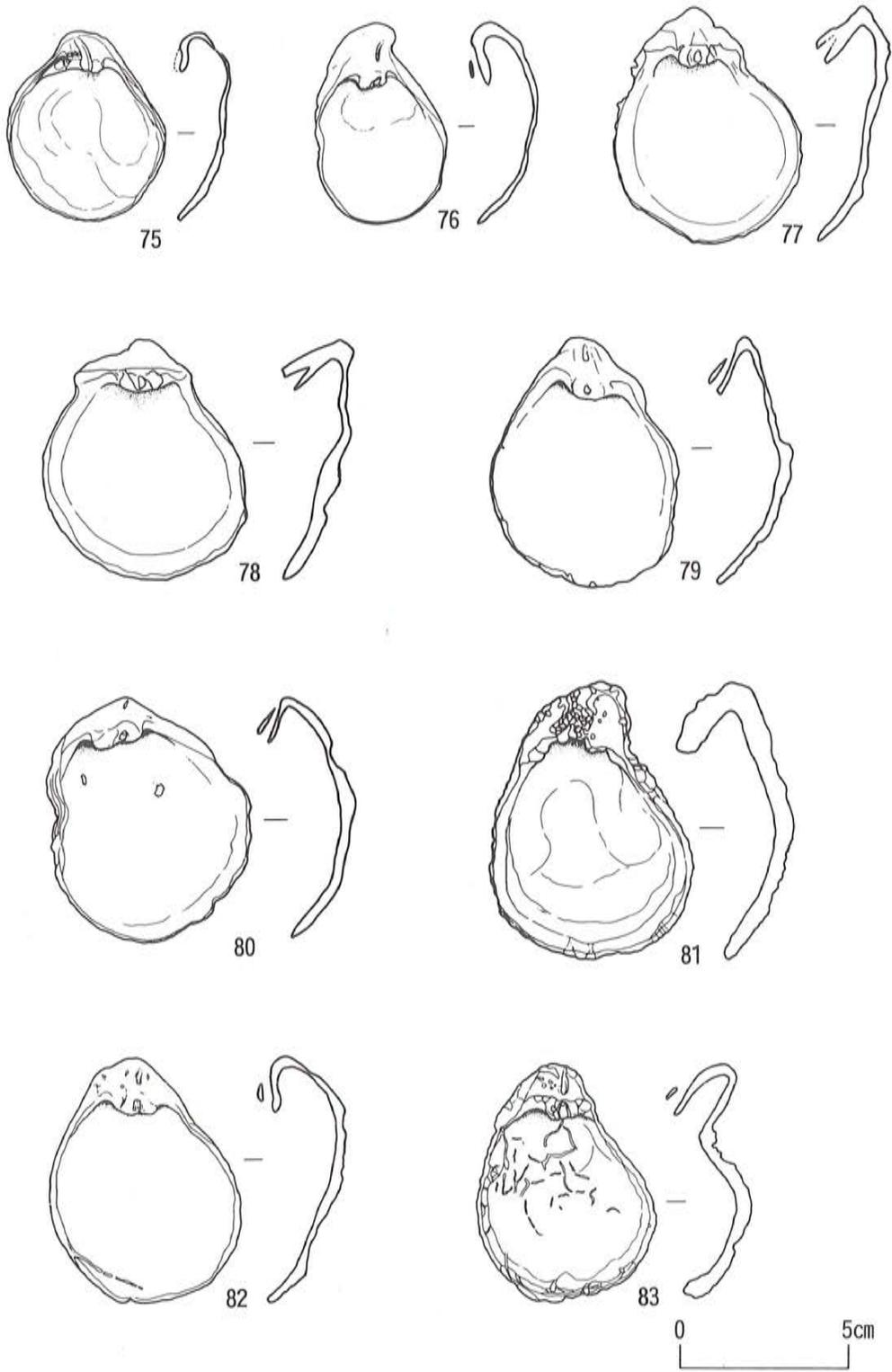
第5表 二枚貝有孔品法量表

No.	貝種	右/左	殻長(cm)	殻幅(cm)	重量(g)	縦(孔径)横		出土地区・レベル
1	ザルガイ	左	3.7	3.6	4.15	0.38	0.47	CトレンチⅡ層 30~40cm
2	〃	〃	3.1	2.8	3.15	0.52	0.52	ABトレンチⅡ層 40~50cm
3	〃	右	3.45	3.15	3.3	0.26	0.3	AトレンチⅡ層 20~30cm
4	〃	〃	3.5	3.1	3.8	0.31	0.39	CトレンチⅡ層 20~30cm
5	〃	左	3.25	2.9	3.15	0.38	0.35	FトレンチⅡ層 20~30cm
6	〃	右	3.35	3.15	3.15	0.64	0.43	FトレンチⅡ層 0~10cm
7	〃	左	4.0	3.5	4.3	1.7	1.4	AトレンチⅡ層 20~30cm
8	〃	左	3.85	3.6	3.8	0.78	0.66	AトレンチⅡ層 10~20cm
9	〃	右	3.65	3.4	4.25	1.7	0.61	CトレンチⅡ層 30~40cm
10	リュウキユウザルボウガイ	〃	4.1	4.9	12.2	0.96	0.82	ABトレンチⅡ層 20~30cm
11	〃	〃	4.2	5.85	22.5	1.76	1.53	ABトレンチⅡ層 30~40cm
12	〃	〃	4.5	6.5	22.3	2.16	2.2	ABトレンチⅡ層 10~20cm
13	〃	〃	3.75	4.5	12.0	0.3	0.28	AトレンチⅡ層 50~70cm
14	〃	〃	3.45	4.3	8.3	0.53	0.86	CトレンチⅡ層 0~20cm
15	〃	左	4.1	5.75	18.1	0.9	1.12	EトレンチⅡ層 10~20cm
16	〃	右	3.1	4.15	8.1	0.19	0.28	FトレンチⅡ層 20~30cm
17	〃	〃	3.5	4.8	9.4	0.84	1.53	ABトレンチⅡ層 40~50cm
18	〃	〃	3.4	4.6	6.1	0.41	0.61	ABトレンチⅡ層 40~50cm
19	〃	〃	3.75	4.5	12.0	0.3	0.28	AトレンチⅡ層 10~20cm
20	〃	〃	4.3	5.75	14.8	0.62	0.94	ABトレンチⅡ層 30~40cm
21	〃	〃	4.25	5.45	13.0	0.36	0.44	ABトレンチⅡ層 50~60cm
22	〃	〃	4.25	6.4	23.0	0.98	2.15	ABトレンチⅡ層 30~40cm
23	〃	〃	3.35	5.0	9.4	1.25	1.36	AトレンチⅡ層 20~30cm
24	〃	左	3.95	5.9	17.4	0.93	1.44	AトレンチⅡ層 50~70cm
25	〃	〃	3.95	5.2	10.9	0.38	0.29	ABトレンチⅡ層 50~60cm
26	〃	〃	3.35	4.0	7.4	0.35	0.47	AトレンチⅡ層 20~30cm
27	〃	〃	3.4	4.6	10.1	0.49	0.78	FトレンチⅡ層 10~20cm
28	〃	〃	3.8	4.8	13.0	0.34	0.39	FトレンチⅡ層 20~30cm
29	〃	〃	3.55	4.75	9.4	0.68	0.96	ABトレンチⅡ層 50~60cm
30	〃	〃	3.6	5.5	13.2	1.12	1.8	AトレンチⅡ層 10~20cm

31	リュウキュウサルボルガイ	右	4.2	5.5	15.0	1.9	2.11	F トレンチ II 層	0～10cm
32	メイガン	左	2.7	2.75	1.5	0.81	1.01	A トレンチ II 層	20～30cm
33	”	”	3.65	3.35	5.4	0.75	0.72	A トレンチ II 層	20～30cm
34	”	”	3.45	3.6	2.4	0.15	0.24	AB トレンチ II 層	30～40cm
35	”	”	4.35	3.9	11.0	1.2	1.4	AB トレンチ II 層	30～40cm
36	”	”	4.2	3.55	12.8	0.7	0.73	AB トレンチ II 層	30～40cm
37	”	”	4.1	3.8	4.3	1.4	1.38	A トレンチ II 層	10～20cm
38	”	”	4.8	4.05	5.8	1.48	1.66	C トレンチ II 層	0～20cm
39	”	”	4.9	4.6	9.2	1.17	1.29	A トレンチ II 層	20～30cm
40	”	”	5.4	5.1	12.8	0.53	1.35	A トレンチ II 層	10～20cm
41	”	”	4.85	4.6	7.5	1.42	1.64	A トレンチ II 層	10～20cm
42	”	”	5.1	5.15	14.0	1.24	1.2	A トレンチ II 層	20～30cm
43	”	”	6.4	6.25	33.3	1.43	1.31	A トレンチ II 層	10～20cm
44	”	”	5.95	5.75	12.8	2.38	2.07	A トレンチ II 層	20～30cm
45	”	”	6.6	6.25	27.3	1.11	1.56	A トレンチ II 層	10～20cm
46	”	”	6.6	6.5	38.4	1.18	1.76	A トレンチ II 層	0～10cm
47	”	”	6.6	6.4	19.8	0.99	1.44	A トレンチ II 層	10～20cm
48	”	”	6.9	6.55	31.7	0.94	1.28	A トレンチ II 層	0～10cm
49	”	”	6.1	6.2	23.8	2.91	2.9	A トレンチ II 層	50～70cm
50	”	”	6.9	5.8	25.5	1.65	1.74	AB トレンチ II 層	40～50cm
51	”	”	7.85	8.05	57.3	1.61	2.09	AB トレンチ II 層	10～20cm
52	”	”	8.85	7.65	80.0	1.16	1.72	A トレンチ II 層	30～40cm
53	ヒメジャコ	右	3.7	4.95	12.0	1.03	1.27	A トレンチ II 層	10～20cm
54	”	左	4.05	6.13	14.0	0.74	0.57	A トレンチ II 層	20～30cm
55	”	”	4.6	6.75	24.0	—	2.05	C トレンチ II 層	30～40cm
56	”	”	5.5	7.15	36.0	0.82	0.84	A トレンチ II 層	20～30cm
57	”	”	5.1	7.5	25.0	0.89	0.93	A トレンチ II 層	20～30cm
58	”	右	4.25	6.95	14.0	—	0.72	A トレンチ II 層	0～10cm
59	”	左	6.3	9.2	56.0	—	3.53	C トレンチ II 層	0～20cm
60	”	”	8.6	11.1	87.0	1.09	1.67	A トレンチ II 層	20～30cm
61	不明	”	7.9	11.0	57.0	2.37	3.47	A トレンチ II 層	20～30cm



第19図 ヤコウガイ製品62 タカラガイ製品63~73 貝匙74



第20図 貝匙 (メンガイ)

第6表 タカラガイ製品法量表

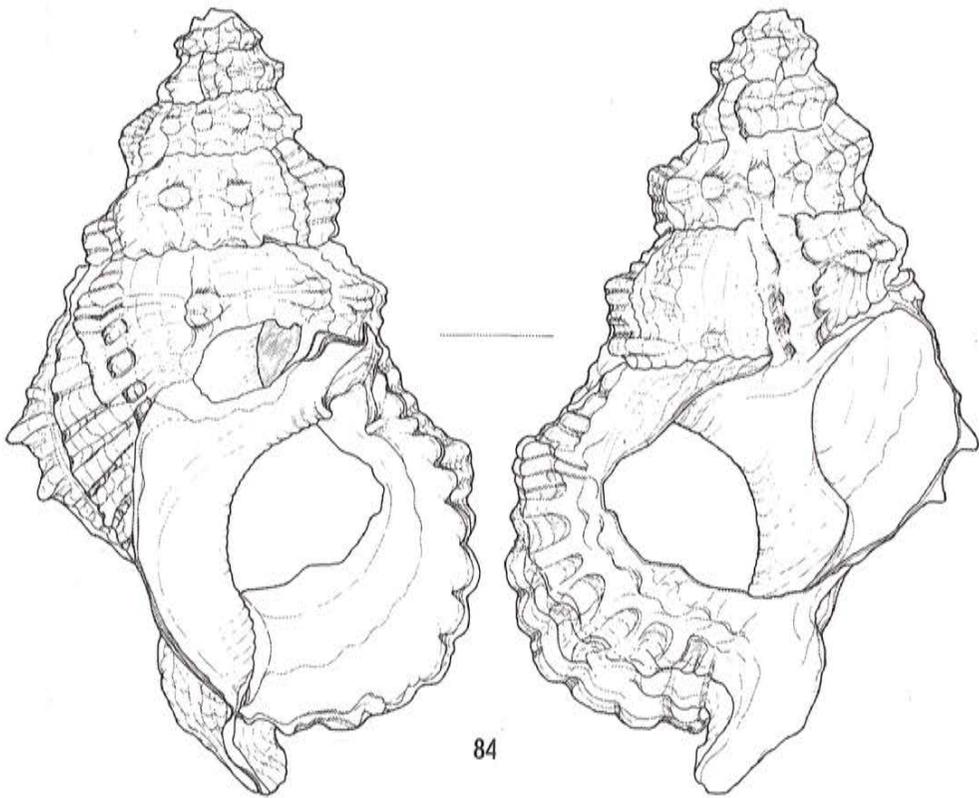
No.	貝種	完破	縦(殻底)横		縦(孔)横		殻厚(cm)	重量(g)	出土地区・レベル
63	タカラガイ	完	2.15	2.0	1.63	1.3	0.1	3.4	FトレンチⅡ層 20~30cm
64	"	"	2.9	2.2	1.96	1.43	0.1	4.3	FトレンチⅡ層 20~30cm
65	"	"	3.05	2.25	2.05	1.29	0.2	5.7	FトレンチⅡ層 20~30cm
66	"	"	3.3	2.3	2.22	1.65	0.1	5.8	FトレンチⅡ層 20~30cm
67	"	"	3.45	2.5	2.36	1.51	0.1	7.4	FトレンチⅡ層 20~30cm
68	"	"	3.2	2.5	2.13	1.5	0.1	7.5	FトレンチⅡ層 20~30cm
69	"	"	3.25	2.55	2.12	1.5	0.2	7.1	FトレンチⅡ層 20~30cm
70	"	"	3.1	2.3	2.12	1.57	0.1	5.5	FトレンチⅡ層 0~10cm
71	"	"	3.3	2.65	2.18	1.46	0.1	8.2	FトレンチⅡ層 10~20cm
72	"	"	3.2	2.45	2.06	1.56	0.2	6.6	FトレンチⅡ層 10~20cm
73	"	"	5.0	3.5	3.57	2.76	0.1	18.3	FトレンチⅡ層 20~30cm

第7表 貝匙法量一覧

No.	貝種	殻長 (cm)	殻幅 (cm)	重量(g)	出土地区・レベル
74	スイショウガイ	6.47	3.59	25.8	AトレンチⅡ層 10~20cm
75	メンガイ	5.6	4.65	14.0	DトレンチⅡ層 0~20cm
76	"	5.9	3.85	14.9	FトレンチⅡ層 20~30cm
77	"	6.95	5.6	26.8	AトレンチⅡ層 60~70cm
78	"	7.15	5.95	36.5	ABトレンチⅡ層 30~40cm
79	"	7.4	5.6	28.1	AトレンチⅡ層 20~30cm
80	"	7.3	6.0	31.3	AトレンチⅡ層 60~70cm
81	"	8.25	6.05	46.4	AトレンチⅡ層 60~70cm
82	"	7.25	5.62	31.45	FトレンチⅡ層 20~30cm
83	"	7.05	5.35	31.0	ABトレンチⅡ層 50~60cm

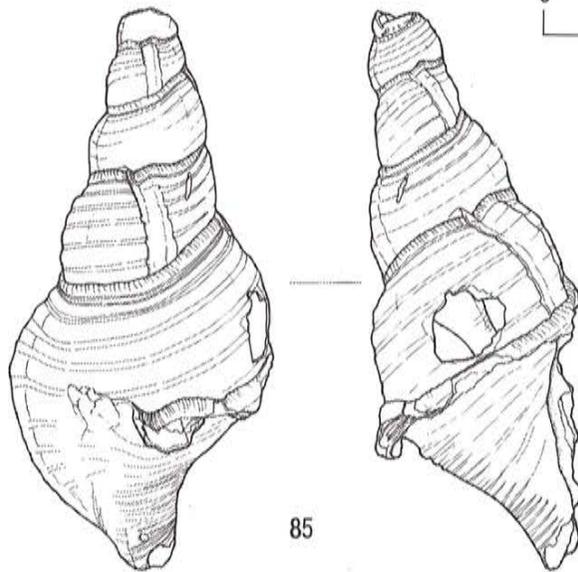
貝匙 第19図74

貝種別にみるとスイショウガイの腹面を素材とした製品1点、メンガイ資料が9点である。前者は、全体に水磨を受けている。大きさが長軸6cm、短軸3.6cmになる。Aトレンチ第Ⅱ層20~30cm。



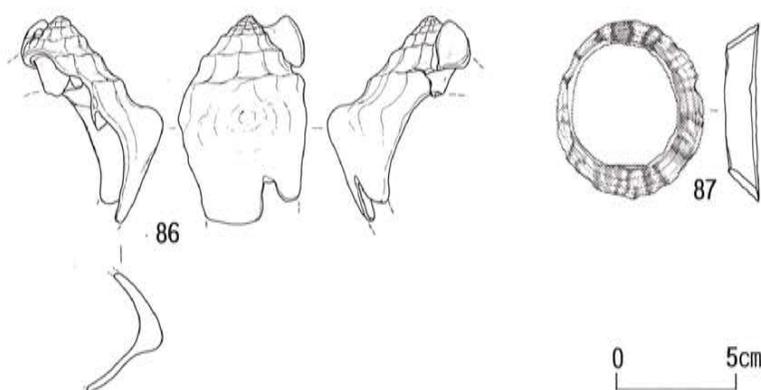
84

0 5cm



85

第21図 ホラガイ系有孔品



第22図 貝輪 ゴホウラ製品86 オオベッコウガサガイ製品87

第20図のメンガイ資料は、人為的な加工痕をみせるものではないが、その形態について、二枚貝有孔に使用されている比較的平板なものに対して、殻頂部に裏が大きく湾曲した形態をし、そしてその縁部分が全体に風化し、なめらかになった特徴がみられたものである。大きさも統一し、まとまって得られているため、形態から用途を推測して本稿に掲載した。

ホラガイ有孔資料 第21図

第21図84は、ホラ貝科のシロナルトボラを素材とした製品である。加工部分としては、殻口側の一番目の体層部に粗孔が、うがたれている。また殻口の逆にあたる体層部は大きく破損している。殻頂は破損し元の形状はみられない。器面は風化し白色化しているが、殻頂部側の付近は亀裂や剥離がみられ、加熱を受けた様子をみせている。口径は縦2.0cm、横3.3cm、重量560g。Aトレンチ第Ⅱ層10~20cm。

同図85は、ホラガイの資料で、完全形の貝殻からみると、第二体層部に粗孔が穿たれている。殻口を上にした場合に裏側に位置する。殻頂は破損している。また全体に風化していて破損部分も磨滅した状況を呈している。口径が縦2.04cm、横2.18cm。重量121g。Eトレンチ第Ⅱ層0~10cm。

貝輪 第22図

ゴホウラ製品、オオベッコウガサガイのいずれも1点ずつからなる。

第22図86はゴホウラの螺頭部側を残した貝輪の破損資料である。全体に著しい風化をうけているが、その加工の状況をうかがい知ることができる。螺層内部の巻きは丁寧なかきとりではなく、やや凹凸が残されている。残存する部分から推測すると腹面部をとりこんだ背面貝輪になろう。A Bトレンチ第Ⅱ層40~50cm。

同図87は、傘の殻頂部を敲打によりかきとり、残った輪を製品とするものである。しかし、当資料の殻の縁部分は、風化があるためきわだった研磨痕をみることができない。したがって、決め手の弱い資料であるが、残存した輪の形態から製品として判断し報告することにした。貝輪の内幅は、縦が5.16cm、横が4.4cm。重量は15g。Aトレンチ第Ⅱ層20~30cm。

石 器

石器は総数51点得られた。その器種の内訳は叩き石、砥石、凹石、磨り石、石錘の5種類で、石斧は全く検出されなかった。出土した石器は、器面上に滑面や凹み部分、敲打部分が並存しているものが多く、たたき石と凹石、磨り石は基本的には兼用したものが多いように思われる。本文では、形態と主な作業面の大きさから器種を決定している。出土量的には、叩き石（4%）、砥石（2%）、凹石（82%）、磨り石（6%）、石錘（6%）と凹石が主体になっている。地区別にみるとAトレンチを中心に検出されている。またレベル的には、上位の出土が多い傾向にある。

第11表に石質の状況を見ると砂岩、角閃石はん岩が中心に出土をみ、あきらかに叩き石、凹石が使用され、他の遺跡での選択状況と類似している。

以下、器種の順序にそって記述をすすめる。

叩き石

総数2点出土した。この類に分類したのは、形状が柱状に長くなる形態をしたものである。

第23図1は、外観が杵状をした堂々とした石器である。長軸の両端にはやや湾曲した敲打面が残っている。当該面は一方が広く、他方はやや狭く、その主作業面の違いがみられる。体部は自然の凹凸面があるが、一部敲打による浅い窪みが認められる。Cトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

第23図3は、上記資料に比較すると大きさが小さくなり、また形態も若干異なっている。長軸の両端が広い敲打面にはいたらず、剝離面になっている。側面は敲打痕が覆っているが、いずれも風化が進行して触りはスムーズである。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

砥石

僅か1点出土した。第23図2の資料で、完全形ではなく、破片で手持ち大きさの略方形になる。これは砥石が再利用されたもので、その破損面が風化し、その側面の四面がいずれも細かい敲打による抉りが観察される。砥磨面は表裏面にあり、いずれも強く凹曲した面になっている。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

凹石

同石器は形態上、4種類に細分してみた。

- a類 やや卵形をなす礫で中央に凹面を有するもの。
- b類 外観が手の平におさまる棒状の形態をなすもので、体部中央に凹を有する小型の石器をいう。
- c類 手の平の大きさと、鏡餅状の円盤形を呈するもの。
- d類 外観がa、cに類似するが、その大きさが大きいもの。
- e類 形態が不定形もしくは、石器の破損部分を使用したもの。

f類 これまでの資料を比較し、明らかに加工面が広がるもので、一定の立方体状に整形を加わえた石器である。凹部分が大きく深いものを一括した。

a類の石器群で計4点である。第23図4、5、第24図7、9は、やや卵形に近い、河原礫を素材にしたもので、いずれも長軸の一端に敲打痕がみられ、また側面にも同様の敲打痕が残っている。主たる作業面は、表面中央の面で三資料とも浅い打面のある凹みがみられる。4はAトレンチ第Ⅱ層10～20cm。5はAトレンチ第Ⅱ層0～10cm。7はABトレンチ第Ⅱ層30～40cm。9はEトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

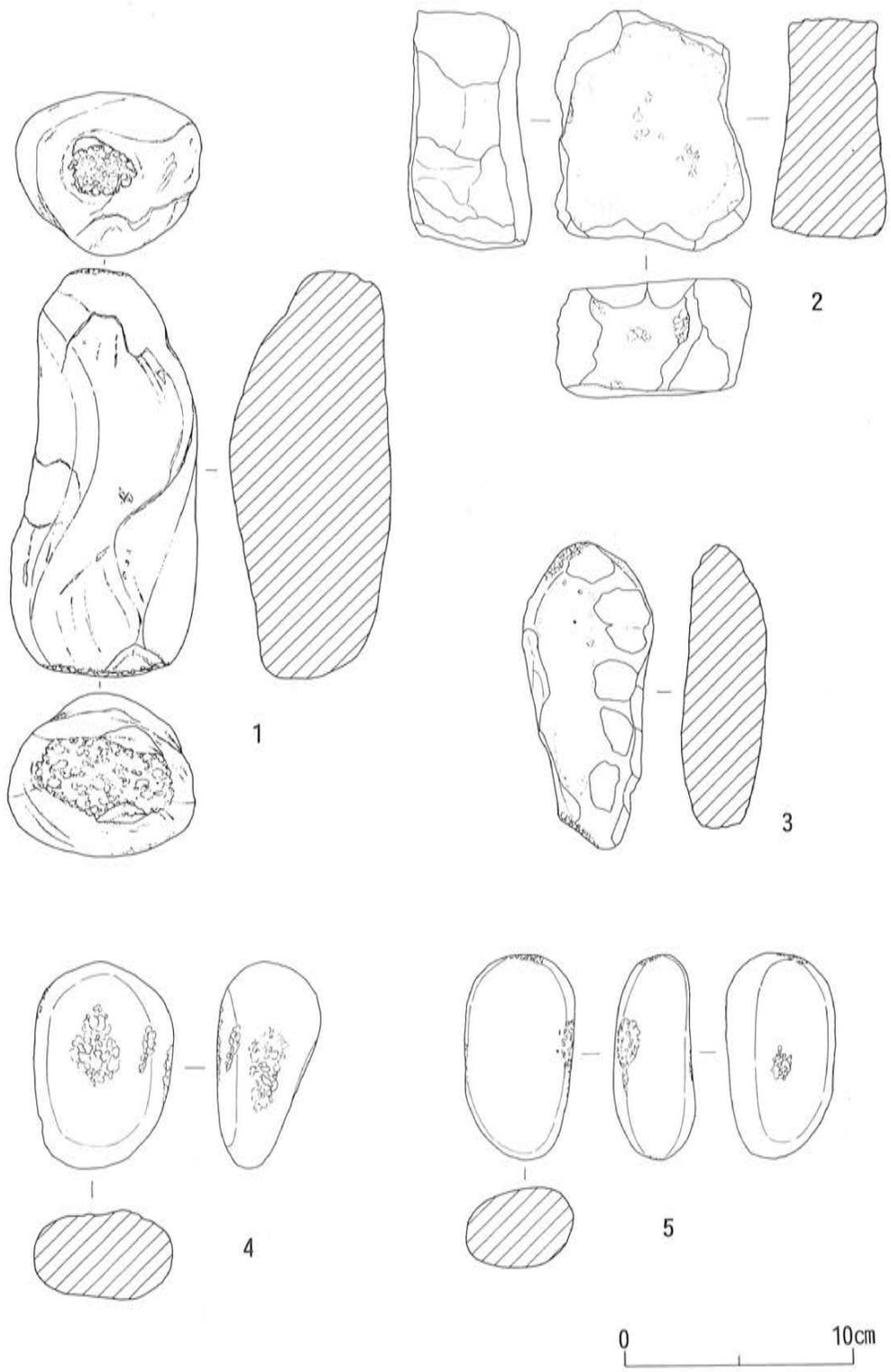
b類の石器群である。外観が手の平におさまる棒状の形態をなすもので、体部中央に凹を有する小型の石器で、第24図6、8、10、11、12がそれである。6は、長軸の一端部が欠損しているが、全体の形状をよく残した資料である。両端部に打痕がみられ、一方側が広くみられる。作業面であろうか。また表裏面の中央にも敲打による凹をつくっている。ABトレンチ第Ⅱ層0～10cm。8は、長軸の両端の敲打痕のある面がほぼ同様な広さをみせるものである。表面のみに敲打痕のある凹がある。10は、長軸の一端と表面に軽微な打痕がみられるものである。長軸に沿って、凹のある面はやや湾曲し反対面は平面になる。この形態は先の6に類似する。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。11は、長軸の一端部を大きく欠落しているが、残された部分の敲打面と形状から本類に含まれるものと考えられる。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。12は、8の資料をやや厚みをつけた感じのある石器で、長軸の両端部の打痕や表面の凹も類似している。ただ、本資料の側面にも打痕のある抉りがみられる。Aトレンチ第Ⅱ層60～70cm。

c類で鏡餅状の円盤形を呈するもの。第25図13～19の7点をいう。

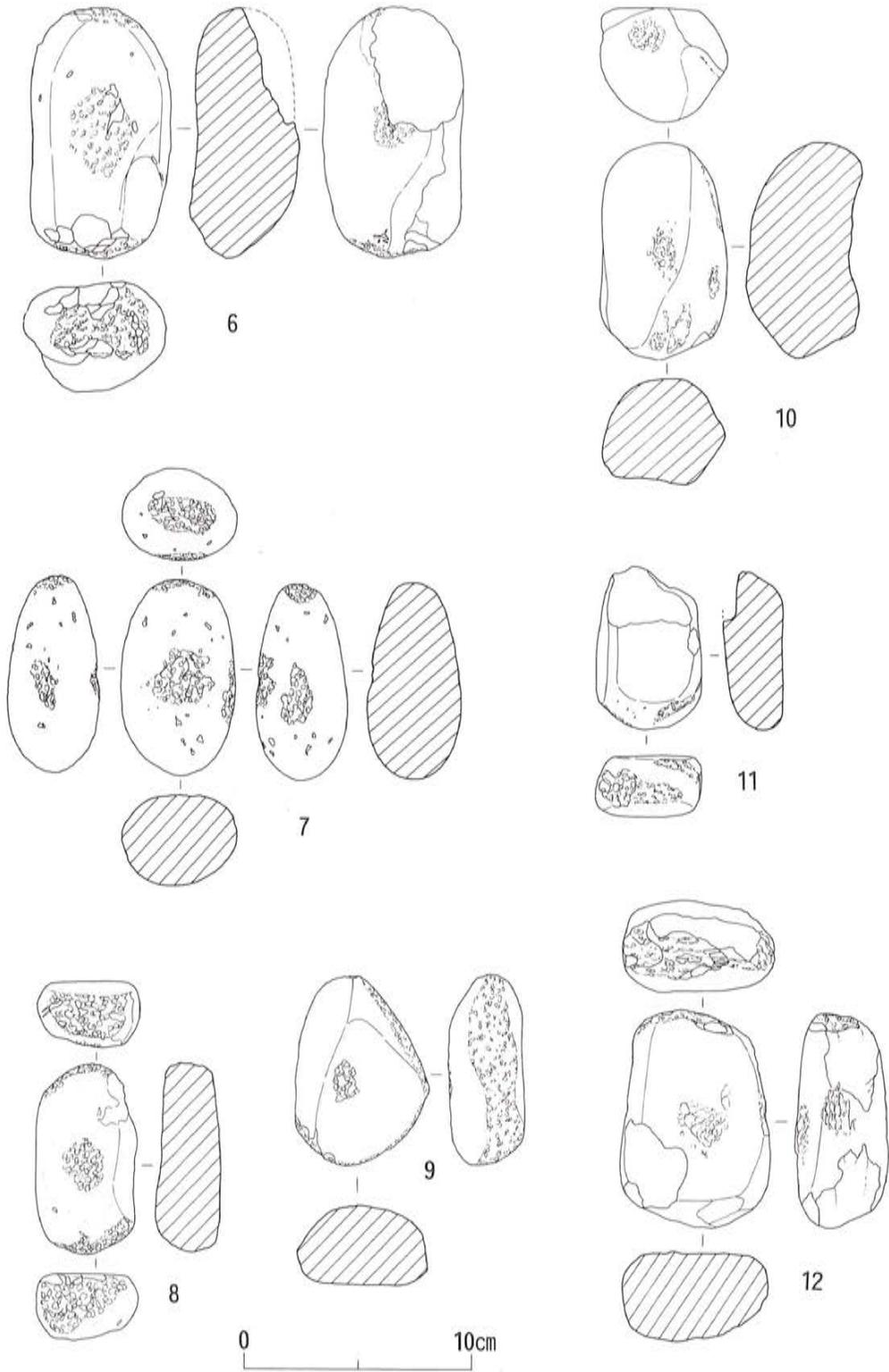
第25図13は、自然の円盤礫を素材とした資料で、湾曲した平面の中央に軽微な打痕を残している。他の面はつるつるした自然面になる。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。14は、側面にやや凹凸があるが、平面形が円形を呈するものとして含めた。表裏面の中央に敲打のある凹がみられる。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

15は、長軸の両端が湾曲するように敲打痕がめぐっているが、全体観は円形をなす。表裏面の中央に凹があるが、一面側がとくに粗く深い。Cトレンチ第Ⅱ層10～20cm。16は側面に風化のすすんだ窪みがある資料で、表裏面の中央には敲打面が広がっている。ABトレンチ第Ⅱ層40～50cm。17は、厚みのある正円体で、表面の中央に粗め打痕が残されている。Cトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

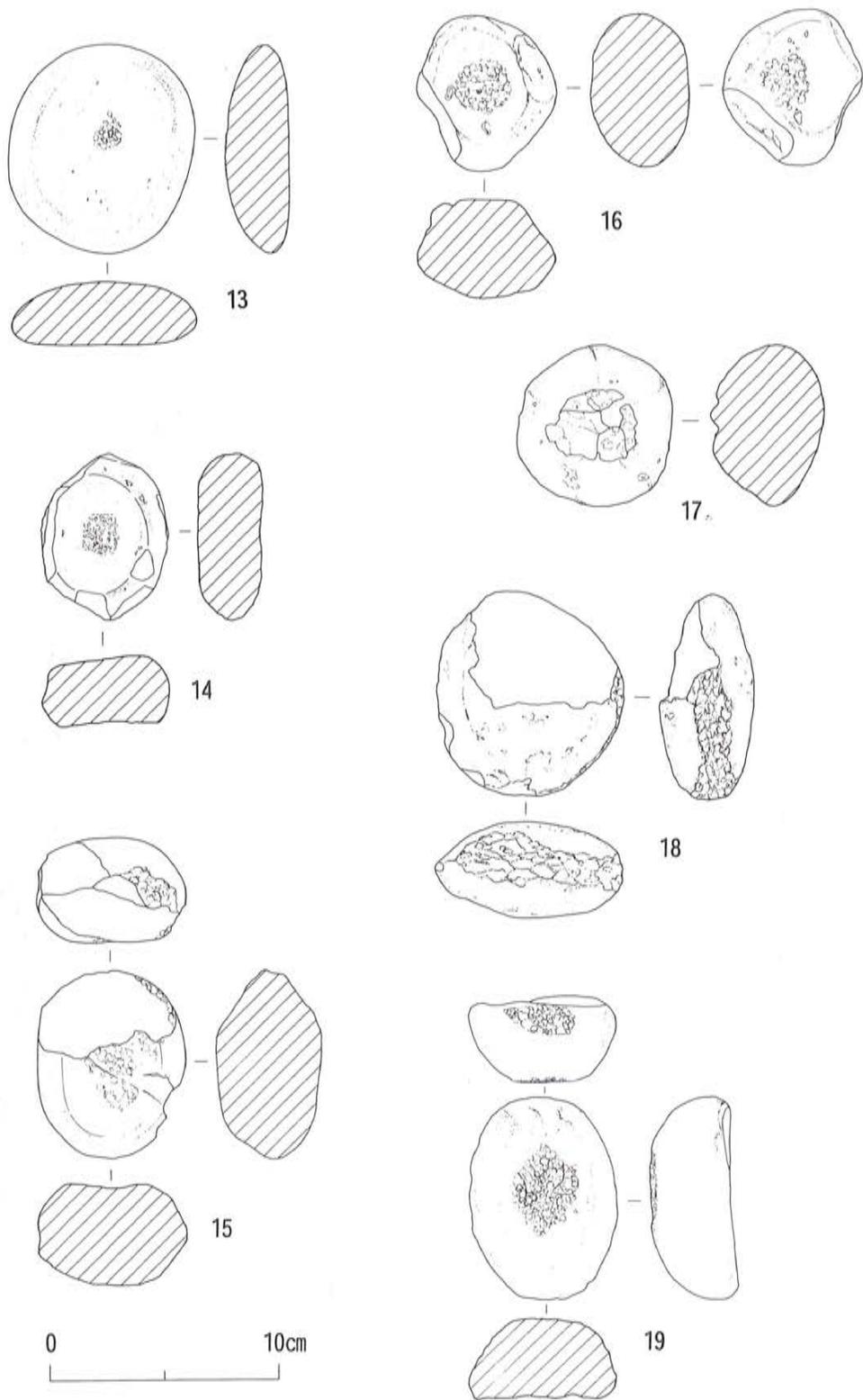
18は、側面に帯状の敲打痕が囲周した平面形が円盤をなした資料である。裏面が大きく剝離



第23図 叩き石1、3 砥石2 凹石a類4、5



第24図 凹石 a類7、9 b類6、8、10、11、12



第25図 凹石c類13~19

している。表面の敲打面は確認されない。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。19は、卵を横半分に切ったような形状をした資料で、その曲面の中央に敲打痕があり、その面のみ平面を作っている。なお裏面の平面は風化面し、素材とした時点からものとみられる。Bトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

d類 外観がa、cに類似するが、その大きさが大きいもの。

第26図20は、自然の円礫を素材とした石器で、表裏面の中央に、やや粗い窪みがみられる。長軸と短軸の両側には部分的に敲打痕がみられる。作業面は主として広い窪みのある表裏面にあるもの考えられる。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

21は、やや半月に近い楕円体を示す資料である。表面の中央に窪みがみられ、その面は粗い打痕が観察される。側面には部分的に敲打面がある。A Bトレンチ第Ⅱ層40～50cm。

22は、当該石器も上記の資料と同じ形態をなす石器である。石質のためか、やや粗面になるが、自然の円礫が基本的素材とみられる。本石器は表面のみに窪みがある。窪みの大きさもほぼ同じである。側面には整形とみられる整形打痕が確認される。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

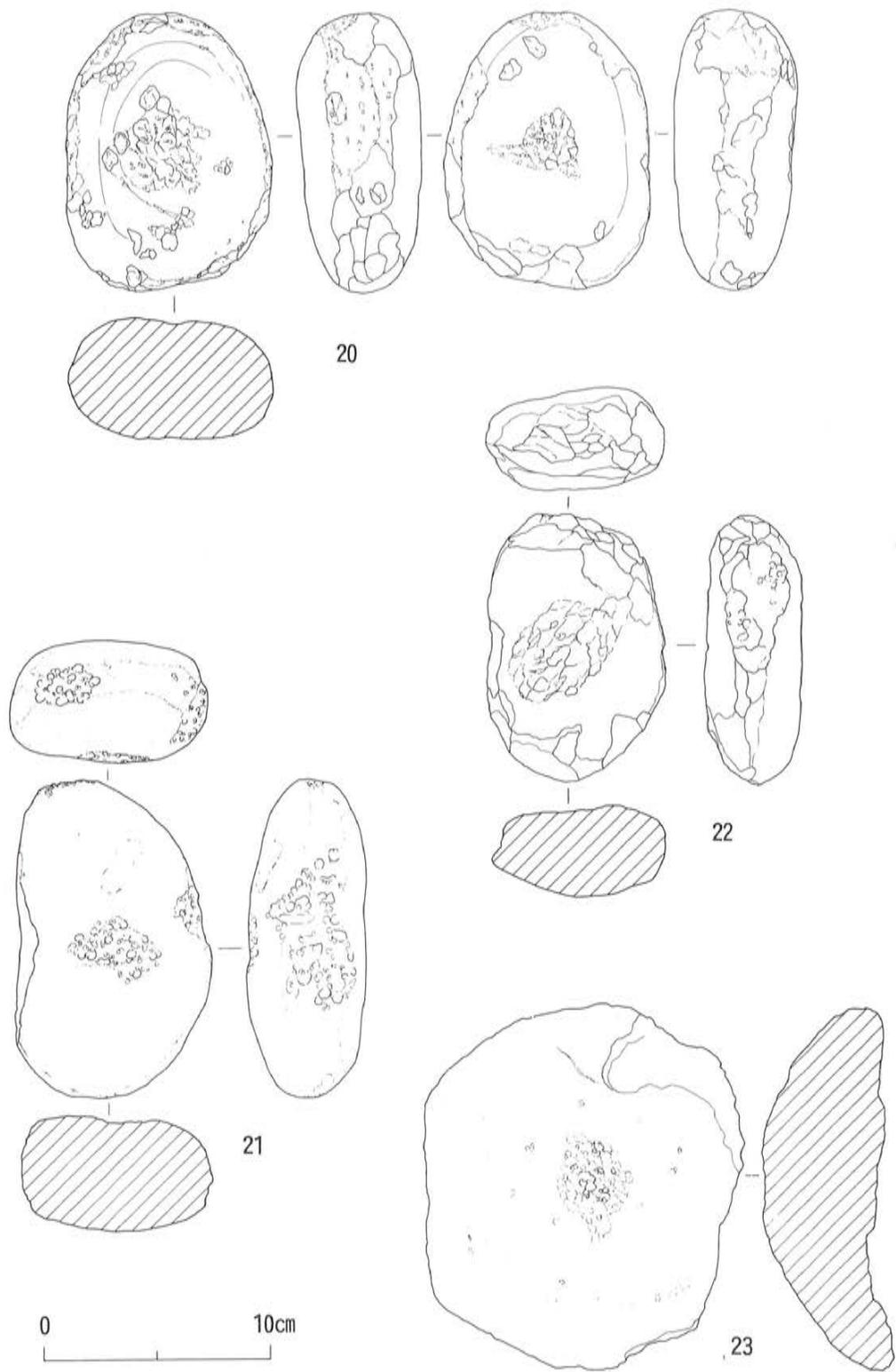
23は、自然の曲面を有する大型礫の破片を素材とした資料であり、石器の破損資料ではない。外観が半球体になる。曲面の中央には比較的浅い敲打のある窪みがみられる。窪みの面は粗面になる。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

第27図24は、河原礫を素材とする資料で、側面の一部を打ちかき、外観をカネク石器状に整えたものである。ただ面の広い側面は自然の風化面からなり、なんら研磨面にはなっていない。表面の中央には、やや風化のある窪みが観察される。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

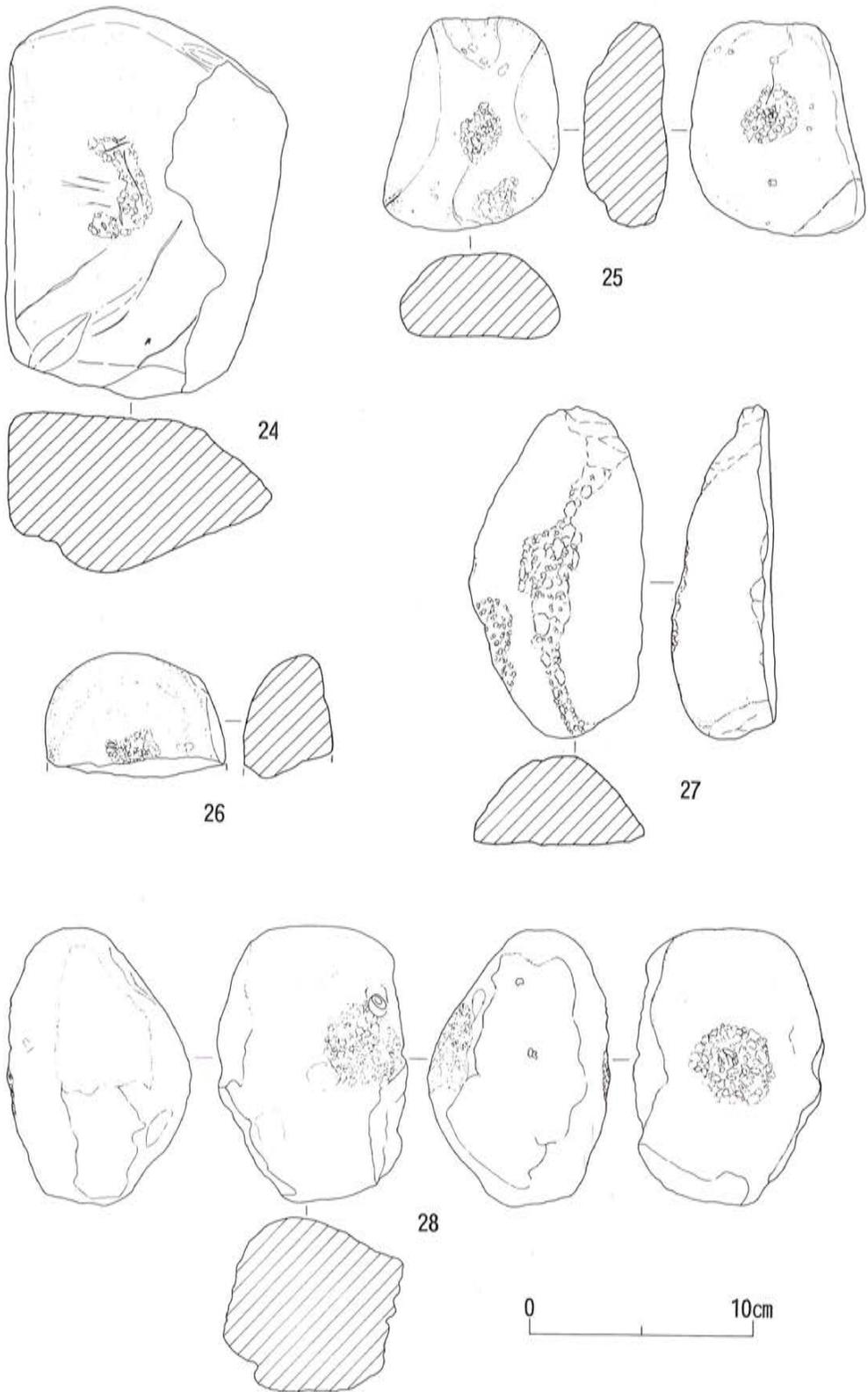
25も、小型の自然礫を使用したもので、形態が表面は、やや平坦になり裏面が曲面になる。いずれの面の中央にも敲打によってできた窪みがみとめられる。側面の一面は、やや直線状に細かい敲打面が観察される。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

26は、上記の資料と同様な断面をなす石器である。ただ大きく破損しているためその平面形は不明であるが、いずれにしても小型の資料になるものである。表面の中央は破損しているが、打痕の残る窪みがみられる。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

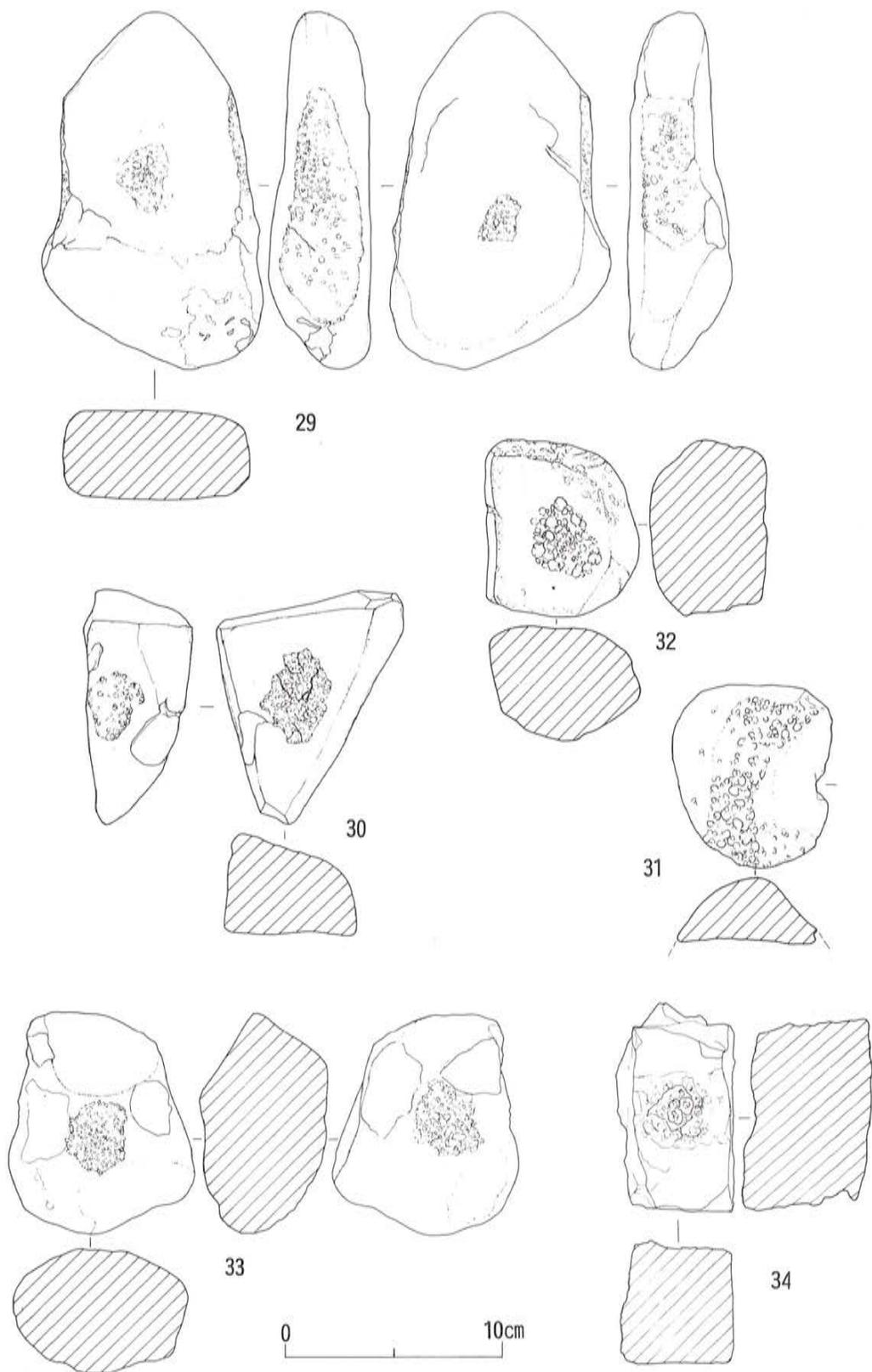
27は、断面が三角柱状の石器で、その縁はいずれも風化のため鋭い稜はみられない。長軸の一端は鋭く敲打部分が観察できる。一方の端部は広いが風化した自然の平面がみられる。図に



第26図 凹石 d類20~23



第27図 凹石d類24~28



第28図 凹石d類29~34

示すように、稜の中央に敲打された窪みが観察されるが、やや横に敲打面が稜に沿うごとくひろがり作業面なのか明確に即断できない。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

28は、やや不定形の自然風化面を有する礫を、手頃の大きさに整形した石器である。敲打のある整形面も風化が進み、手ざわりは比較的スムーズである。長軸の両端には敲打面があり、とくに一方は平坦になっている。また、表裏面の中央にもやや面の広い敲打面になっている。なお窪みには至っていない。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

第28図29は、手頃な自然の偏平礫の資料である。これといった整形痕はみられないが、自然の挟りにも似た両側面部には、かすかな打痕が観察される。また、表裏面の中央に軽微な敲打痕がみられる。Cトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

30は、外観がおむすび型をした自然礫を素材としたものである。作業面は表面の中央部になり、やや粗めの敲打面が残っている。その他の面は風化した褐色面で覆われ、顕著な加工痕はみられない。Fトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

31は、整形打痕がみられる石器の破片である。加工痕のある部位は破損資料であるが石器の側縁部にあたるものであろう。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

32は、もともと小型の自然礫を材料にしてあるが、やや整形の加工した打面をみせる資料である。側面には大雑把ながら四面みられ、それぞれ敲打痕があり、面の広い中央面に粗い敲打痕が集中して存在する。まだ窪みには至っていないが作業面であることが理解される。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

33は、複数の曲面を有する球体の礫で、表裏面の中央に敲打痕のある円状の面が残っている。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

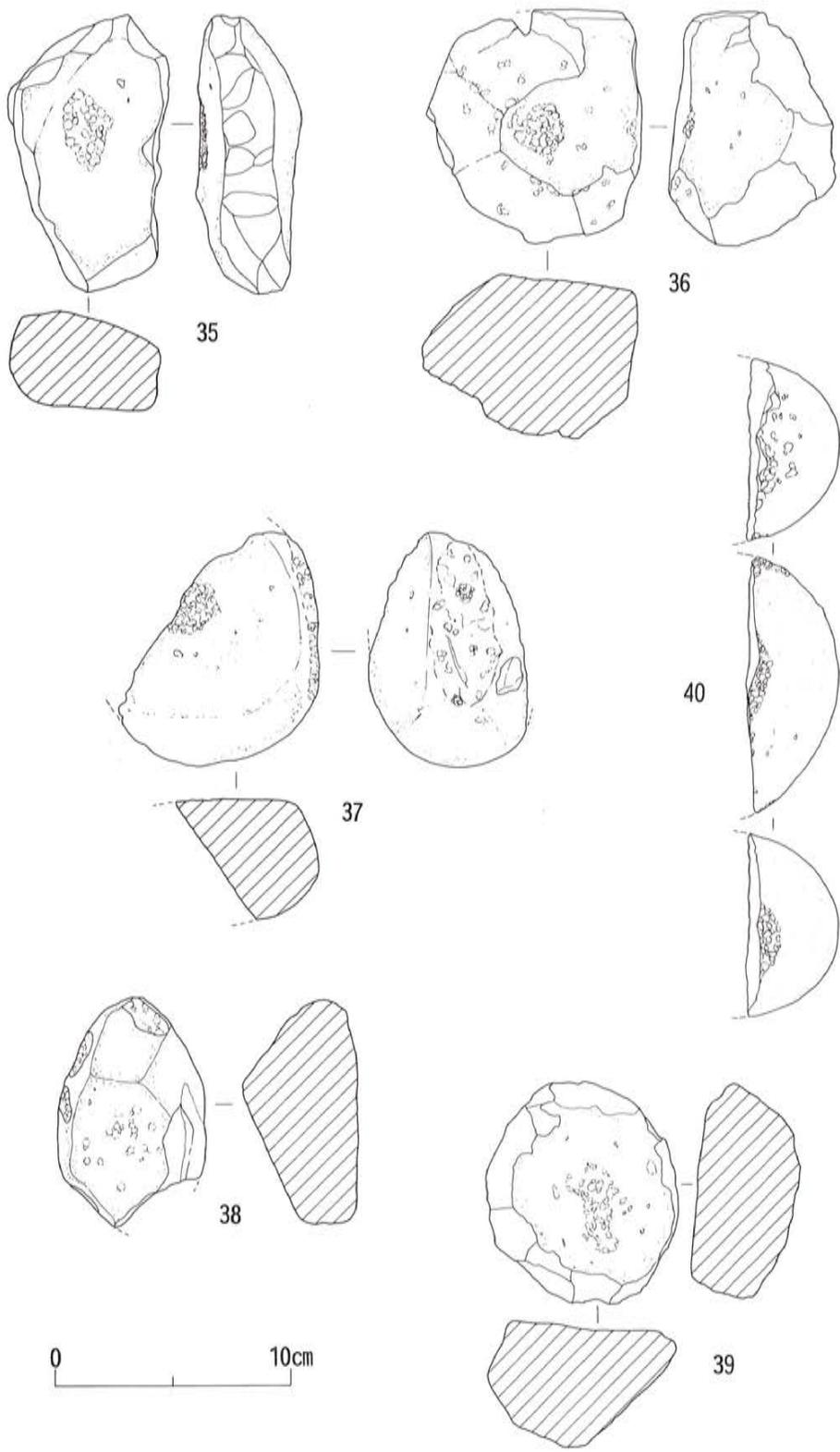
34は、自然の角礫を素材としたもので、一面の中央に敲打面のある深い窪みをつくっている。その他の面には明確な加工痕はみられない。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

e類 形態が不定形もしくは石器の破損部分を使用したもの。

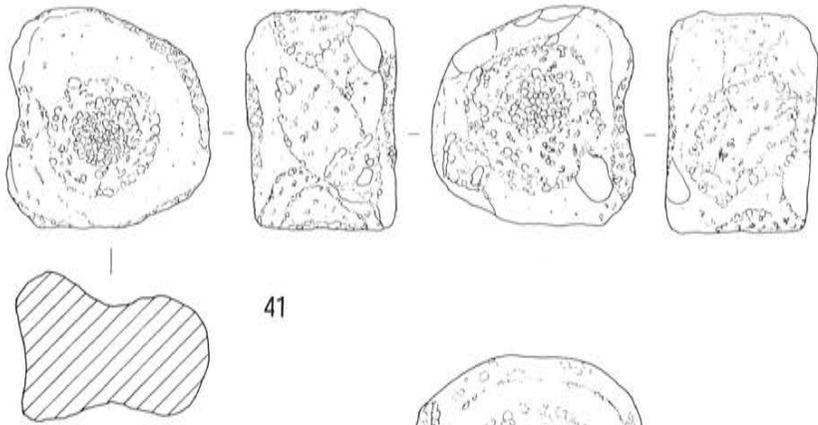
第29図35は、手のひらの^{たい}大の偏平の自然礫を使用し、その表面を作業面としたもので敲打痕が中央に残されている。側面の数箇所^{たい}に風化した打面がみられる。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図38も、同様の自然礫をそのまま使用したもので、わずかな平面の中央に敲打痕が残されている。長軸の一端が破損している。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

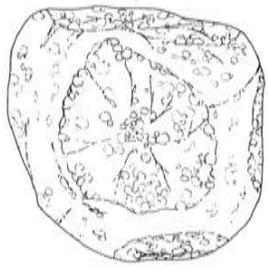
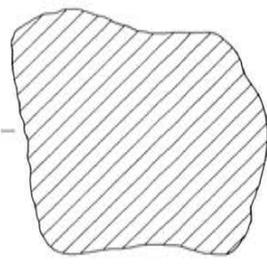
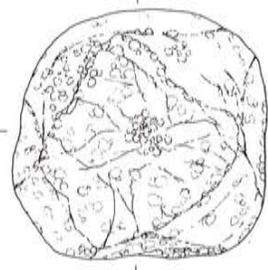
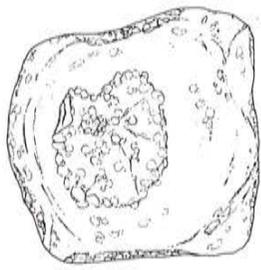
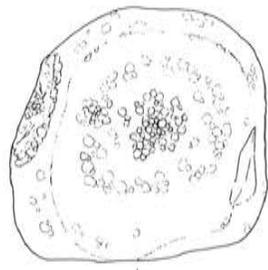
同図36、39は、石器の破損資料を素材として残されている平面を、作業面として使用したも



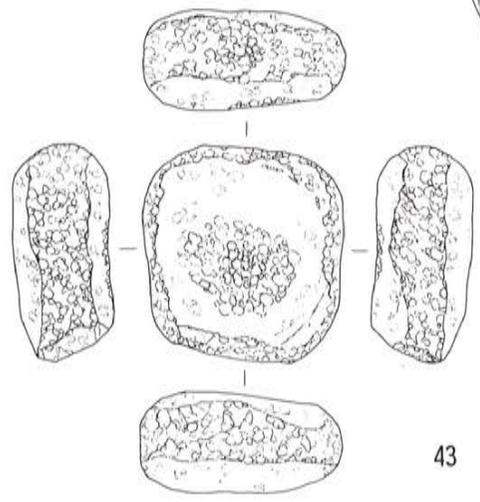
第29図 凹石e類35~40



41



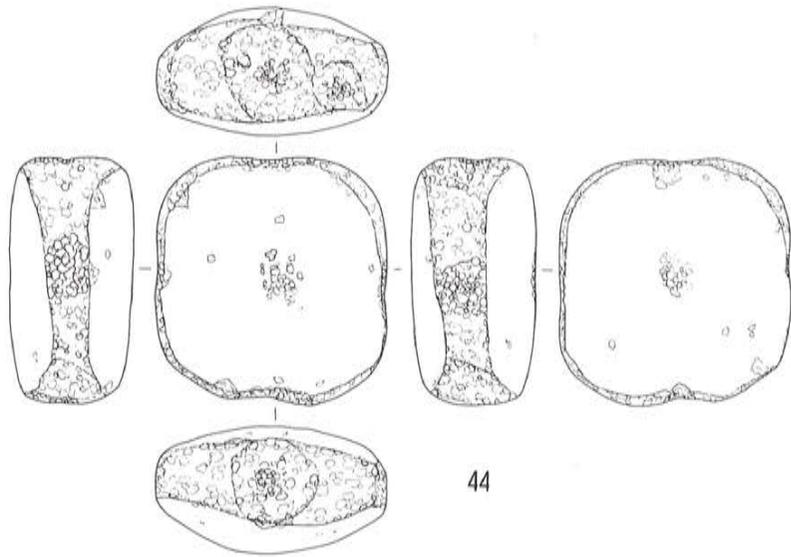
42



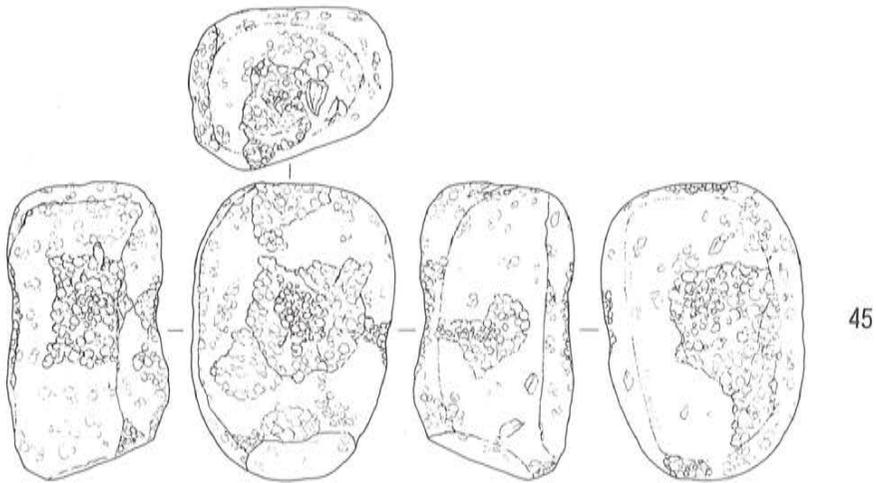
43

0 10cm

第30図 凹石f類41~43

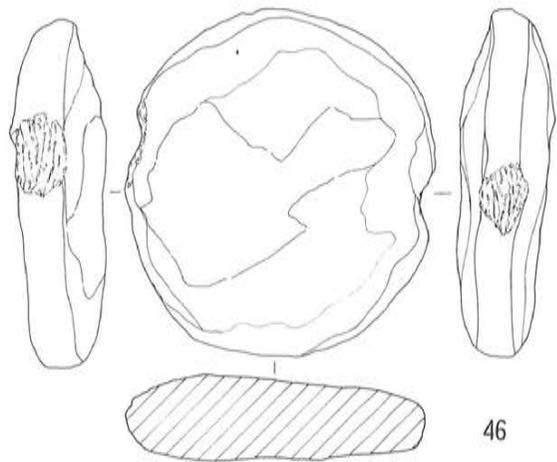


44



45

0 10cm



46

第31図 凹石f類44~45 石鍾46

のと考えられる資料である。この面はいずれも敲打のある浅い窪みがみられる。また全体の形状を整えていないため、裏面にあたる部分には敲打面はみられない。前者はAトレンチ第Ⅱ層10～20cm。後者がFトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

第29図37、40は、凹石の破損資料である。いずれも曲面の中央部に位置する箇所凹が認められる。前者は側面にあたる部分にも面とした敲打がなされている。また後者も小破片であるが、側面部分に敲打痕をみとめることができる。前者はAトレンチ第Ⅱ層0～10cm。後者がFトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

f類 明らかにこれまでの資料と比較し、自然の形状をそのままにするのではなく一定の立方体状に整形を加わえた石器で、凹部分が大きく深いものを一括したものである。

第30図41、42、第31図45は大まかにサイコロ状をしているタイプになる。

41は、表裏面の中央に大きく、深さが0.9cmの凹がある。また側面の四箇所にも敲打のある窪みがあるが、抉りに近い形態をなしている。42は、典型的なサイコロタイプである。六面中で一面が敲打のみで、くぼみはないが他の面は、敲打されくぼみになっている。そのなかで極めて広く円形をなすものは、くぼみの見られない面の逆面にあたる。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。45は、先のdタイプの範疇に近いものであるが、その凹が大きいことから、本類に含めて説明した。全体に自然面が残る石器で、表裏面に著しい凹を作っている。長軸の両端に敲打痕があり、また短軸の両側面にも抉りに近い敲打面がみられる。Eトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

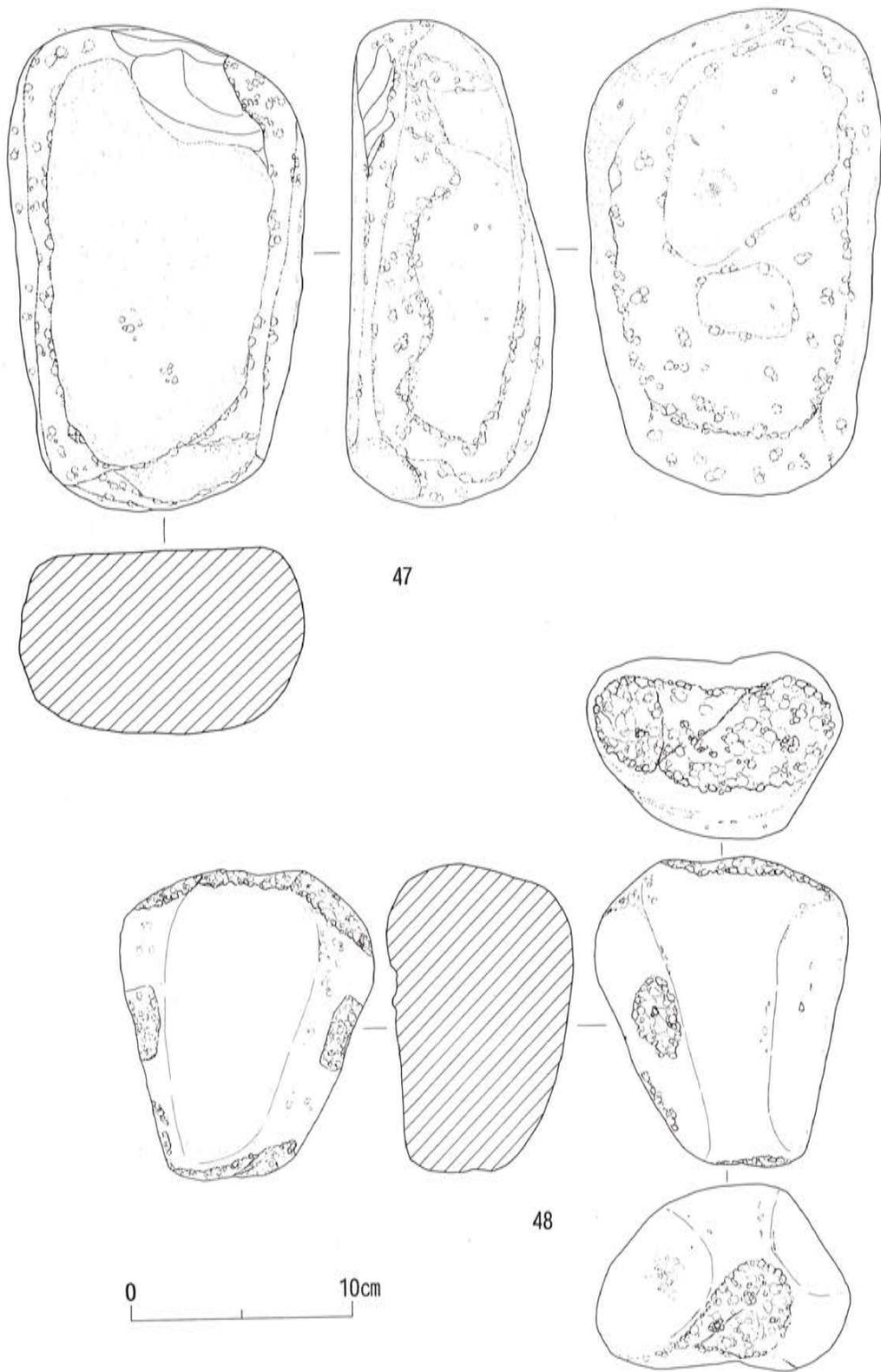
第30図43、第31図44は、サイコロの偏平品といったところであろうか。極めて丁寧に、側面が整形されているところが共通している。

43は、表面の中央のみにやや広めの敲打痕があり、わずかな凹をなしている。ABトレンチ第Ⅱ層40～50cm。44は、外観は石餡状にもなる。表裏面は短軸方向に湾曲している。その表裏面に軽微な打痕があり、わずかに凹をつくっている。磨り石を兼用した石器であろう。側面は敲打痕がめぐっていて、とくにそれぞれの側面中央は抉りにちかい窪みになっている。Cトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

磨り石

第32図47、48、第33図49の三点である。

47は、枕状をした大型の石器で表裏面に自然面が残る以外は、特に側面は敲打痕が覆っている。表面は湾曲面をなし、裏面は平坦面になっている。Aトレンチ第Ⅱ層70～60cm。48は、横断面が略三角形を描く磨り石で、外観は柱状ではなく一方に細くなるものである。長軸の両端には細かい敲打痕がみられる。平面がおおよそ四面みられる滑面になっている。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。



第32図 磨り石47、48

第33図49は、おたまじゃくし胚状に楕円体をなし、その背中部分突出した幅のある稜が整形されている。いわゆるクガニ石の範疇にあるものとみられる。加工面はその背面側で細かい敲打痕が残されている。またその背面の逆面にあたる箇所はわずかであるが平面があり、かなりの大型石器であるが、この面に置くと安定してすわる。テストヒットナンバー2。

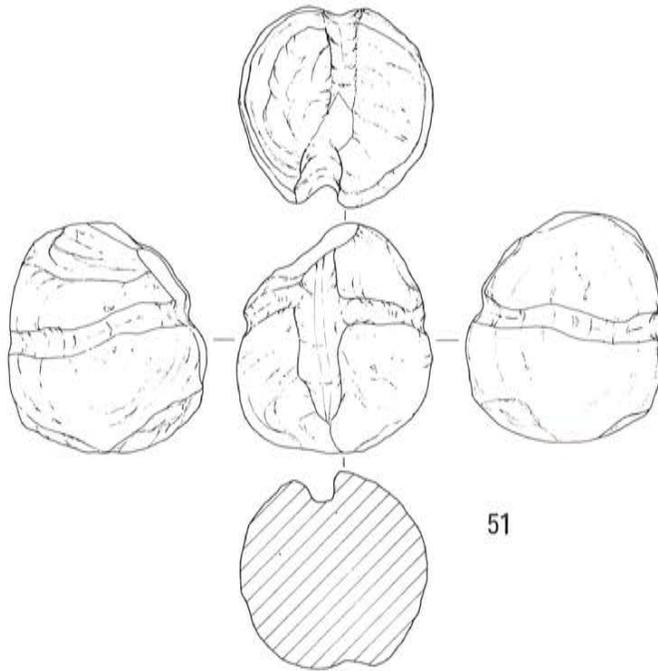
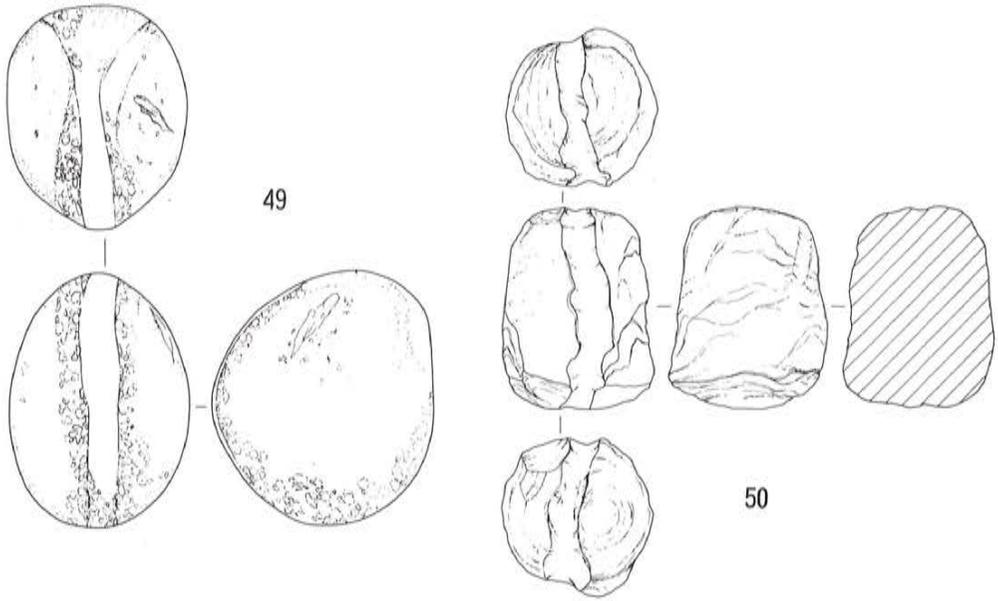
石錘

第31図46、第33図50、51の三点である。

46は、分銅型をした偏平の石器である。全体に著しく風化がすすみ、その整形加工部分が平面ではみられないが、側面は整形の打痕がめぐり、対応する側面に抉りが作られている。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

50は、外観がコルクの蓋状をした資料で、縦位に囲周する幅約2.0cmの溝が施されている。器面は全体に風化し部分的に剝離し白色をおびているが、長軸の両端の湾曲面には整形時の敲打痕をみることができる。テストヒットナンバー1。

51は、前述の50の資料に比べると、ひとまわり大きく、外観が落下する時の水滴のような形状をしている。器面には縦位と横位の囲周する溝が作られている。この溝は切り合いがみられ、横は縦で切られている。また縦が横に比べ深く、縦が幅1.5深さ2.0cm、横が幅1.8深さ0.4cm。テストヒットナンバー1。



0 5cm

第33図 磨り石49 石錘50、51

第8表 石器トレンチ別出土一覧表

トレンチ 器種	Aトレンチ					AB トレンチ			Bトレンチ	Cトレンチ			Eトレンチ	Fトレンチ	テストピット IV層		合計
	0~10	10~20	20~30	30~40	60~70	0~10	30~40	40~50	30~40	10~20	20~30	30~40	0~10	10~20	No.1	No.2	
叩き石	1										1						2
砥石													1				1
凹石	11	5	3	1	1	1	2	3	1	2		2	7	3			42
石錘		1													2		3
磨り石	1				1											1	3
合計	13	6	3	1	2	1	2	3	1	2	1	2	8	3	2	1	51

第9表 石器レベル別出土一覧表

層cm 器種	II層						IV層
	0~10	10~20	20~30	30~40	40~50	60~70	
叩き石	1		1				
砥石	1						
凹石	19	10	3	6	3	1	
石錘		1					2
磨り石	1					1	1
合計	22	11	4	6	3	2	3

第10表 石器と石質一覧表

器種	石質	砂岩	軽石	角閃石斑岩	石英閃緑岩	石英黒雲母片岩	輝緑岩	サンゴ塊石	黒色千枚岩	輝石斑岩	鍾乳石片	角閃石ひん岩	合計
叩き石		1		1									2
砥石			1										1
凹石		16		13	4	2	3	1	1	1		1	42
石錘									1		2		3
磨り石		2		1									3
合計		19	1	15	4	2	3	1	2	1	2	1	51

第11表 石器法量表

図	器種	縦 (cm)	厚さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	石質	出土地 トレンチ(層)	備考
第23図No.1	叩き石	17.7	7.1	8.1	1,320	砂岩	C, II層 20~30	
" 2	砥石	9.9	5.3	8.55	475	軽石	E, II層 0~10	
" 3	叩き石	13.1	3.8	5.7	390	角閃石斑岩	A, II層 0~10	
" 4	凹石	8.95	4.5	6.0	305	"	A, II層 10~20	
" 5	"	8.9	3.5	4.7	225	砂岩	A, II層 0~10	
第24図No.6	"	11.0	4.5	6.1	415	"	AB, II層 0~10	
" 7	"	8.7	4.1	5.05	230	"	AB, II層 30~40	
" 8	"	8.3	2.9	4.4	150	角閃石斑岩	AB, II層 30~40	
" 9	"	8.3	3.5	5.9	230	石英閃緑岩	E, II層 0~10	
" 10	"	9.6	4.6	5.5	370	砂岩	A, II層 0~10	
" 11	"	7.1	2.7	4.6	138	角閃石斑岩	A, II層 0~10	
" 12	"	9.35	4.1	6.65	320	石英黒雲母片岩	A, II層 60~70	変成岩の一種、 名護層(慶良間 諸島にはある)
第25図No.13	"	9.1	2.8	8.1	300	輝緑岩	A, II層 20~30	
" 14	"	7.3	2.9	5.55	203	石英閃緑岩	A, II層 0~10	
" 15	"	8.2	4.6	6.5	305	輝緑岩	C, II層 10~20	
" 16	"	6.8	4.3	6.1	205	砂岩	AB, II層 40~50	
" 17	"	7.1	5.0	6.7	288	"	C, II層 10~20	
" 18	"	8.9	4.2	8.2	315	角閃石斑岩	E, II層 0~10	
" 19	"	8.8	3.4	6.5	320	石英閃緑岩	B, II層 30~40	
第26図No.20	"	12.25	5.3	9.05	830	角閃石斑岩	A, II層 0~10	
" 21	"	14.0	5.3	8.5	465	サンゴ(塊)石	AB, II層 40~50	
" 22	"	11.85	4.4	7.9	455	黒色千枚岩	A, II層 0~10	
" 23	"	16.1	5.3	14.2	1,550	角閃石斑岩	A, II層 30~40	
第27図No.24	"	17.0	7.1	12.4	2,900	砂岩	E, II層 0~10	
" 25	"	9.5	3.8	7.35	390	輝石斑岩	A, II層 0~10	
" 26	"	5.5	4.0	8.0	217	砂岩	A, II層 0~10	
" 27	"	14.7	4.6	7.8	550	"	A, II層 10~20	

第27図No.28	凹石	12.3	7.8	8.2	1,090	角閃石斑岩	E, II層	0~10	
第28図No.29	"	16.5	4.8	10.2	1,040	砂岩	C, II層	30~40	
" 30	"	10.9	5.0	8.5	420	角閃石斑岩	F, II層	10~20	
" 31	"	8.5	3.0	7.4	220	砂岩	A, II層	10~20	
" 32	"	8.2	5.35	7.1	440	"	E, II層	0~10	
" 33	"	10.2	5.9	8.5	600	角閃石斑岩	A, II層	20~30	
" 34	"	9.7	5.7	5.3	494	石英黒雲母片岩	A, II層	10~20	変成岩の一種、 名護層（慶良間 諸島にある）
第29図No.35	"	11.7	4	6.8	410	砂岩	A, II層	0~10	
" 36	"	10.0	7.1	9.1	730	角閃石斑岩	A, II層	10~20	
" 37	"	10.0	6.2	6.6	420	角閃石ひん岩	A, II層	0~10	
" 38	"	9.6	4.9	6.3	350	輝緑岩	A, II層	20~30	
" 39	"	9.4	5.1	8.15	440	角閃石斑岩	F, II層	10~20	
" 40	"	10.9	7.7	3.95	410	砂岩	F, II層	10~20	
第30図No.41	"	8.6	5.8	7.9	625	"	E, II層	0~10	
" 42	"	9.7	10.0	10.0	1,480	角閃石斑岩	A, II層	0~10	
" 43	"	8.5	3.7	7.9	450	石英閃緑岩	AB, II層	40~50	
第31図No.44	"	9.7	5.0	9.0	700	角閃石斑岩	C, II層	30~40	
" 45	"	11.6	6.4	7.8	870	砂岩	E, II層	0~10	
" 46	石錘	13.6	3.9	12.3	760	黒色千枚岩	A, II層	10~20	
第32図No.47	磨り石	22.0	9.1	13.4	4,250	砂岩	A, II層	60~70	
" 48	"	14.0	8.4	11.4	1,815	"	A, II層	0~10	
第33図No.49	"	19.7	14.1	17.2	6,500	角閃石斑岩	テストピットNo.2 IV層砂礫層		
" No.50	石錘	15.7	11.9	12.4	2,670	鍾乳石片	CIV層 テストピットNo.1		
" No.51	"	17.7	15.5	15.3	5,000	"	CIV層 テストピットNo.1		

b類 口縁部の径が胴部の径に比べ、ほぼ同じになるもので胴部の張り出しが弱いものである。第34図4、第35図5～7 第36図15～18。 33点

c類 全体の形状は上記I b類に類似するが、口縁部のみが外返の著しいもの。第35図8、9 第36図13、14、19、20。 18点

甕a類 第34図1～3、第36図10～12

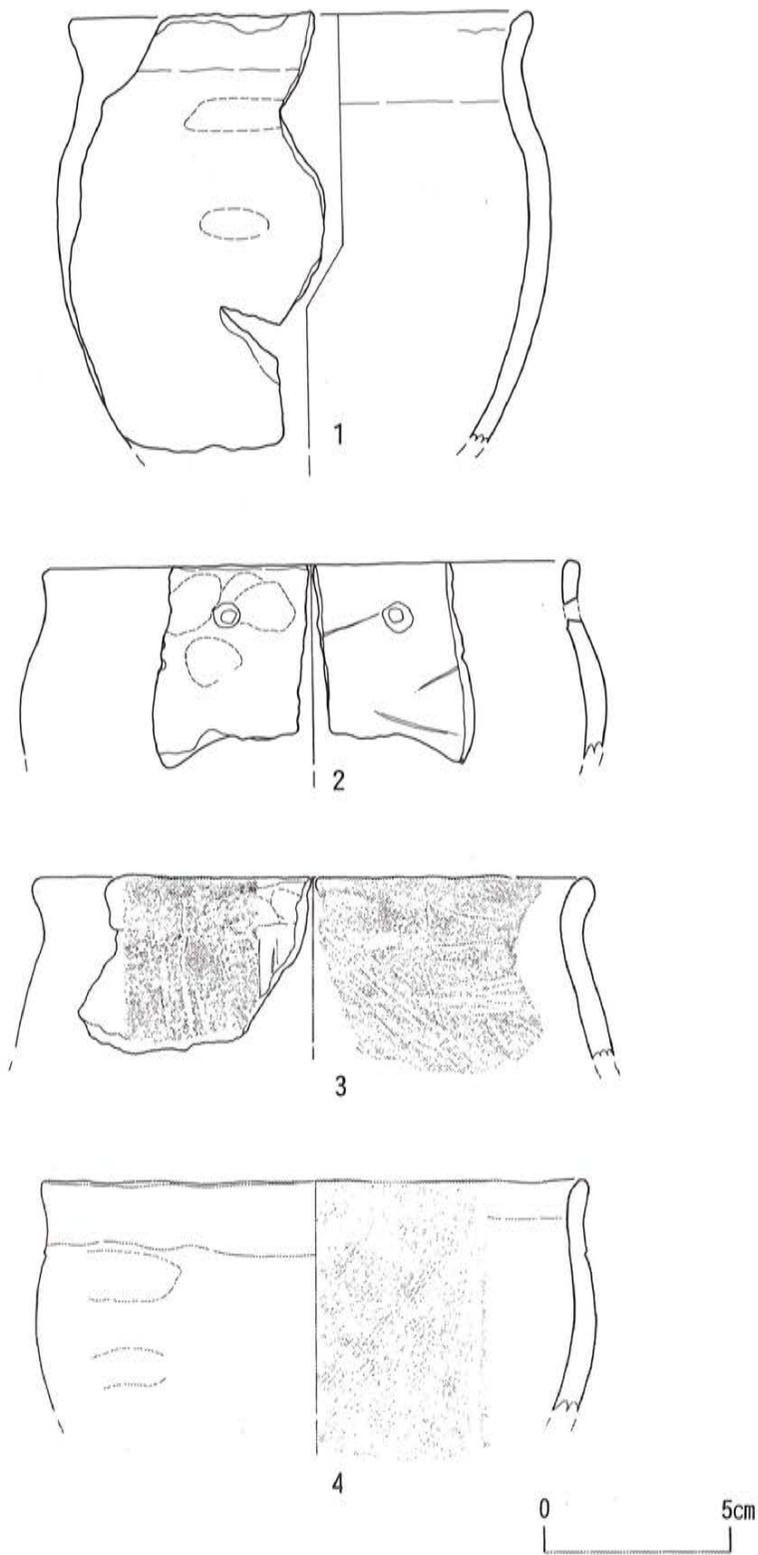
第34図1は、全体の3分の1が残っていた口径推算約12cmの資料である。頸部部分が明瞭につくられ、口縁部は緩やかに外返している。指圧痕を器面上に残すがナデ整形が表裏面でなされ、器面は堅い印象をみせている。器厚0.6cm。色調が茶褐色。口縁部はやや丸く波打っている。焼成は良好。A Bトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図2は、口縁部の小破片であるが、復元推算すると約14cmをはかる。上記の1と同質、同色をなしている。器面の調整はナデ仕上げで、器面がやや凹凸をなしている。裏面には整形時の擦痕が残っている。口縁部下の約1cm部分に口径約0.4cmの孔がみられる。焼成は良好。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図3は、口径推算約15cmの資料である。口縁部は外器面を押し延ばしたように整形したもので、口唇部がやや玉縁状に肥厚したところもある。外器面には縦位の削り似た整形擦痕が指圧痕とともに残されている。裏面には横ないし斜位の擦痕がみられる。色調は褐色、胎土中央は黒褐色を帯びる。焼成は良好。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

第36図10は、口縁部がやや直口縁に軽い外返をし、その以下の胴部が直ぐに張り出す器形をなす。口唇部は平坦になり、器壁も一定して薄い仕上げである。砂質で器面上で細粒子がみとめられる。色調は外器面が褐色ないし暗褐色、内器面が灰白色をおびる。図上復元すると推算約21cmになる。A Bトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図11は、大きく外反した口縁部で、その直下から大きく張り出す器形を示す資料である。口唇部はやや平坦に整形され、そのうえから外器面に垂れ掛ける様に、断面が丸い凸帯文を施文してある。その文様の後尾は、破損して完全形ではない。胎土は細かく泥質に近く、ナデ整形がなされている。色調は明褐色。焼成は良い。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。



第34図 甕形土器 a類 1~3 b類 4

同図12は、口唇部がやや平坦に近い口縁部で、器壁が8mmと厚い資料である。色調は明褐色。焼成は良好。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

甕b類 第34図4、第35図5～7、第36図15～18。

第34図4は、口径推算約14.5cmの甕形土器で、胴の張りがやや弱い器形をしている。口縁部の外器面には、有段状に似せた沈線が施されている。沈線は波をうち、また所々消されてもいる。外器面はナデ整形で暗褐色の光沢のあるところがあり、内面は斜位の細かい貝殻状の整形擦痕がみられる。焼成は良好。A Bトレンチ第Ⅱ層50～60cm。

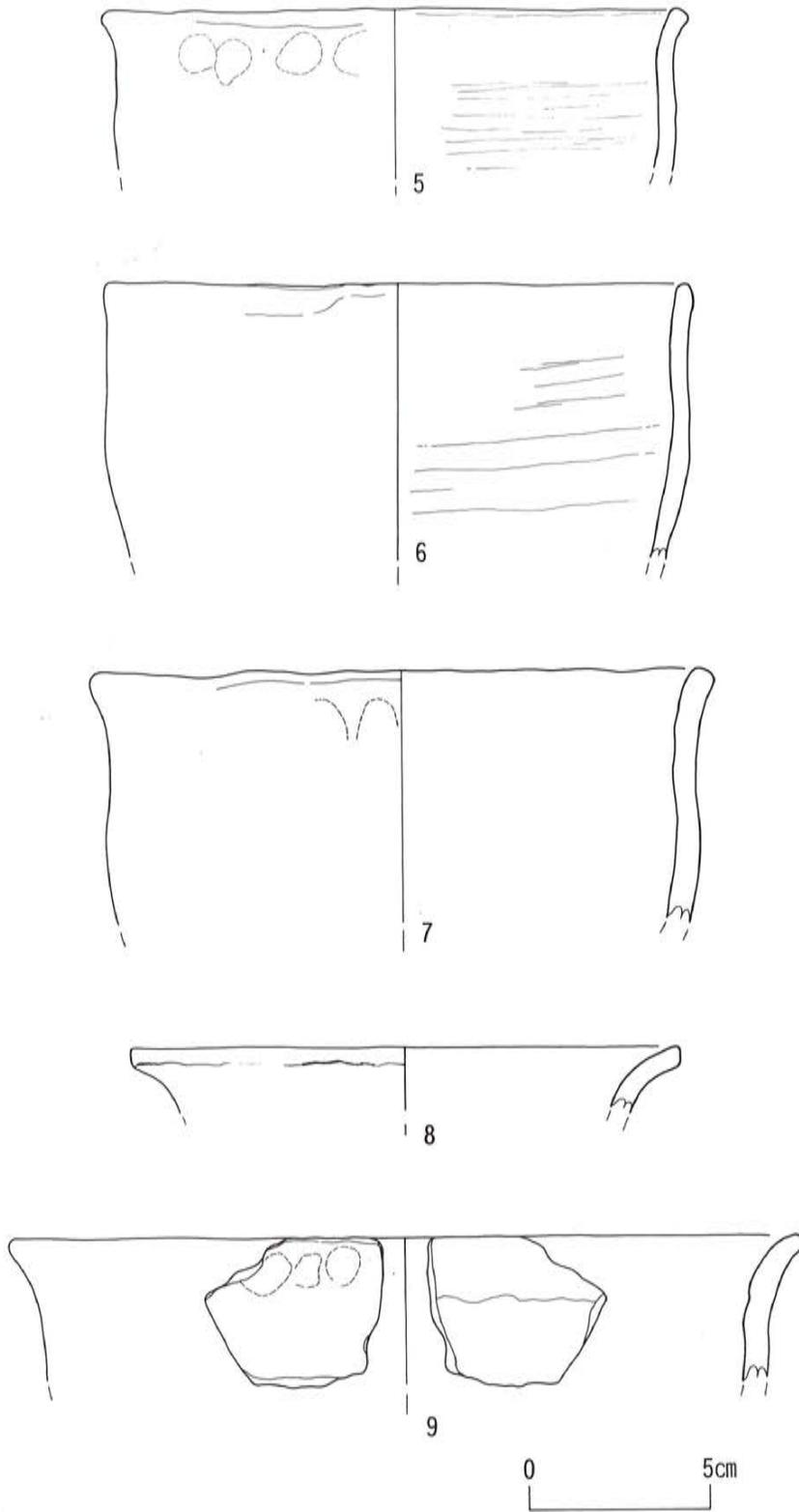
第35図5は、甕形の口縁部資料である。口径推算約16cmをはかる。口縁部で急に外返するもので、口唇部断面でやや方形状に肥厚している箇所がある。外器面は指圧痕がみられるがナデ整形され、内器面は横位の細かい擦痕が走っている。色調が暗褐色。焼成は良好。A Bトレンチ第Ⅱ層50～60cm。

同図6は、口縁部から緩やかに胴部に移行を示す口縁部資料である。口縁部はやや波状を呈し、口径推算約16cmを計測した。外器面はナデ整形でほとんど凹凸はみられないが、やや風化が観察される。内器面は横位の幅のある木状の擦痕がみられる。色調は暗褐色。焼成は良い。A Bトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図7は、前記6の資料と同じく胴部から口縁部へ緩やかに外返をする資料である。口径推算約17cmをはかる。これまでの資料と異なり、5～6mmと器壁が厚く、器面上に石英砂粒が露出している。焼成は弱く明褐色をおびている。器面調整はナデ仕上げで、外器面に凹凸が残り、内器面は剝離し粗面になっている。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

第36図15は、口縁に沿って指頭痕がよく残った資料で、口唇は波状を呈しているが、その面を調整するように平坦に整形され、部分的に潰されたようになっている。口縁部断面からすると、直状に近く口唇部で外返を示している。外器面は黒褐色をおび、粘土つぶが部分的に付着したような粗面になっている。内器面は明褐色でナデ整形されている。焼成は良好で堅緻である。Cトレンチ第Ⅱ層0～20cm。

同図16は器面調整がナデによって丁寧になされた資料である。器壁は6mmと一定している。口唇部はまるい。外器面は橙褐色で内器面は褐色を帯びている。胎土は、細かい粒子の混入した泥質で、焼成は良い。A Bトレンチ第Ⅱ層10～20cm。



第35図 甕形土器 b類5~7 c類8、9

第36図17は、口唇部分のみで軽い外返をしめず破片である。指圧のため口縁部の器壁の厚さが一定していない。器面には細かい粒子が浮き出し、ザラザラしている。焼成は良。色調が明褐色。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図18は、口唇部の断面が舌状を呈した破片で、前記の資料同様に軽い外返をしている。器面は泥質のため滑らかであるが、きめの細かい砂粒が観察される。焼成は良。色調は淡褐色。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

甕c類 第35図8、9 第36図13、14、19、20

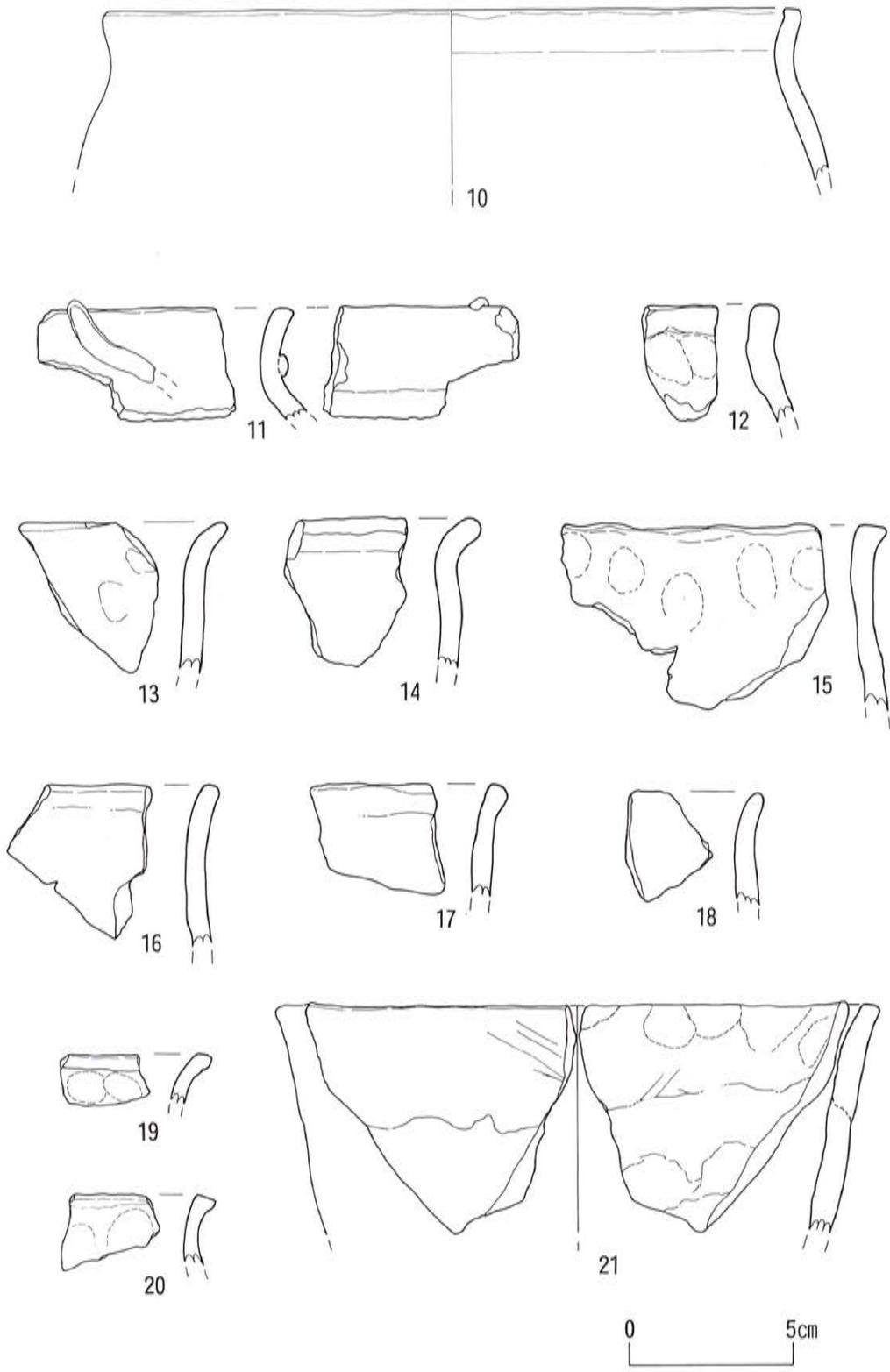
第35図8は、著しく外返をする口縁破片である。口唇は稜のある平面が外向きに作られている。口径推算約15cmをなす。内外面はナデ整形がなされ、器面はスムーズな面になっている。色調は灰褐色。焼成は良好。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図9も、多く外返を呈する口縁部資料で、図上復元すると口径推算約22cmをはかる。内器面には、有段をおしつぶしたような沈線が一条みられる。器面はナデ整形で、外器面の口縁部に指圧痕を残す以外は良好である。色調は暗褐色。焼成は良好。A Bトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

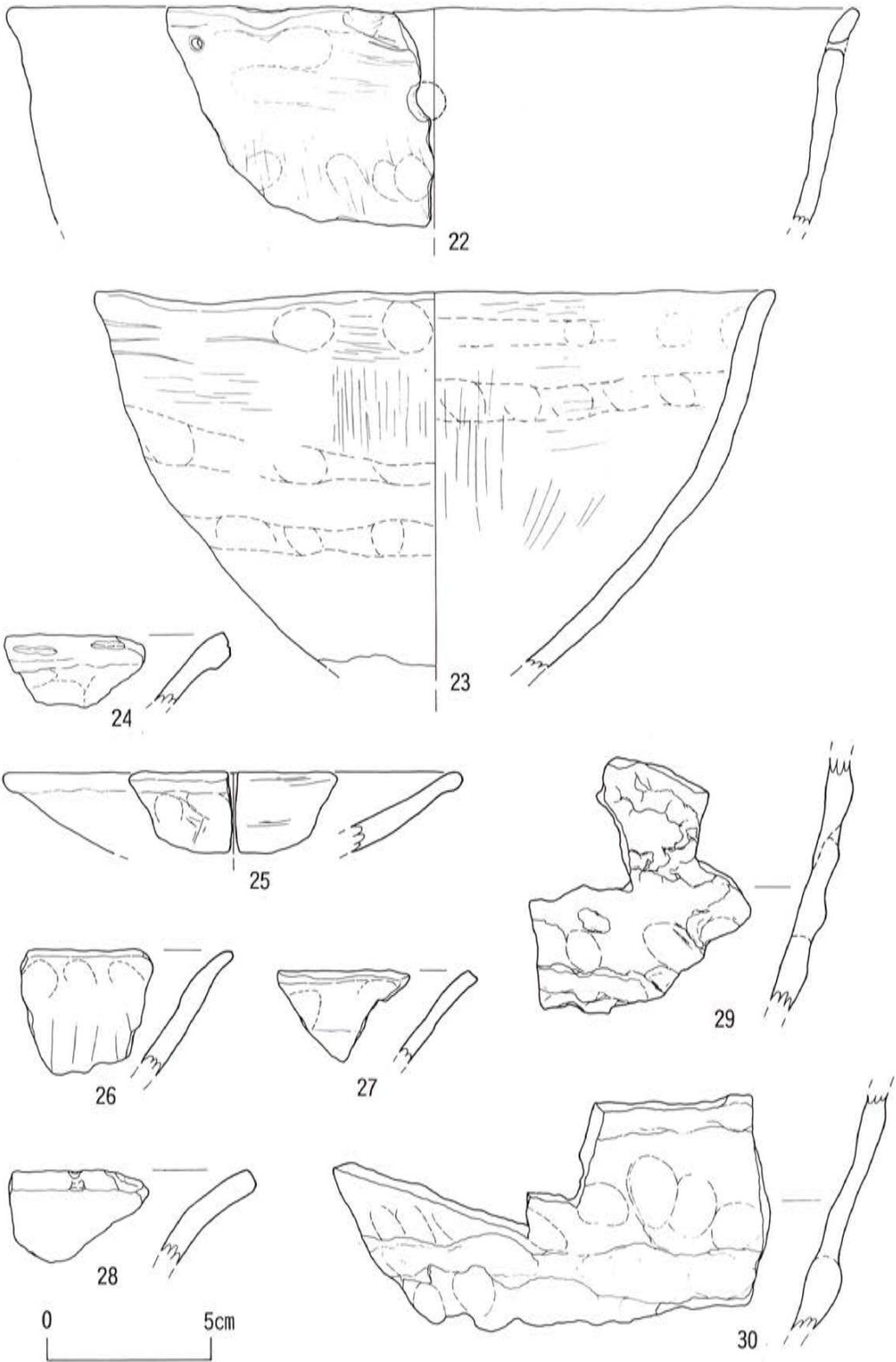
第36図13は、外返した舌状の口縁部破片である。器面は調整時の指圧痕が残るが、全体にナデ整形がなされ、手触りがスムーズになっている。色調が褐色で焼成は良好である。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図14は、強くおりまげる様に外返された口縁部で、口唇部が丸く整形されている。外器面はナデ整形がなされているが荒れている。色調が褐色。内面の調整は良好。焼成も良好で堅緻である。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図19、20の資料は、いずれも口唇部が平坦になり、その口縁部が外側に肥厚した形状になる。また全体に4mmと比較的薄い器壁である点が共通している。前者は、口縁部の外器面にはそぼそとした沈線があり、それと平行するように指圧痕がみられ、ナデ整形が丁寧であるため全体になめらかである。赤褐色。焼成は良い。細かい砂粒が器面にみられる。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。後者は、口縁の外返が指頭圧痕のカーブになるものである。焼成は良好。色調は黒褐色、ナデ整形がなされているが、前者ほど泥質ではない。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。



第36図 甕形土器a類10~12 b類15~18 c類13、14、19、20 鉢形土器21



第37図 鉢形土器a類22~24、26~28 b類29、30 皿形土器25

鉢形

口縁部の径が胴部の径より大きくなるもので、胴部の張りのない器形をなすものである。ただ、甕形c類に類似するものもあるが、直線的な器形と器高の低くなるものを範疇にした。量的には8%になる。

大きさを、口縁径から推算すると、18cm～21cm台のものになる。

- a類 口縁部から胴部へほぼ斜めに直線的に移行するもので、器高の高いものと低いものがある。 14点
- b類 高宮廣衛氏が形式設定した土器で、器面に積み跡の隆起が残され、器面調整もやや粗い土器である（注1）。胴部片で鉢と判断されるものが2点ある。また器形の判断ができないが、間違いなくこの形式のものと分かる小破片が他に10点出土している。口縁部は得られていない。

鉢 a類 第36図21、第37図22～24、26～28

第36図21は、直口縁でほぼまっすぐに胴部へ移行する器形の鉢形口縁部資料である。口径推算18.5cmをはかる。外器面は、ナデ整形が良好で平滑であるのに対して、裏面は器面全体に指圧痕が残され、対象的である点が特徴である。口唇部は厚さは一定していないが、平坦になる。また輪積み跡が内外器面にみられ完全に消し切っていない。器厚6～7mm。焼成良好。きめの細かい石英粒子が器面で黒い光沢としてみとめられる。色調が外器面の口縁部付近が黒褐色、その胴部辺りが褐色をおびる。一方、内器面は全面に黒色を呈している。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

第37図22は、推算口径26cmをはかる大形の口縁部破片である。口縁部は、口唇部近くで外返をみせ、波状を呈している。内外器面上には整形時の指圧痕がのこり、やや粗面になっている。外器面の口縁部4cmは横ナデがみられ、それ以下は縦位の整形擦痕が無数にみられる。また穿孔が二箇所あり、一つは口唇部より約1cmに孔径が約2mmものが、他は、破損面にまたがるが口唇部より約3cmに孔径が約11mmのものがある。焼成は良い。色調は黒褐色。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図23は、石膏復元をこころみた資料で、口径推算21cmをはかる。上記の22の資料と同じく口唇部で僅かに外返をみせ、胴部へ微かに腫れながら底部に移行する器形をなすものである。口唇部は大きく波打ち平坦に整形されていない。内器面は、比較的丁寧に器面調整されているが、外器面は積み痕部分が波打ち、その存在が確認される。器面の調整はナデ整形そして粗面というわけでわかない。焼成は良い。色調が黒褐色から明褐色。A Bトレンチ第Ⅱ層50～60cm。

第37図24は、白磁の玉縁の様に肥厚がみられる口縁部片である。ただその整形はやや不安定で一定した厚さが無い。器面はしっかりしていて、ナデ整形が内外器面でなされている。内器面は暗褐色、外器面は褐色を呈する。焼成は良好。A Bトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図26は、口唇部が舌状を呈する破片で、傾きから浅鉢形をなすものと思われる資料である。指頭痕の残る口縁部付近は、ナデ整形がみられ滑らかであるが、その以下は整形時の擦痕が消し切らずにのこっている。細かい石英砂粒がおおく混入している。明褐色。色調は良い。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図27も、上記26同様の器形をなす小破片である。口唇部は平坦に整形され、内外器面はナデ調整が丁寧になされている。なお26でもみられたが、内面には輪積みの段部が消けし切らずに段をつくっているところが注目される。内外器面が暗褐色。焼成は良好。A Bトレンチ第Ⅱ層40～50cm。

同図28は、口唇が平坦に整形された口縁部資料で、緩やかに大きく外返を示している。傾きが大部ふせたため本項目にいられたが、壺の可能性もあり、断定ができず、とりあえず当項目で紹介した。内外器面ともナデ整形が丁寧で、7mmの均等の器壁になっている。混入物に僅かに白色の砂粒子が見られる。焼成は良好。色調は内外器面とも褐色をおびる。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

鉢b類 第37図29、30

当該土器は、器面の粗面が特徴的なもので、総数12点検出されている。ただ器形が判断されるのは、図に示した第37図29、30のみである。両資料とも胴部の資料で、口縁部は得られていない。いずれも焼成は良好で、外器面側の輪積み痕が顕著にみられ、また器面は荒れた状態にみられる。前者は5～9mmの厚さがあり、色調が赤褐色をおびる。Cトレンチ第Ⅱ層40～50cm。後者は外器面が暗褐色、内器面が赤褐色である。器厚は5～1.1cmをはかる。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

皿形

口縁部が大きく外に傾斜し、器高が低くなるもので、2点検出されている。図化した資料は、第37図25で、口径が約14cmと推定できる破片である。口縁部の外面部分を強く整形したためか、若干くびれた状態になっている。胎土中には、細かい石英砂粒子が混入しているのが観察される。ナデ整形が丁寧で器面上には露出していない。外器面の色調は暗褐色、内面が褐色を呈する。A Bトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

有段口縁部資料

口縁部の外壁面に段ないし線に近い痕跡をなすもので、肥厚口縁の退化か、もしくは、最上段の輪積みの痕を、そのままみせている可能性もある。また段のかわりに線で表現したのも、一応この項目に含めて紹介する。検出された資料は、全部で11点、きわめて微量である。

有段部分の整形状態で、大きく三種類に分類される。

- a 類、明らかに段を有するもので、カヤウチバンタ式土器に近似した口縁形態をしたもの。
第38図34、36 2点
- b 類、有段部の調整が概して丁寧ではないもので、当該部分が撫でつけるようになされたため、段部分が器面上では不規則な波状に見えるものと、段部分が捲れる様にすり付けられ、線状になったものがある。後者のものは口唇から段部までの幅が狭いが多い。
第38図31、35、33、37、40 8点
- c 類 当該部分にあたる箇所が、まったく沈線で表現したもの。 第38図32 1点

有段 a 類

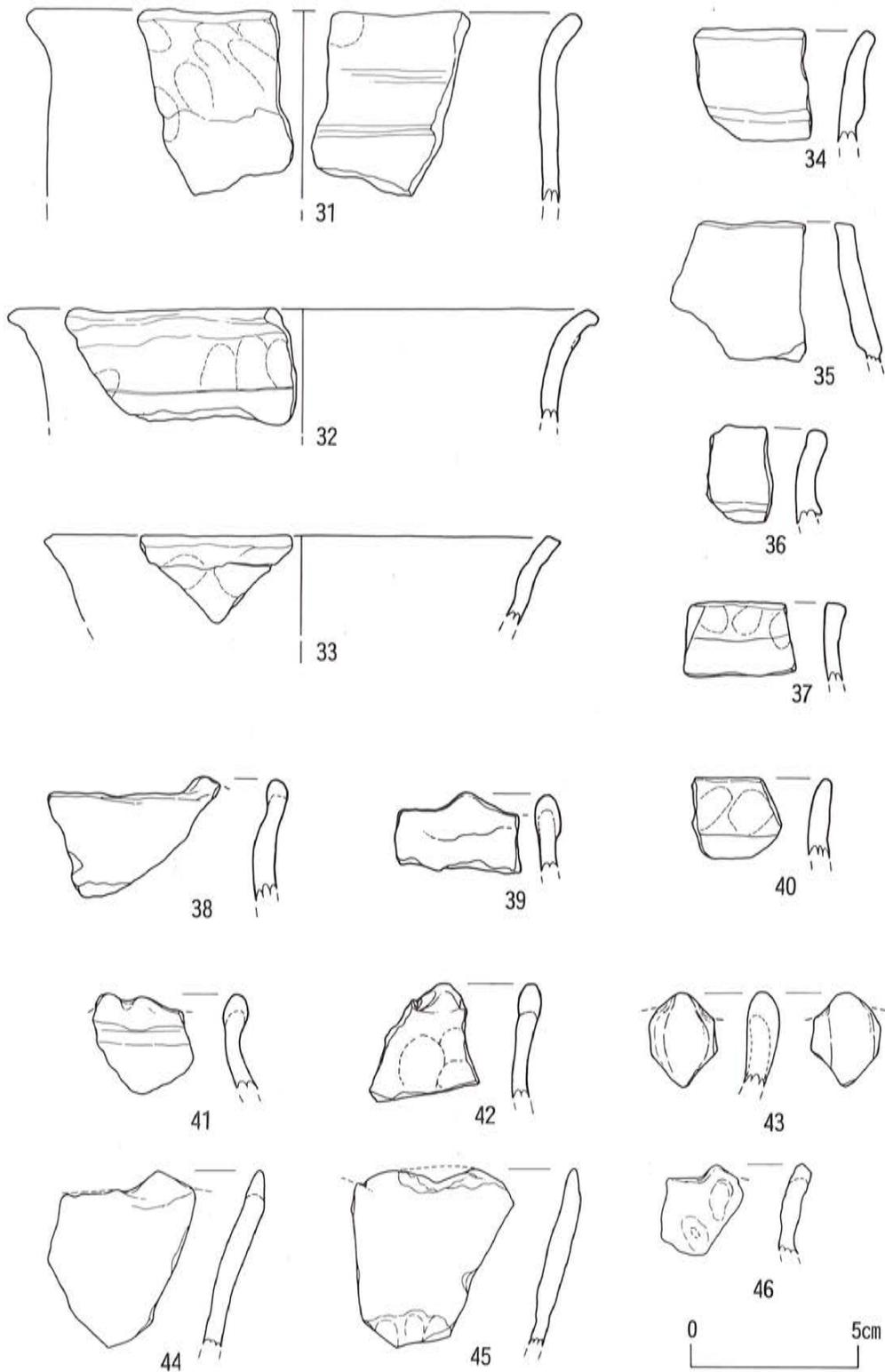
第38図34は、僅かに外返する口縁部破片で、口唇部下の約2.5cmの外壁面に段をつくる資料である。表裏面に黒色の器面が残り、剥がれたところでは褐色の地肌がみられる。焼成は良。A B トレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図36は、くびれる様な口縁部資料で、破損部の下部に丸く段部をつくっている。段部の整形は明らかに、この部分のみでなされており、肥厚するものではない。ナデ整形が丁寧である。焼成は良好。色調が褐色。A トレンチ第Ⅱ層10～20cm。

有段 b 類

第38図31は、口径推算16.5cmをはかる甕形で、口縁部のみが強く外返を示している。有段部は口唇下約3.5cmを計測する。明確に意識させるものではなく波状を呈し、その肥厚も明確なものではない。内器面は、横位の貝殻擦痕が全面にみられ、その上からナデ調整がなされ、その段の痕跡はまったくみられない。焼成は良好。色調は赤褐色。器壁の厚さ5mm。A トレンチ第Ⅱ層50～70cm。

同図35は、やや内傾する甕形の口縁部資料である。口唇部はやや波うち、口唇部下約4cm付近に段があり、その段の整形は波打ち、丁寧ではない。外器面は暗褐色、内器面は褐色を呈する。器面上で石英微粒子が認められる。焼成は良好。A トレンチ第Ⅱ層20～30cm。



第38図 有段口縁部31~37、40 山形口縁部38、39、41~46

第38図33は口唇部が平坦で、有段の口縁部肥厚幅がわずか約1cmと細いものである。段の整形は悪く、波打ち、ところどころでなで潰されている。また肥厚もわずかなもので明確にはみられない。小破片であるが、推算口径約16cmとなる。焼成は良好。胎土には石英砂粒が認められる。色調が褐色ないし淡い褐色を呈する。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図37も、上記の33同様に口唇下約1cmの肥厚口縁部破片である。口唇部は平坦に整形され、段部は指で押しつぶしてつくるため、ところどころ線状になっている。胎土は泥質で、焼成は良好、色調が灰褐色になる。A Bトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図40は、全体に風化した口縁部資料であるが、外器面部に段部がみられ、沈線状に浅いくぼみがめぐっている。器面は剝離しているが、口縁に沿って整形時の指圧痕が残っている。焼成は良い。色調が褐色。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

有段c類

第38図32は同様に、外返が著しい資料で、口径推算約18cmをなす。注目されるのは、口縁下約2.5cm部分に幅が約1mmの細く浅い沈線が一本施されていることと、その間に、粘土を追加して押し広げた様な有段ができていることである。全体にナデ整形されているが、指圧痕が消し切らずにのこっている。口唇部はやや波打っている。色調は淡褐色。焼成良好。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

山形口縁部

甕形ないし、鉢形の口縁部に伴うものとみられるが、破片が小さいこともあり、その所属する器形との関係は追及しがたい。したがって、部位のみの分類となる。総数8点検出された。

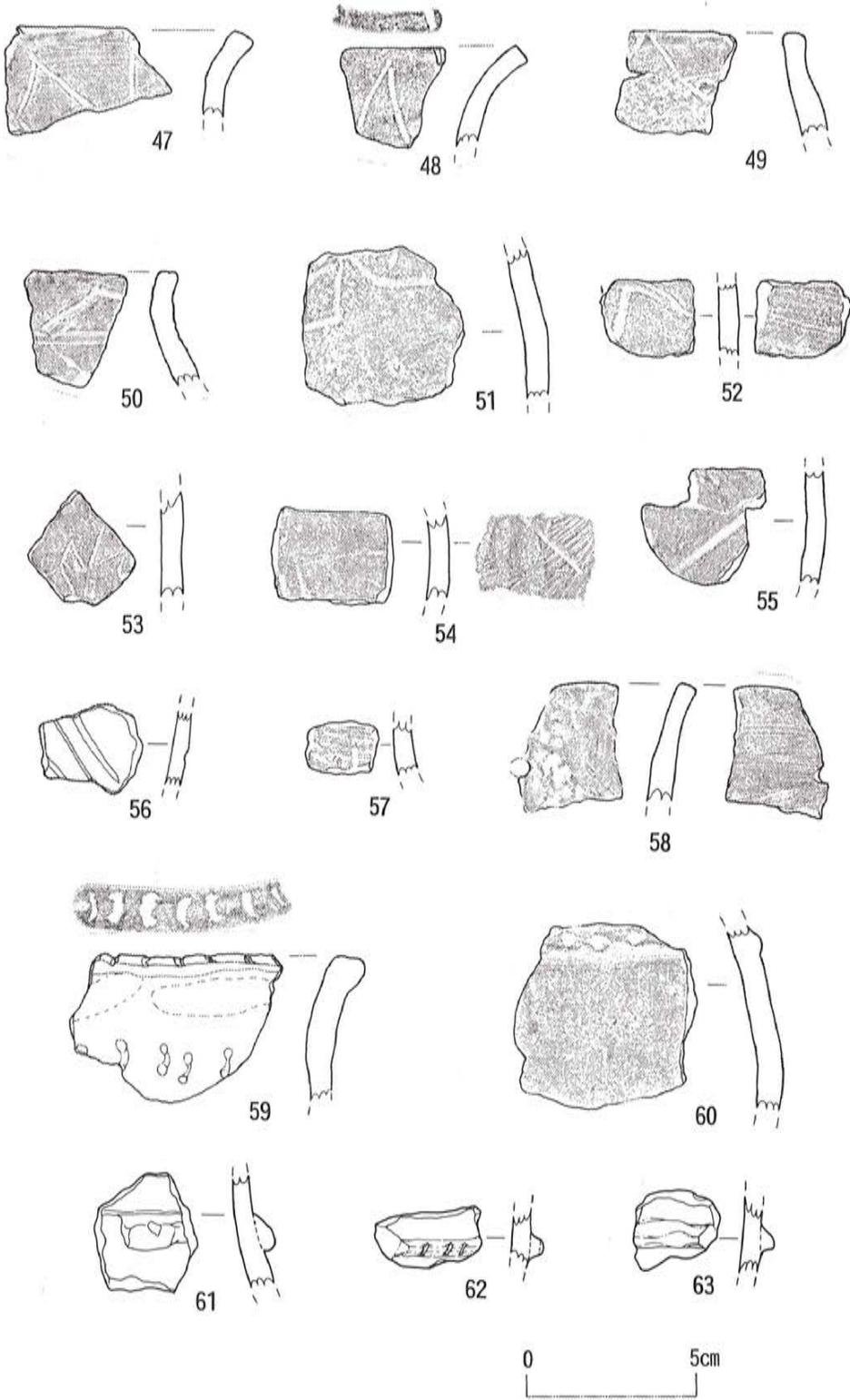
a類 肥厚する山形口縁部 第38図39、41、42、43。 4点

b類 肥厚しない山形口縁部 同図38、44、45、46。 4点

山形a類

明確に山が二つ確認されるのは、41のみで他は山部分のみの破片で単独のものかどうかは不明である。

第38図38は、そり返るような外返を示す口縁部で、やや波うった口唇部に微かに肥厚した山が付されている。破損部が山部分であるため、その展開は不明である。器面はナデが徹底され焼成が良好であるため、手触りが良い。色調は赤褐色である。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。



第39図 有文土器 口縁部47~50、58、59 胴部51~57、60~63

第38図39は、山形部分を整形するため張り付けた粘土部分が外器面にみられる口縁部である。灰ないし黒褐色の器肌に、細かい光沢のある石英砂粒子が大量にみられる資料である。焼成は良好。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図41は、外返の強い口縁資料で、肥厚する山形口唇になる。なお山形は、中央より微かに二分されている。器面は風化しているためか、やや砂質になり、明褐色を呈する。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図42は、先の38、41と同様の外返形を示す口縁部で、肥厚した山形が付されている。中央の舌状になった山の両側には、刻みがみられ、刻みの深さからすると両側にも山が展開する可能性もある。残念ながら欠落しているため、その部分については不明である。焼成は良好。色調が暗褐色。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図43は、縦位の粘土張り付けで山形にした資料で、内外器面に肥厚が残っている。口縁部の残りは悪いが、内湾器形をなすものと推測される。胎土は泥質で、焼成良好。色調が明褐色。ナデ整形は良好である。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

山形b類

ほとんど肥厚をみせず、破片が小さいためでもあるが、一つの山のみである。第38図38、44～46。

同図44、45の資料は、口唇部断面が舌状を呈する資料である。前者は、やや外返を示す鉢形で小さい山が認められる。後者は口縁がやや内湾した鉢形の口縁資料になっている。口唇部が大きく破損していて確定は出来ないが、残存部の刻みと丸く山形に移行する部分から大きな山が予想される。いずれも焼成が良好で、色調が褐色をおびる。調整はナデがなされ器面はスムーズになっている。両資料ともA Bトレンチ第Ⅱ層10～20cmから出土している。

同図46は、器面に指圧痕を明瞭に残す山形口縁部資料で、突起の様に付されている点は前記の38と同じである。断面形状からも外返を示す小型資料である。胎土は砂粒子がみられ、砂質をみせる。焼成は良好。色調は黒褐色をおび、硬質の感じがある。A Bトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

有文土器資料

有文土器は、19点の破片が得られている。文様の種類は基本的には、篋描き沈線文様、凸帯文様、刺突文様の3種類からなる。文様の形態、文様の工具の仕様、施文部位によりさらに細分してみた。

A類 沈線文様 11点

- a、直線構成で鋸歯状に描くものと平行線に近く沈線を描くものがある。

第39図47～50、54～57

- b 幅広の篋で曲線を主として描くもの。第39図51、52

- c 細沈線で文様を描くもの。第39図53

B類 凸帯文様

a 細い丸紐状になるもの。第36図11

b 紐状にした後に、篋などによる刺突文様が組み合わさったもので、aのような紐状の形を残さない。第39図58、60～63

C類 刺突文様のみのもの。第39図59

その文様は、凸帯文にもみられるが、ここでは単独にあるものをさす。第39図59

A a類

第39図47、48は、大きく弓なりに外返する口縁部資料で、口唇部は平坦になっている。いずれも外器面に鋸歯状のシャープな沈線が施されている。両者の異なる点は、前者の口唇部の刻文様はやや半裁竹管状の工具によるもので、後者は、沈線で切る様な刻みになっている。前者は外器面に横位の擦痕がみられ、ナデ調整がなされている。焼成良好。色調が赤褐色。A Bトレンチ第Ⅱ層0～10cm。後者は、やや器面の風化がみられ、ヌメっとした肌をしている。焼成は良い。色調が明褐色。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図49は、少々内傾した口縁部破片で、口唇は平坦になる特徴がみられる。外器面には斜位の沈線が施文されている。小破片のため、文様の展開は不明ではあるが、やや曲線の雰囲気もみられ、胎土中には大量の細かい砂粒子が混じっている。焼成は良好。褐色をおびる。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図50は、外返を呈する資料で、口唇部が平坦に整形されている。外器面には幅約4mmの単ペラで、鋸歯状の沈線文とその直下に横位の沈線文が組み合わされて施文されている。口唇部には刺突による刻文が施されている。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図54、55、56、57の四資料は、いずれも胴部破片である。54は、斜位の平行する浅い沈線が、僅かに残されている。胎土は泥質で細かい。焼成は良い。色調は褐色ないし明褐色。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。同図55は、約2mmの明瞭な斜位の沈線がみられる資料である。焼成は良好。色調は褐色ないし茶褐色。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。同図56は、石英砂粒子が大量に混入した資料で、斜位の沈線が三条みられる。器面は風化しているが、沈線の幅が約2mmとよく残っている。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。57は胴部の微細片で、わずかに沈線文様がみられることから取り上げた。図上の左隅にみられるのがそれで、右の縦位のものは、混入物の剝離した痕の窪みである。焼成良好。色調が褐色。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

A b類

第39図51は、比較的大きな胴部の破片で、全体の文様の展開は不明であるが、曲線や直線が

横方向に浅く施文されている。文様の工具は幅2mmほどの単ベラである。1mm以下の石英砂粒が器面上でみられる。焼成は良好。色調は暗褐色。Cトレンチ第Ⅱ層30~40cm。52も胴部の小破片で、外器面に波状に51の資料と同じ様な工具で、浅く描いている。内面に貝殻状の擦痕が残っている。焼成は良い。色調は赤褐色。ABトレンチ第Ⅱ層50~60cm。

A c 類

第39図53は、文様の展開状況は不明であるが、残された文様からすると、幅3mm程の単ベラと恐らく同様なベラの薄い方を使用して描いた沈線文様からなる。残された破片でみると、対称的な幾何学的文様が展開している。焼成は良好。胎土中に微砂粒が大量に混入している。褐色をおびる。ABトレンチ第Ⅱ層0~10cm。

B a 類

第36図11は、口縁が直状になった肩の破片でB a 類の凸帯文様を口唇部から外器面に垂れ掛けるように張り付けてある。口唇はやや平坦になり器面の撫で整形はよいが、外器面の肩部分に整形時の指頭痕がみられる。焼成は良し。色調が黄褐色。器厚6mm。Aトレンチ第Ⅱ層0~10cm。

B b 類

第39図58は、斜位に凸帯文様をほどこすが、大部形をくずしている。また凸帯文様の上にはこれもくずれた半裁竹管で刺突された文様がみられる。やや外返ぎみの垂直にのびた口縁部破片資料である。内面には横位の整形擦痕がみられる。口唇下2.5cmの箇所には径5mmの孔が穿たれている。Aトレンチ第Ⅱ層20~30cm。

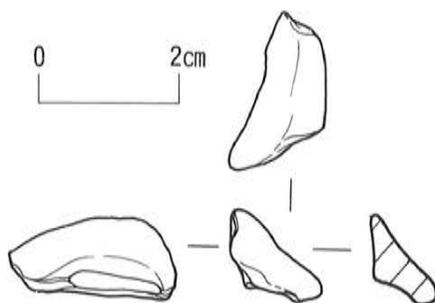
同図60は、同部資料で横位の幅6mmほどの凸帯文様にくずれた半裁竹管文を刺突して施文してある。焼成は良好。色調が褐色。Aトレンチ第Ⅱ層20~30cm。

同図61は、胴部から肩部にいたる部分の資料で、外器面に凸帯文様が張り付けられている。小破片のため全体の展開は不明であるが、刺突もみとめられる。裏面にも平行する細かい整形の擦痕がみられる。Aトレンチ第Ⅱ層10~20cm。

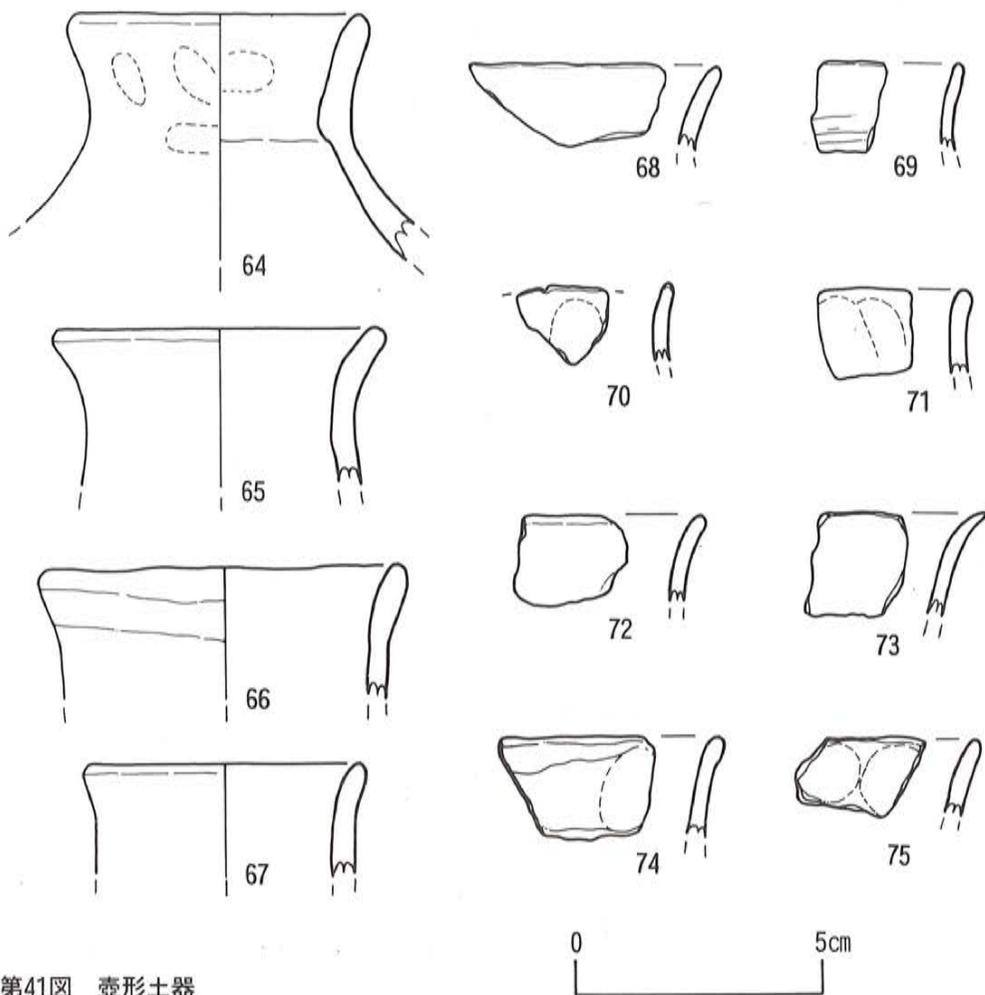
同図62、63の資料は、幅が8mmほどの凸帯文様で、前者には斜位の刻みが見られ、後者には文様がみられない資料である。いずれも凸帯は明瞭に強調されている。前者は赤褐色。後者が明褐色をおびる。焼成はいずれも良好。出土トレンチも同じくAトレンチ第Ⅱ層10~20cm。

C類

第39図59の口縁部資料である。緩やかに大きく外返を呈し、口唇部分が肥厚がみられる。口唇上と胴部に同一の刺突文様が施文されている。工具は半裁竹管具で口唇部はシャープであるが、外器面のそれは器面剝離のためか明瞭ではない。焼成は良好。胎土は精練され泥質になる。灰褐色ないし橙褐色をおびる。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。



第40図 外耳土器



第41図 壺形土器

外耳土器

1点のみ検出されている。大きさが約縦1.0cm、横2.4cm、厚0.5cmで比較的小さい横耳である。取付け部分からの破損で、その状況を復元すると斜め下がりの形態をとる。耳そのものは、形

状を良く残し、突出部分の面は丁寧に整形され、略方形に近い。器面の保持も良好でナデ調整がなされ、やや光沢もみられる。色調は褐色。混入物の極めて細かい砂粒が認められる。A B トレンチ第Ⅱ層10～20cm。

壺形

本資料と判断されるものは19点である。外返するものが一般的であるが、口唇近くで微弱な外返を呈するものと、頸部近くから大きく外返するものがある。壺と明確に判断されるのは、第41図64～67で口径から、大きさを推算すると、6cm～7cmのものが認められる。68～75は小破片のため壺形以外の小型の口縁部資料も含んでいるかもしれないが、明瞭な資料を得ていないため本類に含めてある。

第41図64は、頸から上部に向かい、ややひらきぎみに外返する口径推算6cmの壺の口縁資料である。内面には輪積みの痕跡がみられ、幅が約2.5cmをはかる。胎土は細かく精練され、微砂粒子が多く混入している。内外器面は丁寧なナデ整形がなされ、なめらかである。焼成は良い。色調が褐色。A B トレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図65は、頸部がやや直になり口唇部で反り返る形態の資料である。胎土は泥質で、きめがこまかい。焼成は良い。色調は褐色をおびる。A トレンチ第Ⅱ層60～70cm。

同図66、67は頸部が直で、口縁部が軽い外返を示すタイプである。前者は口縁部付近が僅かに肥厚がみられる。焼成は良好。色調は褐色。きめの細かい微砂粒子が器面上で輝いてみえる。口径推算7.5cm。A B トレンチ第Ⅱ層40～50cm。後者は、無肥厚の口縁部で、口径推算で5.7cmと最も小さいものである。器面のところどころで微砂粒がみられる。焼成は良い。色調が褐色。A トレンチⅡ層20～30cm。

同図68、72、73、74、75の資料は、口縁部がかなり外返を呈するものとみられる資料である。器壁は3～4mmと薄い。68は淡灰褐色で、器面調整は良好。A トレンチ第Ⅱ層0～10cm。72と74は器面がやや風化した資料で、手触りで器面の粉が付着する。前者は褐色。A トレンチⅡ層0～10cm。後者は橙褐色をおびる。A トレンチ第Ⅱ層30～40cm。73は口縁部が舌状に先細りになる形態である、内面側の口唇部は意識して平坦にしてある。色調は褐色。焼成は良い。A トレンチ第Ⅱ層20～30cm。75はナデ整形された器面になるが、口縁部に沿って整形時の指圧痕が残されている。焼成は良好。色調が褐色をおびる。A トレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図69、70、71はやや傾斜が弱いタイプである。69、70は、焼成良好で、器面も硬質でしまっている。整形はナデ調整である。色調はいずれも褐色をおびる。前者は、A トレンチ第Ⅱ層20～30cm。後者はA B トレンチ第Ⅱ層0～10cm。

底部資料

145点の底部破片が得られた。それらは尖底、平底、くびれ平底の3タイプに大別される。後者のくびれ平底は、さらに7種13の亜種タイプに分け検討してみた。全体的出土比率をみると、尖底2%（4点）、平底1%以下（2点）、くびれ平底97%（139点）となり、圧倒的にくびれ平底が主体となる遺跡になっている。また、くびれ平底の最も多い形態では、Fbのタイプであった。

I類 底が尖るいわゆる、尖底タイプで、このなかには明らかに乳房状をなすものと砲弾状に尖るものがみられる。

II類 平底をなすが後述のIII類とは異なり、底径が小さく、器全体の大きさは不明であるが、大形資料になるとI類の範疇にもなる可能性のあるタイプである。

III類 平底で広く安定し、立ち上がる外壁部分の特徴から呼称される、いわゆるくびれ平底。このグループが本遺跡の主体をなすもので、形態、その大きさ、器厚、内底面の形態などからさらに細分される。底径が実測できる資料が82点、推算不可能なものが残る57点からなる。

第42図底部分類概念図を略記した。A～Gの7種に分け、さらに13種類に細分してみた。

III A類 底部の造りが円盤形をしたもので、したがって底面の器厚が厚くなり、その外器面のくびれも極端に弱いものである。第43図82、83

III B類 内底面の造りが狭く湾曲して、外器面のくびれが明瞭に造られているもの。第43図84～86、90～93これらは内底の厚さと大きさにより、細分される。

a、内底の器壁が厚く、底径の大きいもの。

b、全体に小形になり内底がやや薄く、底径もそれにともない小さくなるもの。

III C類 上記のbに比べ内底面は広くなり、かつ裏底面も全体に安定したつくりをしたもの。くびれの外観は上記のB類に比較すると幾分弱くなっているものが多い。第43図87～89、95第44図96～100

a、内底の器壁が厚く、底径の大きいもの。

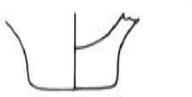
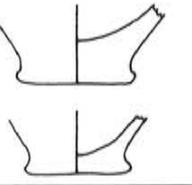
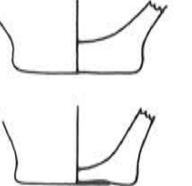
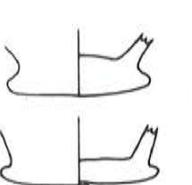
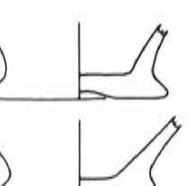
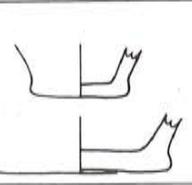
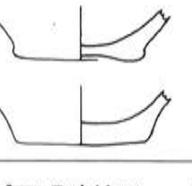
b、若干底径が小さくなり、その底部中央の器厚も薄くなるもの。

III D類 特徴的なのは、くびれの整形が稚拙で、一見くびれ部分が潰れた形をしているもの。第44図102～109

a、内底面は広く、また、裏面および内底面が凹凸を造りながら盛り上がるもの。

b、内底面がさらに広く、器壁が薄いもの。

くびれ平底Ⅲ類

A		2	
B		3	7
		4	
C		10	15
		5	
D		4	11
		7	
E		11	14
		3	
F		8	32
		24	
G		4	6
		2	

タイプ不明破片52 数字は個数
第42図 底部分類概念図

Ⅲ類E類 底部の造りが丹精なもので、概して外器面のくびれのつくりが均整がとれたもの第44図112～116 第45図117～120、138第46図143、144、151

a、内底面が広く、内面の立ち上がる脇に稜がみられる。また、くびれの仕上げも丁寧にそりかえるような形状をなし、かかとができたもの。

b、内底面の立ち上がりやや、厚く、また、くびれの造りがややa類よりは強調されていないもの。

ⅢF類 底器厚と器壁がほぼ同じ程度の薄い資料である。第45図123～137第46図139～142、145～148

a、底径が比較的小形になったもの。

b、底径が広く、内底面も立ち上がり部分まで広く確保するように整形したもの。くびれは比較的低く整形されている。

ⅢG類 内底面が広く、皿状になったもので、立ち上がりもしたがって伏せがちになったもの。第44図110、111第46図149、150

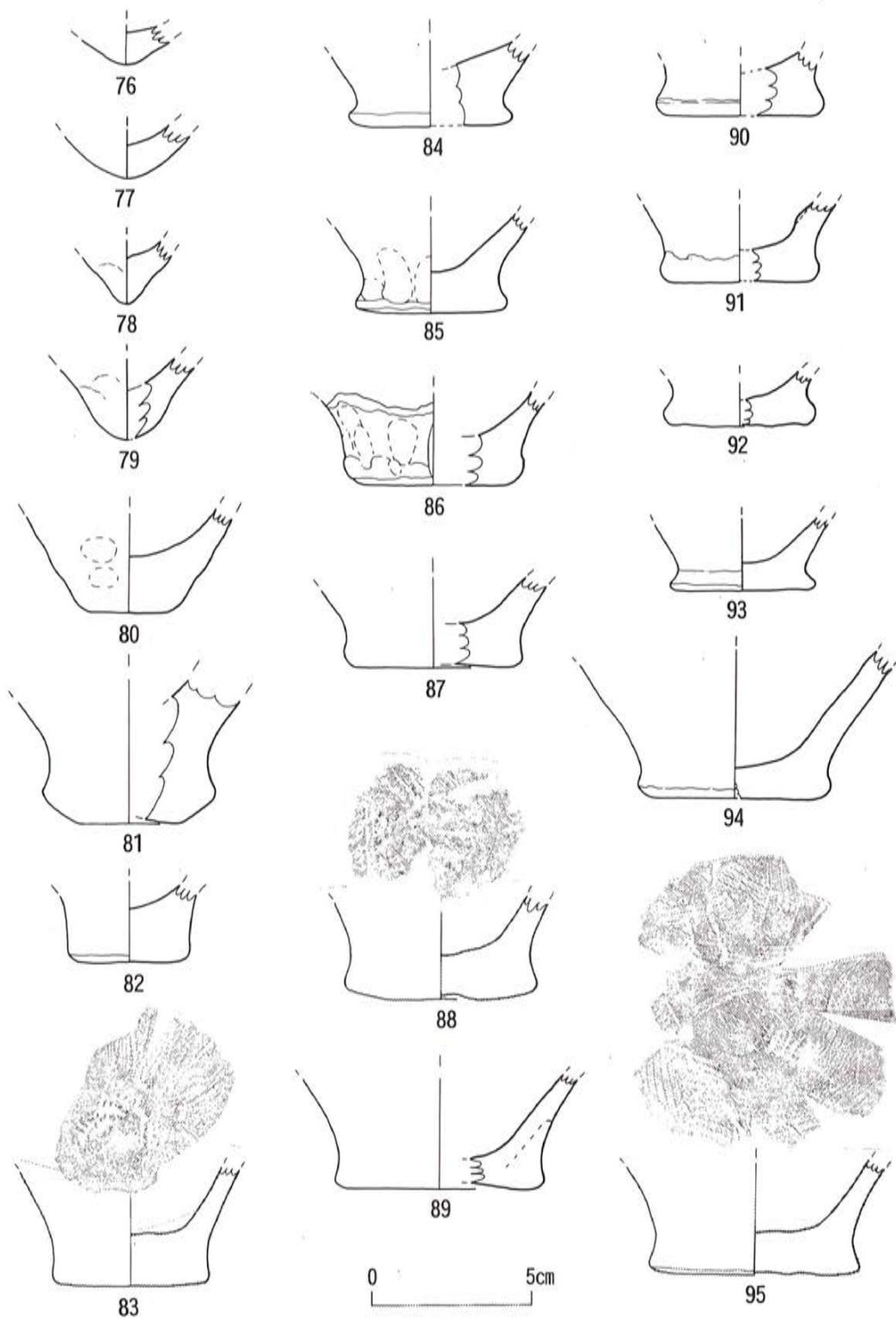
a、くびれが明瞭であるが、つぶれた状況をみせるものがあり、内底面の器壁も薄くなるもの。

b、くびれの造りが弱くなるもので、底部のホルムはaとほぼ同じになる。ただ内底の器壁は厚くなるものが多い。

底部I類

第43図76～79の4点がそれである。いずれも尖底の部分破片資料である。76、77は、ほぼ同形態をしめすものである。両者とも褐色をおびる。前者は、Dトレンチ第Ⅱ層50～60cm。後者はDトレンチ第Ⅱ層40～50cm。

同図78、79は、底の中央部が、さらに角度が鋭く尖る乳房状尖底になっている。前者は胎土がやや粗く、赤褐色をおびる。Cトレンチ第Ⅱ層30～40cm。後者は先の76、77と同じく胎土は細かく精練され、褐色を呈している。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。



第43图 底部

底部Ⅱ類

2例のみである。第43図80は、底径が約2.7cmと小さいものを特徴とする。底から胴部へ移行する部分は、稜はみられず緩やかなカーブを描く。内底部分は厚く約1.8cmをはかる。器面はやや剝離が進んでいるが、整形時の指圧痕が残されている。胎土には石英砂粒が大量に混入し、剝離した器面上で観察される。色調は褐色。焼成は良い。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図81は、底径の小さいくびれ平底である。全面に破損していることと磨滅が進んでいるため、図面上の器形復元が難しかったが、残存部分から検討した結果が図のとおりである。胎土には石英（角礫、亜角礫）、黑色物質が多く混入している。器面はすでに剝離しているためこれら混入物が器面上に露出している。灰褐色ないし褐色。底径5.3cm。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

底部ⅢA類

第43図82は、底径が小さく、かつ内底の器厚が厚いものである。破損資料であるが、底径推算3.7cmをはかる。外壁面には整形時の指圧痕がみられる。胎土中には石英の砂粒が認められる。焼成は良好。色調が褐色。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図83は、底径部分が完全に残存するもので、底径4.9cmをなす。底部のつくりは、円盤に輪積みをする製法をとるもので、外器面はナデ整形が丁寧で滑面になる。内器面は刷毛目状の整形擦痕が残されている。焼成は良好。外器面の色調は褐色、内器面は黒色をおびる。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

底部ⅢBa類

第43図84は、焼成、胎土が上記の81に類似し、混入物も粒子が細くなっている違いがあるだけでよく似ている。くびれは大きく狭くつくられている。外器面の色調は灰褐色、内器面は褐色をおびる。底径推算5.1cm。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図85は、底部をそのまま残存するもので、底面はだるまの様に湾曲の凸面になっている。底径が4.7cmをなす。外器面にのくびれ面には整形時の指圧痕が消し切らずにのこされている。器面の調整はナデでなされ凹凸が観察される。内底面は丸く、ところどころに竹ないし木とみられる工具で調整された擦痕が認められる。混入物に細かい石英砂粒がおおく入れられている。焼成は良好。色調は暗褐色。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

第43図86は、底面が曲り凸面になった底部資料で、半分が欠落している。底径推算5.5cmを計測する。くびれ部分には、並列する様に整形圧痕が残っている。外器面は良く残り茶褐色をおびる。焼成良好。底径推算5.5cm。A B トレンチ第Ⅱ層10～20cm。

第43図90は、だいぶ磨滅が進んだ底部破片で、底径推算5.2cmをなす資料である。くびれは大きくし、内底面の器厚がある特徴がみられる。外器面のくびれ部分には指圧痕が観察される。焼成は良好。色調は褐色をおびる。A トレンチ第Ⅱ層40～50cm。

底部Ⅲ B b類

第43図91も底部の小破片である。外器面の調整は窺ナデをした様に幾つもの細かい平面がみられ、また整形時の指頭痕がのこされ、全体に器面の仕上げは悪い。焼成は良好で、赤褐色ないし褐色をおびる。細かい砂粒はみられるが、全体に微量である。底径推算4.9cmをはかる。D トレンチ第Ⅱ層40～50cm。

いずれも内底面が湾の底の様に湾曲するもので底径が比較的小さく、かつ器壁が薄いものである。92は底部が完全に残存する資料で、底径が4.8cmを計測する。前者の資料に比べ、くびれの仕上げも丁寧で縁も薄くなっている。器面はナデ整形で底面もふくめ器面はスムーズな面になっている。A トレンチ第Ⅱ層 0～10cm。

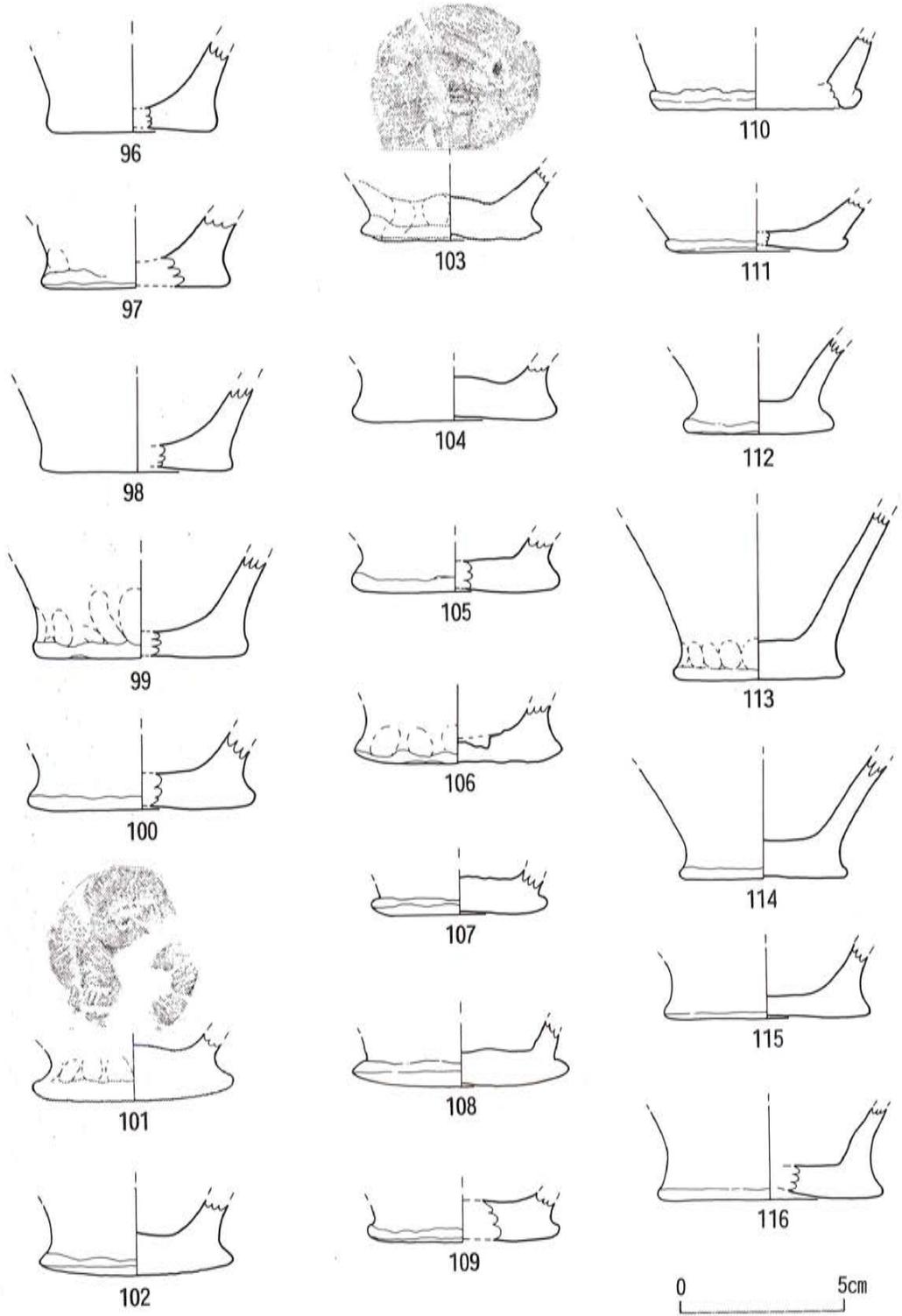
93は半欠落した底部で、推算底径が4.6cmをはかった。僅かにのこったくびれの立ち上がり部分には、整形時の圧痕がみられ、そのくびれの縁も波打っている。焼成は良好。色調は褐色。A トレンチ第Ⅱ層20～30cm。

底部Ⅲ C a類

上記のbに同じく内底面は丸く広く、また底壁が厚く、さらに底径が大きいもので、そのため、どっしりした感があるもの。外観は上記のものに比べ、くびれは幾分弱くなっている。

第43図87は、底部の小破片で、器面の剝離がみられ、胎土中の細かい石英砂粒が表に露出している。色調が灰褐色ないし橙褐色をおびる。本資料もくびれ部分に指圧痕が明瞭に残され消されていない。くびれの縁は不定形である。底径推算5.5cmをなす。C トレンチ第Ⅱ層40～50cm。

同図88は、底部全体の半分以上を残す資料で、くびれも大きなカーブを描くように整形され、これまでみられた整形時の指圧痕は、丁寧にナデ消されている。底面部分は、外周に粘土の付着がみられ、結果として中央部がくぼみになっている。内底面には、刷毛目状の整形擦痕が無数に走っている。焼成は良好。色調は内器面が灰色、外器面が橙褐色をおびる。内底部の厚さが1.2cm。底径推算6.0cm。A トレンチ第Ⅱ層10～20cm。



第44图 底部

第43図89は、底部の一部を残す資料で、図面復元推算6.6cmをはかる。くびれ部分の整形は丁寧で、その線形は大きく緩やかなカーブになっている。焼成は良い。色調は暗褐色、胎土中央が灰色をなす。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図94は、欠損資料であるが中央部までは残存しているため、比較的形状が観察される。内底面は、スムーズな湾曲して広く、外壁のくびれは、緩やかでなされ、外器面は繊維の様なものでナデた様な無数の条痕がみられる。内器面は刷毛目の擦痕がみられる。焼成は良好。色調は外壁が褐色、内壁は黒ないし褐色をおびている。底径推算6.0cm。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図95は、底部全体を残す資料である。底径は6.6cmを計測する大形の底部である。外器面はナデ整形がなされ、くびれの外周も稜をもっている。底部裏は浅い凹ができています。内底面は、約2mm間隔の刷毛状の工具により整形がなされ、全体に擦痕として残っている。焼成良好。色調は淡褐色。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

底部ⅢC b類

第44図96は、底径推算5.2cmをはかる。器面は剝離し手触りで褐色の粉末が付着する。器面の調整は、ナデがなされ滑らかになっている。底部分は平坦になり、残存する中央部分は面があらわれている。おそらくくぼみをなしていたものとみられる。内底面は湾曲する面になり、木の様な整形擦痕が残っている。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図97は、同じく内底面がボール状になるものである。外器面はナデがなされ、また底面も平坦に整形されている。底径推算5.7cm。色調が褐色。石英の砂粒を多く含む。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図98、99も同様に、内底面がボール状になるものである。前者は底径推算5.9cmで、焼成は良好。色調が灰褐色。器面はナデの整形がなされている。底面は平坦になり、くびれ部分との接点は稜ができるほどに丁寧である。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。後者は、やや大きく6.6cmの底径をなす。くびれ部分は指頭圧痕が明瞭に残っている。焼成は良い。色調は外器面が褐色、内器面が橙褐色を呈する。また内器面に刷毛目の擦痕有り。なお両資料とも外底面の中央は浅いくぼみで、やや粗面になっている。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図100は、底径推算6.9cmをなす資料である。くびれの整形は雑でその底面との縁や器面に指圧痕が残されているのである。内底面は広く確保されている。底面裏の中央部分は軽いくぼみになっている。焼成は良い。器面の剝離がみられ、手で触れると粉末がつくのも焼成は良いと記述してある。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

底部ⅢD a類

特徴は、内底面は幾分広くなり、中には盛り上がるものもあり、くびれの整形が稚拙で、一見くびれのつくりが雑で、その縁が波うっている。内底面が丸く湾曲し、内底面の器厚が厚いもの。

第44図101は、くびれの裾が大きく外側にとびでたもので、内底面にはくしの目の大きい整形工具で整形された擦痕が残されている。外器面はナデ整形でなされている。焼成は良い。底径は6.1cm。底の器壁は厚く1.7cmを計測する。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図102は、くびれの裾がまったく調整されてないかの様に、凹凸がそのままのこされたもので、底裏はまるく突出したかたちになる。いわゆるだるま様になる。底径推算5.9cm。器面に混入物の石英、千枚岩の礫類がみられる。色調が褐色。焼成は良い。Dトレンチ第Ⅱ層0～20cm。

同図103も本類の概念に該当するもので、くびれ部分のつくりが雑で、かつ底厚が1.4cmをなす。底裏は全体に凸面になるが、中央部分が浅いくぼみになっている。外器面はナデ整形、内底面には刷毛の工具で整形されている。ただその整形は丁寧ではなく凹凸面がそのままになっている。焼成は良好。色調は褐色。底径推算5.5cm。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図104は全体に風化し磨滅しているが、内底面の中央の盛り上がり、くびれ部分の裾の形状などからこの範疇にはいる資料と考えられたものである。裏面の中央は浅いくぼみになる。色調が褐色。焼成は良い。底径推算6.2cm。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

底部ⅢD b類

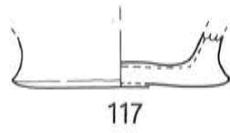
同図105、106も全体に粗雑な整形を特徴とするもので、くびれの外周が歪んでいる。前者は、大きな石英粒子が混入している。焼成は良好。底径推算6.4cm。A Bトレンチ第Ⅱ層20～30cm。後者は内底面の剝離が著しく進んだ資料でその器面形状はよくわからない。裏面底はへばりついた様な扁平をなす。接合資料ではほぼ底部の形状がみることができる。底径6.4cm。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cmと同層40～50cmから出土した破片である。

内底面がさらに広がるもので、さらにくびれ部分の外周がめくりかえるようになったもの。

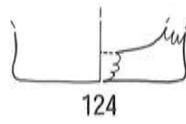
第44図107～109の三例である。107は泥質で破損部分を含めて磨滅がいっそう進んでいるのでヌメツとした器面になっている。内底面の中央はゆるやかに盛り上がり、逆に底裏面は幾分くぼみがみられる。色調が灰褐色ないし褐色。底径5.4cmをなす。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

108は、大きな石英砂粒を大量に混じえた資料で、内底面が広くとられている点が注目される。底径推算6.6cm。色調は明褐色。内底面は灰褐色をおびる。焼成は良好。A Bトレンチ第Ⅱ層20ないし30cm。

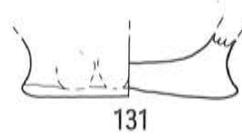
109は底部の小破片で、図面上で復元すると、底径推算5.9cmをはかる。焼成良好。色調が灰褐色～褐色を呈する。A Bトレンチ第Ⅱ層20～30cm。



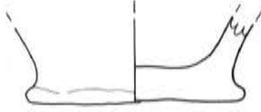
117



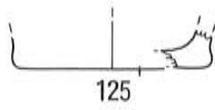
124



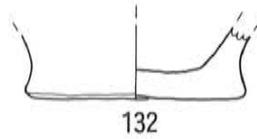
131



118



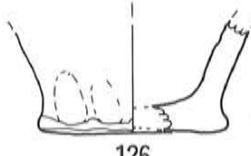
125



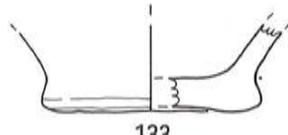
132



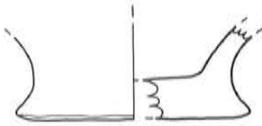
119



126



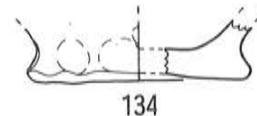
133



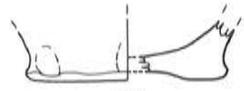
120



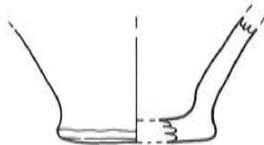
127



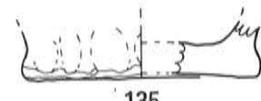
134



121



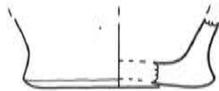
128



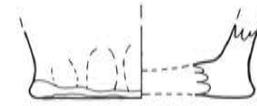
135



122



129



136



123



130



137



138



第45图 底部

底部ⅢE a類

内底面が広く、内面の立ち上がる脇に稜がみられ、丁寧に広げられまたくびれの仕上げも丁寧にそりかえるような形状をなし、かかとができたもの。内底が厚いものと、薄いものがある。これらは底径の大きいものと、小さいものとに分けられる。

第44図112は、底径4.6cmと計測可能な底部資料で、小型であるが全体に丁寧に作りあげられている。内底面は小さいが、平面が確保され、底と立ち上がり部分の境が明瞭につくられている。色調が褐色。焼成は良好。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図113は、高さ約5.2cmまで、底部全体が残存したもので、底径は5.1cmをはかる。全体にナデ整形したことが理解される。くびれ部分の器面側に整形の指圧痕がみとめられる。しかしその他の調整は良好。くびれの外周はやや稜が潰れがみとめられる。また上記資料と同じく、底部裏の中央には何等くぼみは認められない。内底面が色調は褐色をおびる。焼成は良い。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図114は、底径5.1cmをはかる資料で、その作りは均整がとれている。底部裏の中央部分は粗面の残る浅いくぼみがある。器面の調整はナデであるが、内底面の立ち上がり部分に縦位の擦痕が観察される。色調は黒褐色で部分的に褐色がみられる。焼成は良好。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図115、116はくびれのそりかえりが強調されるような資料で、いずれも半分以下の資料である。前者は褐色、後者は暗褐色。焼成は後者が前者に比べ良好である。いずれも底部裏の中央は浅いくぼみがみられる。前者の内底面の中央の器壁の厚さは5mmと薄く、底径推算6.3cm。後者は7mmになる。底径推算6.9cm。また後者の底面の立ち上がり部分は面との境が明瞭になっている。前者はCトレンチ第Ⅱ層50～60cm出土。後者はCトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図117は、内底面は広く、器壁も底面とおなじ薄いものである。くびれもつくりは鋭どく縁を強調するようにみられる。底径推算5.8cm。焼成は良好、赤褐色。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

第45図118は、底部分が残った製品で、底径は5.8cm。内底面は広く確保されているがその内部の立ち上がりはややルーズである。底部裏の中央は浅いくぼみがある。色調は褐色。破損面は風化がみられる。くびれの外周は後々の破損のためやや波打っている。内底面には刷毛目が見られるが、大部ゆびなでがなされ薄くなっている。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

第45図119は、内底面が平坦かつ広く仕上げたもので、くびれも大きく外返させたものである。底径推算6.3cmをはかる。焼成は良好で硬質である。外周のくびれの縁は欠損してやや波状をしている。底部裏面は粗面のある浅いくぼみになる。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図120は、均整のとれた代表的な形態を示すもので、半欠資料であるが底径が6.3cmをなす。全体に丁寧なナデ調整がなされ、器面は良好である。焼成は良好、色調が灰褐色をおびる。内底面は十分に平坦にとり、胴部を形成してある。裏面底の中央は当資料も浅いくぼみを有する。A B トレンチ第Ⅱ層40～50cm。

同図138は、小破片のため底部の径が復元できなかったものである。著しくそりかえったくびれ部分の残存資料で器面はナデが徹底され、やや光沢もみられるものである。色調は褐色を呈する。出土地区はAトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

底部Ⅲ E b類

第46図143は、器形的には142と同じく、内底面の脇の器壁が厚く斜めになった形状を示すもので、底径は6.6cmと大きく安定している。内底面はしかし底径のわりに内面の広さは狭い。底面の裏には粘土粒が無造作について一見すると粗面に見られる。外器面の調整はナデ整形であるが、所々に粘土の凹凸がそのままになされている。また内底面は縦位の擦痕がキズのようにみられる。色調が淡褐色。焼成は良い。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図144は、胴部のある程度の部分まで復元可能な大型の破片である。底径は7.6cm。内底面の形状は、その脇部分が上記の143と同じく、立ち上がりが、ななめに厚くなる箇所と、逆に薄くなる場所が認められる。また内底面の中央はすり鉢状に浅くくぼむ。むしろ当資料も底面の裏もくぼみがある。器面の風化がみられるが、とくにくびれの縁部分の整形は雑であるのが、その縁は正円形はつくられず、所々で剥離がみられる。ナデ調整がなされ、特徴的な擦痕はみられない。色調が褐色。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図151は、器形的に143、144と同じく、内底面が狭く斜めに立ち上がるものである。そのコーナ部分は厚くなっている。底径推算5.0cmをはかる。外器面はナデ調整がなされ、内器面は風化のため剥離がみられ、ガサついている。Aトレンチ第Ⅱ層40～50cm。

底部Ⅲ F a類

第45図123は、全体に磨滅している資料である。底径は推算6.3cm。器面上に混入物の石英砂粒が露出して砂質の観をみせる。くびれの立ち上がりはゆるやかである。内底面の器厚は薄い。また裏面には浅いくぼみがみられる。焼成は良い。色調は褐色。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図124、125は、立ち上がり部分を欠落した底部資料である。底径推算は前者が4.6cm、後者が5.3cmになる。いずれも破損面が丸くなるほど磨滅して器面を保持していない。色調はいずれも褐色。出土地区は前者がAトレンチ第Ⅱ層20～30cm。後者がAトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図126、127は、焼成が良好の資料で、前者はくびれ部分に指頭痕が並ぶように良くのこっている。内底面は狭いが、まるく丁寧に細工してある。底径推算5.1cmを計測する。色調は外器面が暗褐色、内面が褐色。A Bトレンチ第Ⅱ層20～30cm。後者は底部全体が残った資料で、底径が5.1cmをはかる。ナデ調整がなされ前者のような指頭圧痕は消されている。底部裏の中央には本資料にも浅いくぼみが形成されている。色調は褐色、Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

同図128、129は、内底から立ち上がりまでの器厚がほぼおなじ厚さに整形されたもので、内底面が広くとられた結果とみられる。両者とも色調は外器面が灰褐色、内面が前者が灰褐色、後者が褐色。いずれも小破片であるが、図面復元すると、推算底径が前者が4.2cm、後者が5.2cmをなす。出土地区は、前者がAトレンチ第Ⅱ層0～10cm、後者がAトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

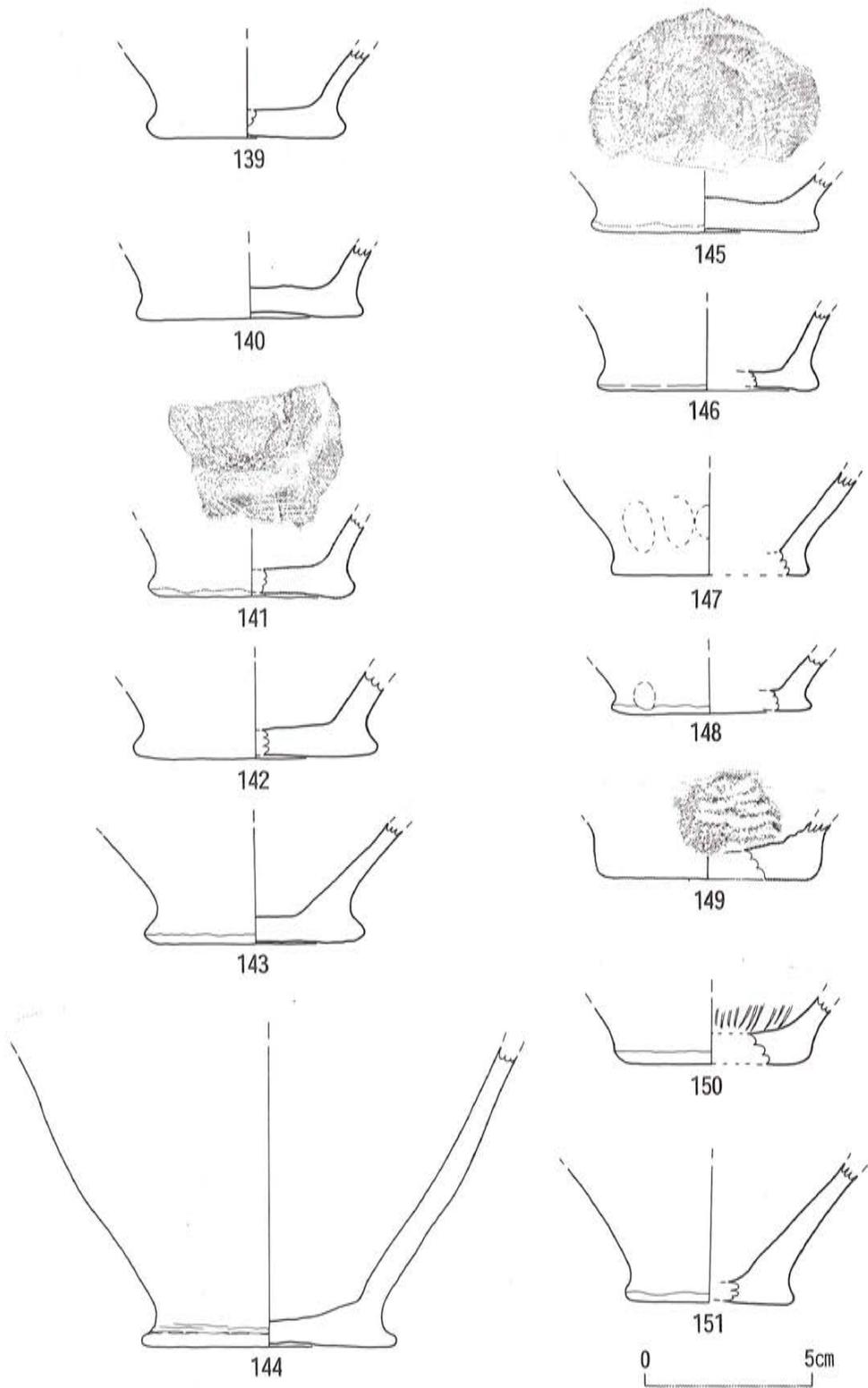
底部Ⅲ F b類

同図130は、底部が残った資料で底径が5.7cmを計測する。内底面の風化がすすみ混入物の砂粒が全面に露出している。その点、外器面の保存は比較的良好である。色調が褐色。当資料にも低面裏に浅いくぼみがみられる。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図131と136の立ち上がり部分は、残存する破片ではあるが、内底面を引き付けずに、一定の厚さで整形されている。いずれも外器壁のくびれ部分には指頭圧が並列するようにのこされている。前者の資料は破片が幾分大きいこともあり、底部裏が浅いくぼみをなしていることが確認される。前者は黒褐色、底径推算5.7cm。後者が赤褐色、底径推算6.0cm。出土地区はいずれもAトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図132～135の4点は、前者の131、136に比較すると内底面を引きづるようゆるやかに立ち上がる資料である。133は器面の剝離があるためか、器面の手触りがかすかにがさつくような砂質感をみせるのに対し、132、134、135は泥質で器面がヌメツとした感がみられる。

132は色調は外器面が褐色、内器面が灰色をおびる。底径推算5.8cm。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。



第46図 底部

133は外器面が褐色、内器面が灰褐色を呈する。内底面には刷毛目状の擦痕がみられる。底径推算5.8cm。Cトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

134は、全体に赤褐色で、底径推算5.9cm。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

135は、外器面が褐色、内器面が灰褐色、底径推算6.4cmを計測する。Aトレンチ第Ⅱ層50～70cm。

同図137は、小破片のため底部の径が復元できなかったものである。前者は内底と器壁がほぼ同じ厚さを示すもので、焼成は良好である。色調が褐色をおびる。色調は褐色を呈する。出土地区は両資料ともAトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

第46図139は、内底面の立ち上がりの脇まで器壁を薄く広く整形した底部破片で、外壁面は保存されているが、内壁面は剝離がみられ、胎土中の石英砂粒が露出している。色調が褐色。底径推算6.0cm。Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図140は、焼き締められた底部資料で、底径推算6.8cmをはかる。内底面は整形時の波面がそのままのこされ、擦痕はみられないが、立ち上がり部分に刷毛目状の整形擦痕がみられる。色調は暗褐色、Bトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

同図141は、全体に器面の風化がみられる資料で、上記の139、140と内底面の広がったものである。また、底部裏の中央になんらかのものに押さえられた様な浅いくぼみがみとめられる。底径推算は6.2cmを計測する。内底面の立ち上がり部分に貝殻状の擦痕が僅かに残されている。色調は褐色。Aトレンチ第Ⅱ層0～10cm。

同図142も器面の風化がみられるもので、器面上に細かい大量の石英砂粒が露出して、砂質の胎土をみせるものである。内底面の脇がやや厚く斜めに立ち上がる器形を呈する。色調が褐色。内底面の裏に浅いくぼみがみられる。底径推算7.3cm。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

同図145は、ほぼ底部の形状を残す資料で、底径が6.9cmと最も底径の大きい資料である。ただし、底径の割りには器壁は薄く、また内底面も広がるのも特徴である。くびれ部分は、へらによるものとみられる押さえ痕が線状にのこり、指のかわりをなしていたものとみられる。内底面にはとくに立ち上がり部分に板状の工具による刷毛目状擦痕が残されている。底部裏は浅い緩やかなくぼみをなしているのが観察される。焼成は良好。色調は褐色。Cトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

第46図146～148は、器壁が5 mm以下の薄い器壁を有する底部資料である。

146は、泥質で器面の剝離もみられる。色調は外器面が褐色、内器面が灰色を呈する。焼成は悪い。底径推算6.6cmをはかる。Aトレンチ第Ⅱ層40～50cm。

147も泥質で、きめの細かい粉末が着くほどである。色調は明褐色、胎土中央のみ灰色。内底面は大きく欠落しているが、くびれ部分から図面復元すると底径推算5.9cmになる。Aトレンチ第Ⅱ層30～40cm。

148は、やや砂質をみせる胎土で、外壁部分のくびれが小さい範囲で大きくめくるように、くびれるものである。小さい破片であるが、底径推算すると6.0cmを計測する。Aトレンチ第Ⅱ層10～20cm。

底部Ⅲ G a 類

eに類似するが、底部分の器厚が薄くなるもの。第44図110、111の二例である。いずれも明褐色をおびるもので、前者はわずかにくびれ部分をのこす資料であるが、底径を無理に推算すると6.4cmをはかる。くびれ部分の外器面は立ち上がり部分で付着する箇所もみらる。

後者も、そのくびれ部分か一部立ち上がり部分で接合している資料である。底径は5.6cmをはかる。全体にナデ整形されているが、器面上で細かい白色の砂粒を多く混じている状況を見ることができる。両資料とも、Aトレンチ第Ⅱ層20～30cm出土。

底部Ⅲ G b 類

第46図149、150の資料は、底面から立ち上がり部分がゆるやかになり、また内底面の立ち上がり部分もゆるやかになるものである。前者の150の内底面には、太く深い整形の擦痕がみとめられる。器面は風化していて、手ざわりでも粉末が付着する。きめの細かい石英粒子がみられる。底径推算6.7cmである。後者の内底面には貝殻状の擦痕がみられる。全体に剝離がみられ胎土中の混入物が露出し砂質の感をみせる。底径推算5.9cm。いずれもAトレンチ第Ⅱ層20～30cm。

胴部

胴部資料は、総数2019点である。色調が橙褐色を呈したものが多く、また手触りで細かい粉末のつくものが一般的である。

器壁の仕上げからみると、器面が凹凸をなす資料が全体の約5%で、一定した器厚を有するものが95%になっている。器壁の厚さは、最も薄いもので2~3mm、最も厚いもので9~10mmものがみられた。量的には、5~6mmが39%と最も多く、続いて4~5mmが30%、6~7mmが18%となり、比較的薄手の土器群である。

器面の調整は、指ナデ、ヘラナデ、刷毛でなされている。外器面が、指撫でで覆われ、その他の調整痕をみせないものが74%、外器面上に混入物が引きずられ線状の擦痕を残すものが全体の25%、さらに幅のあるやや滑面が条をなすヘラナデで仕上げのものが1%になっている。なお、混入物をひきずった擦痕は、胴部で縦位に、口縁部付近では横位にみとめられた。またこの擦痕も指撫で仕上げで消されるものが普通である。次に裏面の調整は、外面と同じく指撫でを主体になされたものが61%をかぞえ、幅1~1.5cmの工具などで刷毛目擦痕として器面に残すものが39%になる。しかし、これも基本的には消す作業がなされているもので、刷毛目が完全に器面を覆うものは少ない。

底部破片でその調整をみると、刷毛目痕を残すものは、くびれ平底130点の中で、35点(27%)になり、他の73%は撫で整形になっている。また刷毛目の残る部分は、内底面の立ち上がり面に多くみられた。刷毛目痕には目の細かいものや粗いもの数種類があるようで、その工具幅は約1cmのものや1.5cm台のものが認められた。

胎土は、①精練された砂質で、器面調整や器壁の仕上げなどがやや雑、外器面の擦痕が荒く残るものや、また器面の凹凸が多い粗面になるもの、②その仕上げが比較的丁寧で、器面もまた細かく手触りがザラつくもの、③泥質に近く、手触りがスムーズになるもの、さらに④砂が全くみられず、吸水性のあるパウダー状になるものに細分される。その比率は①：②：③：④=25%：52%：20%：1%となり、②が半数を占めている。

混入物では、極めて細かい砂粒がはいるものが主体をなすが、ただし、それも器面の剝離した所でしか観察されない程度に仕上げられているものである。また特徴的な混入物としては、黒色鉱物混入や赤色粘土粒が入るものもみられたが、肉眼でみる限りいずれも量的には僅かで、全体量からすると二者全部合わせても2%程度である。

EトレンチII層			DトレンチII層										EトレンチII層	FトレンチII層			計
30-40	40-50	50-60	0-10	10-20	20-30	30-40	40-50	50-60	60-70	70-80	80-90	10-20	0-10	10-20	20-30		
	1						1									32	
																33	
	1															18	
																14	
																2	
																19	
				1												65	
																2	
																8	
																1	
																4	
																4	
																8	
																8	
1																2	
																1	
																1	
																6	
																1	
	3															16	
																1	
1							1	1								4	
																2	
																2	
																3	
																4	
	1															10	
																5	
																4	
			1													7	
																11	
		1														3	
																8	
1		1														24	
	1															4	
																2	
																52	
13	2			1	1			1						2	1	503	
	17	10	3	3		2		2	2	3	2			2	1	1,051	
5	30	7	5	8		2			2	3	3	3	1	1	2	400	
3	1					2	3	2			1	1		2	5	19	
										1						24	
	1	1	1	1		3								1	1	22	
	4			1	1			1		2						7	
2										1						33	
1										4	1					34	
3									1	3						16	
2			1					1		1						4	
1								1			1					3	
								1								4	
	1										1					143	
2	4	3		1		1					3	1		1	1	583	
	9	5		5		4	1	2						3	3	750	
7	27	4	3	4	1	1	2		1				1			345	
3	7	6	3	2		3			1			2				78	
	5		2	1					1			1				12	
														1	1	7	
														1		16	
	1	2	1					1	1	1		1		1	5	321	
	5	13	1	4		2	2	1		1	1	2				442	
																12	
1	6			3							1				2	178	
20	41	3	7	6	1	7	1	3	3	8	4		1	5	2	1,050	

第14表 巻貝出土一覧表

番号	調査区(層序) 種名		Aトレンチ第2層							ABトレンチ第2層					C
			0~10	10~20	20~30	30~40	40~50	50~60	60~70	10~20	20~30	30~40	40~50	50~60	
1	ニシキウズガイ科	サラサバテイ	15	23	15	12	14	1	25	4	16	34	35	6	1
2		ギンタカハマ								1	1	3			
3		ニシキウズガイ		1					1						2
4		オキナワイシダタミ			2										
5		ヒメクボガイ			1										
6	リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ/フタ	7/1	29/8	39/3	6/2	8/	3/	46/3	11/	31/1	32/	41/2	16/1	12/
7		カンギク		2/	1/				1/			2/			1
8		ヤコウガイ		/1								/1	2/		
9		オオウラウズガイ													
10	アマオブネガイ科	アマオブネガイ	1	4	4		1			1					
11		ニシキアマオブネ		2	2					1					
12	ムカデガイ科	ヘビガイ													
13	ウミニナ科	キバウミニナ	2	1	2	1		1			3	8	5	1	1
14	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	1	5	4	7	3		11		10	15	20	3	3
15		クワノミカニモリガイ													
16		オオシマカニモリガイ	1												
17	ソデガイ科	マガキガイ	5	43	8	67	51	33	350	29	201	183	107	20	5
18		クモガイ	5	11	4	4		1	18		7	12	11	2	2
19		クモガイ(幼)	2		2	3			4	1	4	1	3	2	
20		イボソデガイ				1			1		1		3		
21		イボソデガイ(幼)				細片 1									
22		スイジガイ											1		
23		ムカシタモトガイ		2											
24		ネジマガキガイ													
25		ラクダガイ				細片 1				細片 1					
26		マイノソデ													
27		ゴホウラ									1	1			
28		ゴホウラ(幼)				1					1				
29		ウラスジマイノソデガイ				細片 1									
30		オハグロガイ	1								1				
31	タマガイ科	ヘソアキトミガイ		1						1	1	1	1	1	
32	タカラガイ科	ホシダカラガイ										1			1
33		ハナマルユキガイ			2				1		1	2			
34		ホソヤクジマタカラガイ		1	1	1					1	2	2		
35		ハナビラタカラガイ			2									1	
36		ヤクジマタカラガイ		1							2		1	1	
37		コモンタカラガイ													
38		ハチジョウダカラガイ									細片 1				
39		ヤナギシボリタカラガイ			1										
40		ナツメガイモドキ		1											
41	ウミウサギガイ科	ウミウサギ													
42	フジツガイ科	ホラガイ			1										1
43		シオボラ										1	1		

ンチ第2層			Dトレンチ第2層											Eトレンチ第2層		Fトレンチ第2層			合計	料別 合計	比 率
30~ 40	40~ 50	50~ 60	0~ 20	20~ 30	30~ 40	40~ 50	50~ 60	60~ 70	70~ 80	80~ 90	攪乱	0~ 10	10~ 20	0~ 10	10~ 20	20~ 30					
	1		3	1			1				1	7	3	4	1	5	229				
	1											1		1	1	2	11				
													1				5				
														1		2	5				
	1													1		2	5	255	(9.64%)		
10/	2/1	3/	4/1	/1	/1	1/	1/		4/	/1	7/2	6/	6/1	9/6	14/8	11/23	376				
	1/	1/	1/												2/	1/	13				
																	4				
						1											1	394	(14.8%)		
	1	2					1								1	14	30				
						1										6	13	43	(1.63%)		
											1						1	1	(0.04%)		
1	1	1		1											1	2	32	32	(1.21%)		
2	5											1		3	11	7	113				
															2	3	5				
																	1	119	(4.50%)		
3			5	4	9	1	1	2	5	1	16	7	4	28	20	41	1252				
			2	4			1			1	1	15	4	9	15	8	137				
	1													7	3	2	35				
														1			7				
																	細片1 0				
																	1				
				1													3				
						1		1							3	2	7				
																	細片2 0				
										1							1				
																	2				
																	2				
																	細片1 0				
																	2	1,449	(54.76%)		
															1		8	8	(0.30%)		
																	2				
									2					4	34	15	61				
																	8				
	1	1								1	1		2		4	11	24				
																1	6				
1															1		2				
																	細片1 0				
																	1				
																	1	105	(3.97%)		
														細片 1			細片 0				
																	2				
	1														1		4				

第15表 巻貝出土一覧表

番号	調査区(層序) 種名		Aトレンチ第2層						ABトレンチ第2層						(
			0~10	10~20	20~30	30~40	40~50	50~60	60~70	10~20	20~30	30~40	40~50	50~60		0~20
44	フジツガイ科	フジツガイ			1											
45		サツマボラ		1								1				
46	オキニシ科	オキニシ	1						3		2	1	1			
47	ヤツシロガイ科	ヒナズルガイ											細片 ₁			
48		スクミウズラガイ							1	1			1			
49		イワカワトキワガイ				細片 ₁										
50		ウズラガイ							1				1			
51	アクキガイ科	ツノレイシガイ			1	2			2		3	2				
52		シラクモガイ									1	1				
53		アカイガレイシ	1	1		2			4		3	4	5	1		
54		ホソスジテツボラ			細片 ₁						細片 ₁					
55		ガンゼキボラ	1						1							
56		ハナワレイシガイ												1		
57		センジュモドキ				細片 ₁						細片 ₁				
58	エゾバイ科	シマベッコウバイ														
59	オリレヨウバイ科	ヒメヨウバイ									1					
60	イトマキボラ科	リュウキュウツノマタガイ										1				
61		イトマキボラ					1		2		1	1	2	1	1	
62		チトセボラ		1					1				2			
63		ナガイトマキボラ											1			1
64		ヒメイトマキボラ														
65	オニコブシガイ科	オニコブシ										6				
66		コオニコブシ					1				1					
67	イモガイ科	アンボンクロザメガイ		1	1	1			2					1	1	
68		ヤナギシボリイモガイ											細片 ₁			
69		々(幼)	1	3		2	1		1		5		1			1
70		クロミナシガイ														
71		マダライモガイ		1								1				
72		イボシマモガイ				1			1		2	1	1			
73		ミカドミナシガイ														
74		アジロイモガイ														1
75		ニシキミナシガイ										1				
76		キヌカツギイモガイ														
77		クロザメモドキ														
78		ヤキイモガイ														
79		オトメイモガイ		細片 ₂					細片 ₁							
80		ゴマフイモガイ									1					
81		カバミナシガイ		2							1	1				
82		コモンイモガイ														
83		ヤセイモガイ												1		
84	ナツメガイ科	ナツメガイ						2		1	2					
1	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ		2	6				2	1	7	1	2	1		
2	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ			細片 ₂											
3		パンダナマイマイ		1							3					
4	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ						1	1		2	5	10			
合計			44	141	100	111	80	42	480	52	317	326	262	57	33	

ンチ第2層			Dトレンチ第2層										Eトレンチ第2層		Fトレンチ第2層			合計	割別	比率
30~40	40~50	50~60	0~20	20~30	30~40	40~50	50~60	60~70	70~80	80~90	攪乱	0~10	10~20	0~10	10~20	20~30				
																	1			
																	2	9	(0.34%)	
	1																9	9	(0.34%)	
																	細片1 o			
																	3			
																細片1	細片2 o			
																	2	5	(0.19%)	
					1											1	13			
														1			3			
																	21			
	1																細片2 o			
																	3			
																	1			
																	細片2 o	43	(1.63%)	
																1	1	1	(0.04%)	
																	1	1	(0.04%)	
														1			2			
2			1								2	2		3	1	4	24			
																	4			
																	2			
	1																1	31	(1.17%)	
																2	8			
			1										1	1			5	13	(0.49%)	
1				2		1	1		2	1	1	2			1	2	21			
					細片1												細片2 o			
														1		3	19			
																1	1			
											1					1	4			
							1				1						8			
					細片1												細片1 o			
																3	4			
										1							2			
														1			1			
			1								1						2			
														1			1			
														細片1		細片4 o				
															1		2			
																	4			
																1	1			
																	1	71	(2.68%)	
													1	1	1		8	8	(0.30%)	
	1															1	24			
													細片1				細片3 o			
												1					5			
						1											20	49	(1.85%)	
20	20	8	18	14	11	7	7	3	13	7	33	41	23	78	122	164	2,646	2,646	(100.1%)	

第16表 二枚貝出土一覧表

番号	調査区(層序) 種名		Aトレンチ第2層							ABトレンチ第2層					C	
			0~10	10~20	20~30	30~40	40~50	50~60	60~70	10~20	20~30	30~40	40~50	50~60	0~20	20~
1	フネガイ科	リュウキュウザルボウ	5	13	10	3	2	1	15	1	7	10	22	7		
2		エガイ	1	2	1	3			6		1	1	3			
3		ベニエガイ								1	6			1		
4	リュウキュウマスオガイ科	リュウキュウマスオガイ	1	1			1	2	5		1	3	6			
5		マスオガイ		2		3	2		11		2	4	12	4		
6	ウグイスガイ科	クロチヨウガイ							1		1					
7		ミドリアオリガイ			1											
8	ウミギクガイ科	メンガイ	3	11	16	11	4	1	8	3	5	4	30	6	6	
9	イタボガキガイ科	ノコギリガキ											1			
10	シャコガイ科	シラナミガイ	4	19	15	19	4	2	19	1	5	16	8	5	5	
11		シャゴウ	3	11	6	5	2		5	1		3	1	4	4	
12		ヒレジャコガイ	4	3	2	5	5		3	1	4	7	1		1	
13		ヒメジャコガイ	4	5	4	6	1		4	1	3	5	9	1		
14	マルスグレガイ科	アラスジケマンガイ														
15		ホソスジイナミガイ														
16		ヌノメガイ	3	4	4	1			9		3	5	12	6	5	
17		アラヌノメガイ														
18		チヨウセンハマグリ														
19		マルオミナエシ														
20		ユウカゲハマグリ														
21	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリガイ	1	1	4	2	3	1	7		3	3	4	2		
22		モチヅキザラガイ														
23		サメザラガイ						1				2	1			
24		ヒメニッコウガイ				1						2				
25	カブラツキガイ科	ツキガイ														
26	チドリマスオガイ科	イソハマグリ		8	5	5			1	1	1	1	1			
27	ツタノハガイ科	ベッコウガサガイ		1							1	1				
28	ザルガイ科	カワラガイ														
29		リュウキュウザルガイ	1	5	6	1			3		1	1	7	3	1	
30	バカガイ科	リュウキュウバカガイ		2					2			2	1			
31	シジミガイ科	シレナシジミガイ			1	2								1	1	
32	キクザルガイ科	ケイトウガイ														
33	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ														
合計			30	88	75	67	24	8	99	10	44	70	119	40	23	

ンチ第2層			Dトレンチ第2層										Eトレンチ第2層		Fトレンチ第2層			合計	型別 合計	比 率
30~ 40	40~ 50	50~ 60	0~ 20	20~ 30	30~ 40	40~ 50	50~ 60	60~ 70	70~ 80	80~ 90	攪乱	0~ 10	10~ 20	0~ 10	10~ 20	20~ 30				
3	3	1		1		1		1		2	5	1	2	8	8	17	150			
																9	27			
		2															10	187	(19.10%)	
1	1													1		3	26			
														1		4	45	71	(7.25%)	
																	2			
																1	2	4	(0.41%)	
3	5	4	4		1	1				2	7	1	3	5	9	11	166	166	(16.96%)	
															5	5	11	11	(1.12%)	
	2		3					1	1	1	2	3	1				136			
1											1	1				4	52			
						1						1	3	1	1		43			
												2	1			1	47	278	(28.40%)	
																1	1			
															1	2	3			
	1							1			3			1	2	7	68			
														1	5	2	8			
														細片 1			0	細片1 0		
1																	1			
																1	1	82	(8.38%)	
						1										1	33			
						細片 2										細片 1	細片3 0			
			1													1	6			
															2		5	44	(4.49%)	
														1			1	1	(0.10%)	
										1				1	2	22	49	49	(5.01%)	
												1			1		5	5	(0.51%)	
																2	3			
1	4	1				1	1		1		1		5	3	3	9	60	63	(6.44%)	
																3	10	10	(1.02%)	
																	5	5	(0.51%)	
		1														1	2	2	(0.20%)	
														1			1	1	(0.10%)	
10	16	9	8	1	1	5	1	4	3	5	19	10	15	24	43	103	979	979	(100%)	

久良波遺跡出土の脊椎動物遺体

金子 浩昌

久良波遺跡出土の脊椎動物遺体は、調査地域の面積の限られたことと、その場所が遺跡の中心域を脱れたこともあって出土した骨の量は少なかった。しかし、検出された動物種の在り方は、この時期の特徴をよく示していると考えられ、その資料的重要さにおいては変わらないと思われる。

a 軟骨魚綱

サメ類

メジロザメ科の椎体が1点採集されているのみである。

b 硬骨魚綱

フエフキダイ科、ブダイ科、ベラ科、ハリセンボン科の骨が出土している。いずれも沖縄における代表的な魚類である。このうちハリセンボン科の顎骨の目立つのは特徴的である。意図的に獲ったというよりも多棲し、獲り易い状況があったのであろう。

これに次いでブダイ科、ハマフエフダイがつづくが、この種の魚の多い例は一般にみる。

c 爬虫綱

ウミガメ類骨片を含めてではあるが64点と多い。背、腹甲板の破片が多いからである。しかし、上腕骨をみると右3、左2点があり、大きさからみておそらくすべて別個のものと思われる。ウミガメの出土はイノシシも多かったとみてよい。しかもウミガメの骨は大型のものが多。主要な食料源の一つと考えていたと思う。

d 哺乳綱

イヌ

単独で出土した頭骨が一点ある。調査区壁にかかるようにして出土している。四肢骨など他に検出されていないが、果たして当初から頭骨のみであったかは、はっきりしないと思われる。

頭骨は左側の前頭骨、上顎骨を欠損する他はほぼ実存する。この種標本としては保存の良い例といってよいであろう。歯牙は右側はすべて植立しており、それらの歯に咬耗がほとんど認められない。縫合も骨化することもなく若い固体のものである。根元の凹陷が深いものも若い個体のためではないかと思われる。本標本ではこの時期の資料として稀とみる保存の良好なものであるが、成体としての特性がみられないので、この標本から直ちに当時のイヌの形質のべるわけにはいかないと思われる。現存推定頭骨最大長147・0mm。

ジュゴン

肩甲骨と肋骨があり、5片が確認されているのみである。肩甲骨の2点はほぼ同大の幼体であり、肋骨に幼体と成獣のものがある。最小個体数を2個体とみておく。

ウマ

歯が一点出土しているが、出土層位が浅く新しいと思う。

リュウキュウイノシシ

検出された歯牙や四肢骨からの推定の個体数は3～4個体が最小の個体数である。

まとめ

以上、本遺跡から出土した脊椎動物遺体について記述したが、それを要約すると下のようになる。

魚類

ハリセンボン科、ブダイ科、ハマフエフキダイが多かった。特にハリセンボン科が最多数を占めていたことは興味深く、この地域の魚類相の特徴であったかと思われる。これについては今後の調査で確認したい。

爬虫綱

ウミガメ類の遺骸の多かったことも特記される。

上述の魚類からみると遺跡の直ぐ近くにはリーフの発達と考えられるが、ウミガメ類も珊瑚内での捕獲であったのであろう。

哺乳綱

イヌの頭蓋を得たことは貴重な収穫であった。沖縄におけるイヌの飼育はさらに遡るが、頭骨や埋葬例得ることが非常に少ない。本例も頭骨の破損と若年令であるために充分形質をうかがえないのだが残念である。しかし、イヌと人との関わりも、こうした資料の積み重ねで少しずつ明らかになろう。ジュゴン、リュウキュウイノシシの検出も含めて、再度行われる予定の本遺跡の調査結果を基に改めて述べてみたいと思う。

魚 骨

種類	ハリセンボン科									ベラ科	ブダイ	ナンヨウブダイ		イロブダイ	ブダイ科		ハマフエフキ	フエフキダイ科		サメ科
	部位		上顎骨		下咽頭骨		上咽頭骨		前上顎骨		下咽頭骨		前上顎骨		歯骨		脊椎骨			
	調査区 (層序)	下顎骨	棘	R	L	歯骨	下咽頭骨	R	L	前上顎骨	歯骨	R	L	R	L	R	L			
A ト レ ン チ II 層	0~10	— 1																		
	10~20	— 5 3																		
	20~30	— 6 10					2 — 1L			1									1	
	30~40	2												1				1		
	50~70						2 — 1				— 1			1						
A B II 層	10~20					— 1L														
	30~40					2														
C II 層	0~20																			
	10~20																			
	20~30	— 1																		
	30~40													1 — 1						
	40~50	— 1												1 — 1						
D II 層	40~50												1 — 1							
合計		— 13 15	1	2		— 6 2L	1	2		1				— 3 1	1			1	1	

イ ノ シ シ

部位 調査区(層序)		推体	肩甲骨 p s d	上腕骨 p s d	橈骨 p s d	尺骨 p s d	脛骨 p s d	肋骨 p s d	不明 s	
A ト レン チ II 層	10~20	R L 不							1	
	20~30	R L 不		1 0 0		0 1 0			1	
	50~70	R L 不		1 0 0						
A B II 層	0~10	R L 不	1 0 0			0 1 0				
	30~40	R L 不		1 0 0			1 0 0			
C II 層	0~20 旧道側	R L 不	1 0 0							
	30~40	R L 不	1 0 0		1 0 0					
D II 層	0~10	R L 不							1	
	40~50	R L 不								
E II 層	10~20	R L 不			0 0 1 (幼)					
F ト レン チ II 層	0~10	R L 不				0 1 0				
	10~20	R L 不						1	1	
	20~30	R L 不						1	1	
攪乱層		R L 不							1	
合計		R L 不	1	2 0 0 1 0 0	2 0 0 1 0 0	1 0 1	0 2 0 0 1 0	1 0 0	2	6

ウミガメ

調査区(層序)		部 位	頂骨板	烏口骨	上腕骨	脛 骨	指 骨	背甲板	中腹板	縁骨板	破 片
		R L 不									
A ト レ ン チ II 層	10~20	R L 不				1	3				14
	20~30	R L 不			1	1					11
	30~40	R L 不		1 前烏口骨	1	1					1
	40~50	R L 不			1			1 第七破片			9
	50~70	R L 不									11
A B ト レ ン チ II 層	10~20	R L 不									4
	20~30	R L 不								1 (破片)	3
	30~40	R L 不									3
	40~50	R L 不		1	1	1					1
C ト レ ン チ II 層	30~40	R L 不	1								3
	40~50	R L 不						1 _R			1
D ト レ ン チ II 層	10~20	R L 不									1
	60~70	R L 不									1
F II 層	20~30	R L 不									1
合 計		R L 不	1	1	3	1 1 1	3	1	1	1	64

イノシシの歯

部位 調査区 (層序)		R										L									
		上顎										I ₁ I ₂ I ₃ C P ₁ P ₂ P ₃ P ₄ M ₁ M ₂									
		下顎										I ₁ I ₂ I ₃ C P ₁ P ₂ P ₃ P ₄ M ₁ M ₂									
A II 層	30~40																				
												1(♂) 1(♂) 1(♂)									
A B II 層	10~20																				
												1(♂)									
C II 層	40~50																				
		1(♂)1(♂) 1(♂)										1(♂)1(♂) 1(♂)									
D II 層	0~10																				
												1 1 1									
D II 層	80~90																				
												1									
合 計	上顎																				
												1									
		1 1 1										1 1 3 1 1									

<凡例> I→切歯 C→犬歯 P→前臼歯
 1→第1、2→第2、3→第3、4→第4

ジュゴン

調査区 (層序)		部 位	肩 甲 骨	肋 骨	不 明
A	0~10	R L 不			1
	10~20	R L 不			1
II 層	20~30	R L 不	1		
	40~50	R L 不		1	
	50~70	R L 不	1		
C II 層	0~10 旧道側	R L 不		1	
	30~40	R L 不		1	
F II 層	0~10	R L 不		1	
	10~20	R L 不			1
合 計		R L 不	1 1	4	3

R o s i n (固形樹脂)

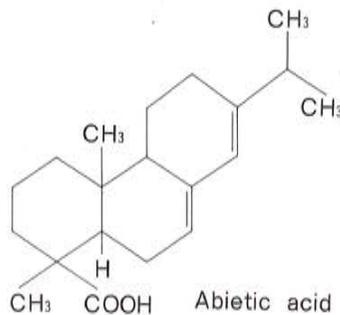
本資料は、外面が風化した茶褐色の粉末でおおわれ、破損した新鮮な面では、淡褐色ないし淡黄色を帯びたガラス様の透明なる固まりである。Aトレンチ第2層30~40cmから検出された。大きさは、縦×横×幅：5.0×6.5×4.2cm、重さ69gを測る。

当資料の分析は、①核磁気共鳴吸収スペクトル、②赤外吸収スペクトル、③薄層クロマトグラフの三種類の分析でおこない、その結果R o s i nであることが確認された。

R o s i nの特徴を記述すると次のようになる。ゴツゴツした透明な琥珀色の塊りで、m p (融点) 100~150℃、引火点187℃で水に溶けず、アルコール、ベンゼン、エーテル、クロロホルム、氷酢酸、二硫化炭素、稀薄な水酸化アルカリに溶ける。室温では硬く、崩れやすい。暖めると軟化してベトベトになる。可燃性で、低毒性である。成分はアビエチン酸とピマル酸タイプの樹脂酸で、一般式は $C_{19}H_{29}COOH$ でフェナトレン環をもつ。用途は感圧形の粘着剤、ハンダ用材、絶縁剤 (mastic や Sealant として)、石鹸、紙のサイジング (Sizing) 剤として、またワニス、ラッカーなどの塗料に広く利用される。

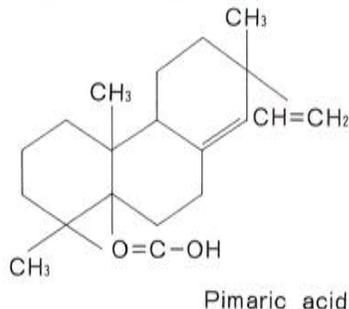
A b i e t i c a c i d (アビエチン酸)

三環式ジテルペンに属する。m p 172~175℃。(乳酸、酪酸バクテリアの成長促進に用いる)



P i m a r i c a c i d (ピマル酸)

マツ科マツ属植物のR o s i nに広く含まれる。m p 217~219℃。熱、無機酸に比較的安定。



A 科学的な検討

分析には、発掘で得た固形遺物の粉末をもちい、その比較資料には現在、琉球大学のキャンパス内に生える松の樹脂を使用した。なお、現生の松の樹脂は軟化したものではなく、白くすでに固形になった部分をサンプルとした。

① 核磁気共鳴吸収スペクトルによる分析

この分析はテトラメチシラン化合物 (TMS) を基準にしたものである。測定の結果、貝塚資料は特徴点をあげると次のとおりである。表1

- イ、0～2 P P m 前後の吸収は、 $-\text{CH}_3$ の吸収を示している。
- ロ、2～4 P P m の吸収は、 $-\text{CH}_2$ の弱い吸収を示している。
- ハ、5～6 P P m の吸収は、 $>\text{C}=\text{C}<$ の二重結合のピークである。
- ニ、7 P P m は CDCl_3 (溶媒の重クロロホルム) の吸収である。

現在の松樹脂の場合は以下のとおりである。表2

貝塚資料が単純な吸収ピークを示しているが、現在の松樹脂の場合はやや複雑な吸収ピークとなっている。

- ホ、0～2 P P m の吸収は、 $-\text{CH}_3$ のピークである。
- へ、2～5 P P m の吸収は、匂いの成分である生で揮発性のテルペンを含有していることを示す。
- ト、6～7 P P m の吸収は、芳香環の存在を示している。

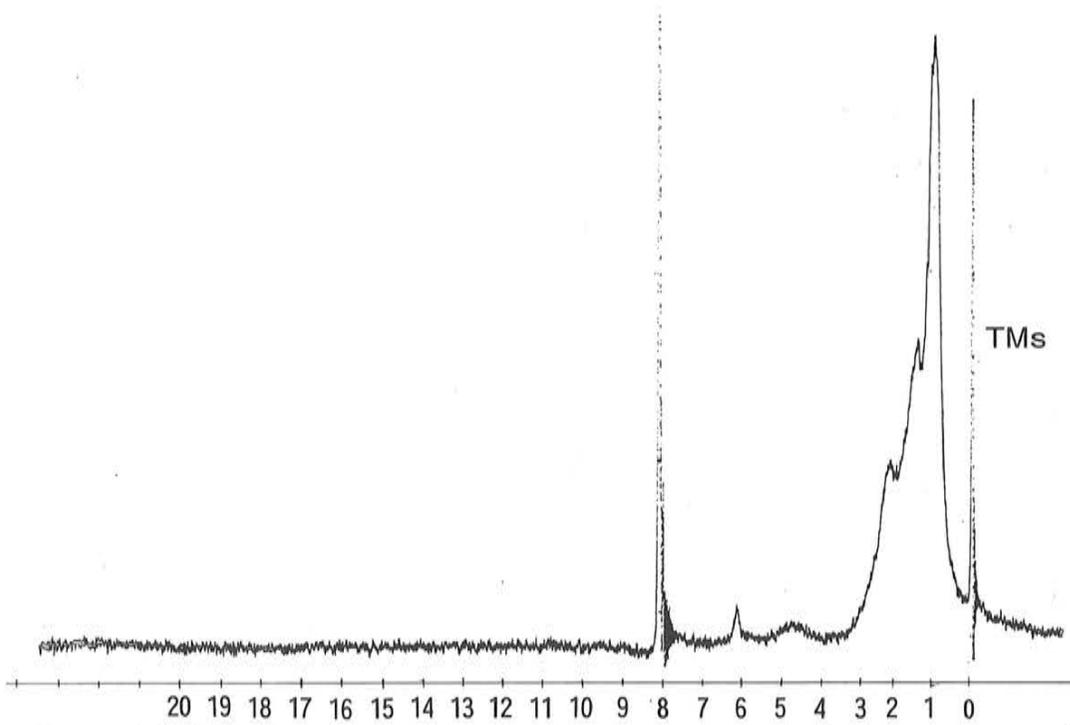
以上、異なる吸収点は、現在の資料に、揮発性のテルペンが多く含有されていることにある。それに対し、貝塚資料は時間の経過が原因でそれらは揮発してしまい最終的に $-\text{CH}_3$ 、 $-\text{C}\text{H}_2$ が残り安定したことを示している。現在の松樹脂が時間の経過によって不安定物質が除去されR o s i nに移行したものと推定される。

② 赤外吸収スペクトルによる分析

この分析は分子の振動スペクトルを測定したものである。

貝塚資料では第3表の通りになる。

- イ、3438. 2cm^{-1} の吸収は、 OH の振動スペクトルである。
- ロ、2957. 7cm^{-1} の強い吸収は、 $-\text{CH}_3$ 、 $-\text{CH}_2-$ 、 $=\text{CH}-$ の存在を示している。
- ハ、2252. 4cm^{-1} の吸収は、試験室の測定室中のガスで、資料の成分物質ではない。
- ニ、1714. 0cm^{-1} の吸収は、 $>\text{C}=\text{O}$ の吸収。

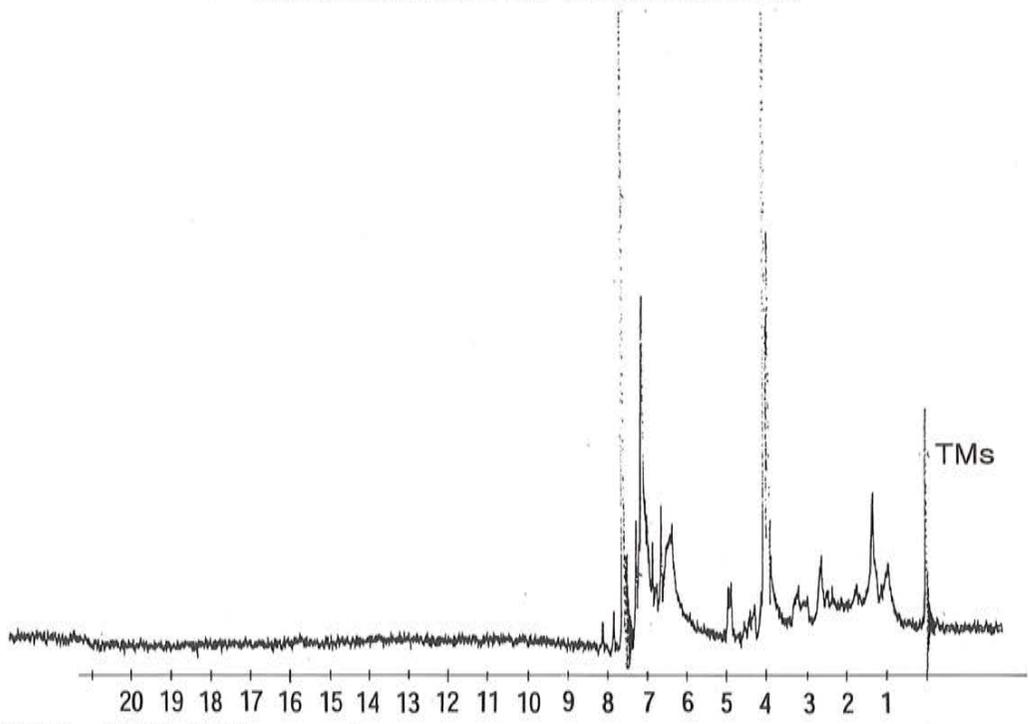


第1表 AMPL 10×6
HILEVEL 1

Filt 20

Feb. 28 '92

核磁気共鳴吸収スペクトル (久良波貝塚出土資料)



第2表 AMPL 10×6
HILEVEL 0.5

Filt+20

松

Feb. 28 '92

核磁気共鳴吸収スペクトル (現代の松樹脂)

- ホ、1463. 0 cm^{-1} の吸収は、 $-\text{C}-\text{H}$ の変角振動を示している。
 へ、1385. 0 cm^{-1} の吸収は、 $-\text{C}-\text{H} < \begin{matrix} \text{CH}_3 \\ \text{CH}_3 \end{matrix}$ (isopropyl 基) の吸収である。
 ト、1036. 3 cm^{-1} と908. 8 cm^{-1} の吸収は、 $\text{O}-\text{H}$ の振動吸収である。
 チ、733. 5 cm^{-1} の吸収は、ジゲザグメチレンの振動吸収である。

現在の松樹脂の場合は第4表のとおりである。

- リ、3417. 6 cm^{-1} の吸収は、上記イの振動吸収に対応する。
 ヌ、2937. 4 cm^{-1} と2851. 1 cm^{-1} の吸収は、上記ロのピークに対応する。
 ル、2252. 5 cm^{-1} の吸収は、測定室中の炭酸ガスが表れたもので、資料の物質ではない。
 オ、1694. 0 cm^{-1} の吸収は、 $\text{C}=\text{O}$ の吸収が表れている。
 ワ、1463. 0 cm^{-1} の吸収は、 $-\text{C}-\text{H}$ の変角振動を示している。
 カ、1371. 8 cm^{-1} の吸収は、 $-\text{C}-\text{H} < \begin{matrix} \text{CH}_3 \\ \text{CH}_3 \end{matrix}$ の吸収である。
 コ、1032. 2 cm^{-1} と910. 3 cm^{-1} の吸収は、 $\text{O}-\text{H}$ の振動吸収である。
 タ、730. 5 cm^{-1} の吸収は、 $-\text{C}-\text{H}_3$ 、 $-\text{C}-\text{H}_2-\text{C}-\text{H}_2-\text{C}-\text{H}_2$ の振動吸収である。

以上、新しい松の樹脂の特に、1759. 7 cm^{-1} ~1694. 0 cm^{-1} の間の振動スペクトルは複雑な化合物が色々と混ざっていて、それぞれの特徴のある吸収がでていいる。ところが、長い時間が経過した貝塚資料は、その振動ベクトルが単純になっている。そのあり方は、②核磁気共鳴吸収スペクトルの分析の結果と共通している。

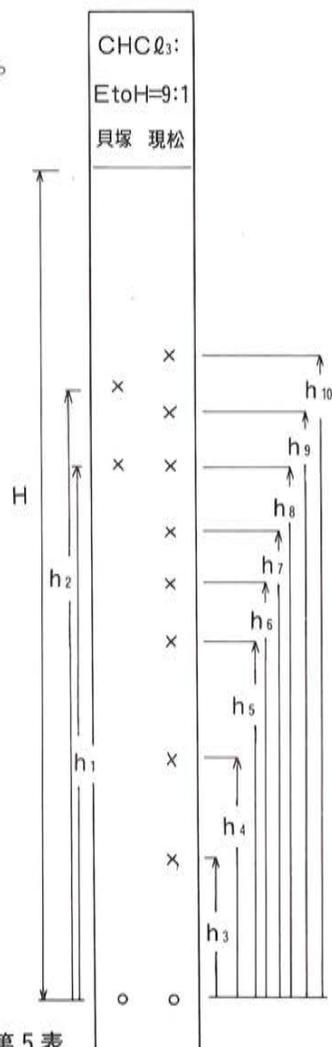
③ 薄層クロマトグラフによる分析

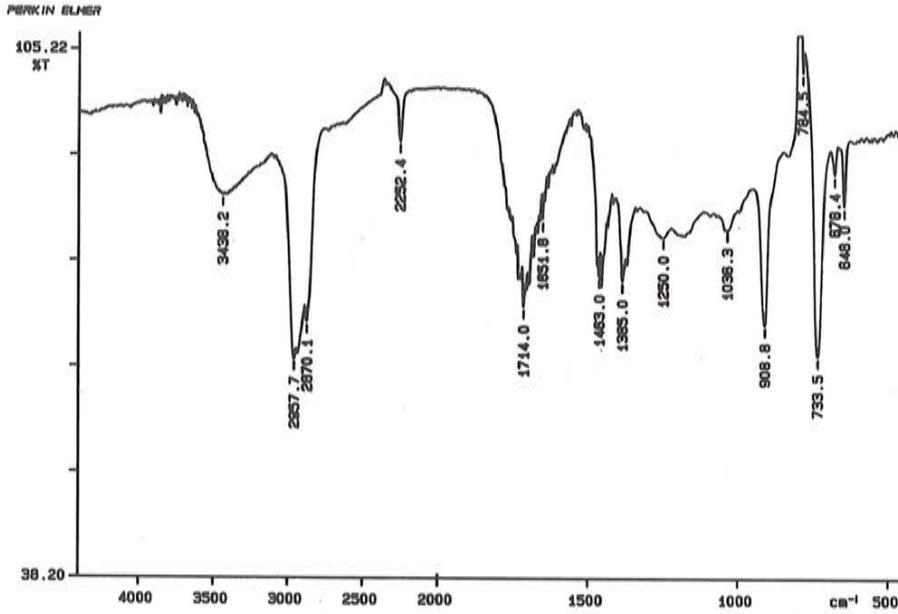
(Thin layer chromatography)

クロロホルム9：エチルアルコール1の混合溶液に溶かし、クロマトグラフを展開したものである。試験資料図を第5表に掲げた。

久良波貝塚 Rosine Rf値 h_1 0.64
 〃 h_2 0.74

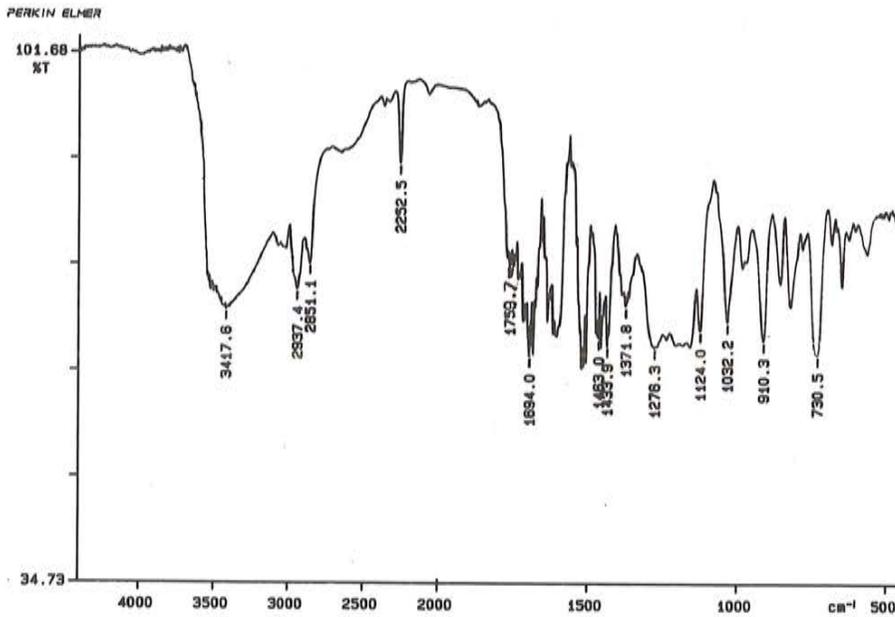
2スポット (二成分) が現れている。





92/02/27 20:19
X: 4 scans, 4.0 cm^{-1}

第3表 赤外吸収スペクトル (久良波貝塚出土資料)



92/02/27 20:28
Y: 4 scans, 4.0 cm^{-1}

第4表 赤外吸収スペクトル (現代の松樹脂)

現在の資料	R o s i n e	R f 値	h_3	0.17
			h_4	0.29
			h_5	0.43
			h_6	0.50
			h_7	0.56
			h_8	0.64
			h_9	0.70
			h_{10}	0.77

8のスポット（八成分）が現れている。

この分析においても、久良波貝塚の資料には、R f 値0.64と0.74の二成分がある。これはアピエチン酸とピマール酸の二成分に相当すると考えられるが、資料の関係で精査（資料を破壊しての分析）することができなかつた。現在の松樹脂と同じ主成分が含まれていることが分かり、（例えば h_1 ：R f 値0.64と h_9 と h_{10} が h_2 に近い値を示している。）、また現在の松樹脂に含まれている他の成分は、久良波貝塚資料ではほとんど痕跡程度に残っていることが理解される。

B 渡喜仁浜原遺跡出土のR o s i nの比較

これまでで発掘調査で得られたR o s i nは少なく、1976年に検出された渡喜仁浜原遺跡の資料のみである。（注1）

渡喜仁浜原遺跡の資料はK B r 錠剤法によって赤外吸収スペクトルの測定結果がだされている。（145頁掲載のFig.1、第48表分析表）

今回の久良波貝塚の①、②スペクトルの比較が可能であり、その結果、とくにエーテルに溶ける部分だけのI Rスペクトルは久良波貝塚資料とよく似ていることが理解されよう。渡喜仁浜原遺跡の資料は久良波貝塚の資料に比べ、主要成分の吸収がさらに弱く、久良波貝塚に痕跡としてみられたその他の化合物の吸収もほとんどみられない状況にある。換言すると久良波貝塚資料は渡喜仁浜原遺跡の資料に比べ各成分がまだ残存していることを示し、渡喜仁浜原遺跡より新しいR o s i n eであるといえる。

第V章 おわりに

当該遺跡は、丘陵に囲まれた僅狭な入江の砂丘に形成された遺跡である。調査の結果、戦前までの近世の集落跡と先史時代の貝塚を確認することが出来た。いずれも第Ⅱ層から検出され、約100mの調査区間で出土状況が異なり、東方のトレンチに近世の資料の混在が多く、西方のトレンチに移行するにつれ混在が少なくなり、逆に先史時代の資料が多数出土していた。

近世代の資料には、沖縄製施釉陶器、無釉陶器の日常雑器を中心に、17～18世紀以降の中国産染付、本土産磁器、陶器などの器類と、遺構としての道路（戦前）がある。当旧道は、路面に枝柵珊瑚礫や山砂利礫を敷き突き固め、その両側の路肩に珊瑚切石で縁取りをするものである。図面復元ではあるが道路幅約5mを測った。当地のように地盤の弱い地域での工法を知る歴史の道の資料である。

なお、当該地は、伝承で背後の丘陵にある山田グスクの津口として繁栄していたとあり、注意されたが、数片の青磁片が得られているのみで、直接関連を説明しうる資料はみられなかった。また得られた近世陶磁器に属する集落遺構そのものも今回のトレンチで確認するまでにはいたらなかった。今後の近隣地域の調査に期待される。

次に、貝製品、石器、土器などについてみると、これらは主として先史時代に所属するものであるが、貝製品、石器については、近代に属する資料も混在している可能性がある。

貝製品は、実用品の二枚貝有孔製品を主としている。貝種別にはリュウキュウザルボウ、メンガイが多く、他に僅かにシャコガイ、ザルガイなどが出土している。全体に小型の貝種が選択されている。また貝錘としてタカラガイ製品が得られているが、これについては近年までの研究成果にもとずくと近世代のもの蓋然性が高い。また注目されるものとして僅か一点であるが、ヤコウガイ製品が出土した。類似資料として恩納村熱田貝塚、今帰仁渡喜仁浜原遺跡にもとめることができる。

石器は、凹石（82%）、叩き石（4%）、磨り石（6%）、砥石（2%）、石錘（6%）などがあり、圧倒的に敲打の機能を有する石器類が主体を示し、石斧類については未発見であった。磨り石では、奄美地域から一円に分布する大形のカネク石もみられた。また、球体の大型の石錘については、その形態、加工からみると、近世に属するものと考えられる。

土器は、総破片数2,370点余り得られ、人工品では圧倒的出土量を示すものであった。口縁部の資料から甕型45%、壺型10%、鉢型8%、皿型1%、（不明36%）の4器種が認められ、甕型器形が主になっている。

甕の器形は、口縁が外返し、底部は一様にくびれた平底になるものが一般的である。その口縁が外返しの程度と胴体の張りで三種類に細分された。鉢型に分類した中には、器面の仕上げが粗い、いわゆる粗隆帯文土器が含まれている。破片が小さく量的にも僅かであるが、得られた底径資料から尖底になるものと推測される。皿型と分類した資料は、破片資料で二例であった。

壺型は、口縁部が外返するのが普通であるが頸部との取り合いが明確ではなく、全体の形状の復元が出来なかった。今後の追加資料で検討したい。

その他、特徴的な要素をあげると、有段口縁部はカヤウチバンタ式に類似したタイプと、その段部が撫で潰されたタイプ、段差が沈線で表現された様になるタイプの三種類があった。量的にはいずれも微量であり、変遷や時期を示すものか明らかでない。

山形口縁部これも僅かで、山が二つと一つのものがあり、それらが肥厚するものと、しないものが認められる。

有文土器は、総数19点とこれも微量である。その種類は窺描きの沈線文、凸帯文、刺突文がみられた。また特記されるものとしては外耳土器が一例得られている。小形の横耳になるもので、古い時期にみられる要素を残すものであろうか。

底部は、尖底（4%）、平底（非くびれ、2%）、くびれ平底（94%）と三種類に分けられる。量的に圧倒的にくびれ平底を主体とし、当該遺跡の土器の特徴の一つである。くびれ平底は、A～Gの七種に細分を試みた。その中でFとした内底厚と壁器がほぼ同様に薄く、内底面が広く整形されたタイプが多く得られる傾向がみられた。A～G類には造りが稚拙なタイプから均整のとれ丁寧な造りのタイプまで細分したが層位的な関係はつかめていない。

当貝塚の土器の色調は、橙褐色を呈したものが一般的で、その手触り細かい粉末がつくものが多い。器面の仕上げでは、凹凸をなすものは約5%で、器壁の一定したものが95%になる。器壁の厚さ5～6mmをなすもの約39%、4～5mmのものが30%と続いている。

器面の調整は、口縁部では明確ではないが、底部資料では刷毛目が全体の35%認められ、残り73%は指撫で整形がなされていた。

以上、これら土器の器形、器面の状況などは、高宮廣衛氏編年の後期の前里式土器に似たものがみられる。文様要素、底部器形（くびれ平底）については、具志原貝塚に類似が認められ、また底径の小さい底部資料、有段口縁資料、山形口縁、外耳土器、粗隆帯文土器（阿波連浦貝塚）の存在などは、全体に後期の古式の遺跡に傾向的に多くみられる。また一方、本遺跡と同じ西海岸にある後期編年の後半に位置する熱田貝塚では、同じくびれ平底を主体に検出され注意される。ただ、尖底は出土していない点、その他上記の土器要素や、二枚貝の貝種が異なる点からすると、少なくとも本貝塚の方が先行すると考えられるが、現在後期の詳細な位置づけについて整理検討中で、結論を述べるまでには今報告にまにあわずできなかった。検討の終了しだい別紙で報告をしたい。

自然遺物の貝塚では、マガキガイが圧倒的に多く得られ、ほかにチョウセンサザエ、サラサバタイなどがつづいている。潮間帯水深20mの珊瑚礁で生息するもので、採集活動の場の環境を考慮されるが、いずれにしても大型の貝殻は極めて少ない特徴が上げられる。脊椎動物遺体では、魚類ではハリセンボン科が多数を占めていたことは注目され、またウミガメ類の遺體も多かった。陸獣ではイヌがみられる。ほぼ完全形に近い頭蓋骨が得られ、具志川村宇堅貝塚

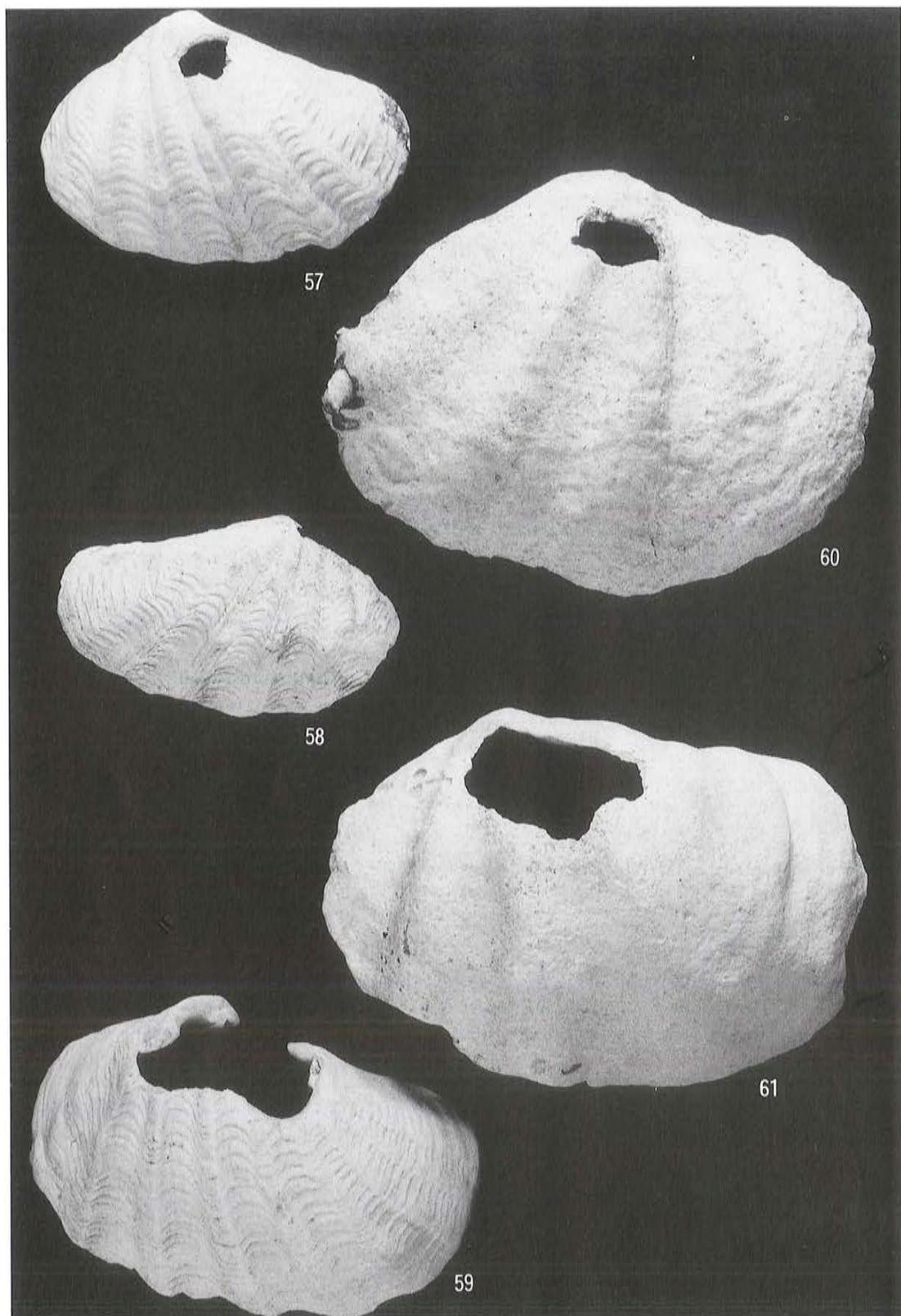
に次ぐもので貴重な収穫であった。

固形樹脂は、分析結果では、渡喜仁浜原遺跡出土のそれよりは、本貝塚のものが新しいことが判明した。その事実は、樹脂の採集時期と遺跡の存続期間との関係も留意されるが、土器の新旧にそのまま反映している可能性も考えられ有力な時期変遷の検討の視点になるものと思われる。

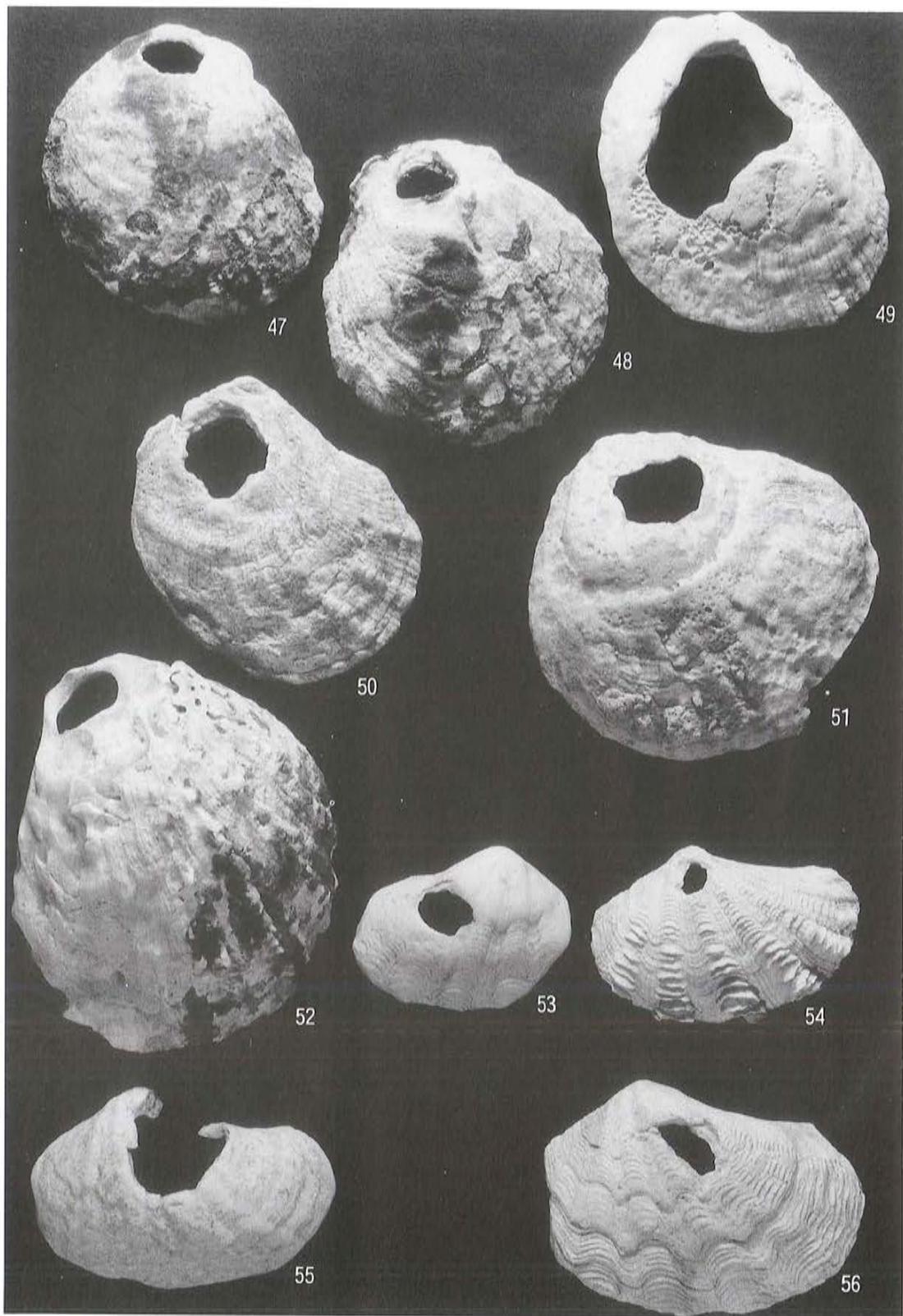
参考文献

- 高宮廣衛 具志川村アカジャンガー遺跡調査学概報 琉球政府文化財保護委員会 1960年6月
友寄英一郎 高宮廣衛 伊江島具志原貝塚調査概報 琉球大学文学部紀要社会篇12号 1968年
高宮廣衛 高宮廣衛 伊江島具志原貝塚調査概報 琉球大学文学部紀要社会篇12号 1968年
高宮廣衛 上本部備瀬貝塚調査概報 沖大論叢第8巻第1号 1968年1月
高宮廣衛 恩納村熱田貝塚調査概報 沖大論叢第9巻第1号 1969年
沖縄県教育委員会 恩納村熱田第二貝塚発掘調査報告書 1979年3月
今帰仁村教育委員会 渡喜仁浜原遺跡 1977年3月 伊江村教育委員会 伊江島具志原貝塚 1978年3月
沖縄県教育委員会 大原第二貝塚 1980年3月 読谷村教育委員会 木綿原遺跡 1978年3月
本部町教育委員会 備瀬貝塚 1986年3月 友寄英一郎 久米島謝名堂貝塚調査概報
沖縄県教育委員会 津堅第二貝塚緊急発掘調査報告 文化財要覧 1974年
沖縄国際大学考古学研究室 宜野湾市宇字地泊兼久原遺跡発掘調査報告 沖国大考古10号 1989年12月
高宮廣衛 昆布貝塚表採の粗隆帯文土器 九州上代文化論集 乙益重隆先生古希記念 1990年11月
具志川村教育委員会 清水貝塚 1989年3月 浦添市教育委員会 嘉門貝塚A 1991年3月
恩納村教育委員会 山田グスク 1990年6月 具志川市教育委員会 宇堅貝塚中間報告 1989年3月
本部町教育委員会 兼久原貝塚発掘調査報告書 1977年 大宜味村教育委員会 喜如嘉貝塚 発掘調査報告書 1979年

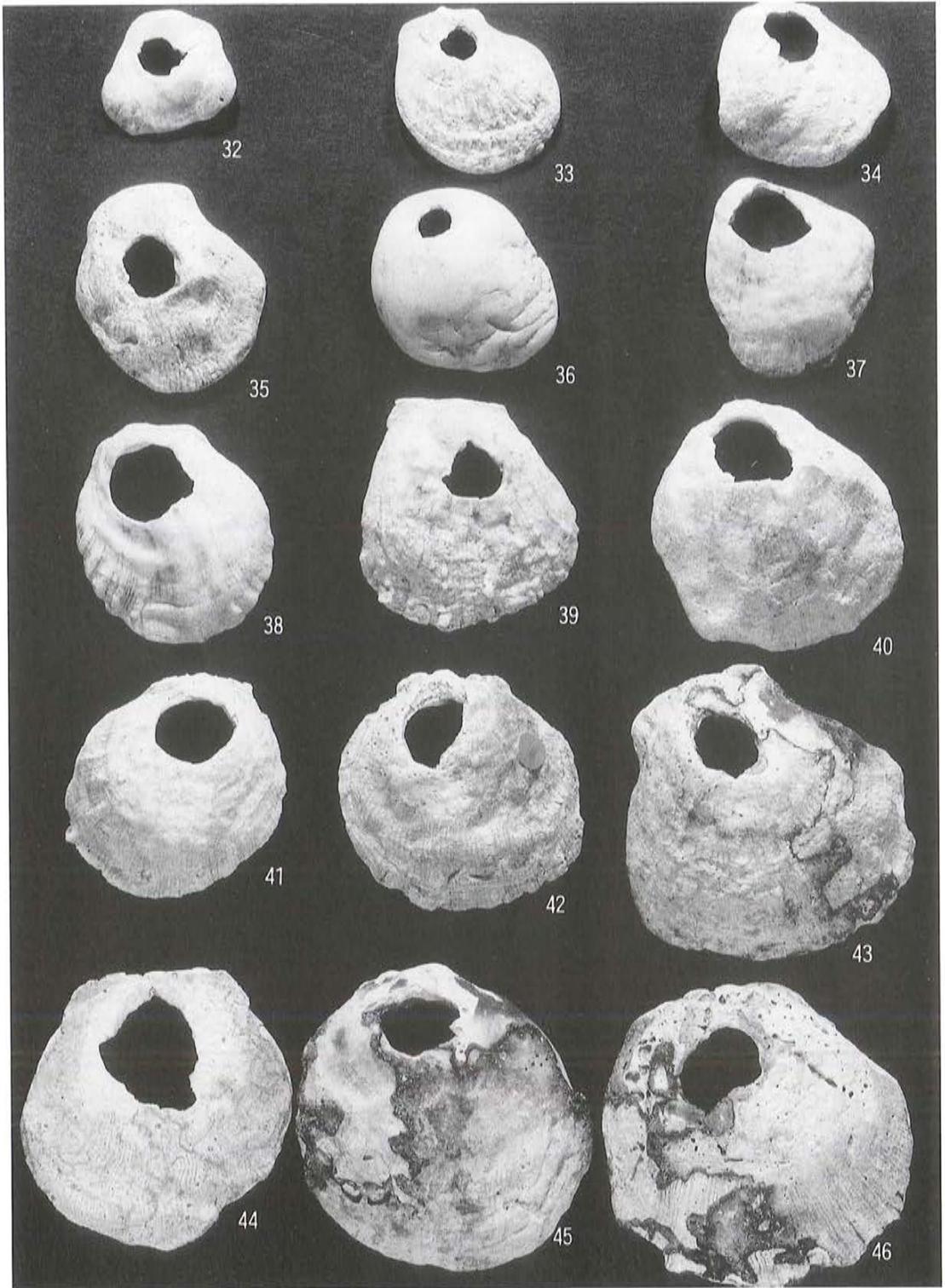




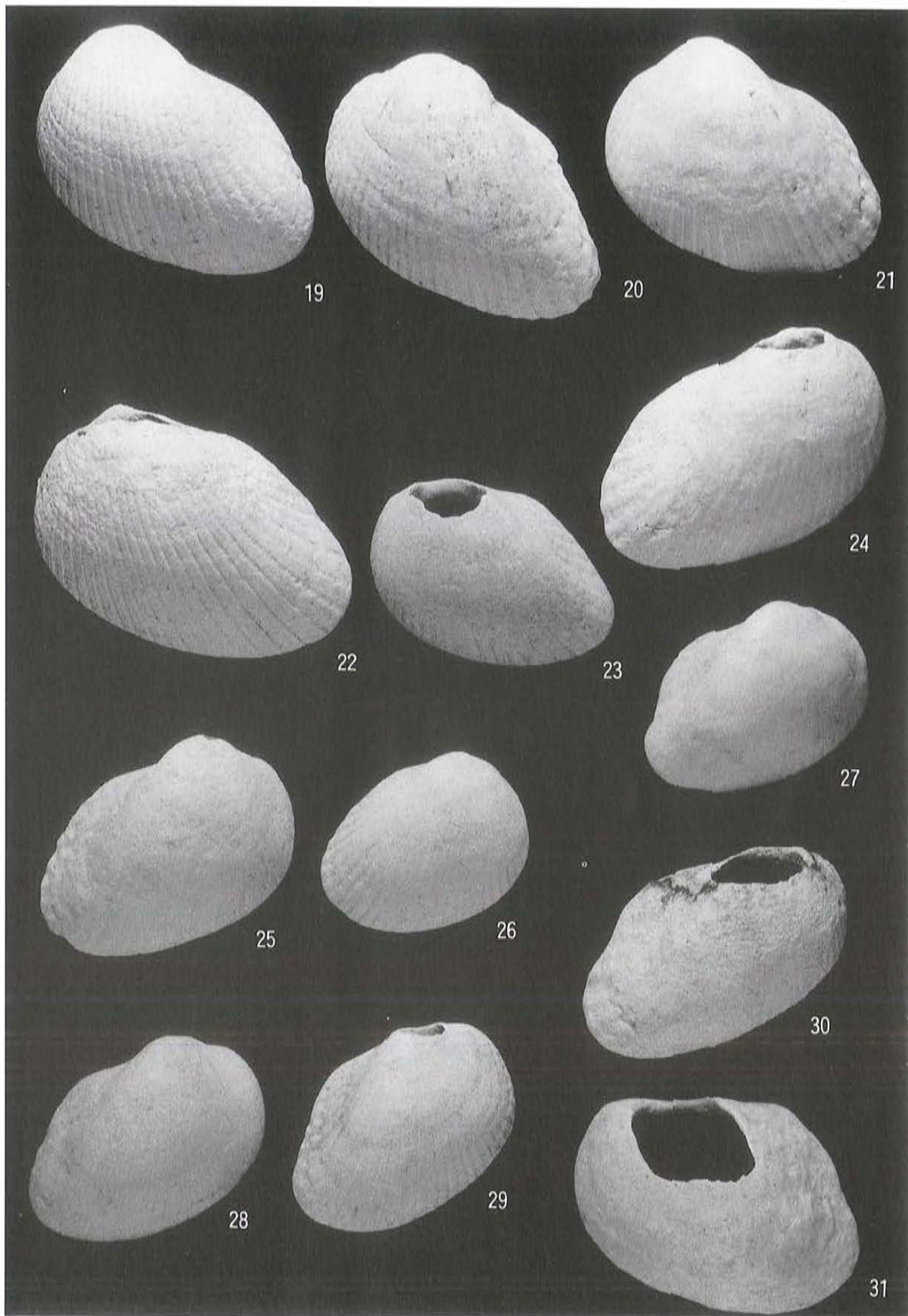
図版21 有孔二枚貝製品 シャコガイ57~61



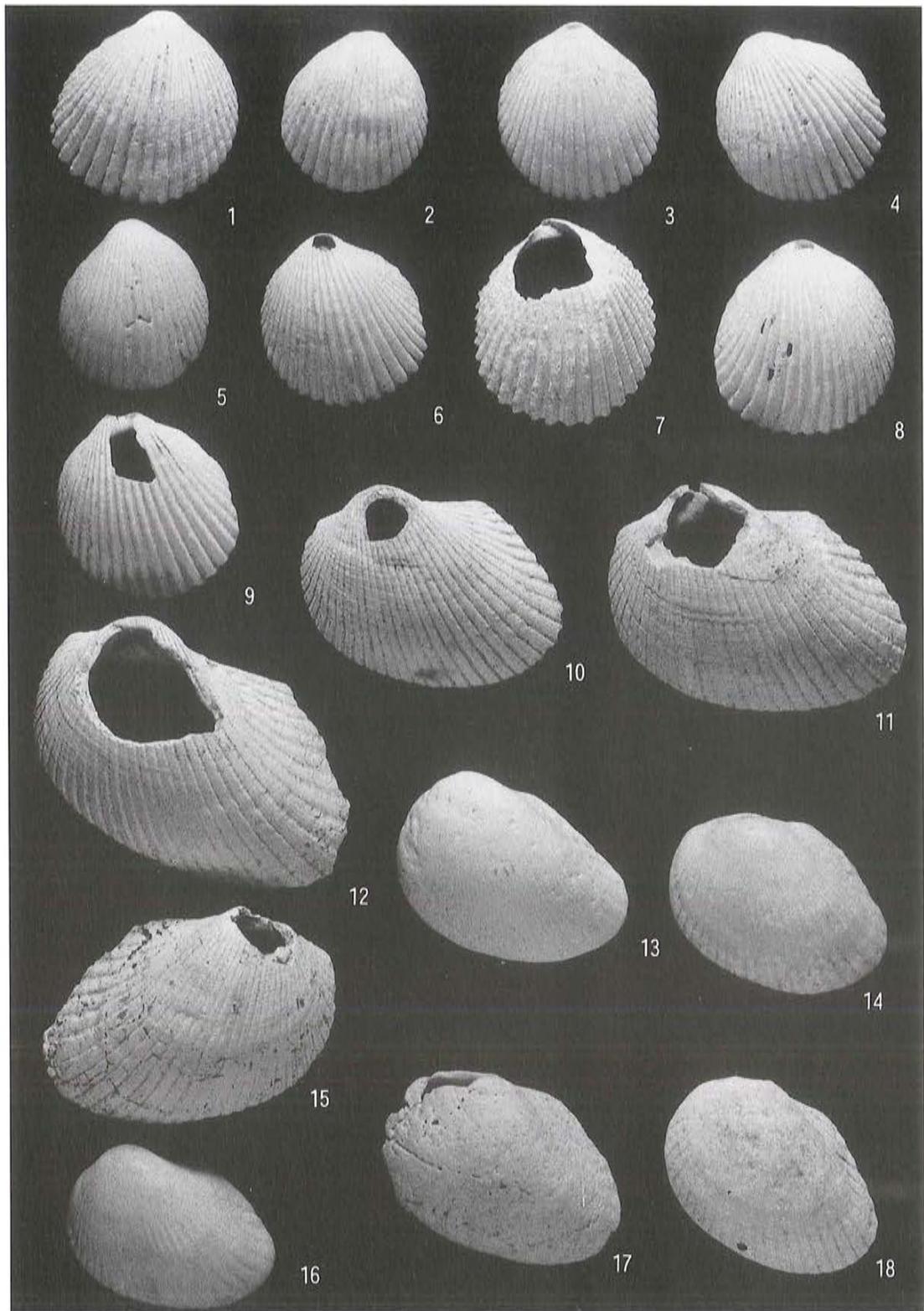
図版20 有孔二枚貝製品 メンガイ47~52 シャコガイ53~56



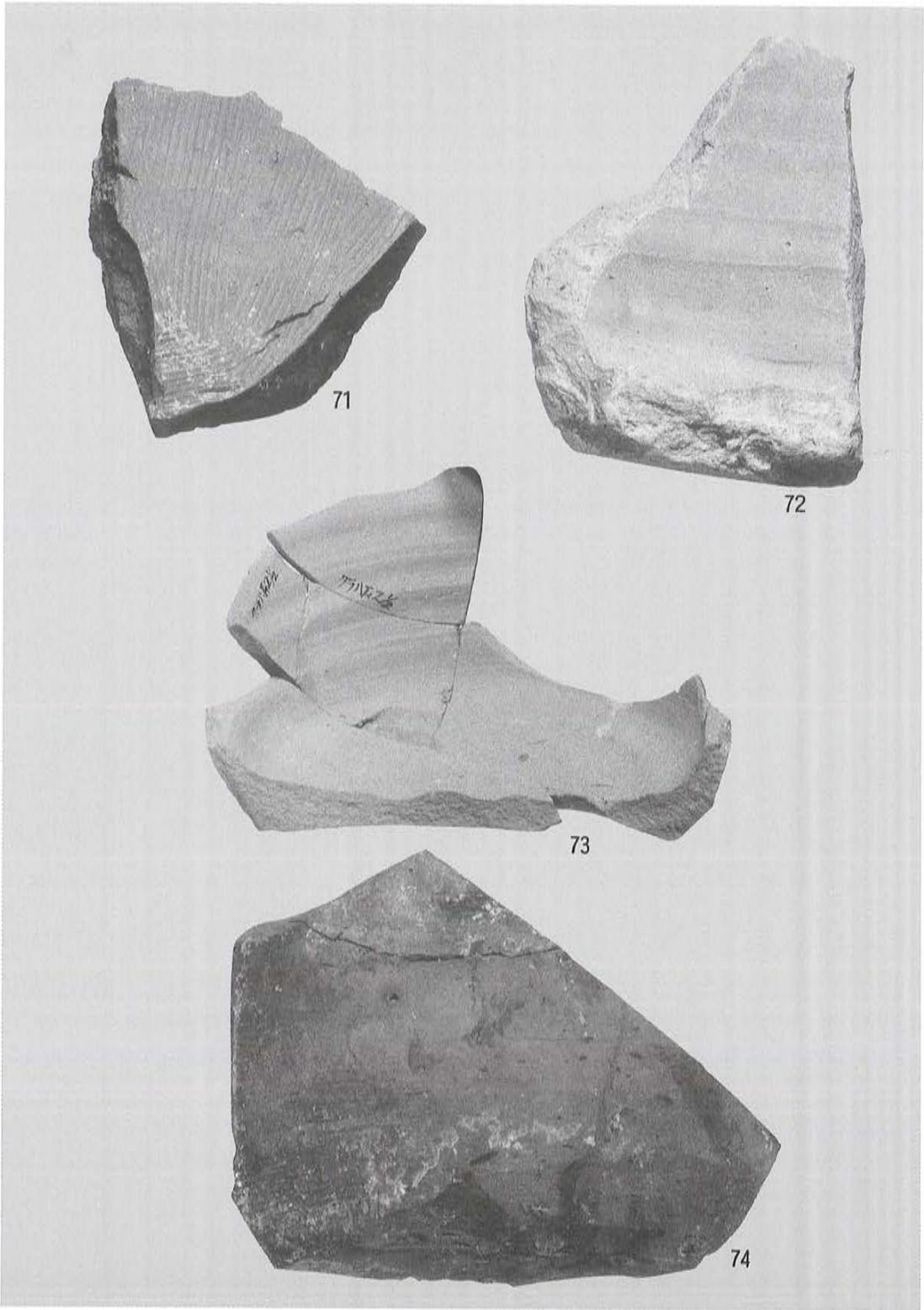
図版19 有孔二枚貝製品 メンガイ32~46



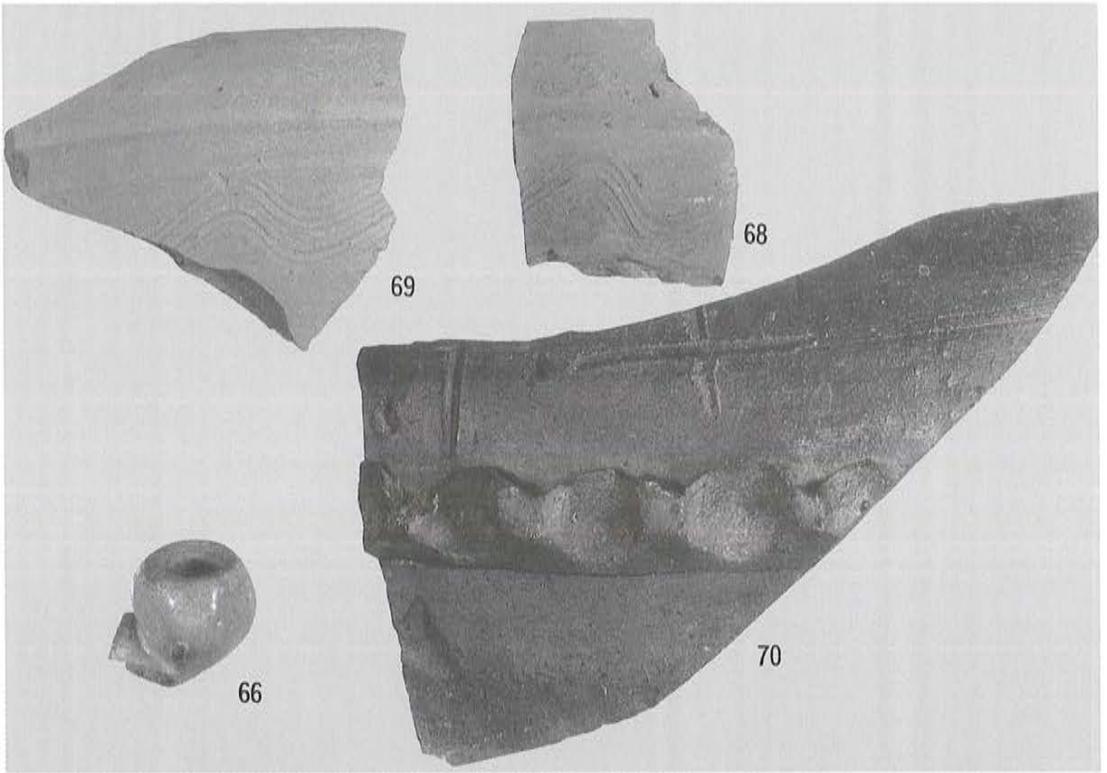
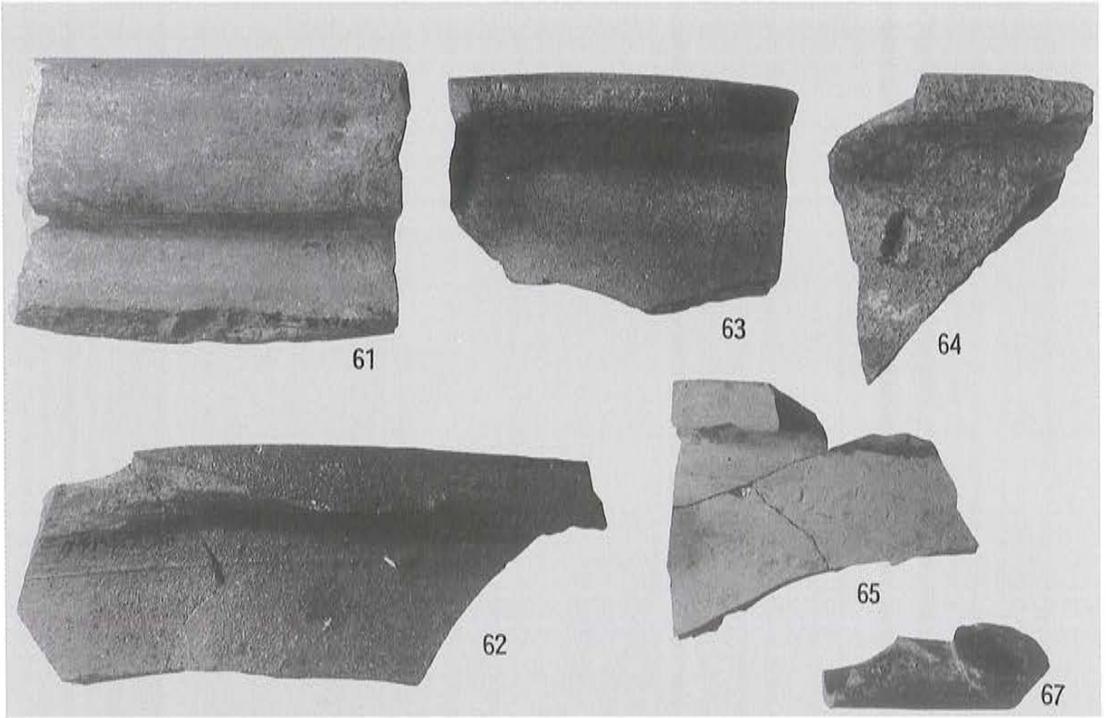
図版18 有孔二枚貝製品 リュウキュウザルボウ19~31



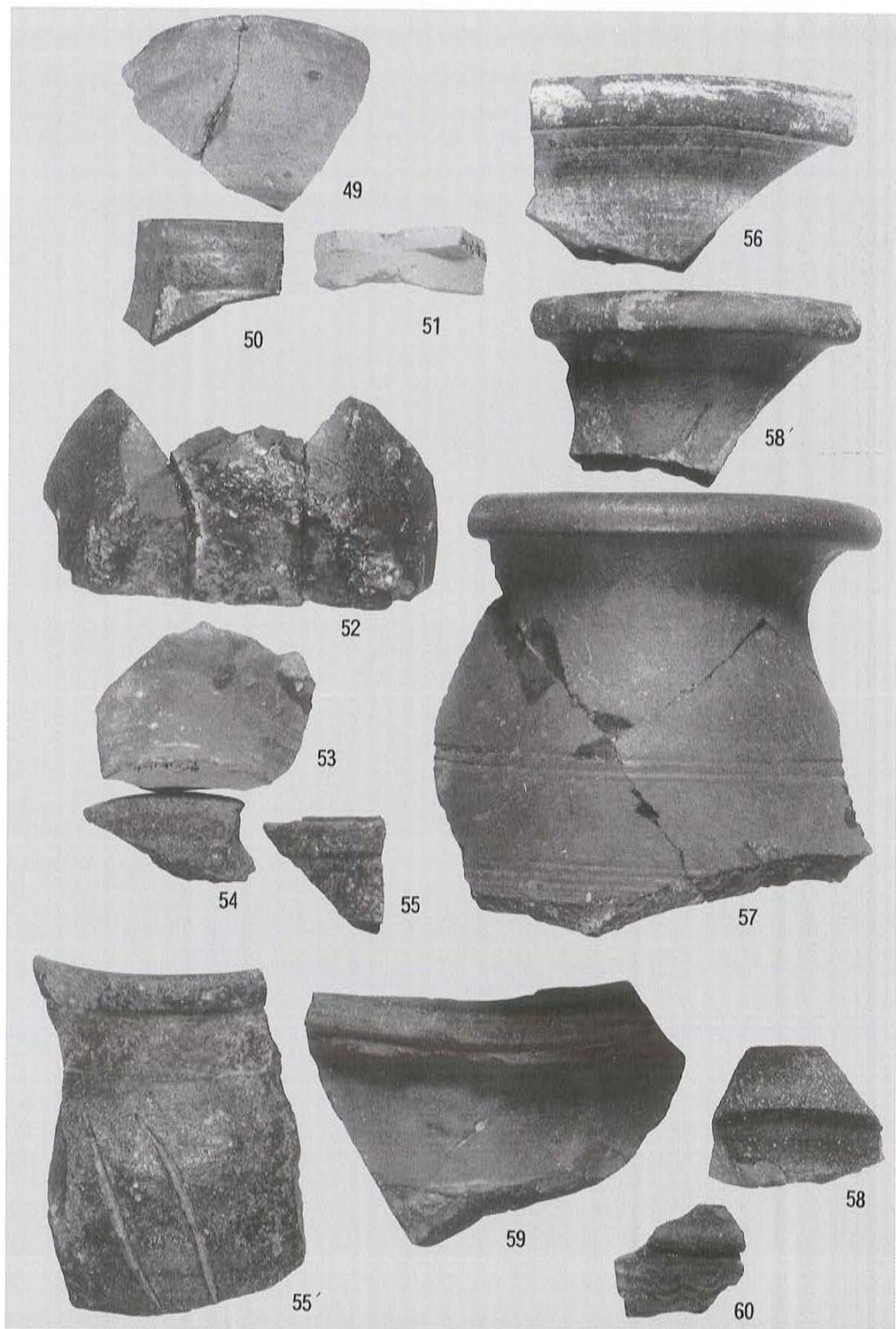
図版17 有孔二枚貝製品 リュウキュウザルガイ1~9 リュウキュウザルボウ10~18



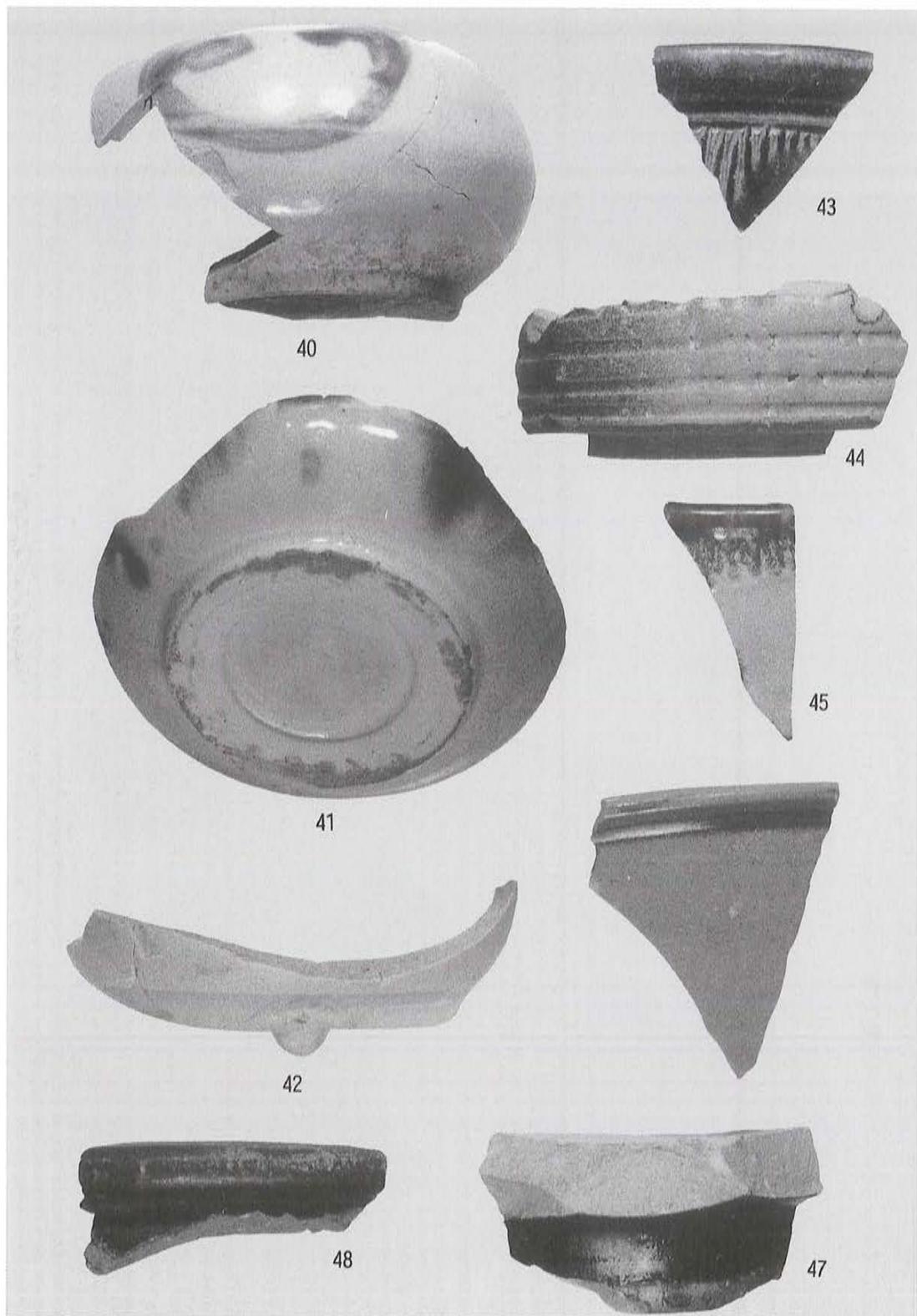
图版16 無釉陶器



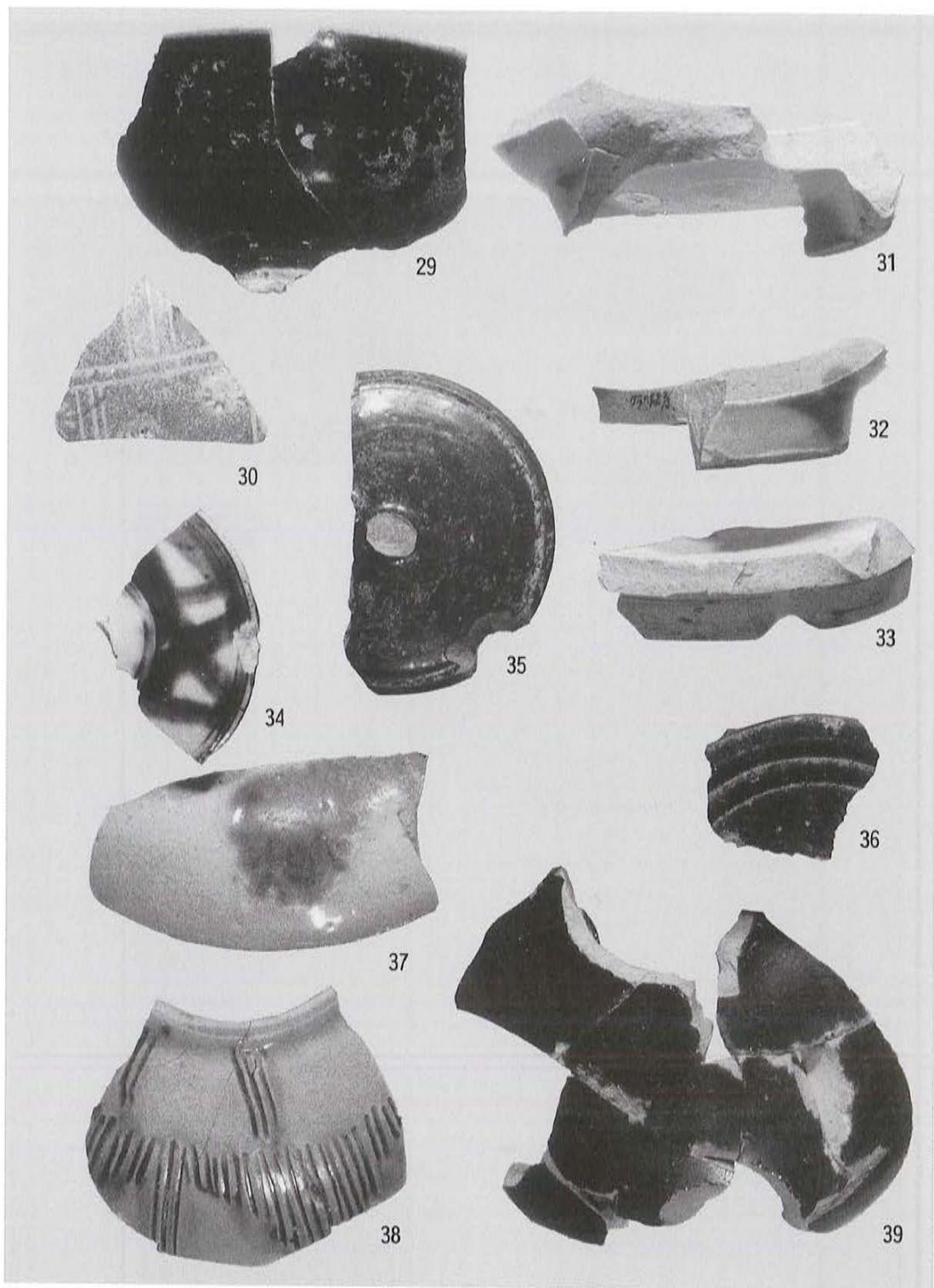
图版15 無釉陶器61~65、69、68 施釉陶器70 煙管66、67



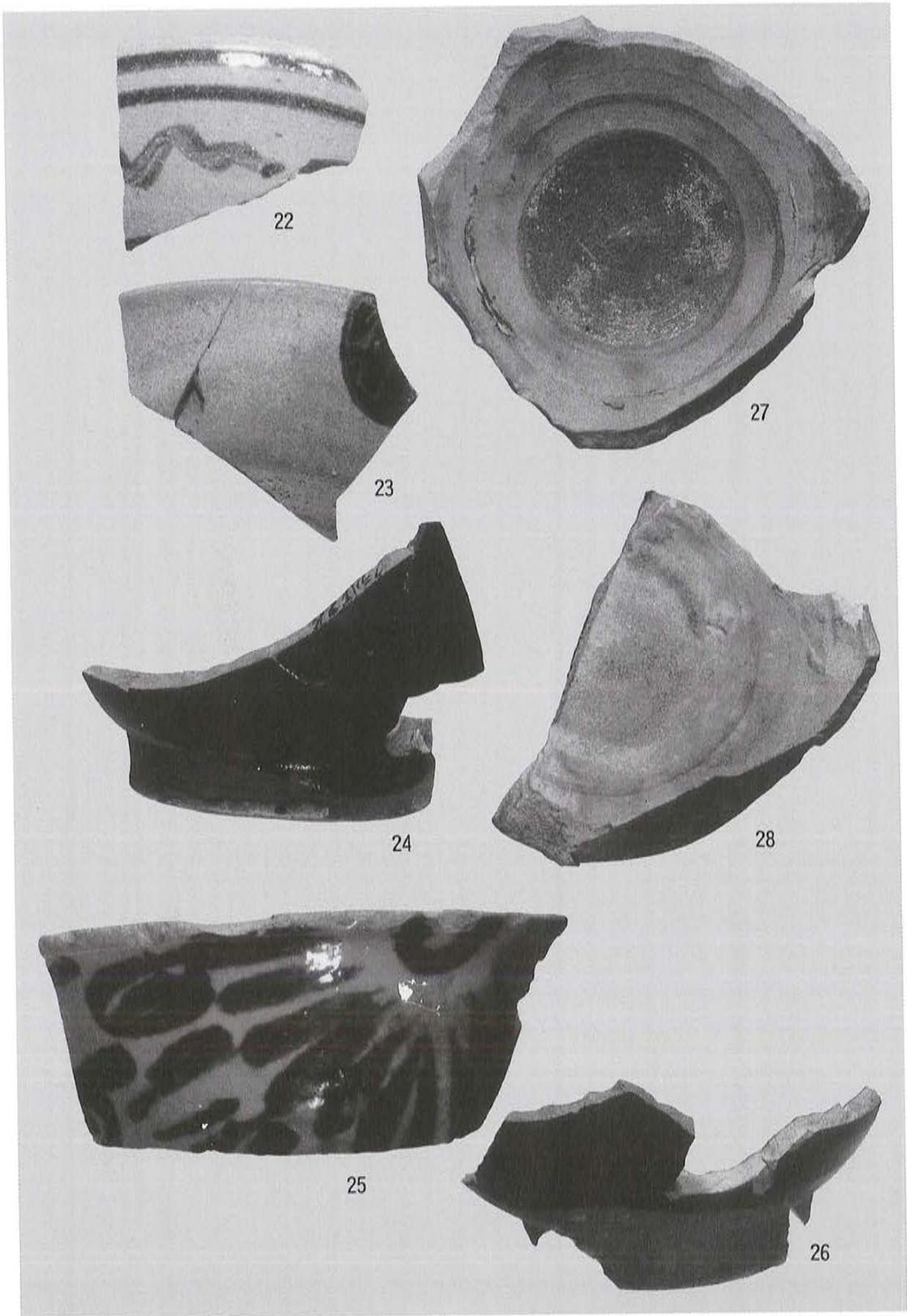
图版14 無釉陶器



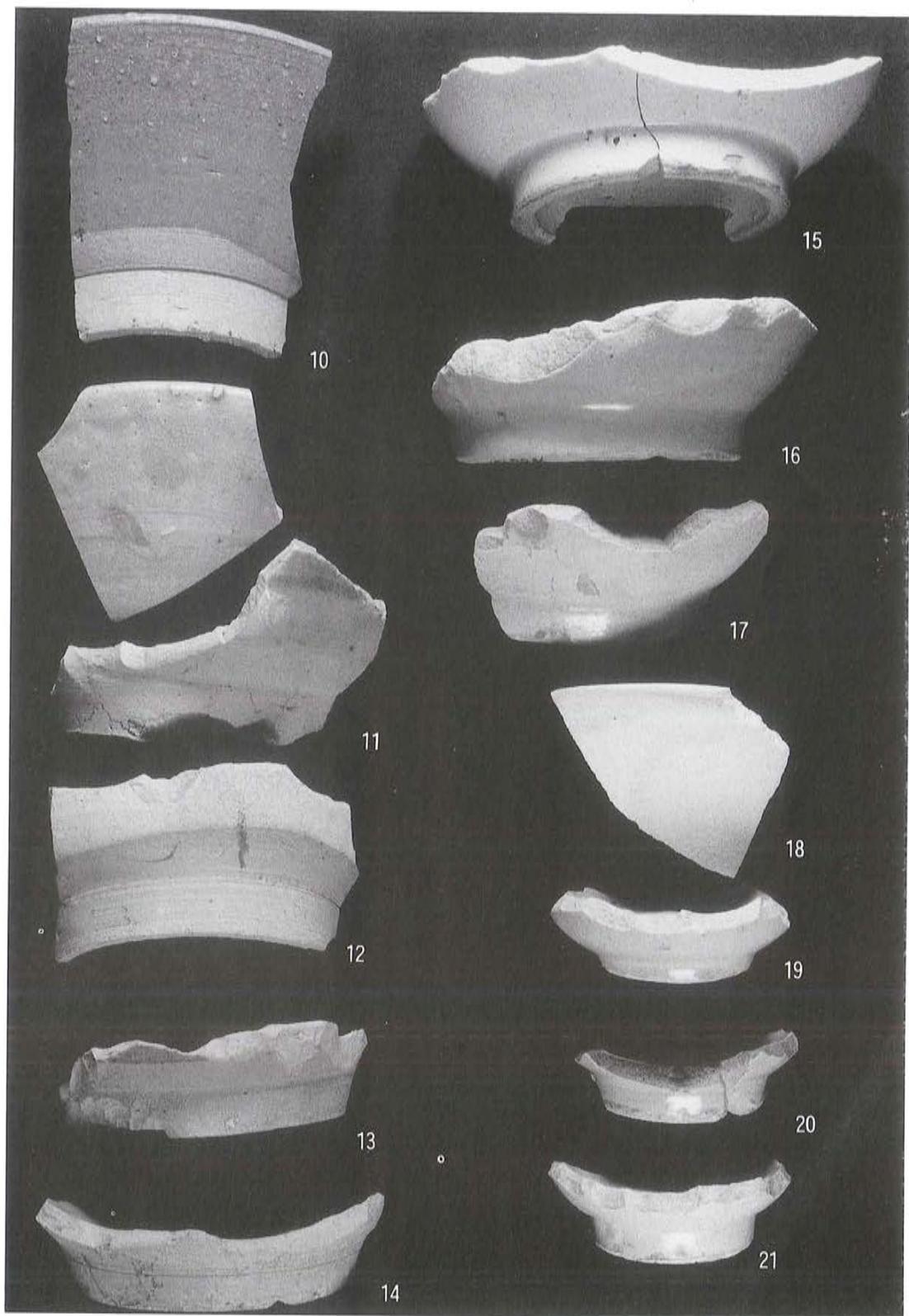
图版13 施釉陶器C類40~47 黑褐釉陶器48



図版12 施釉陶器c類29、31~39 唐津焼30



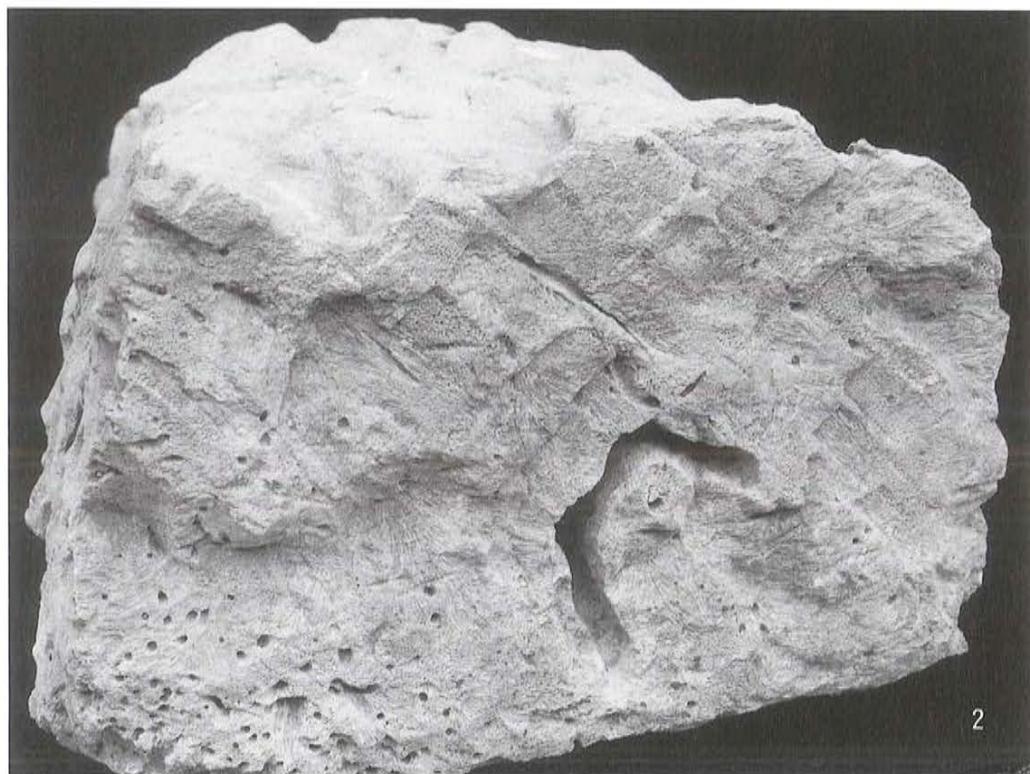
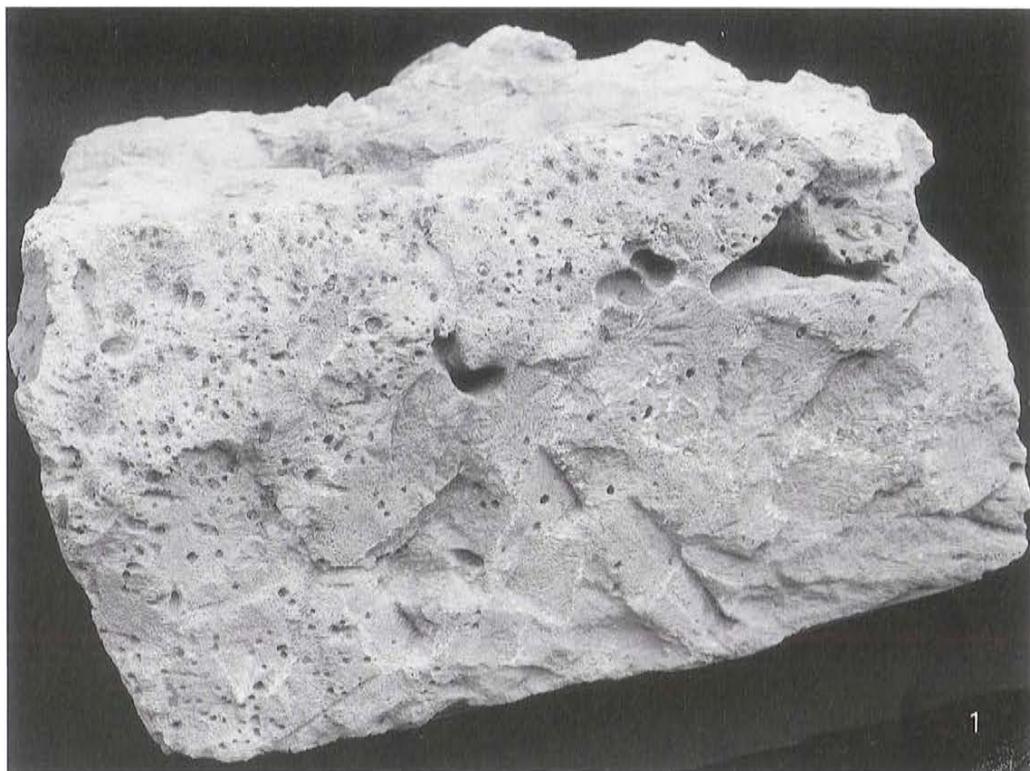
图版11 施釉陶器c類22~28



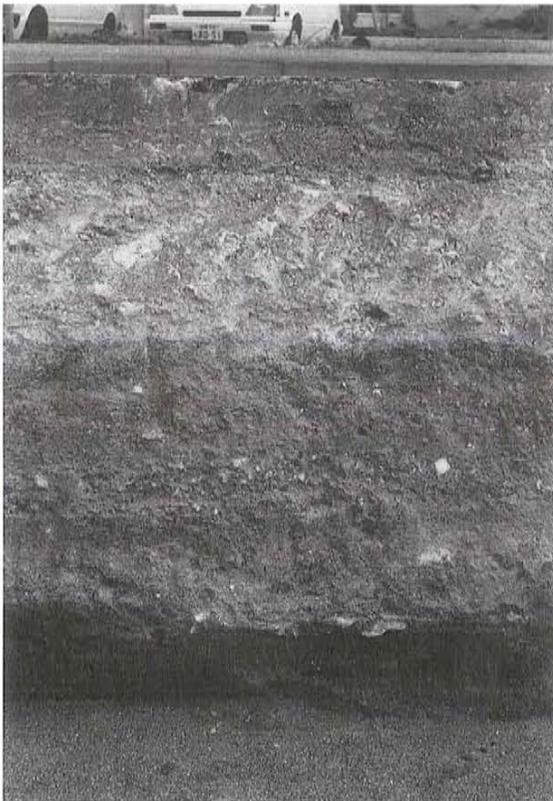
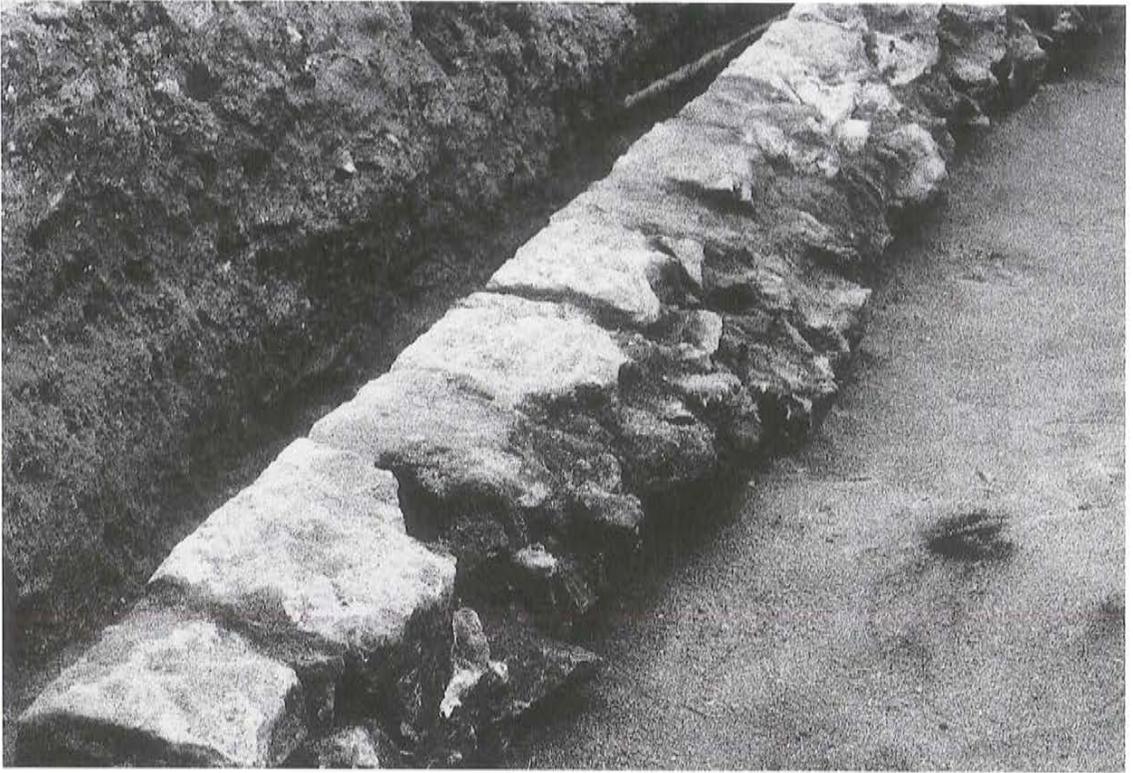
图版10 施釉陶器a類9~14 b類15~21



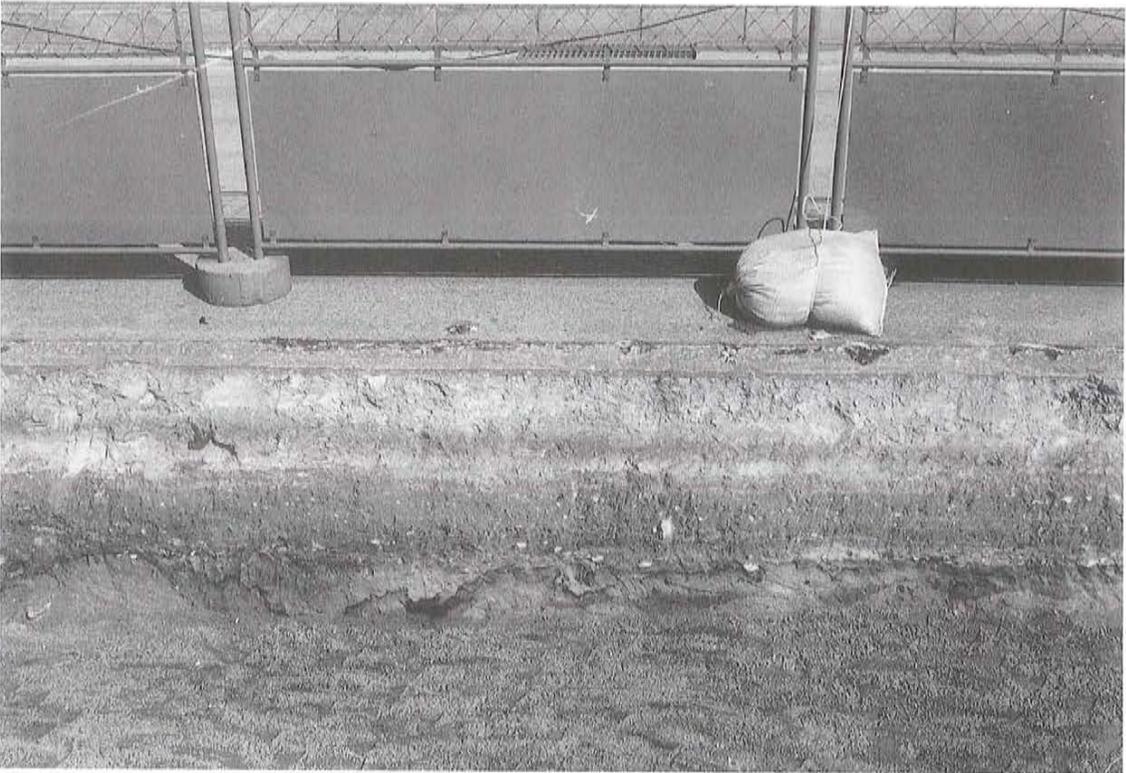
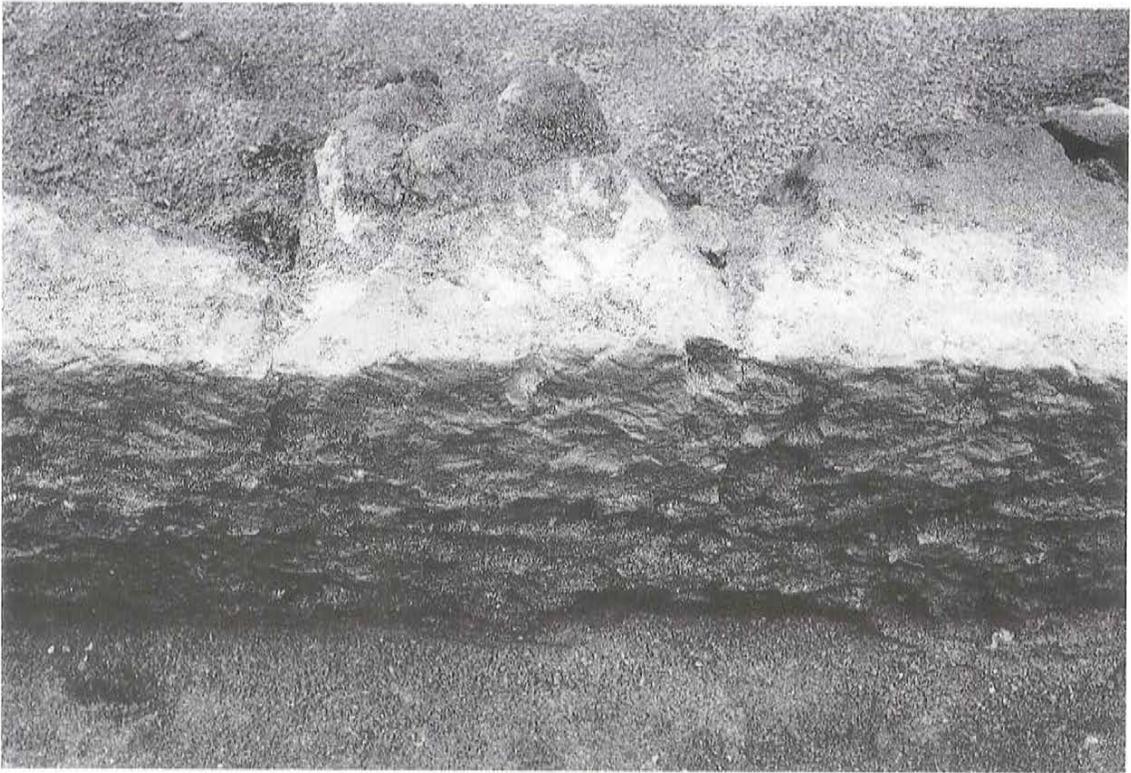
图版9 青磁1 染付2~8



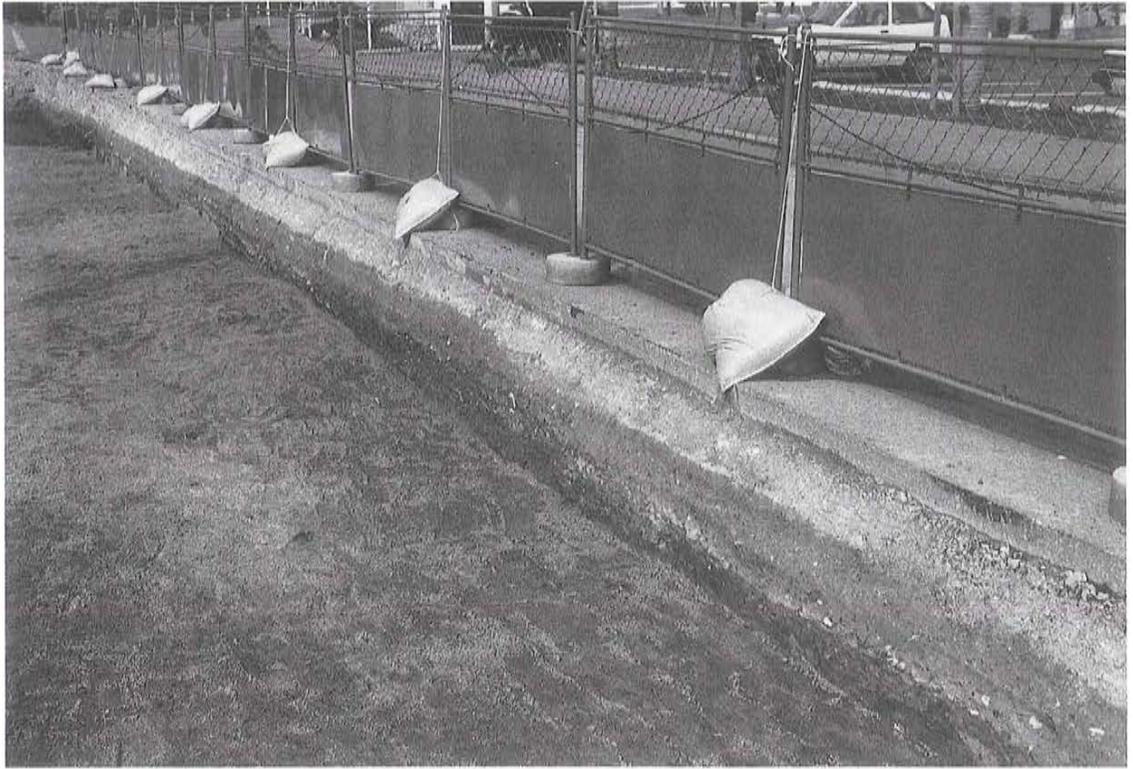
図版 8 旧道縁石



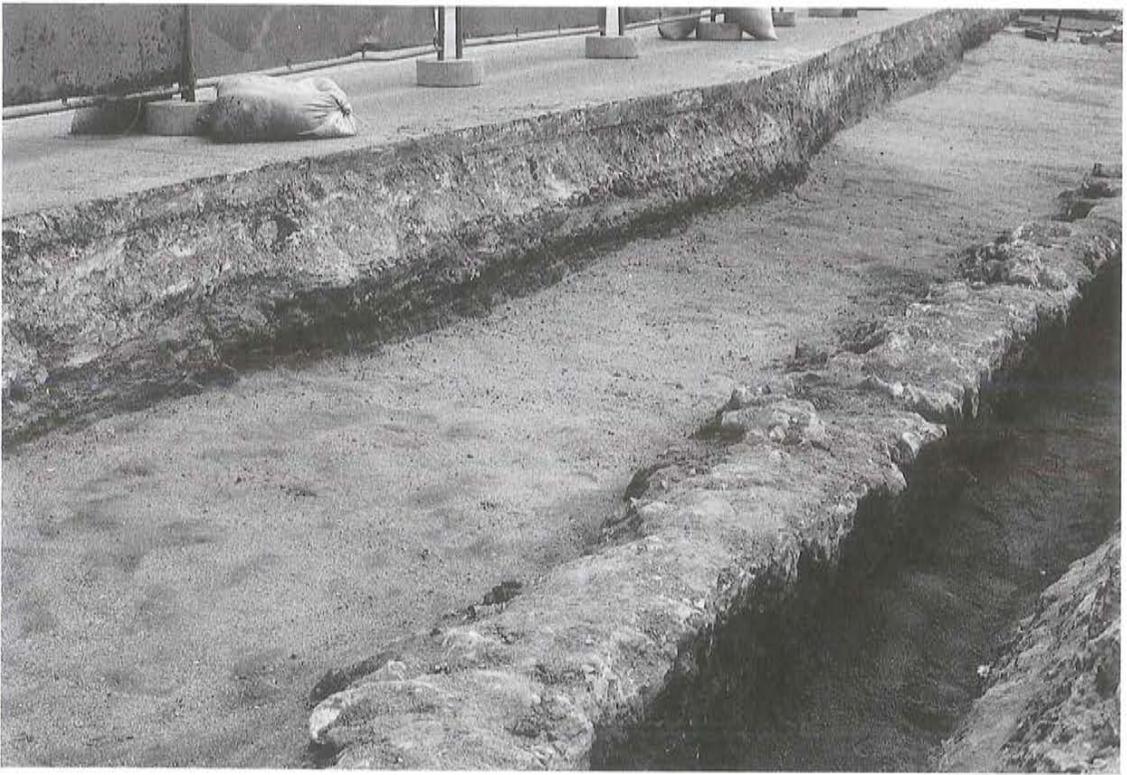
図版7 調査トレンチ状況
上：旧道縁石の状況
下：道路側壁面



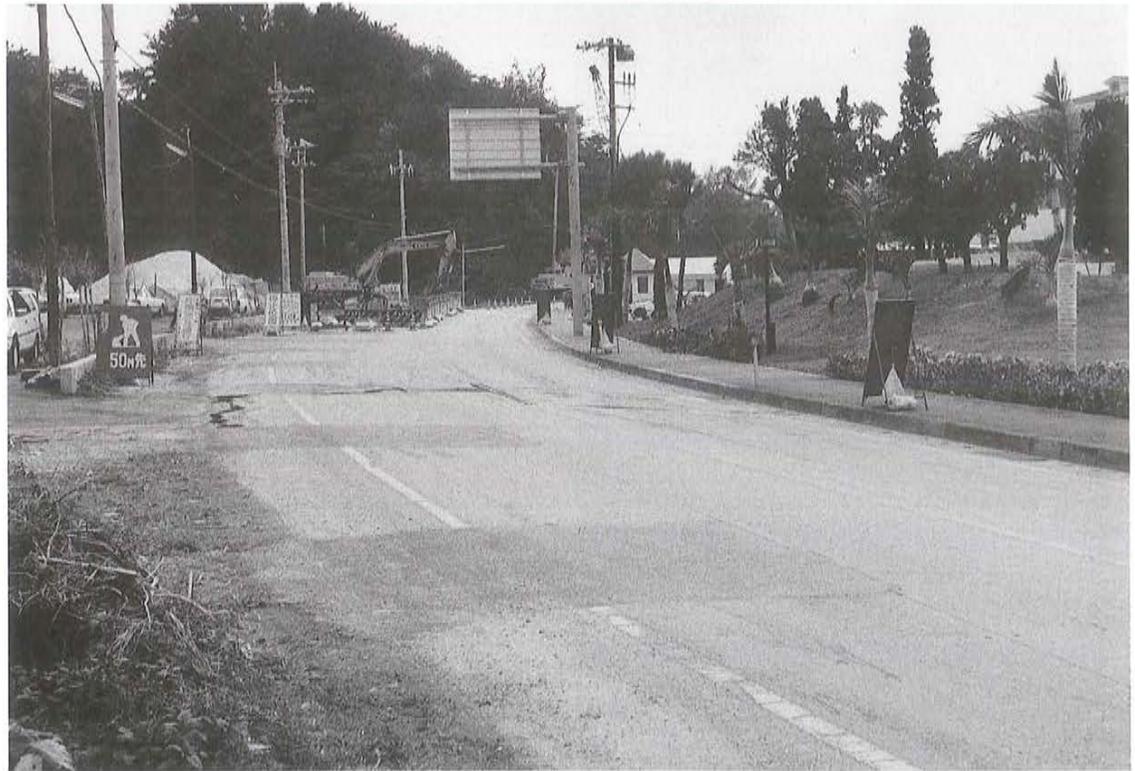
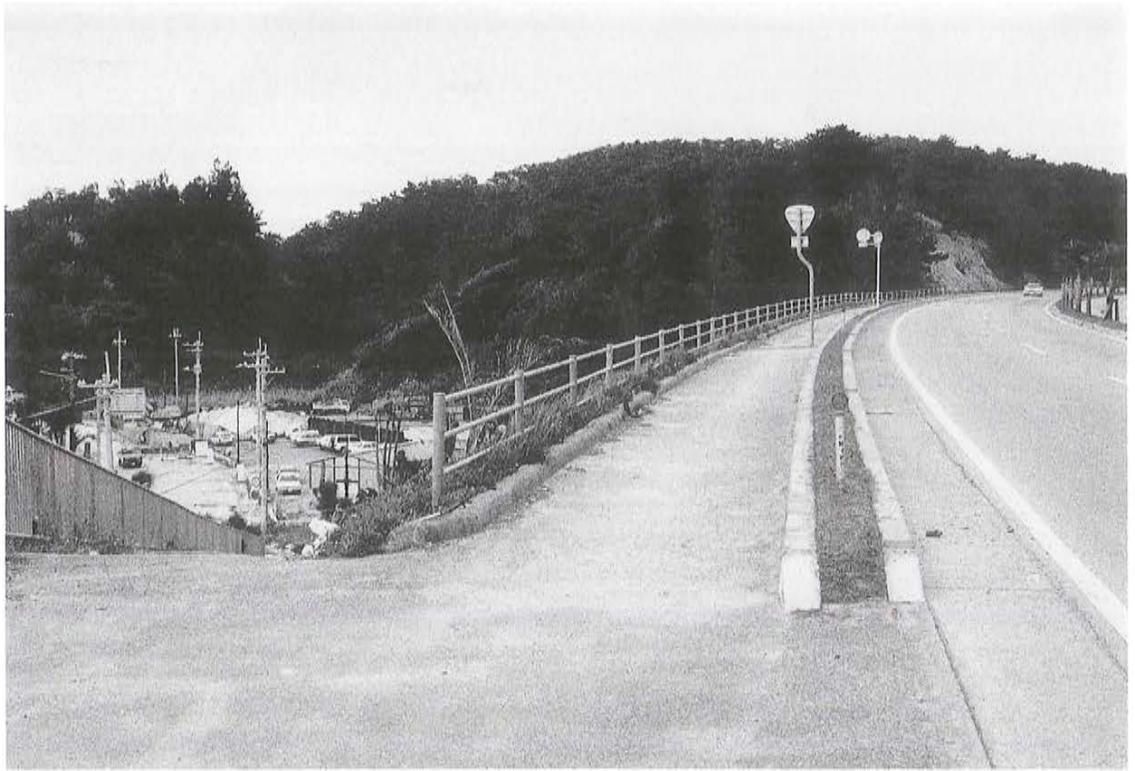
図版6 調査トレンチ 上：道路側壁面 下：旧道縁石



図版5 調査トレンチ 上：壁面状況 下：旧道縁石状況



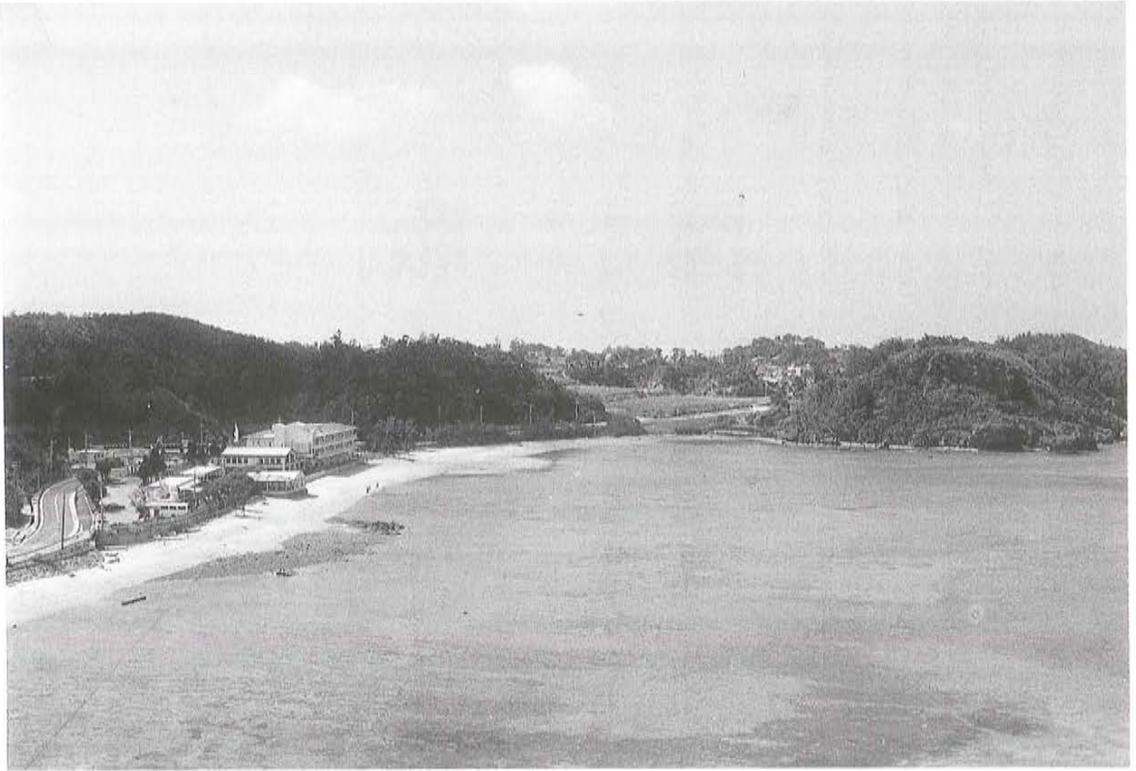
図版4 調査トレンチ状況



図版3 久良波貝塚 上：国道(左)と県道(右) 下：調査地区

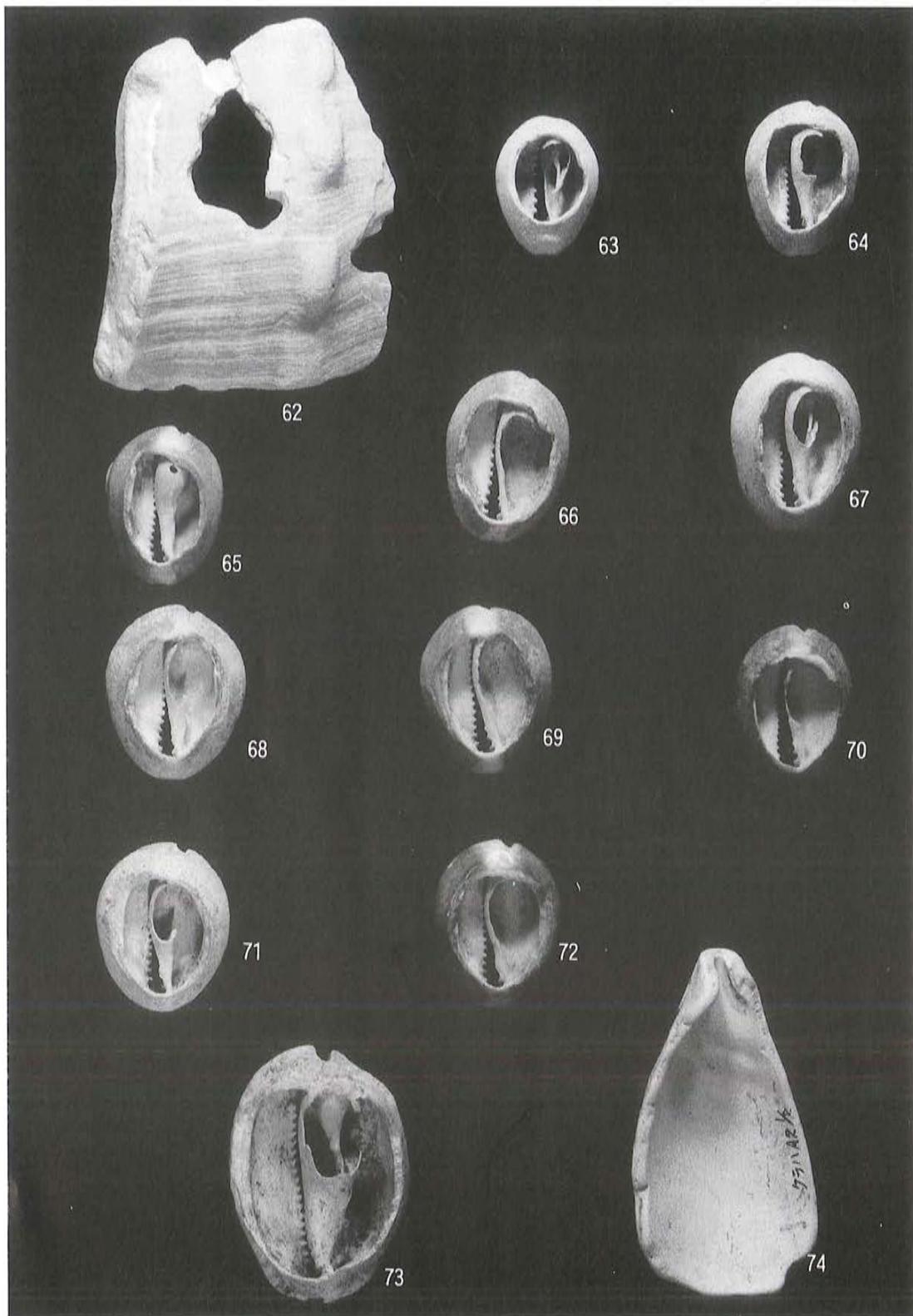


図版2 久良波貝塚近景
上：県道6号線と海岸のレストラン等
下：県道沿の調査トレンチ

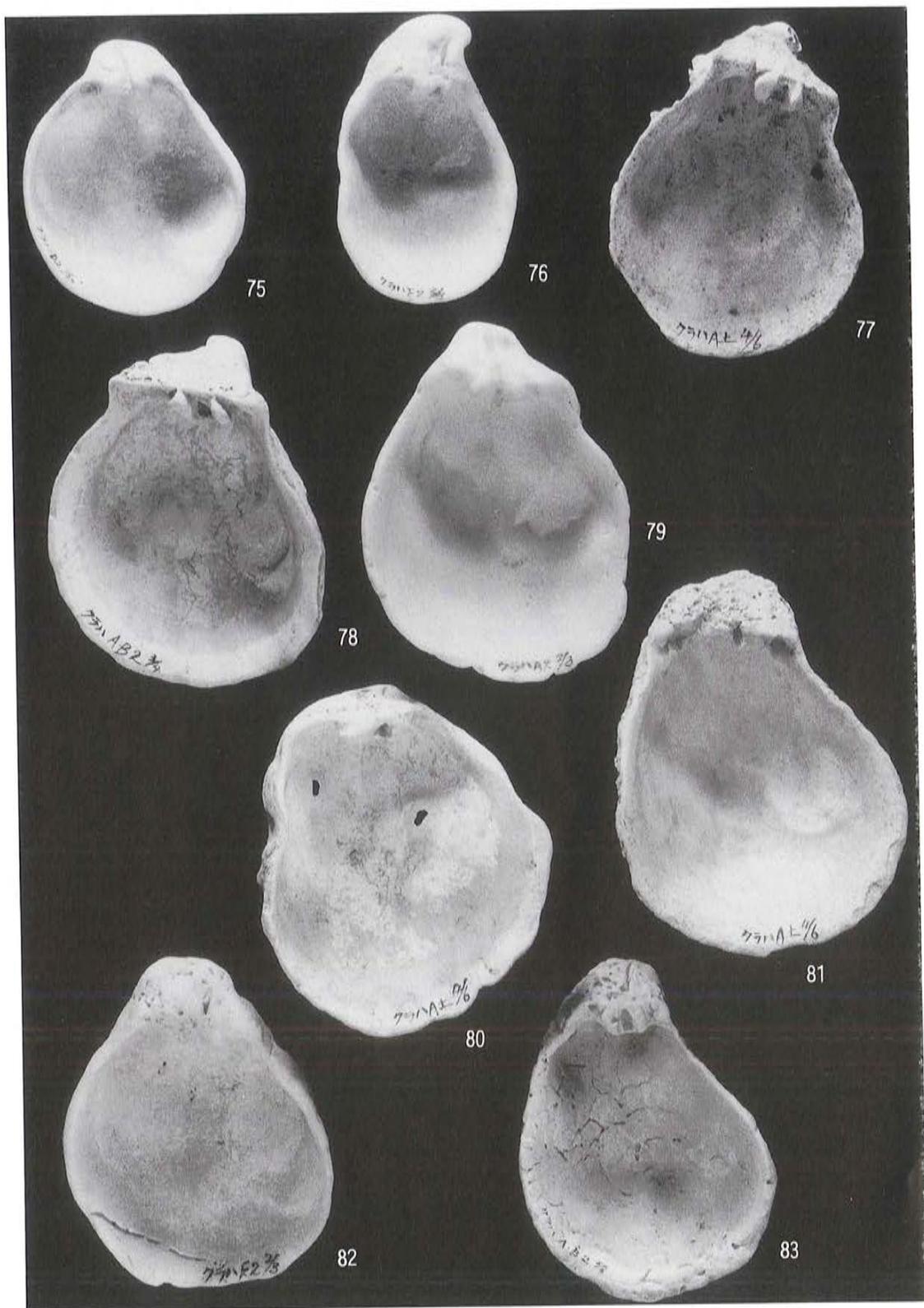


図版1 久良波貝塚遠景 上：久良波の海岸 下：左側は国道、右側が県道

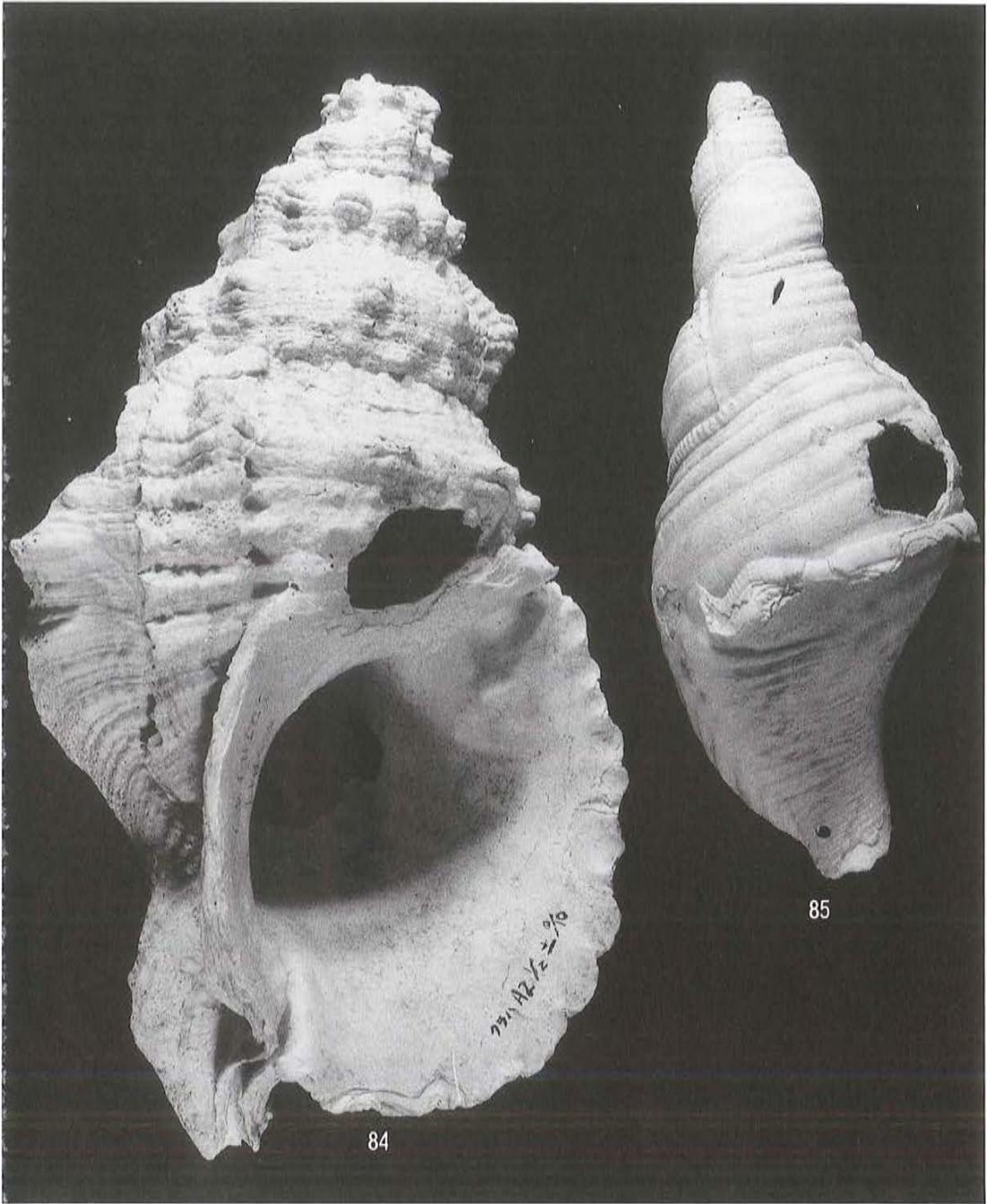
圖 版



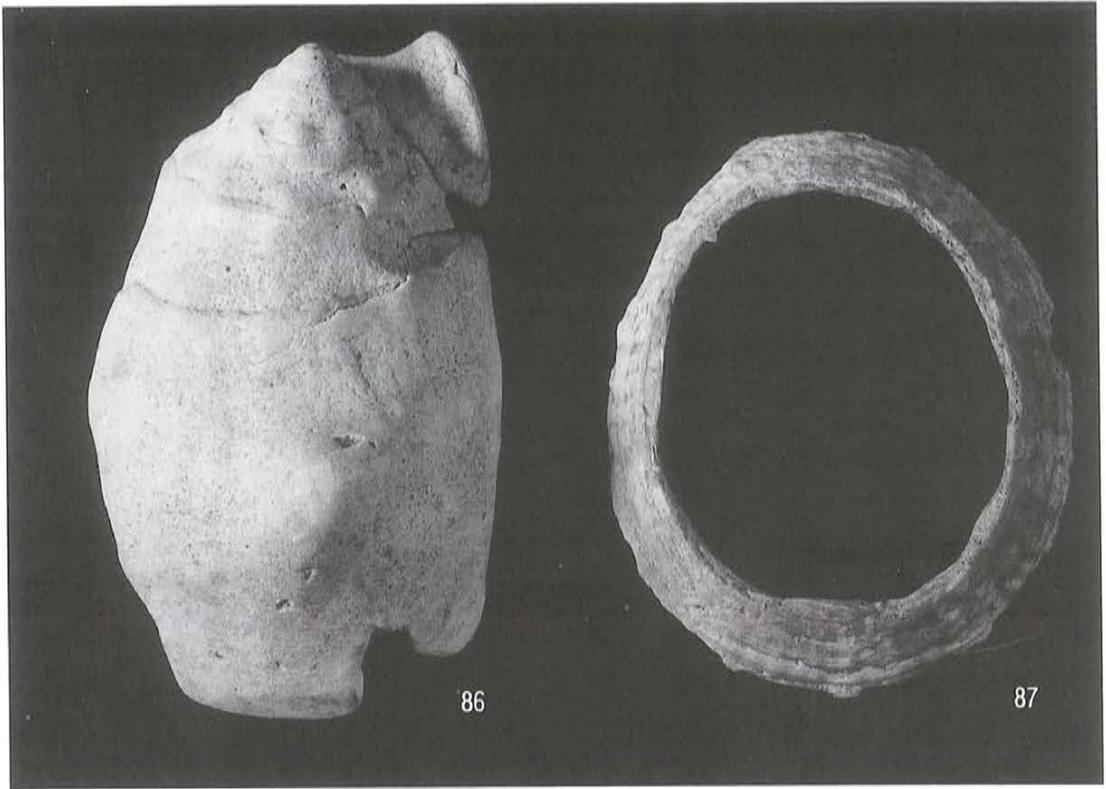
図版22 ヤコウガイ製品62 タカラガイ製品63～73 貝匙74



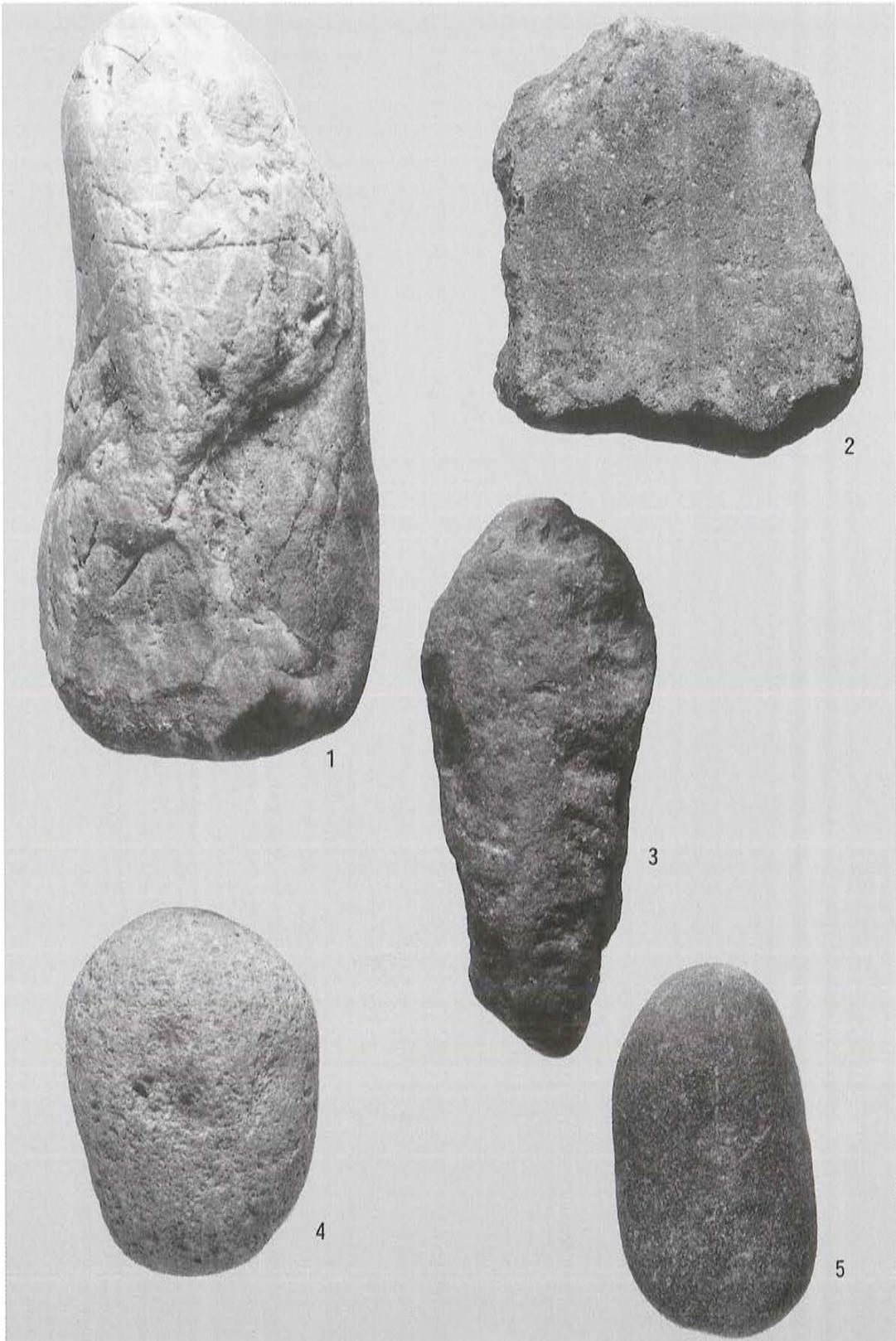
図版23 具匙 (メンガイ)



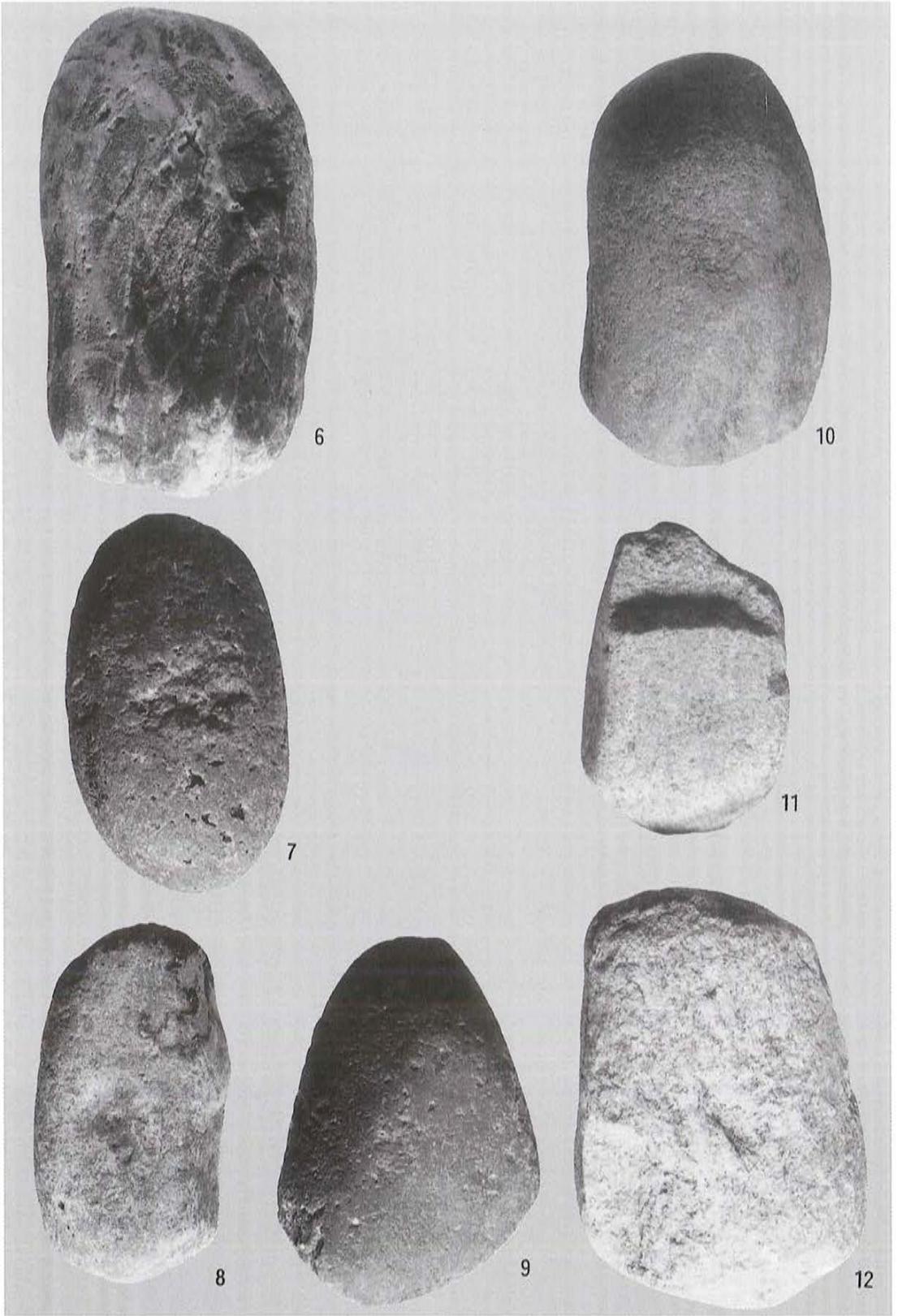
図版24 ホラガイ系有孔品



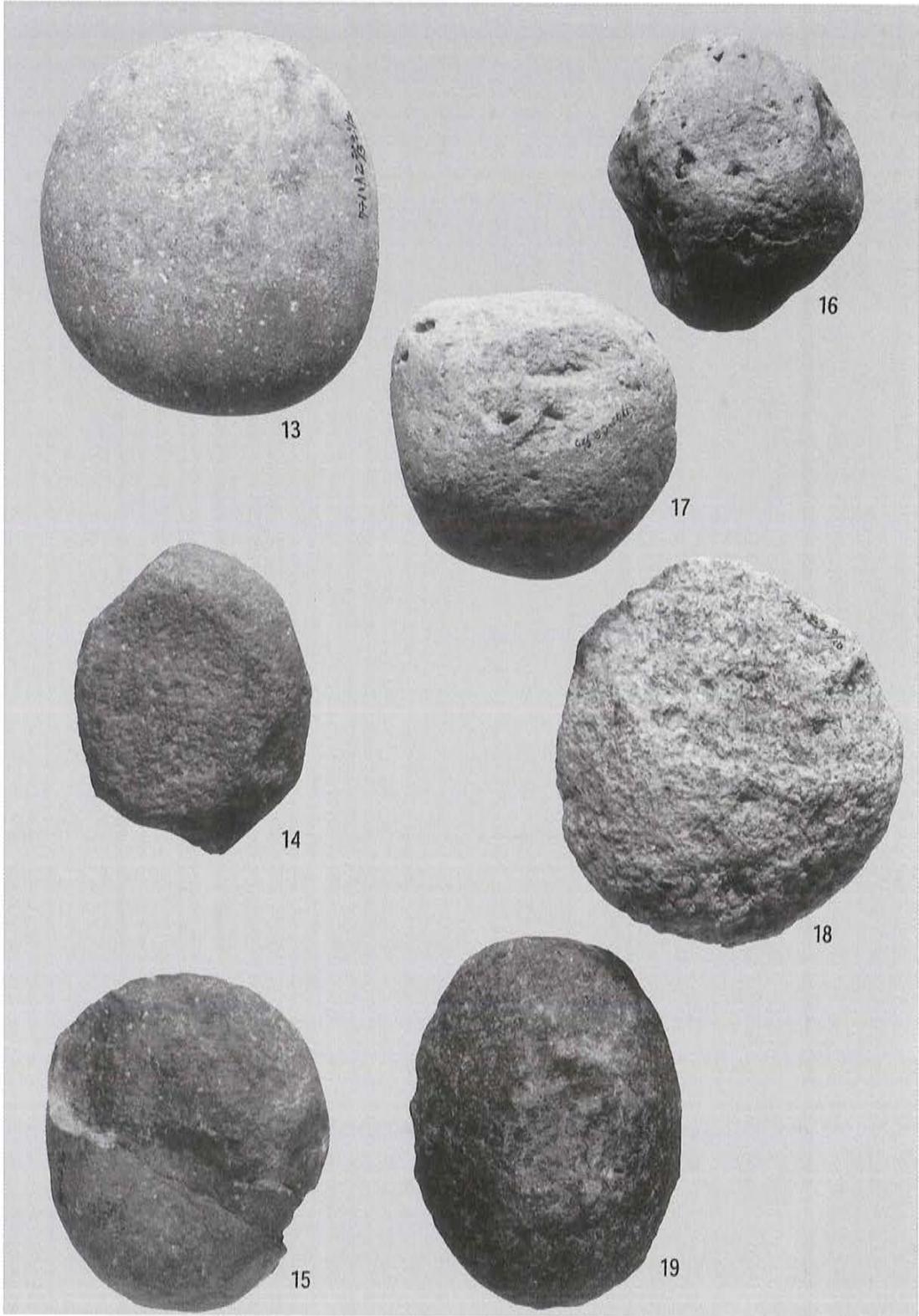
図版25 上：貝輪 ゴホウラ製品86 オオベッコウガサガイ製品87
下：Rosin (固形樹脂) 88



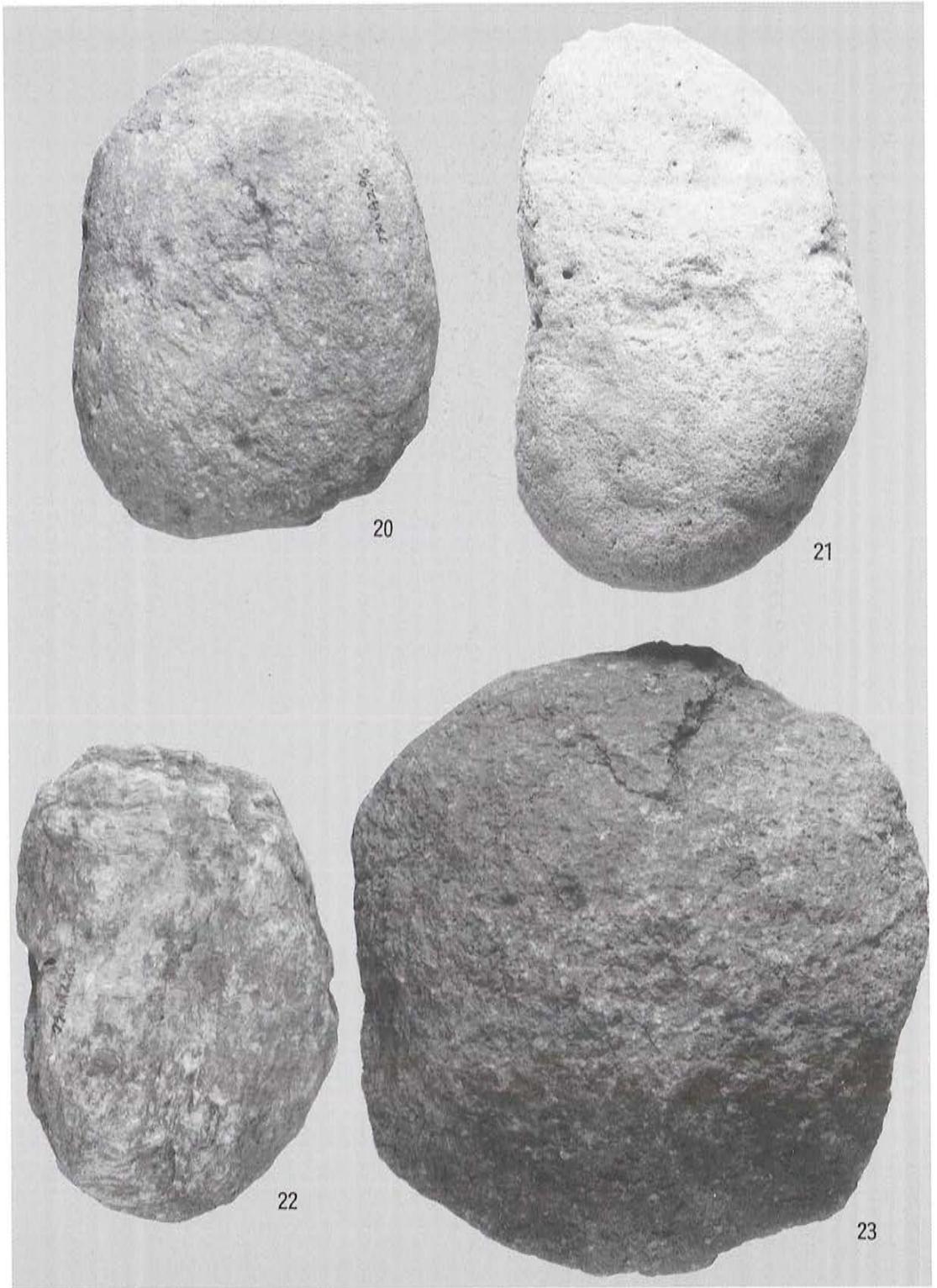
図版26 叩き石1、3 砥石2 凹石a類4、5



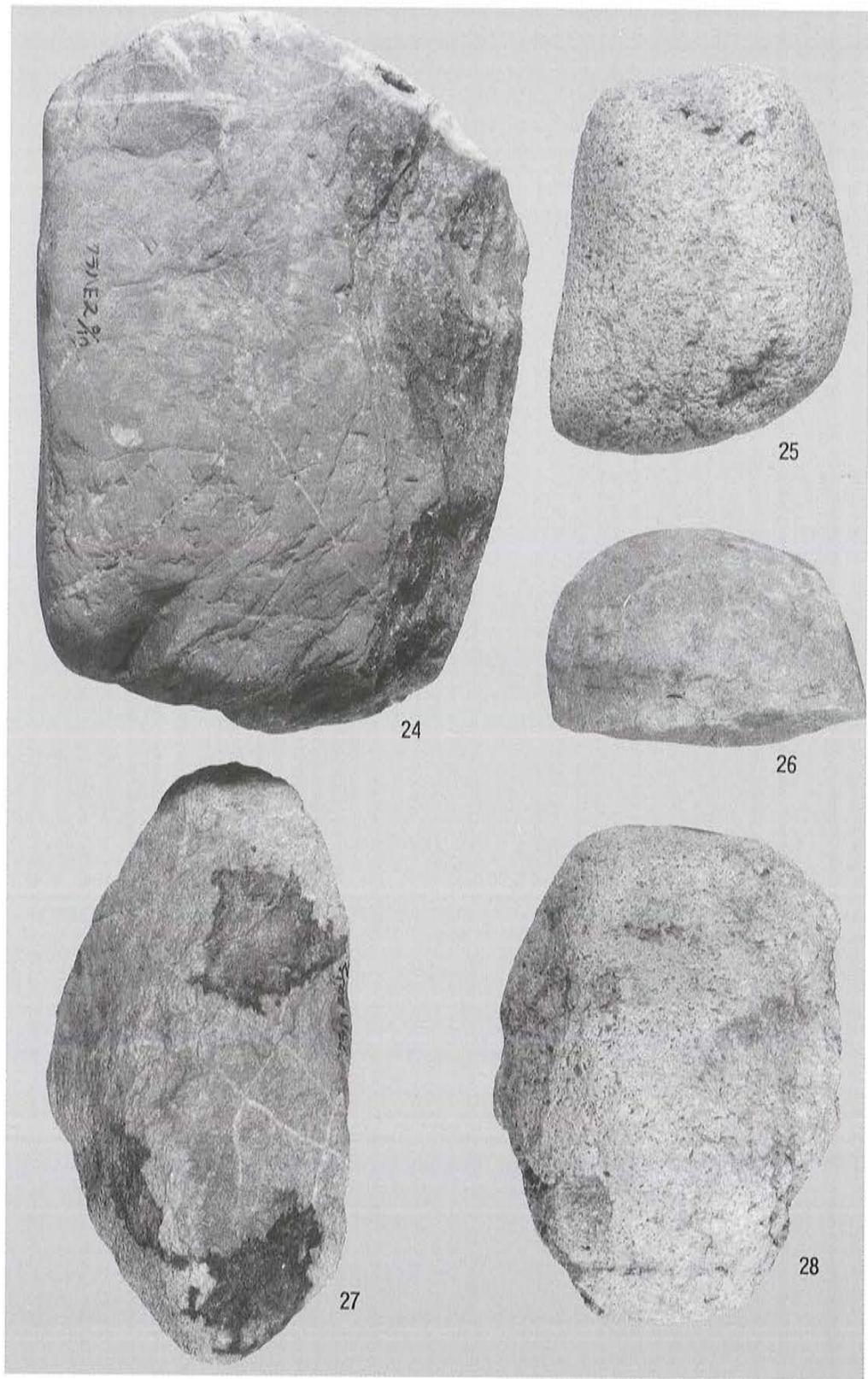
図版27 凹石類 a7、9 b類6、8、10、11、12



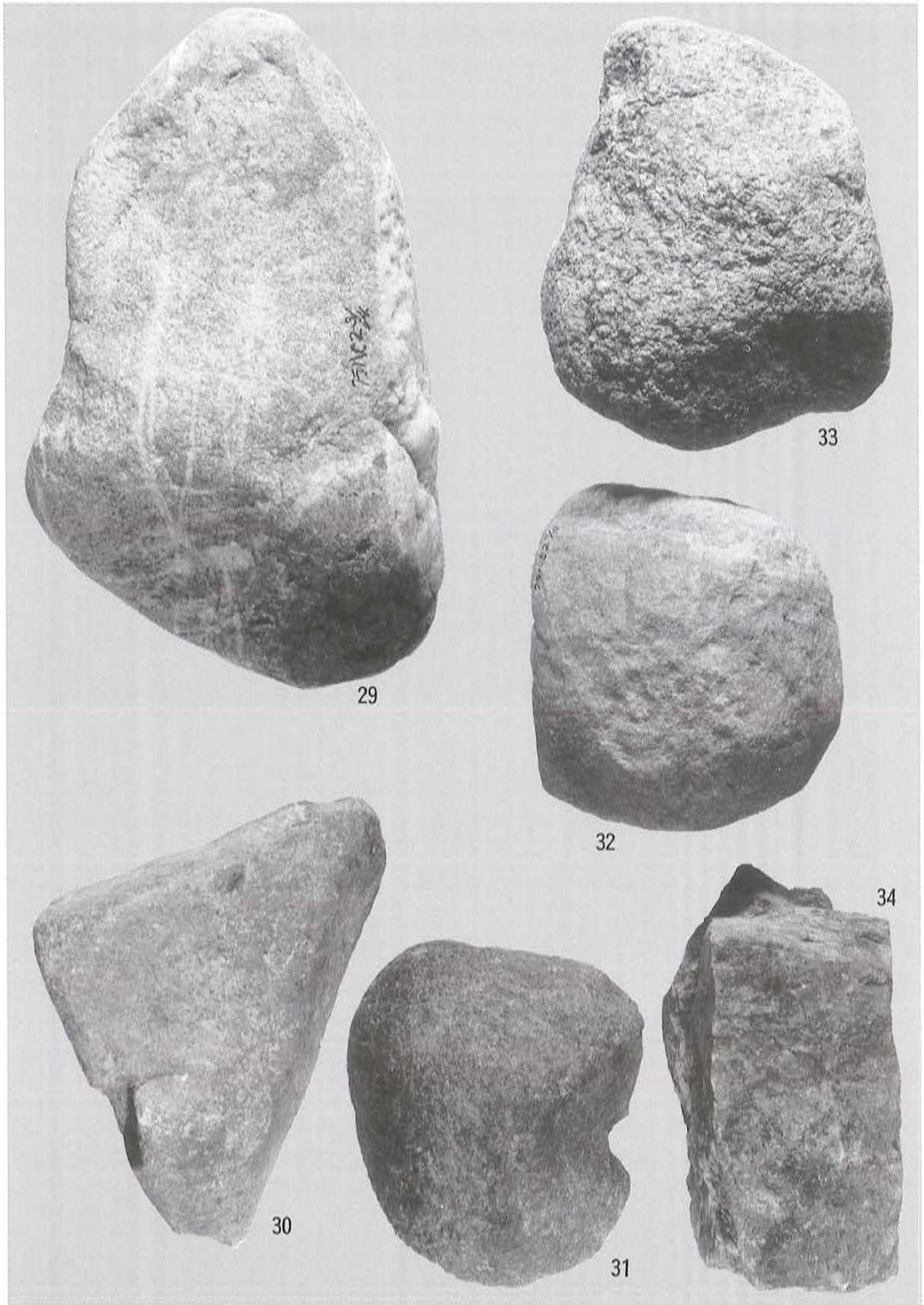
図版28 凹石c類13~19



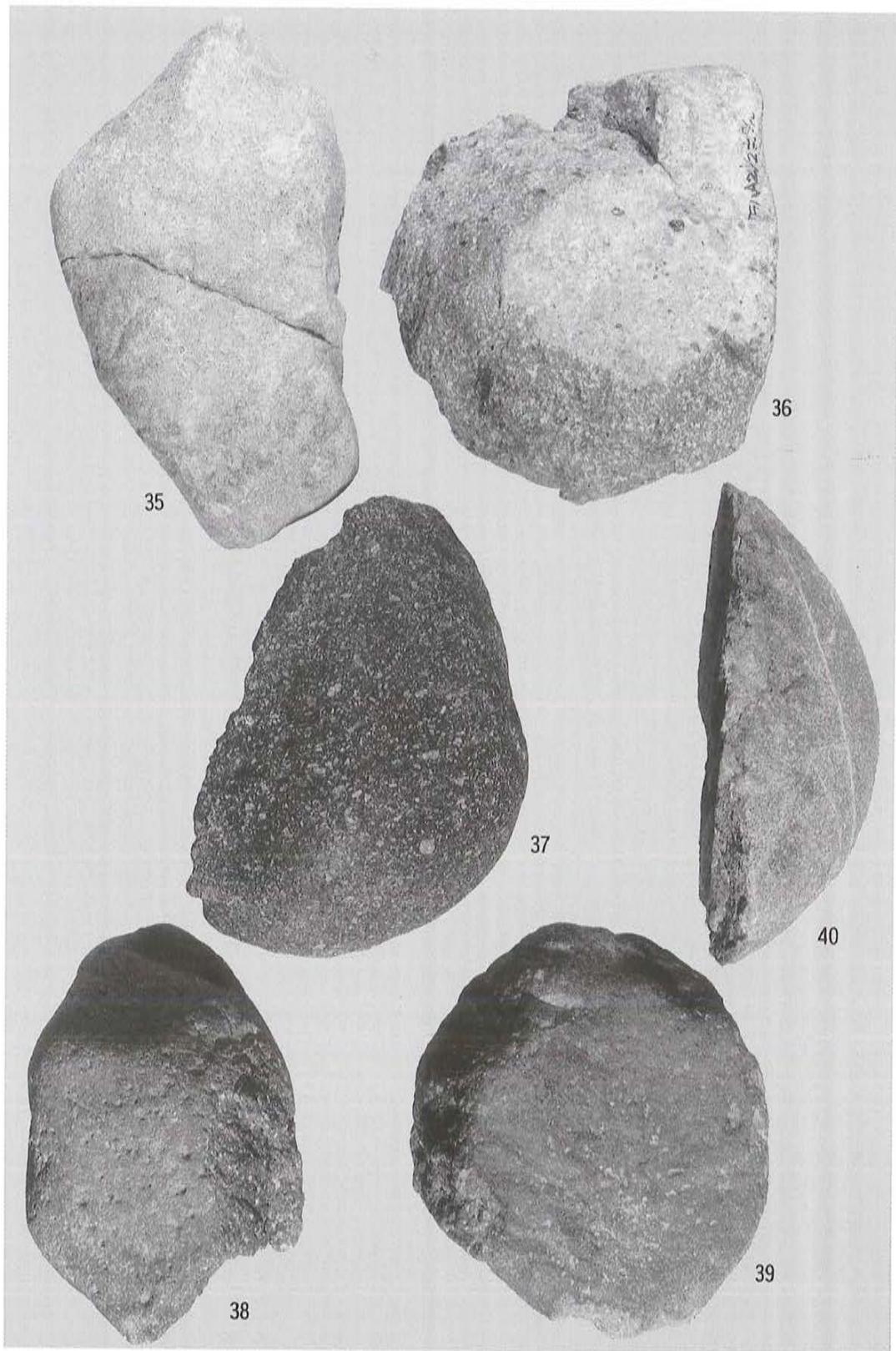
図版29 凹石d類20~23



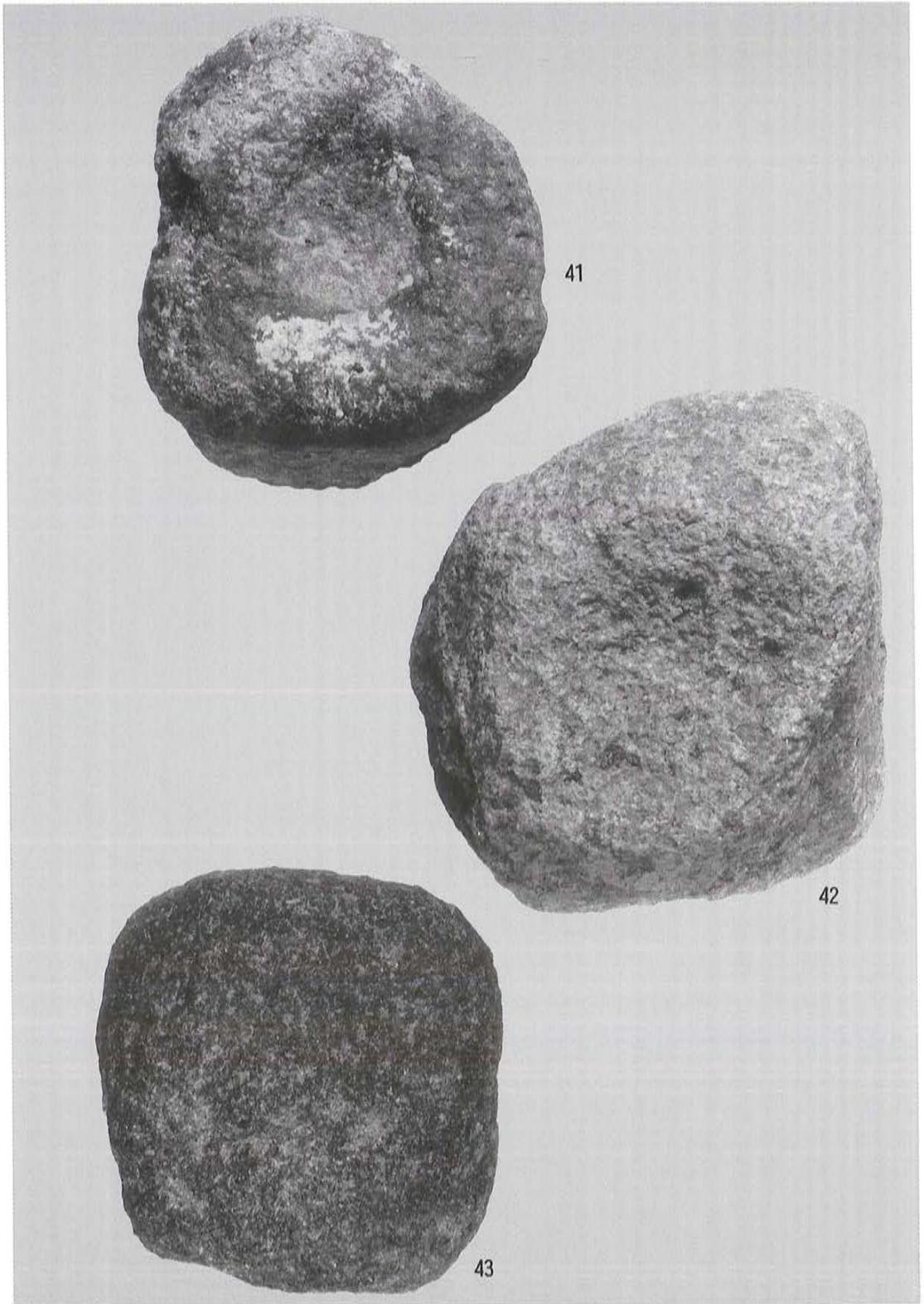
図版30 凹石d類24~28



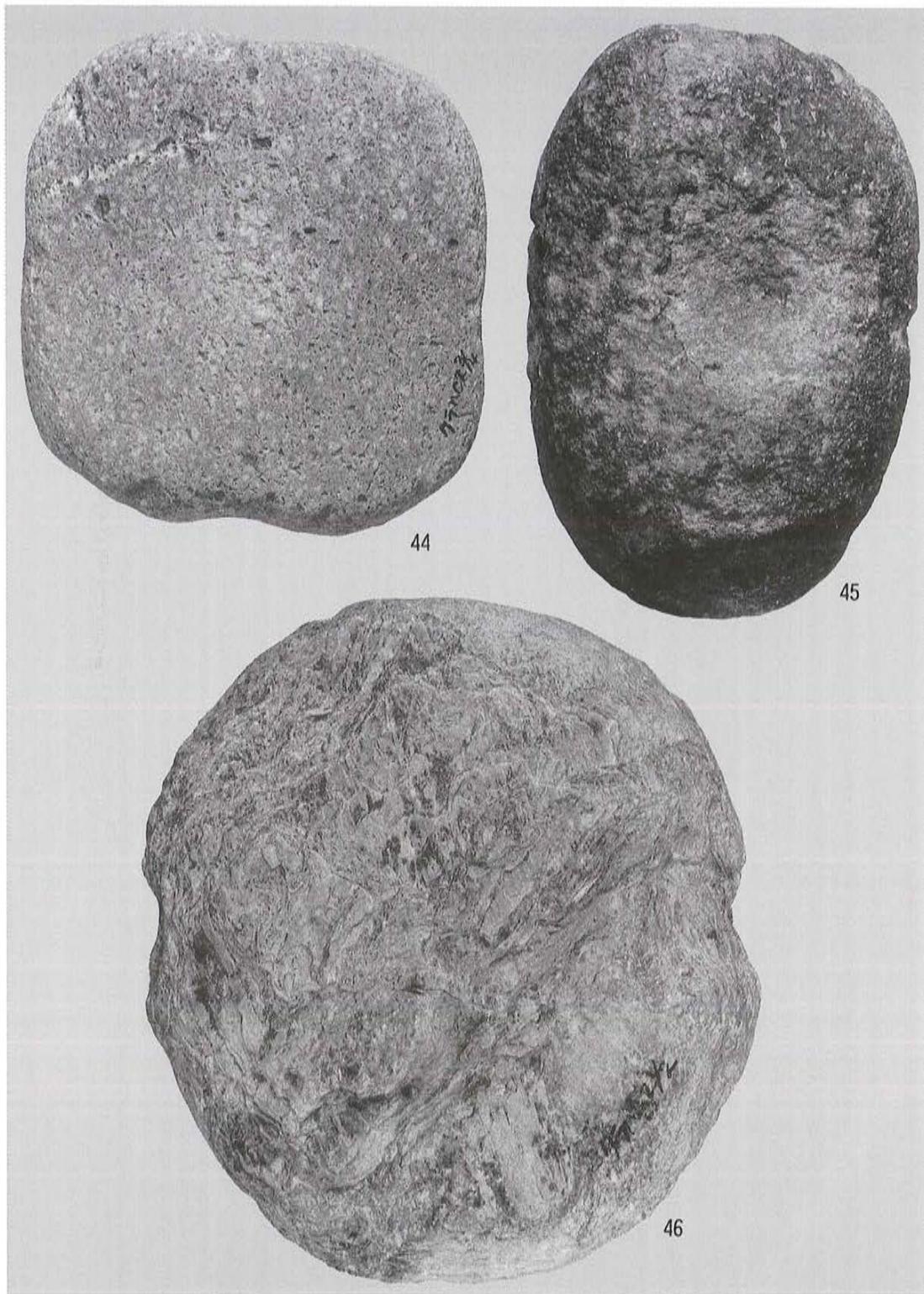
图版31 凹石d類29~34



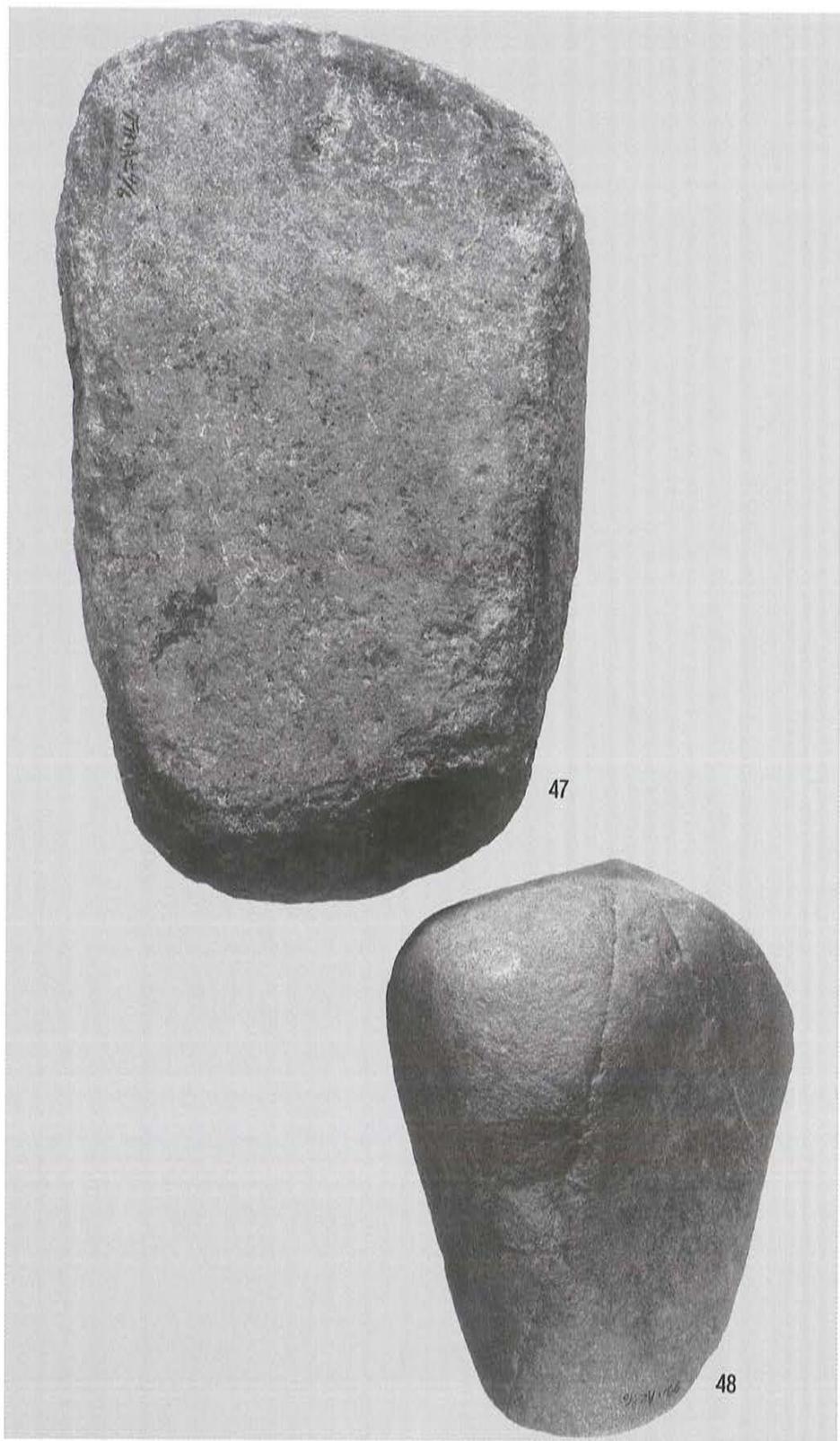
图版32 凹石e類35~40



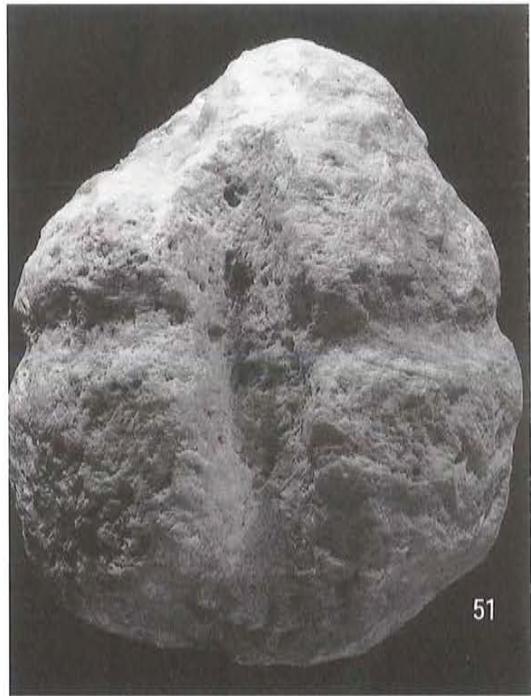
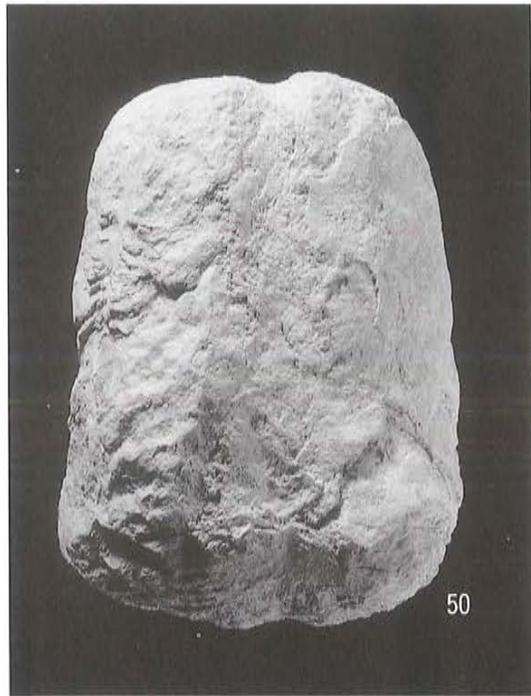
图版33 凹石f類41~43



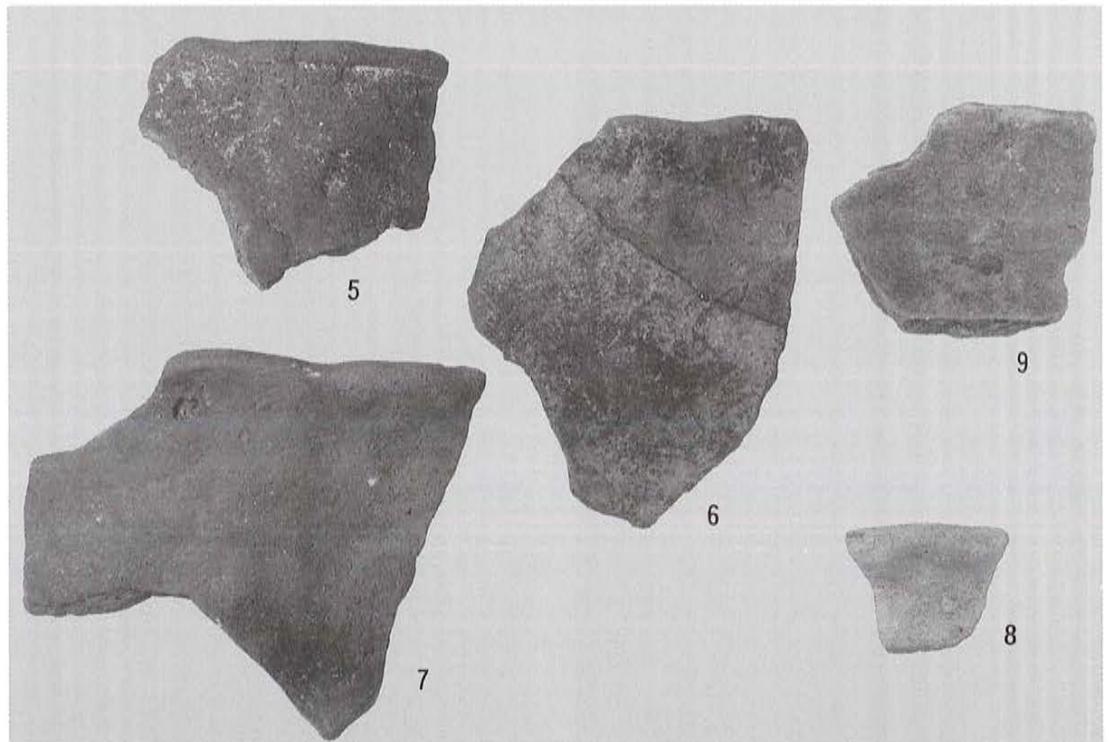
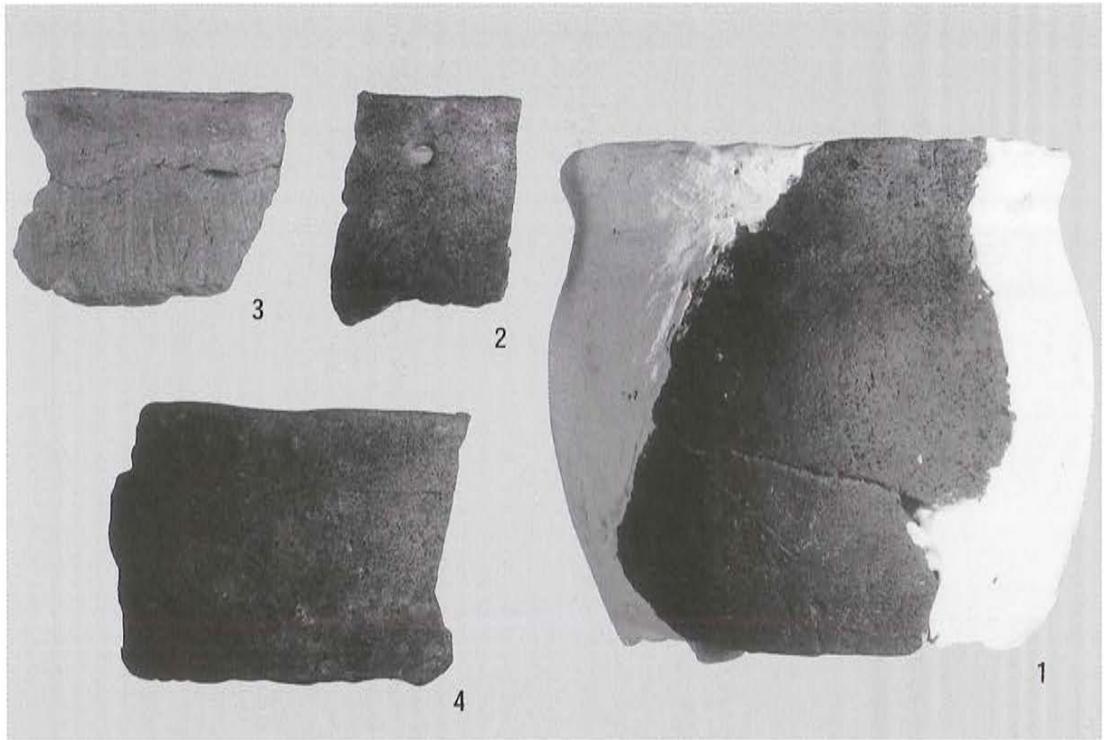
图版34 凹石 f 類44、45 石錘46



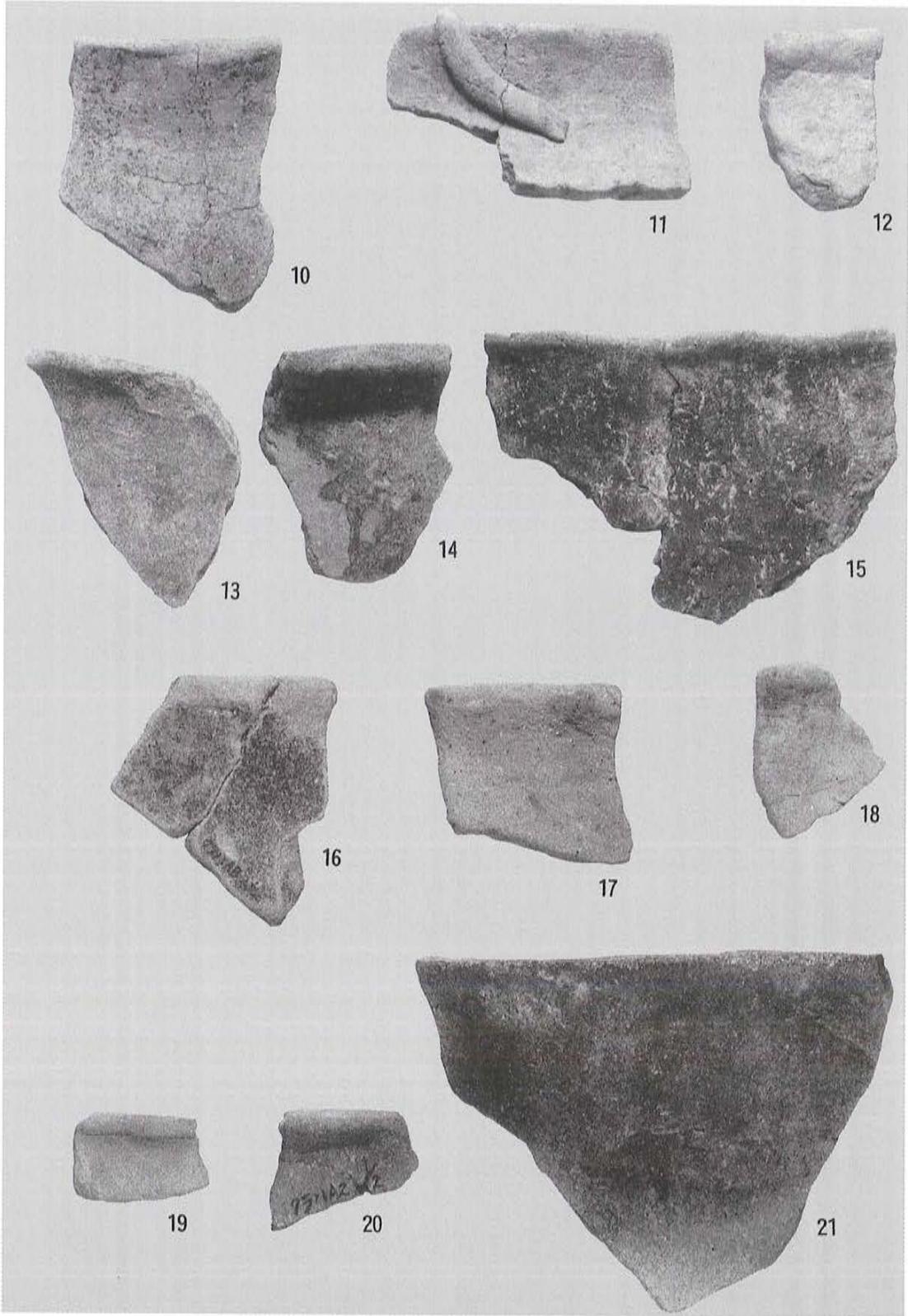
图版35 磨石47、48



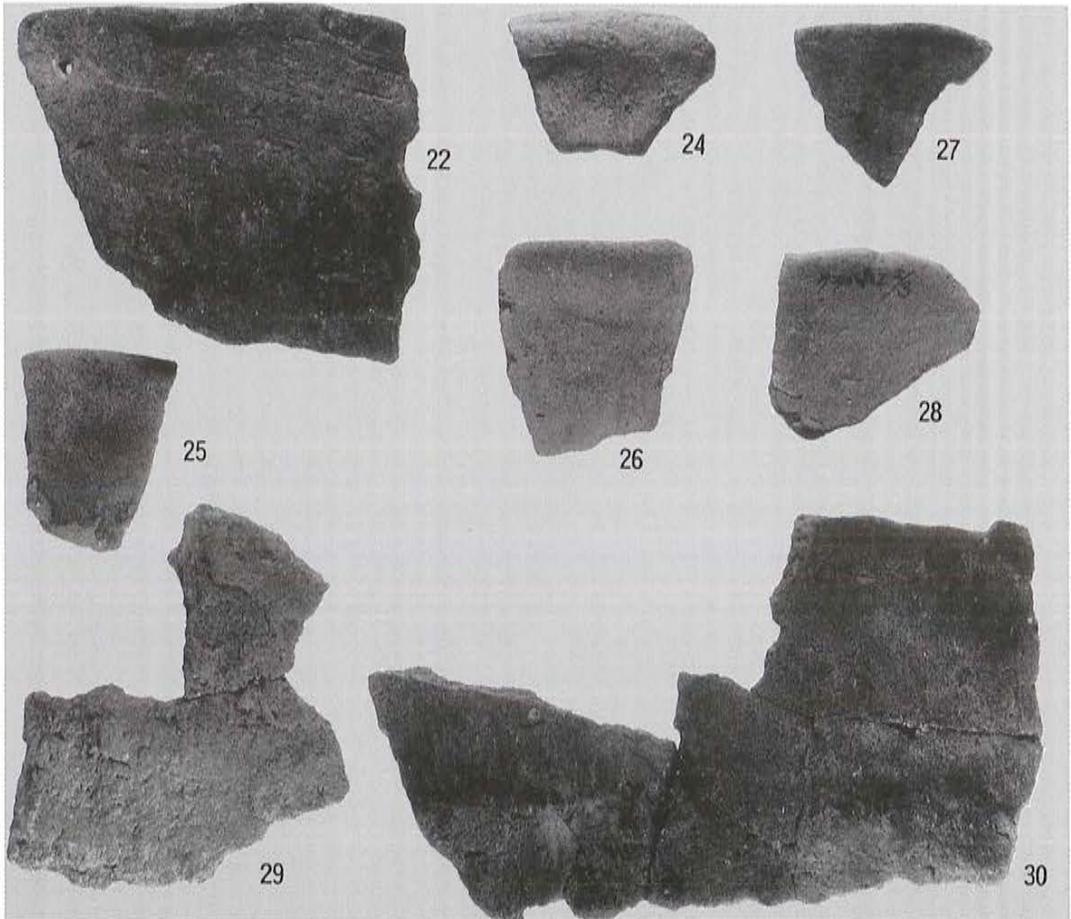
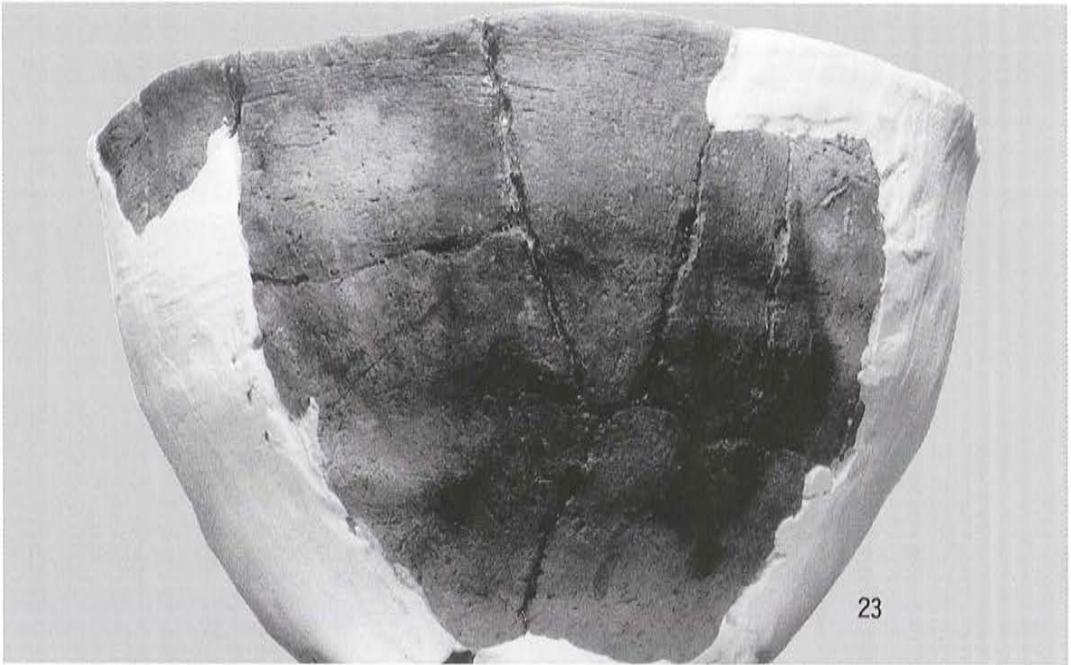
図版36 磨石49 石錘50、51



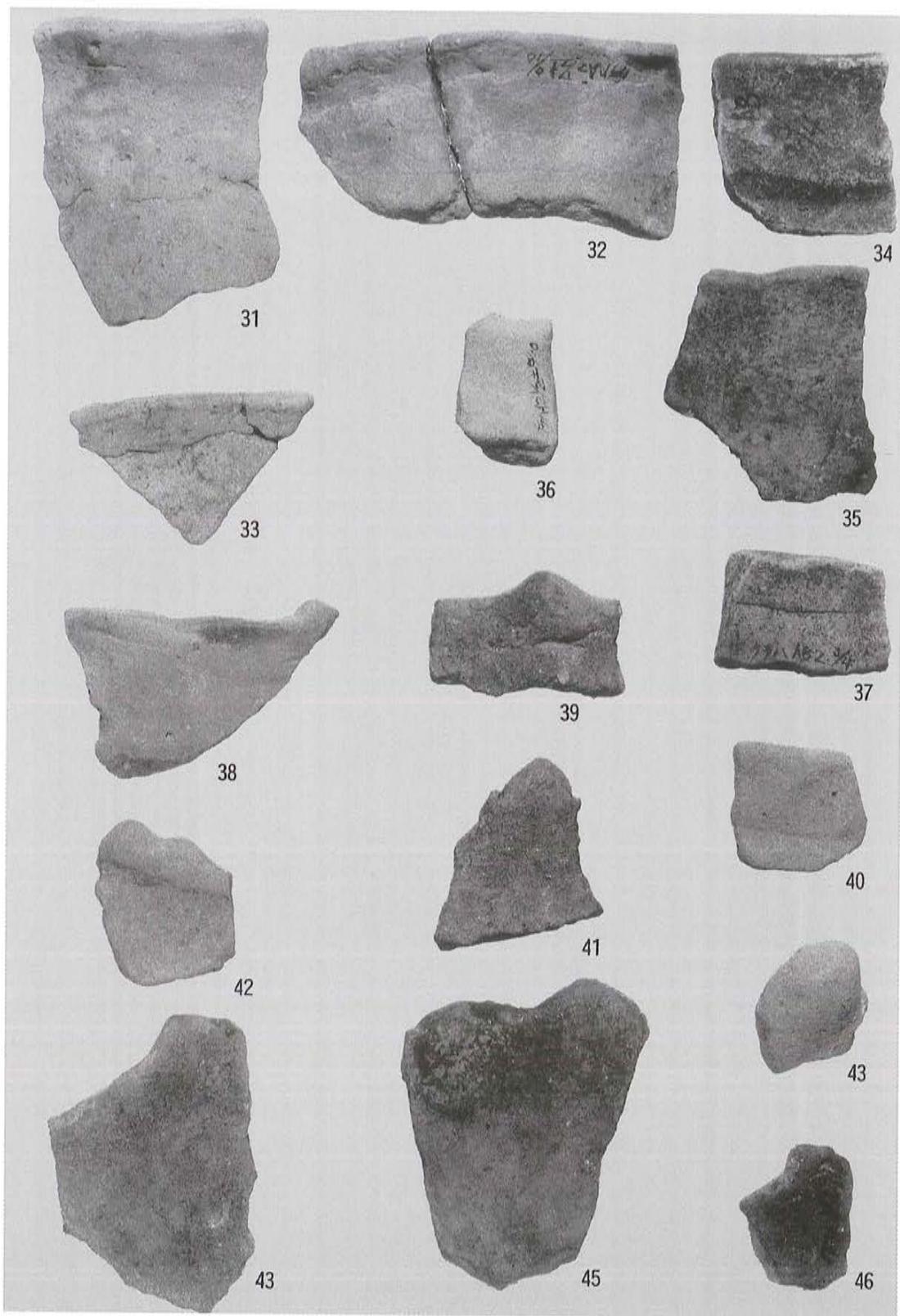
図版37 甕形土器a類1~4 b類5~7 c類8、9



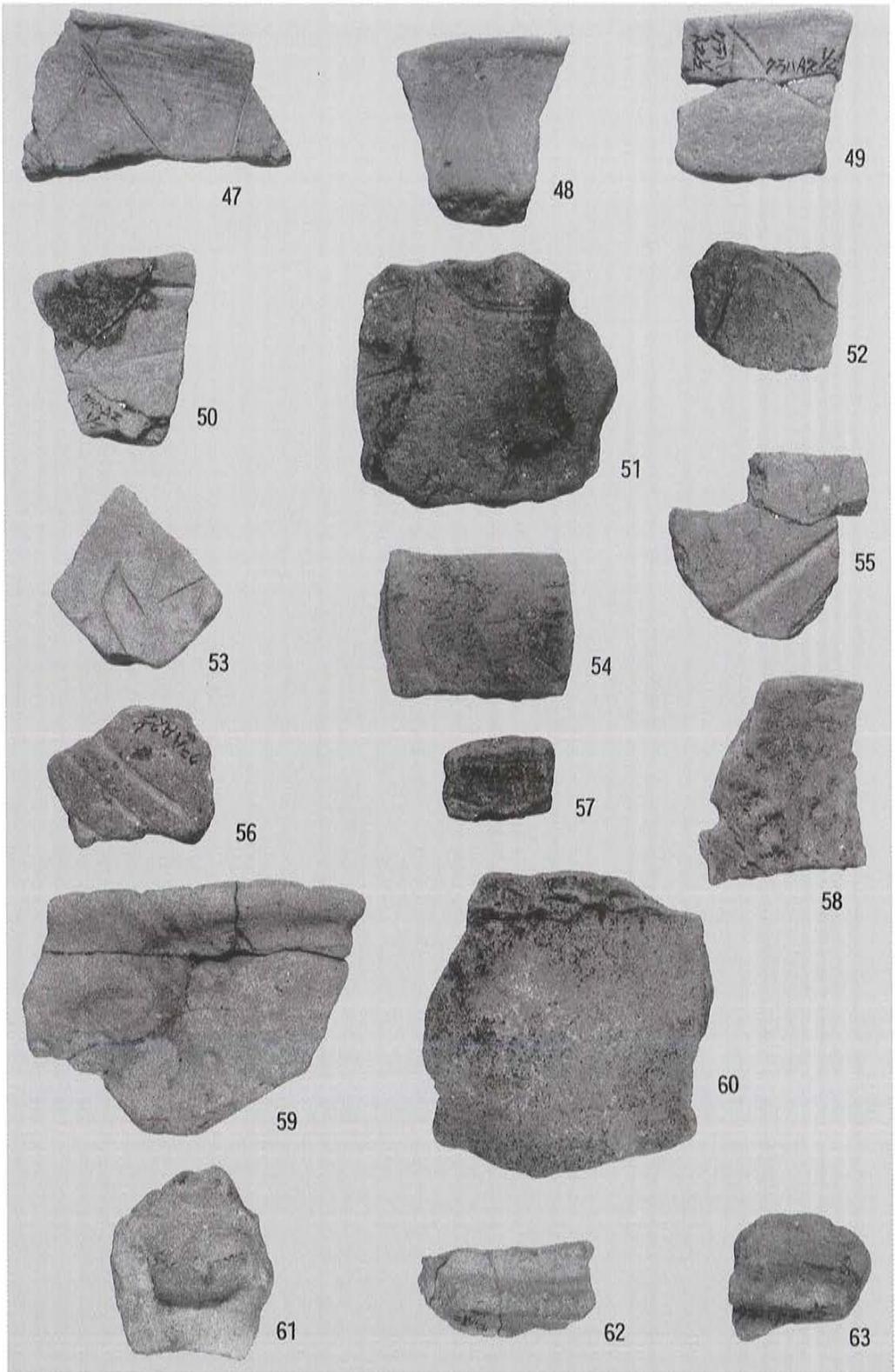
図版38 甕形土器10~20 鉢形土器21



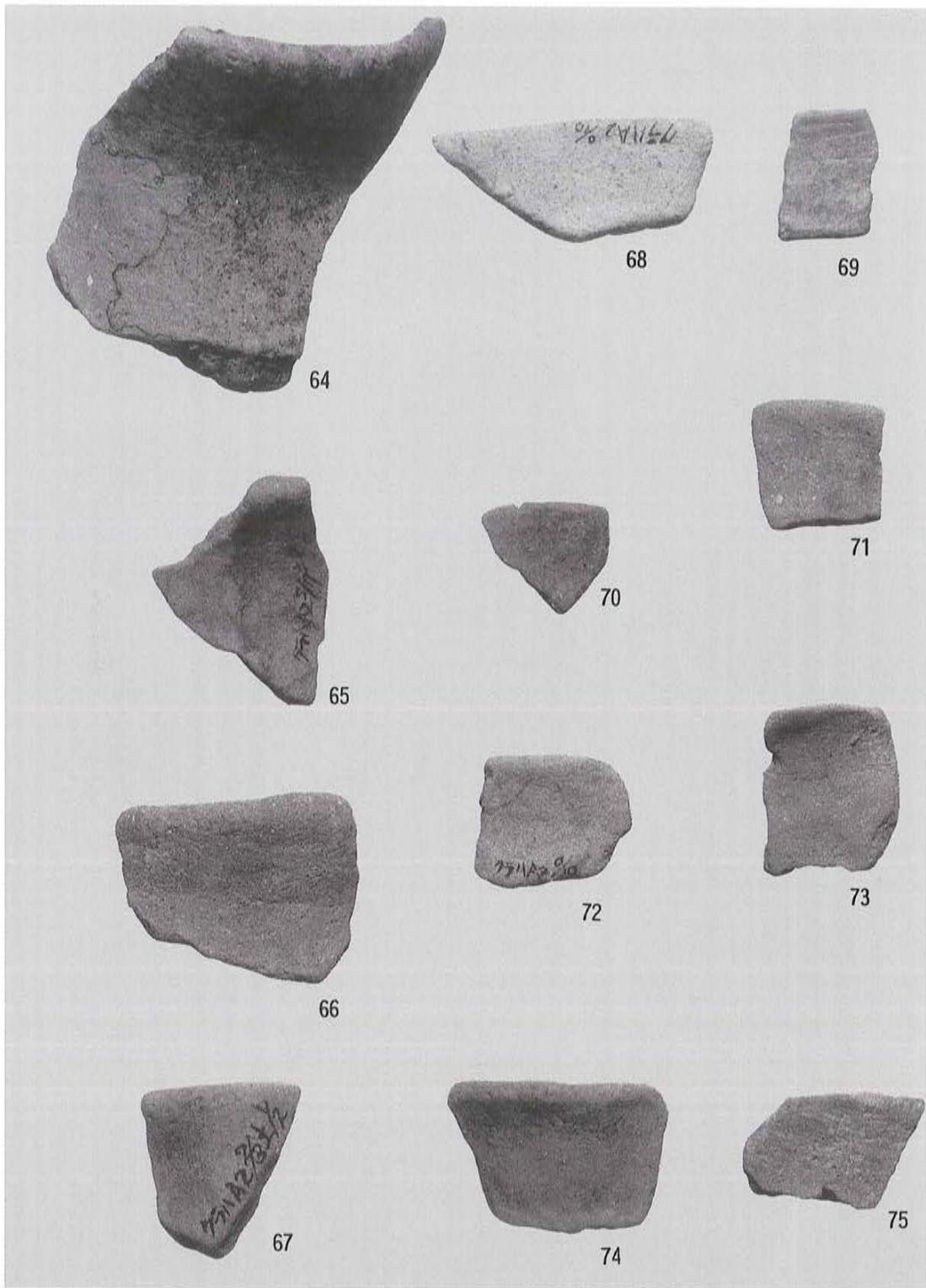
図版39 鉢形土器22~24、26~30 皿形土器25



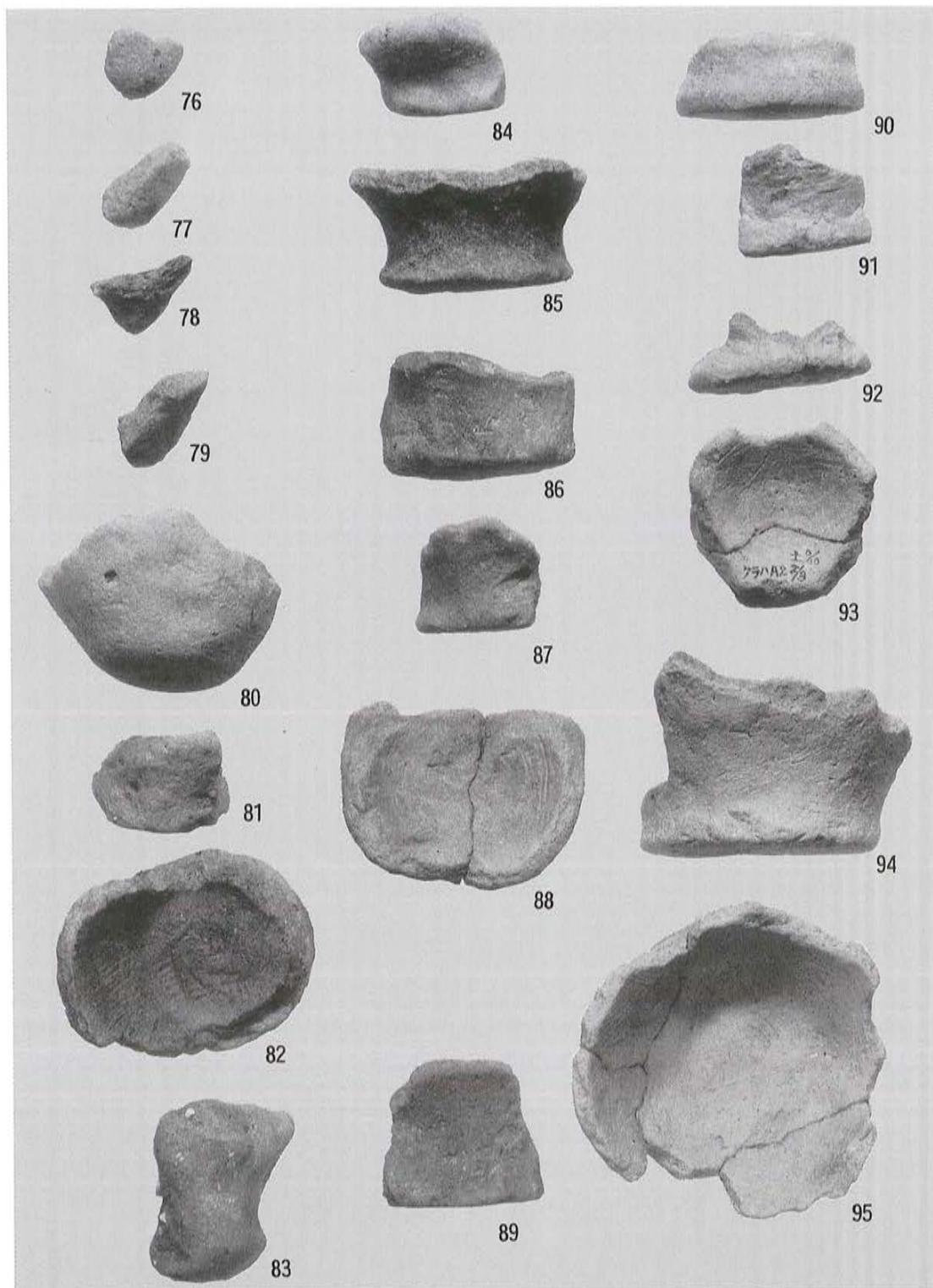
図版40 有段口縁部31~33、34~37、40 山形口縁部38、39、41~46



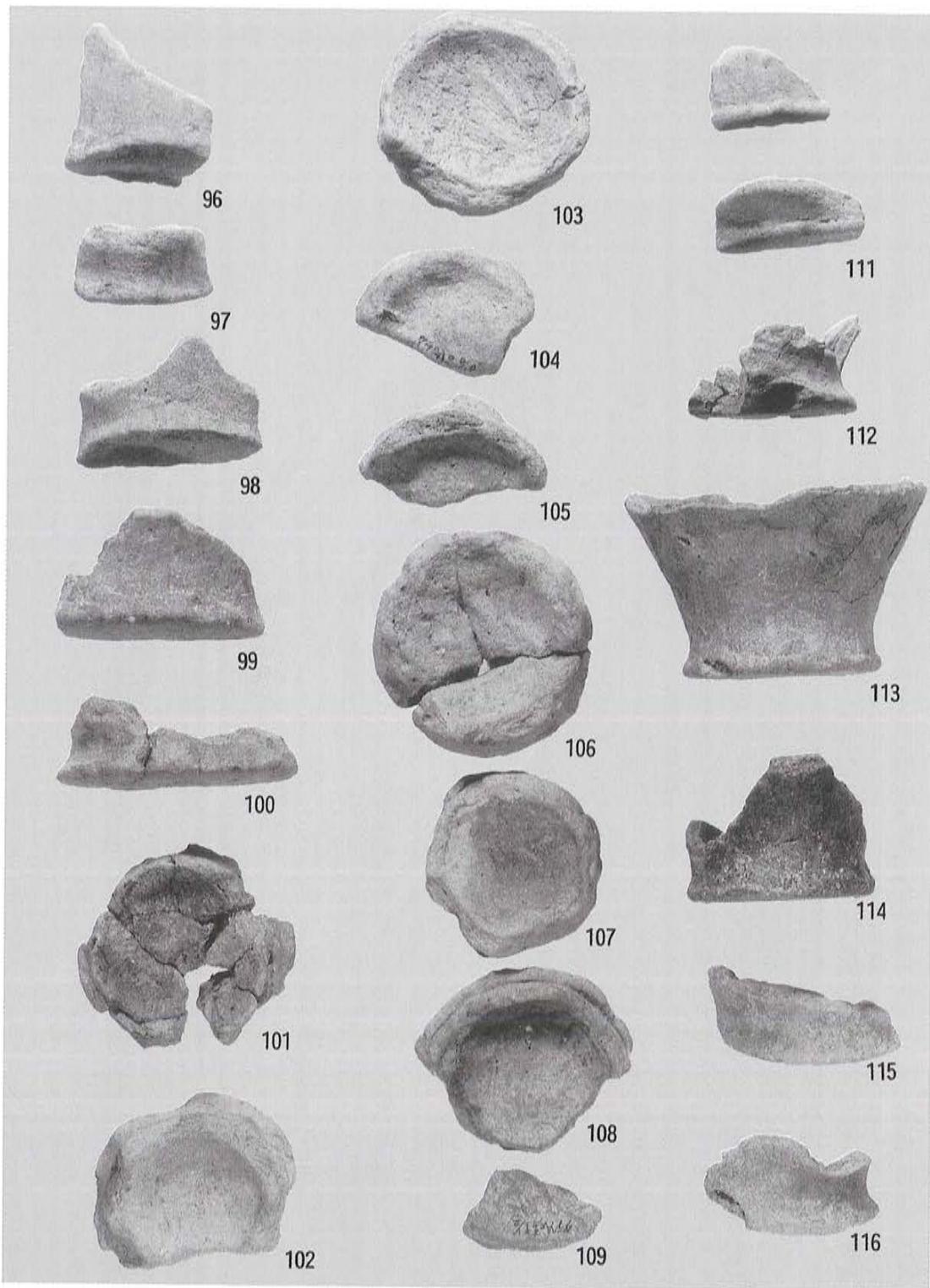
図版41 有文土器 口縁部47~50、58、59 胴部51~57、60~63



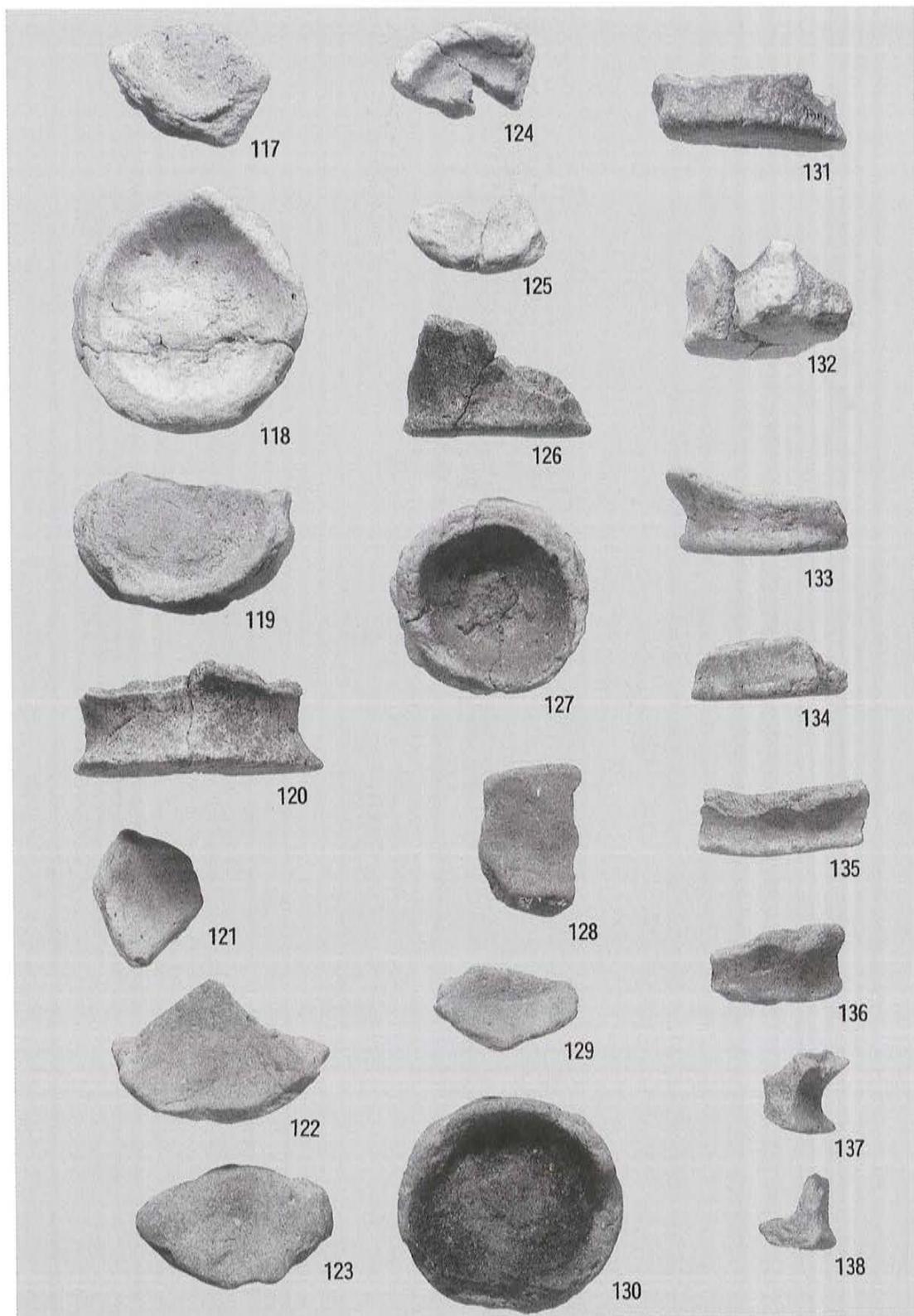
图版42 壺形土器



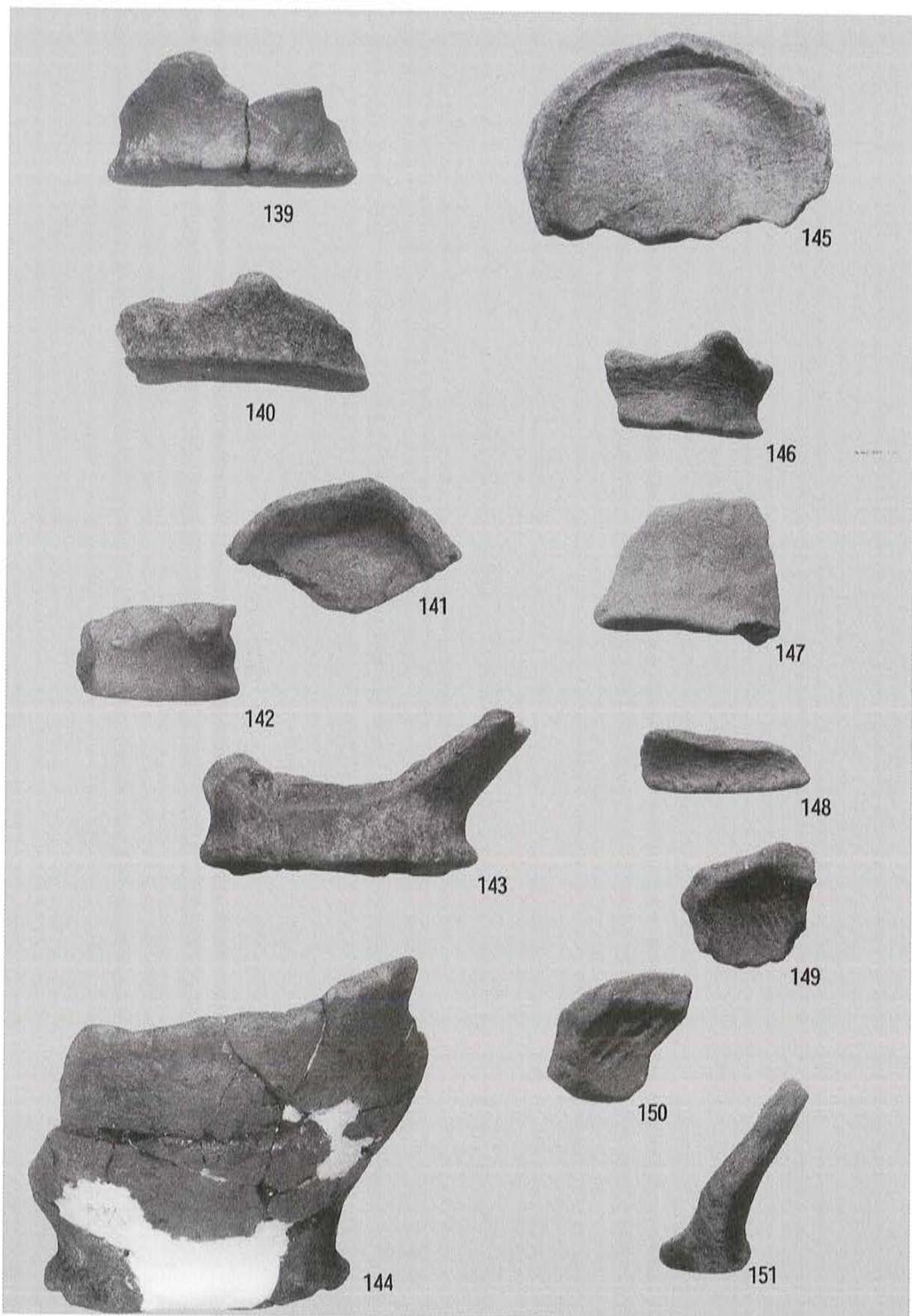
図版43 底部



图版44 底部

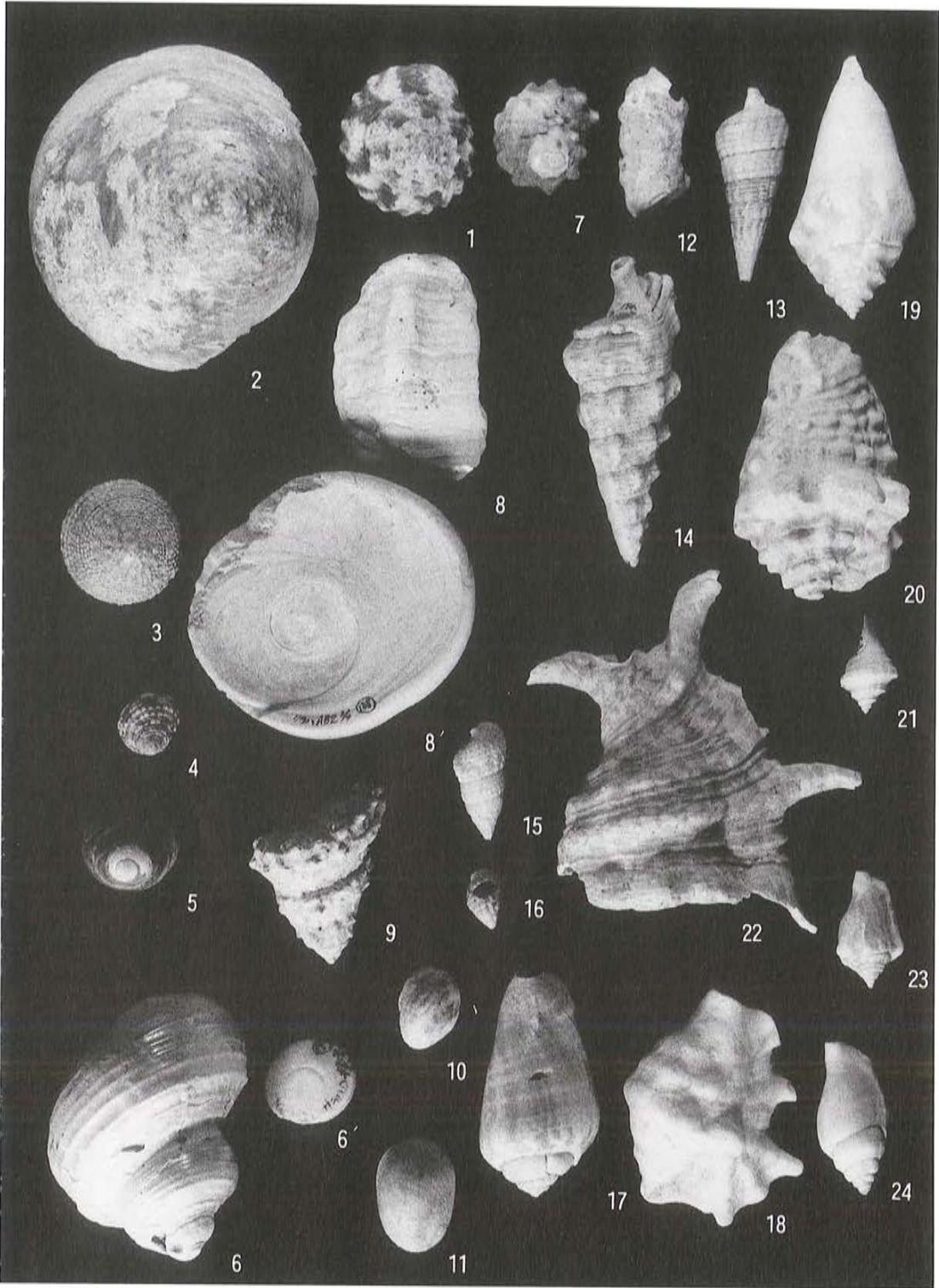


图版45 底部



图版46 底部

番号	科名	貝名
1	ニシキウズガイ科	サラサバテイ
2	〃	ギンタカハマ
3	〃	ニシキウズガイ
4	〃	オキナワイシダタミ
5	〃	ヒメクボガイ
6	リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ
6'	〃	チョウセンサザエのフタ
7	〃	カンギク
8	〃	ヤコウガイ
8'	〃	ヤコウガイのフタ
9	〃	オオウラウズガイ
10	アマオブネガイ科	アマオブネガイ
11	〃	ニシキアマオブネ
12	ムカデガイ科	ヘビガイ
13	ウミニナ科	キバウミニナ
14	オニノツノガイ科	オニノツノガイ
15	〃	クワノミカニモリガイ
16	〃	オオシマカニモリガイ
17	ソデガイ科	マガキガイ
18	〃	クモガイ
19	〃	クモガイ(幼)
20	〃	イボソデガイ
21	〃	イボソデガイ(幼)
22	〃	スイジガイ
23	〃	ムカシタモトガイ
24	〃	ネジマガキガイ



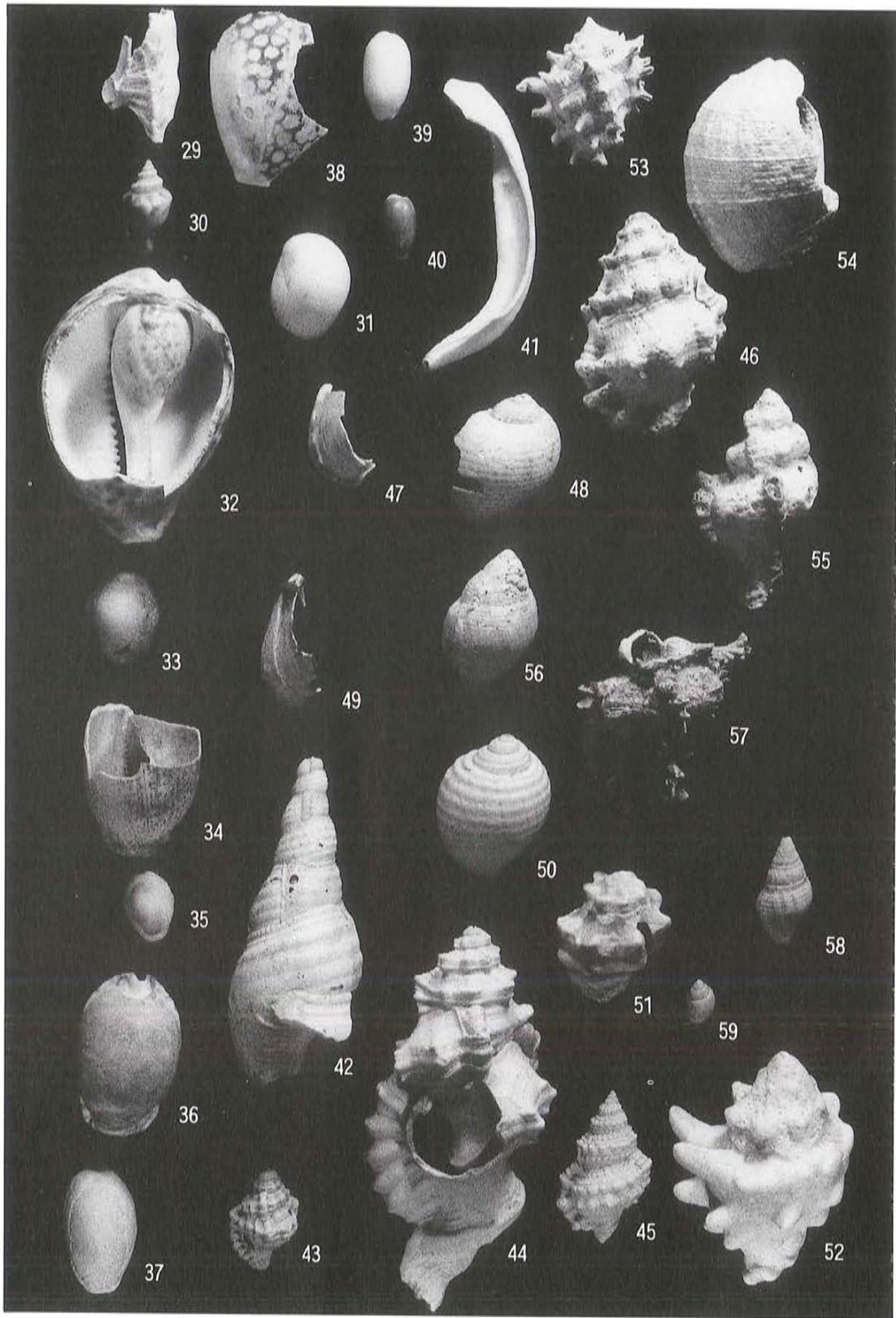
图版47 卷貝

番号	科名	貝名
25	ソデガイ科	ラクダガイ
26	々	マイノソデ
27	々	ゴホウラ
28	々	ゴホウラ(幼)



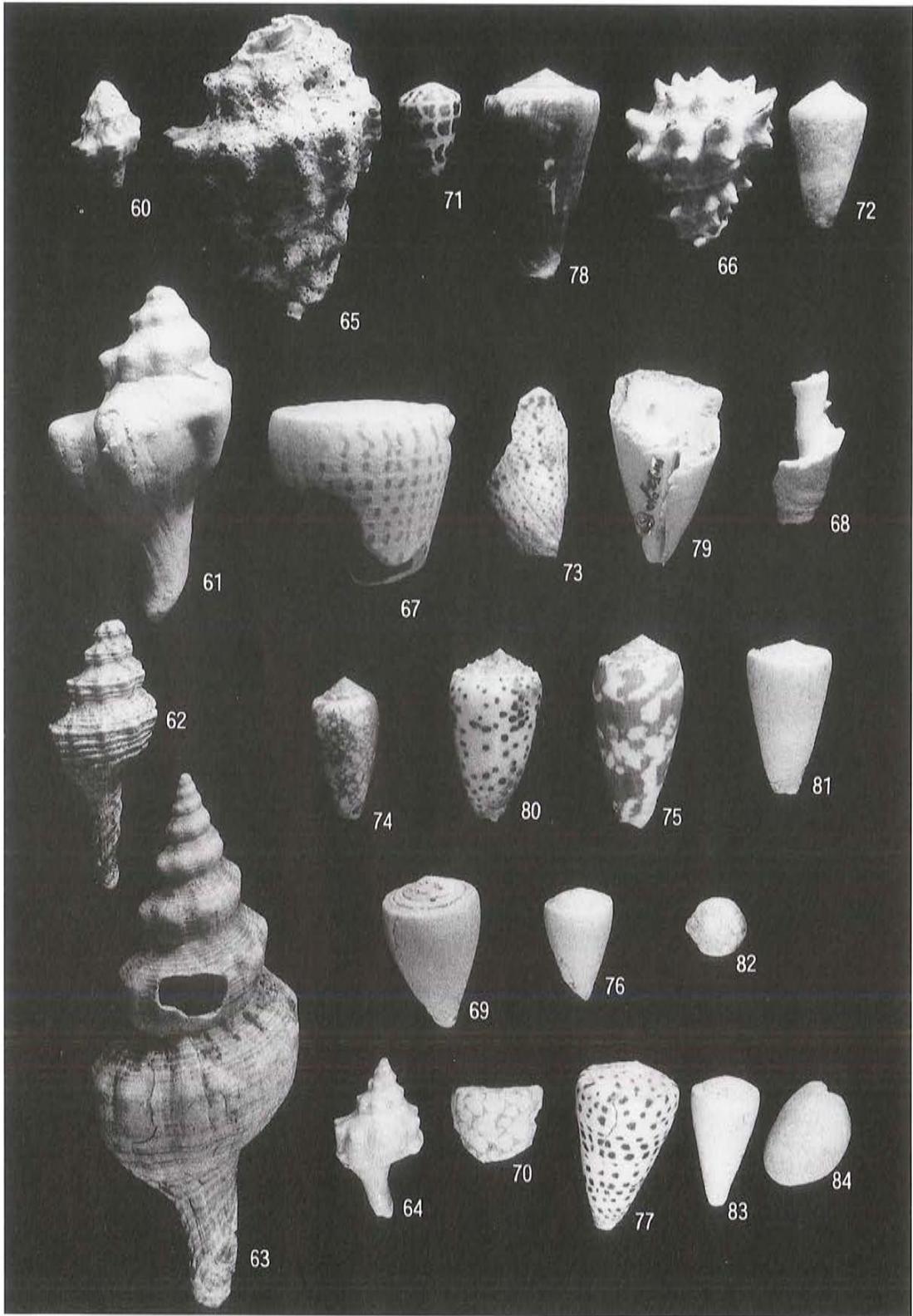
图版48 卷貝

番号	科名	貝名
29	ソデガイ科	ウラスジマイノソデガイ
30	〃	オハグロガイ
31	タマガイ科	ヘソアキトミガイ
32	タカラガイ科	ホシダカラガイ
33	〃	ハナマルユキガイ
34	〃	ホソヤクジマタカラガイ
35	〃	ハナヒラタカラガイ
36	〃	ヤクジマタカラガイ
37	〃	コモンタカラガイ
38	〃	ハチジョウダカラガイ
39	〃	ヤナギシボリタカラガイ
40	〃	ナツメガイモドキ
41	ウミウサギガイ科	ウミウサギ
42	フジツガイ科	ホラガイ
43	〃	シオボラ
44	〃	フジツガイ
45	〃	サツマボラ
46	オキニシ科	オキニシ
47	ヤツシロガイ科	ヒナズルガイ
48	〃	スクミウズラガイ
49	〃	イワカワトキワガイ
50	〃	ウズラガイ
51	アクキガイ科	ツノレイシガイ
52	〃	シラクモガイ
53	〃	アカイガレイシ
54	〃	ホソスジテツボラ
55	〃	ガンゼキボラ
56	〃	ハナワレイシガイ
57	〃	センジュモドキ
58	エゾバイ科	シマベッコウバイ
59	オリレヨウバイ科	ヒメヨウバイ



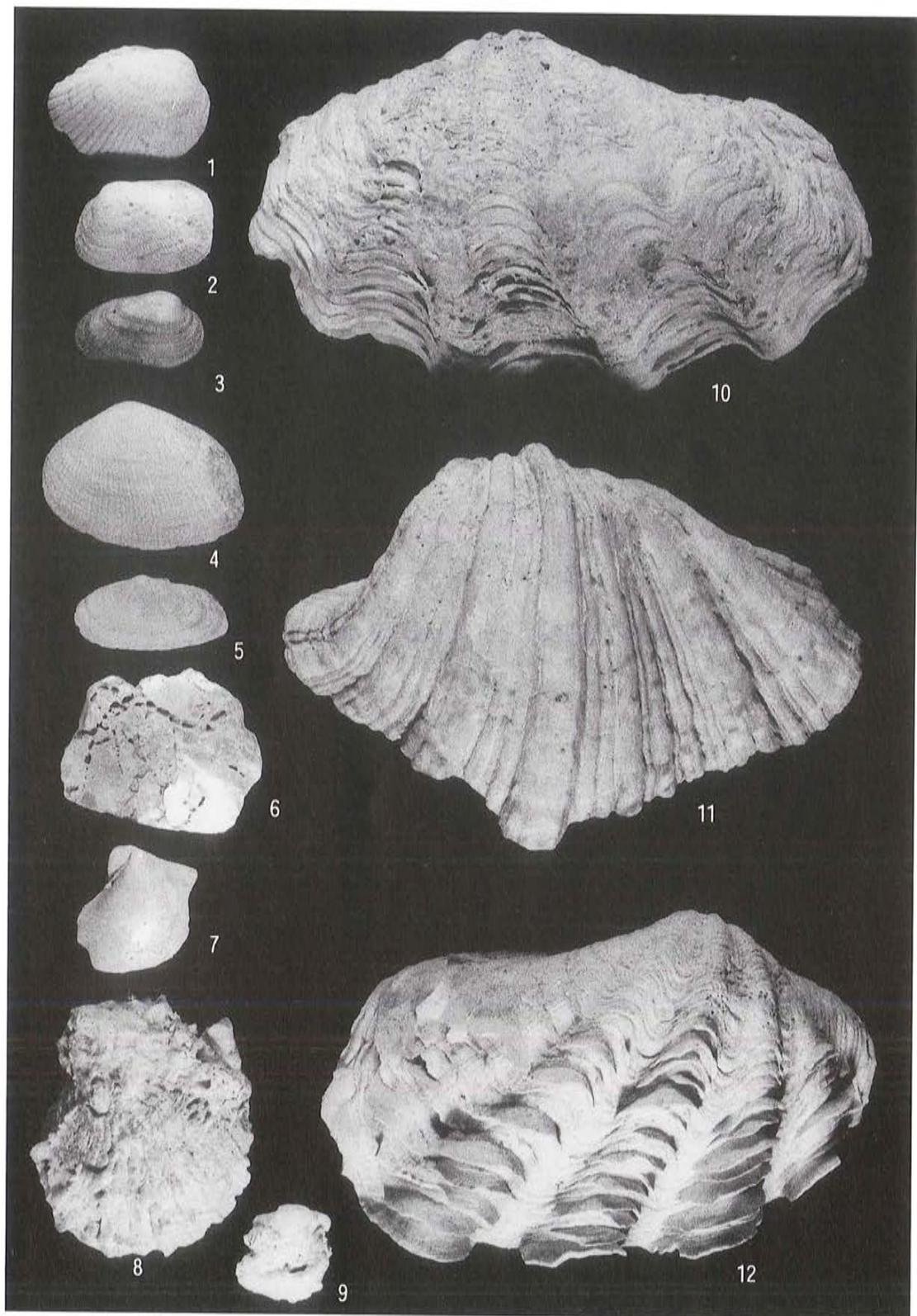
图版49 卷貝

番号	科名	貝名
60	イトマキボラ科	リュウキュウツノマタガイ
61	〃	イトマキボラ
62	〃	チトセボラ
63	〃	ナガイトマキボラ
64	〃	ヒメイトマキボラ
65	オニコブシガイ科	オニコブシ
66	〃	コオニコブシ
67	イモガイ科	アンボンクロザメガイ
68	〃	ヤナギシボリイモガイ
69	〃	ヤナギシボリイモガイ(幼)
70	〃	クロミナシガイ
71	〃	マダライモガイ
72	〃	イボシマイモガイ
73	〃	ミカドミナシガイ
74	〃	アジロイモガイ
75	〃	ニシキミナシガイ
76	〃	キヌカツギイモガイ
77	〃	クロザメモドキ
78	〃	ヤキイモガイ
79	〃	オトメイモガイ
80	〃	ゴマファイモガイ
81	〃	カバミナシガイ
82	〃	コモシイモガイ
83	〃	ヤセイモガイ
84	ナツメガイ科	ナツメガイ



图版50 卷貝

番号	科名	貝名
1	フネガイ科	リュウキュウザルボウ
2	〃	エガイ
3	〃	ベニエガイ
4	リュウキュウマスオガイ科	リュウキュウマスオガイ
5	〃	マスオガイ
6	ウグイスガイ科	クロチヨウガイ
7	〃	ミドリアオリガイ
8	ウミギクガイ科	メンガイ
9	イタボガキガイ科	ノコギリガキ
10	シャコガイ科	シラナミガイ
11	〃	シャゴウ
12	〃	ヒレジャコガイ

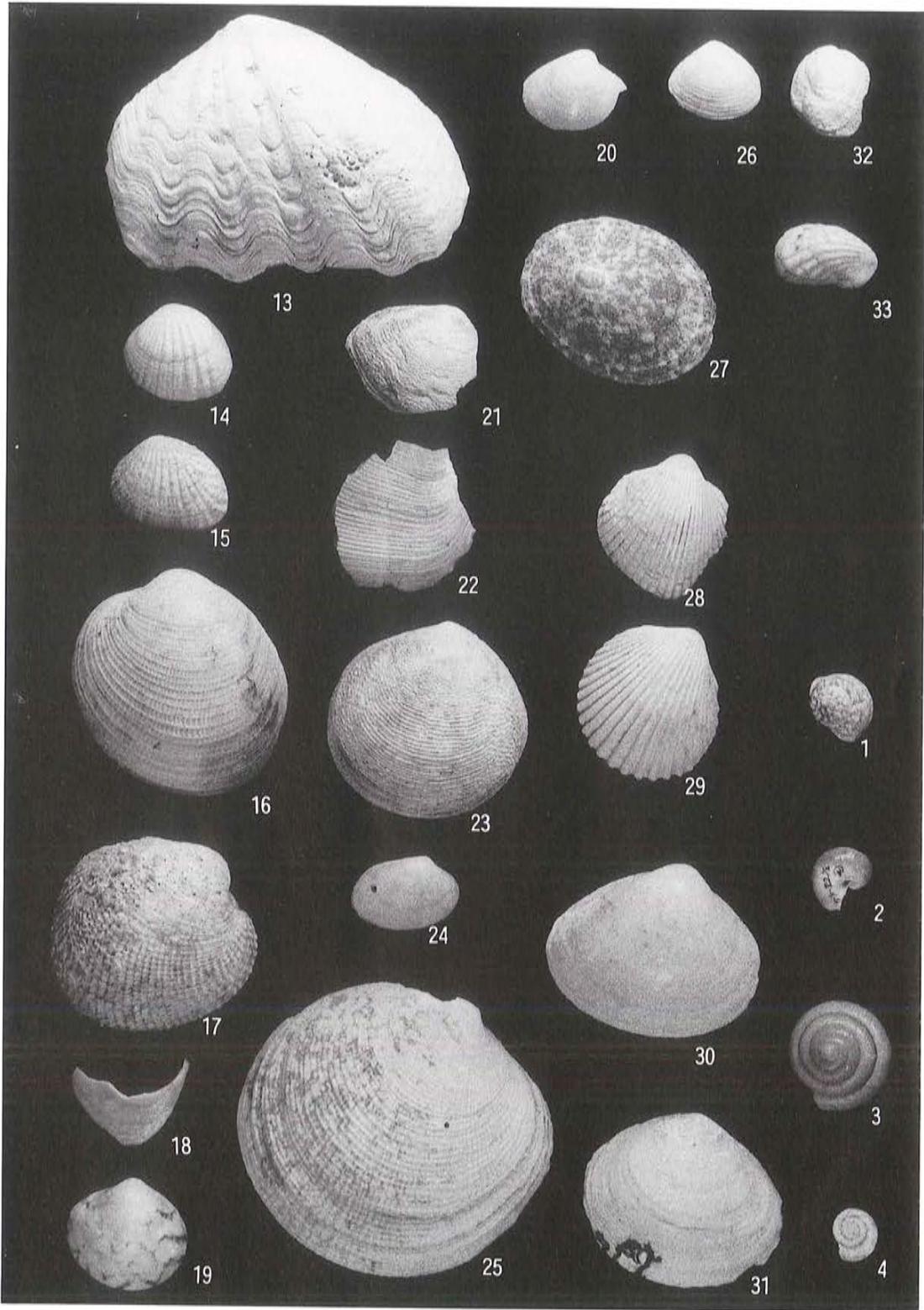


图版51 二枚貝

番号	科名	貝名
13	シャコガイ科	ヒメジャコガイ
14	マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ
15	ク	ホソスジイナミガイ
16	ク	ヌノメガイ
17	ク	アラヌノメガイ
18	ク	チョウセンハマグリ
19	ク	マルオミナエシ
20	ク	ユウカゲハマグリ
21	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリガイ
22	ク	モチツキザラガイ
23	ク	サメザラガイ
24	ク	ヒメニッコウガイ
25	カブラツキガイ科	ツキガイ
26	チドリマスオガイ科	イソハマグリ
27	ツタノハガイ科	ベッコウガサガイ
28	ザルガイ科	カワラガイ
29	ク	リュウキュウザルガイ
30	パカガイ科	リュウキュウパカガイ
31	シジミガイ科	シレナシジミガイ
32	キクザルガイ科	ケイトウガイ
33	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ

陸産マイマイ

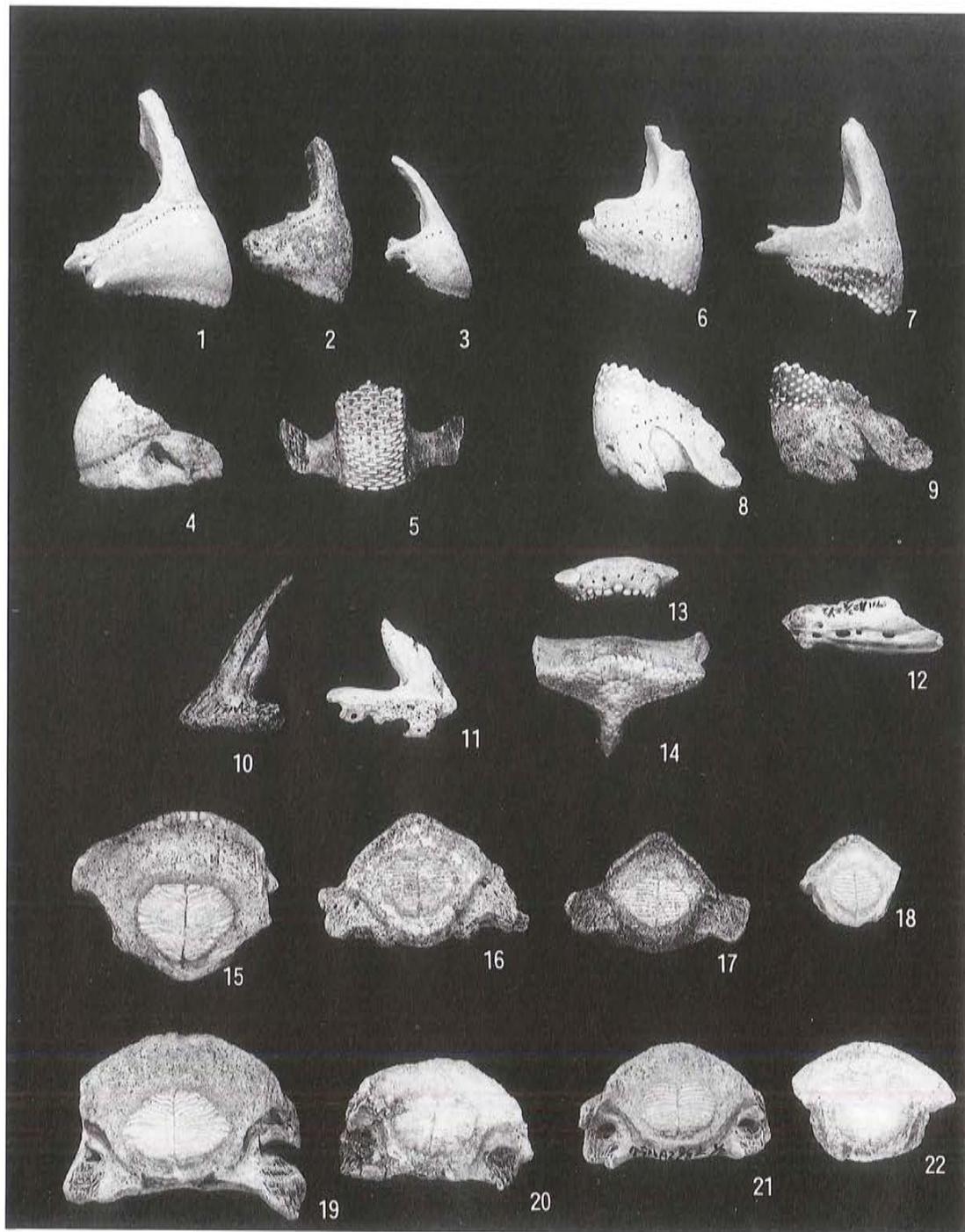
1	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ
2	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ
3	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ
4	オナジマイマイ科	パンダナマイマイ



図版52 二枚貝13~33 陸産マイマイ1~4

魚類

1	ナンヨウブダイ	前上顎骨 R	A II 層50~70cm
2	〃	〃 R	A B II 層30~40cm
3	〃	〃 R	A B II 層30~40cm
4	〃	歯 骨 L	A B II 層10~20cm
5	〃	下咽頭骨	A II 層50~70cm
6	ブダイ科	前上顎骨 R	C II 層30~40cm
7	〃	〃 R	C II 層40~50cm
8	〃	歯 骨 L	A II 層20~30cm
9	〃	〃 L	A II 層50~70cm
10	ハマフエフキダイ	前上顎骨 R	A II 層50~70cm
11	〃	〃 L	C II 層0~10cm
12	フエフキダイ	歯 骨 L	A II 層20~30cm
13	ベラ科	下咽頭骨	A II 層10~20cm
14	〃	〃	A II 層0~10cm
15	ハリセンボン科	前上顎骨	A II 層20~30cm
16	〃	〃	A B II 層30~40cm
17	〃	〃	A B II 層20~30cm
18	〃	〃	A II 層10~20cm
19	〃	歯 骨	A II 層20~30cm
20	〃	〃	C II 層30~40cm
21	〃	〃	A II 層20~30cm
22	〃	〃	A II 層10~20cm



图版53 鱼类

海ガメ類

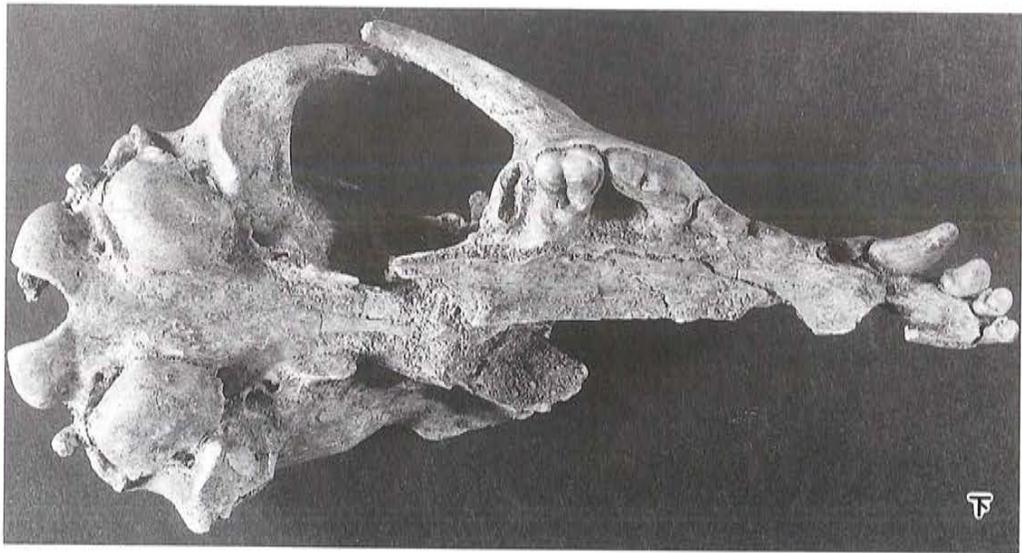
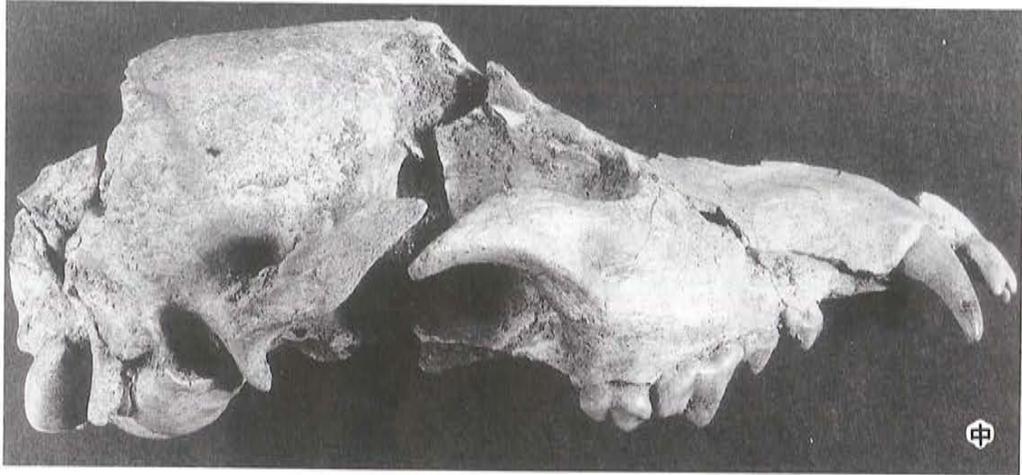
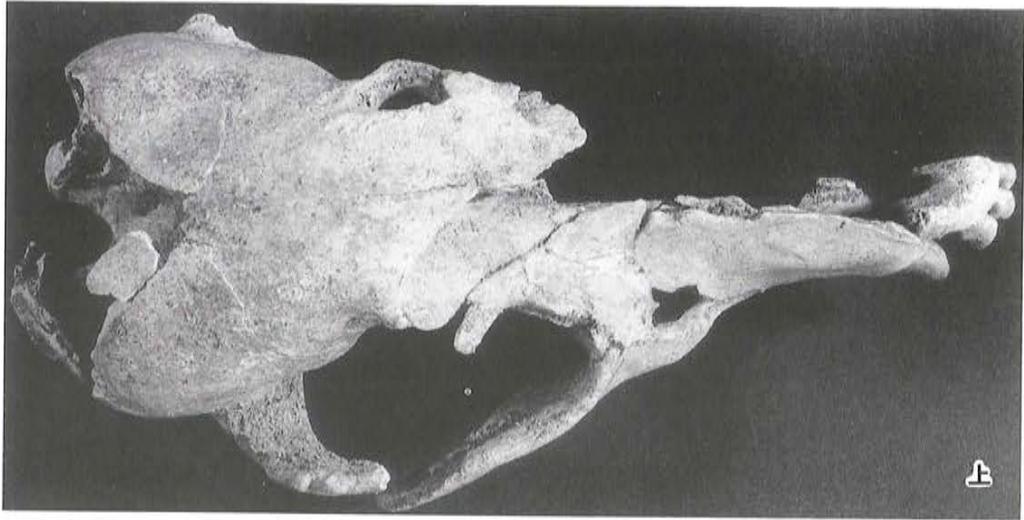
1	前鳥口骨	L	A B II 層	40~50cm
2	〃	R	A II 層	30~40cm
3	上腕骨	R	A B II 層	40~50cm
4	〃	R	A II 層	30~40cm
5	〃	L	A II 層	20~30cm
6	〃	L	A B II 層	40~50cm
7	胫骨		A II 層	10~20cm
8	頂骨板		C II 層	20~30cm
9	肋骨板	L	A 2 層	40~50cm
10	縁骨板片		A B II 層	20~30cm
11	中腹板	R	C 2 層	40~50cm
12	指骨		A II 層	10~20cm
13	〃		A II 層	10~20cm



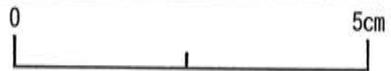
図版54 海ガメ類

犬

頭蓋骨 AトレンチⅡ40~50cm



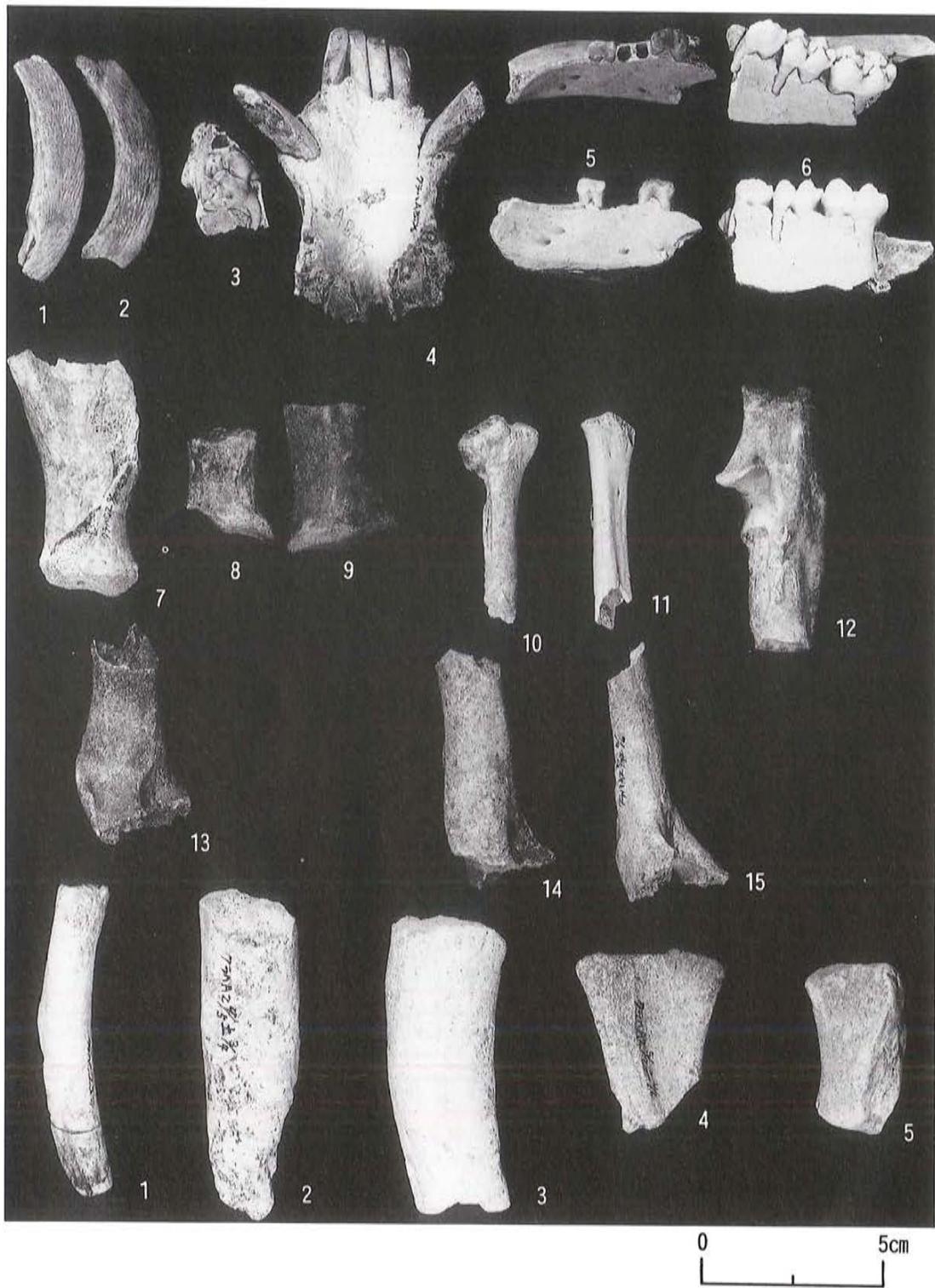
図版55 犬 上：上面、中：側面、下：裏面



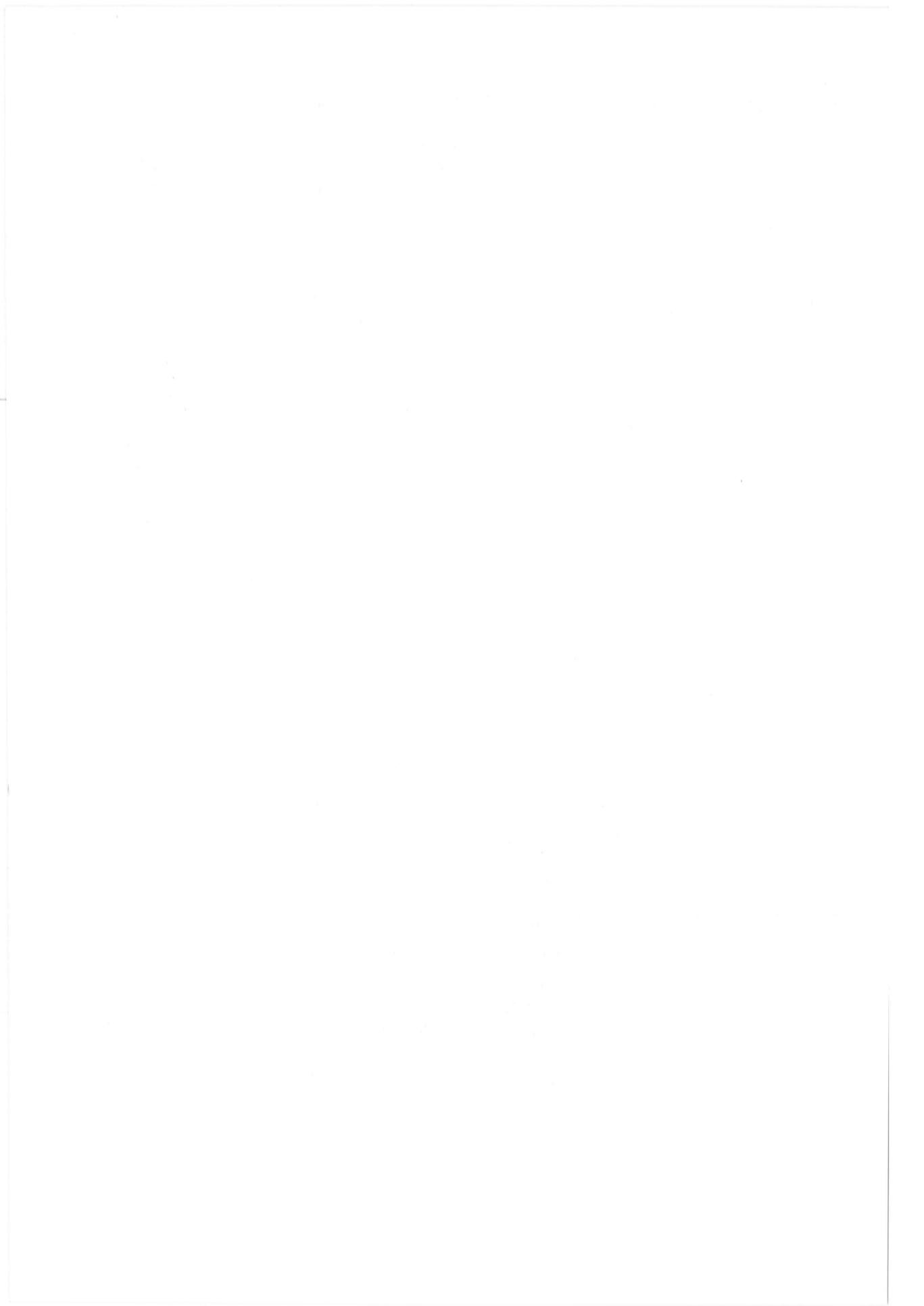
イノシシ 1~15 ジュゴン 1~5

イノシシ

1	犬 歯	L		AB II 層 10~20cm
2	〃	L		A II 層 30~40cm
3	上顎骨	L (M ²)	++++	D II 層 80~90cm
4	下顎骨 (♂)	R (I ₁ I ₂ C) L (I ₁ I ₂ C)		AB II 層 40~50cm
5	下顎骨 (♂)	L (P ₂ P ₄)	+ ++	A II 層 30~40cm
6	下顎骨	R (P ₄ M ₁ M ₂)	+ ++	C II 層 0~20cm
7	肩甲骨	L 近位部		C II 層 0~10旧道側
8	〃	R 〃		C II 層 30~40cm
9	〃	R 〃		AB II 層 0~10cm
10	橈 骨	L 近位端		C II 層 30~40cm
11	〃	R 遠位部 (幼体)		E II 層 10~20cm
12	尺 骨	L 骨体		AB II 層 0~10cm
13	上腕骨	R 近位部 (eP欠)		AB II 層 30~40cm
14	〃	L 〃 (〃)		A II 層 20~30cm
15	〃	L 〃 (〃)		A II 層 50~70cm



図版56 イノシシ1~15 ジュゴン1~5



沖縄県文化財調査報告集 第108集

恩 納 村

久良波貝塚

—導水管施設工事に係る緊急発掘調査報告集—

発 行 **沖縄県教育委員会**

〒900 那覇市泉崎1丁目2-2

編 集 **沖縄県教育庁文化課**

TEL098(866)2731~2733

印 刷 **あけぼの印刷株式会社**

TEL098(867)3451





